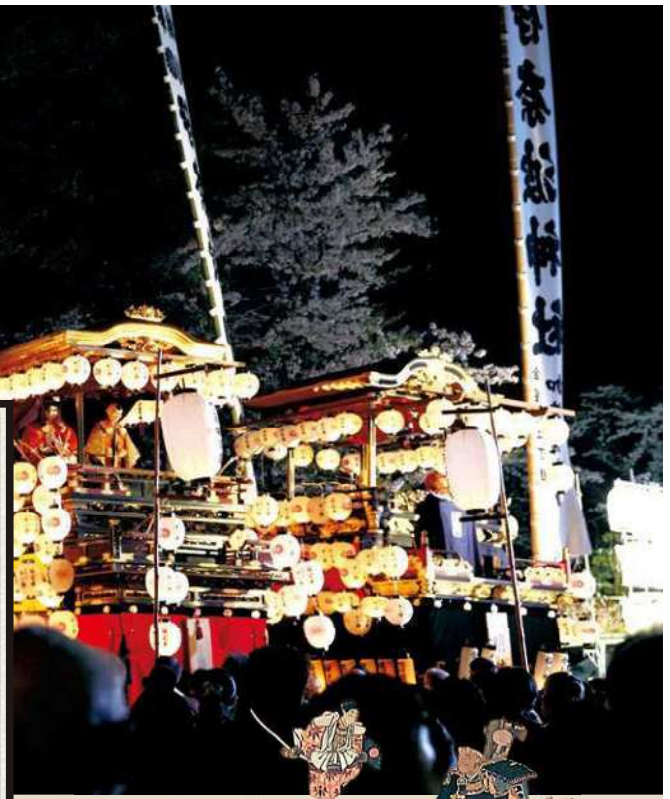




岐阜まつり総合調査報告書



岐阜まつり総合調査報告書



岐阜市



巻頭写真1 例祭



巻頭写真2 神幸祭







巻頭写真4
安宅車 あたくしや







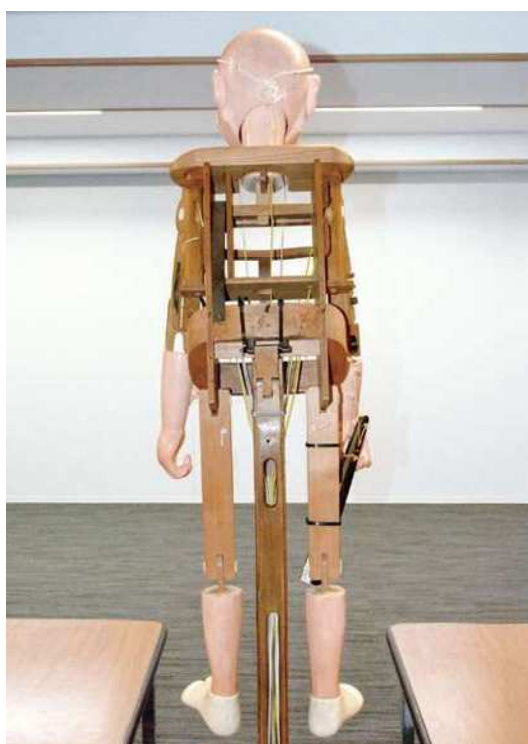
巻頭写真7 おどりしゃ おどりやま
踊車（踊山車）



巻頭写真8 安宅車 義経人形 よしつね



巻頭写真9 安宅車 弁慶人形

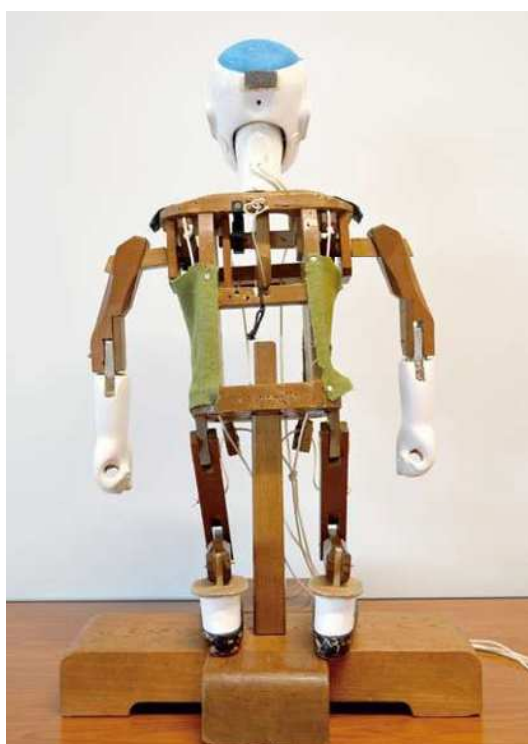


巻頭写真10 安宅車 弊振り人形^{へいふ}





巻頭写真12 若戎車 弊振^{へいふ}り人形









巻頭写真16 清影車 弊振り人形^{へいふ}









刊行によせて

岐阜城下町は、戦国時代に斎藤道三公や織田信長公らによって整備が進められ、江戸時代には尾張藩岐阜奉行所の支配のもと、商業都市・岐阜町として発展をとげてまいりました。その岐阜町で行われてきた伊奈波神社の祭礼、すなわち岐阜まつりは、多い時で二十四台もの山車が町中を曳き回され、大いに賑わっていたことが伝えられています。近代以降、濃尾震災や太平洋戦争、伊勢湾台風などの苦難がありました。先人の努力によって乗り越え、今日に至っています。

本報告書は、令和三年度から実施した岐阜まつり総合調査の成果をまとめたものです。文献・民俗・建築・工芸など様々な分野の調査を通じて、まつりの変遷や山車・からくり等の構造が明らかになりました。同時に、地域の方々が岐阜まつりを愛する想いや、岐阜まつりの伝統を次世代へ引き継いでいこうとする姿も、岐阜まつりの価値として捉えることができたのではないかと思います。

この報告書によって、多くの方に岐阜まつりの価値や魅力を知っていただくとともに、これからの保存・継承の一助としてお役立ていただけることを願っております。

最後になりましたが、今回長期にわたり調査を担当していただいた岐阜まつり文化財検討委員会委員ならびに調査員の皆様、金華・京町・明德・本郷地区の皆様、ご協力をいただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和八年三月

岐阜市長 柴橋 正直



例言

一 本書は、岐阜市が令和三～七年度に実施した「岐阜まつり総合調査」の報告書である。

二 調査対象は次のとおりである。

岐阜まつりの歴史

岐阜まつりの組織

岐阜まつりの山車

岐阜まつりの山車のからくり人形

木造町神輿

岐阜まつりの山車と木造町神輿の鋳金具

岐阜まつりの山車のお囃子

三 調査は、岐阜市附属機関設置条例に定める岐阜まつり文化財検討委員会が実施した。

岐阜まつり文化財検討委員会

石樽 康彦 (日本機械学会会員)

岩田 敏也 (東海工業専門学校講師)

小野崎 隆賢 (岐阜若戎車奉曳会役員) (令和三～四年度)

寛 真理子 (公益財団法人犬山城白帝文庫 主任学芸員)

加藤 麗己 (金華安宅車支援会事務局次長)

後藤 勝義 (清影車からくり保存会会長)

日比野 光敏 (愛知淑徳大学教授)

松波 隆生 (岐阜若戎車奉曳会会長) (令和五年度)

虫賀 文人 (朝日大学教授) (令和三～六年度)

四 岐阜まつりの山車と木造町神輿の鋳金具の調査は、久保智康(独立行政法人国立博物館京都国立博物館名誉館員)に依頼した。

五 岐阜まつりの山車のお囃子の調査は、早川真(日本民俗音楽学会会員)に依頼した。

六 報告書作成にかかる事務局は次のとおりである。

岐阜市ぎふ魅力づくり推進部長

牧ヶ野 敏明

(令和三年度)

大塚 直哉

(令和四年度)

田川 智史

(令和五年度)

歴史文化財活用審議監兼歴史博物館長

大塚 清史

(令和三～五年度、六年度)

主幹)

文化財保護課長

高橋 方紀

文化財保護課主幹

内堀 信雄

(令和三年度～五年度、六年度副主幹、七年度特任研究員)

文化財保護課 文化財係長

井川 祥子

(令和三～四年度)

文化財保護課 副主査

三輪 剛史

(令和五年度)

文化財保護課 主事

吉田 晋右

(令和五年度)

文化財保護課 主事

井上 涼太

(令和三～四年度)

七 本書の執筆分担者は次のとおりである。

第一章 (第一～三節) 日比野 光敏 (第四節) 吉田 晋右

第二章 寛 真理子

第三章 吉田 晋右

第四章 岩田 敏也

第五章 石樽 康彦

第六章 岩田 敏也

第七章 久保 智康

第八章 早川 真

第九章 (第一節) 虫賀 文人 (第二節) 大塚 清史

(第三節) 日比野 光敏

八 本書の編集は、文化財保護課 吉田晋右が行った。

九 山車の掲載順は、山車蔵の収蔵順(東から)に準じた。また、山車の名称は岐阜市重要有形民俗文化財「山車」に登録されている名称を使用した。なお、かつて踊車の曳行団体である「神賑会」は、「神々会」と表記するものもあるが、本書では「神賑会」に統一して表記した。

十 本文の引用・参考文献については、各章末に示した。

十一 本書に掲載した写真は、個別に出典の説明があるもの以外は、各執筆者および岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課が撮影したものである。

十二 一般に「岐阜まつり」とは、四月の第一土曜日に岐阜市各地域で行われ

る祭り、商工関係者による「道三まつり」並びに四月五日の伊奈波神社の例祭を含めた祭りの総称で使われることが多い。このうち、平成三十一年(二〇一九)三月二十八日に岐阜市重要無形民俗文化財に指定された「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」は、伊奈波神社の一連の例祭神事および関係する行事群(神幸祭、宵宮、山車奉曳とからくり奉芸、神輿奉納など)を指している。本報告書では、この市指定を受けた文化財を特に「岐阜まつり」として記載する。また、道三まつり等指定以外の祭りの内容も含むときは、「道三まつり等も含む岐阜まつり」と記載する。

十三 山車の実測・作図については、中田建築工房に、神輿の実測・作図については、有限会社白鳳社寺に委託して実施した。また、からくり人形の実測・作図については、石樽康彦に依頼して実施した。

十四 本調査を実施するにあたり、次の団体や関係の方々からご協力、ご教示をいただきました。記して謝意を表します。(五十音、敬称略)

秋田市民俗芸能伝承館 伊奈波神社 加納天満宮 川越市教育委員会 木造「町神輿」 岐阜市自治会連絡協議会 岐阜市歴史博物館 岐阜まつり宵宮実行委員会 岐阜神輿連 京町第一地区清影車奉曳実行委員会 京町第二地区岐阜祭山車奉曳実行委員会 京町第三地区清影車奉曳実行委員会 金華安宅車支援会 金華自治会連合会第一・三地区安宅車奉曳実行委員会 金華自治会連合会第五・六地区安宅車奉曳実行委員会 金華自治会連合会第九・十地区安宅車奉曳実行委員会 久喜市教育委員会 金神社 金神社神輿奉賛会 岐阜睦 護国寺 清影車からくり保存会 関市協働推進部文化課 名古屋市蓬左文庫 ボーイスカウト岐阜第十六団

美濃市教育委員会人づくり文化課 岐阜若戎車奉曳会 井上博
文 岩田創太郎 奥山剛史 小野崎隆賢 加藤和義 加藤敏
弘 加藤麗己 河合喜三 河合喜正 久保智祥 後藤勝義
後藤嘉津幸 後藤孝一郎 後藤卓也 後藤東洋士 小林孝道
酒井広史 佐藤登美子 鈴木博幸 住田喜久次 住田名央妃
高木幹雄 田中一男 辻浩徹 橋爪大 林康司 福井重光
藤井明 藤澤眞一 松波隆生 松原和生 山田益加 萬屋仁兵
衛（二代目）

その他、調査および資料の開示、提供等について多くの方からご協力を
いただきました。記して感謝の意を表します。

目次

刊行によせて	岐阜市長 柴橋 正直	1
第一章 岐阜まつりとその現況		10
第一節 岐阜まつりの概要		
第二節 伊奈波神社の神事		
第三節 山車奉曳、神輿奉納、その他		
第四節 岐阜まつり協賛 道三まつり		
第二章 岐阜まつりの歴史		34
第一節 岐阜町から岐阜市へ		
第二節 伊奈波神社の歴史		
第三節 伊奈波神社の祭り — 濃尾震災まで —		
第四節 濃尾震災から終戦まで		
第五節 戦後の岐阜まつり		
第三章 岐阜まつりの組織と行事		70
第一節 はじめに		
第二節 伊奈波神社の組織		
第三節 岐阜まつりの組織		
第四節 各山車保存会・運営組織と自治会		
第五節 むすびにかえて		
第四章 山車の構造		102
第一節 山車の概要		
第二節 岐阜まつり各山車の歴史と構造・意匠		
第三節 岐阜まつりの山車の特徴		
第五章 山車のからくり		148
第一節 からくりの概要		
第二節 各山車のからくり・操作方法		
第三節 各山車のからくりの図面		
第四節 岐阜まつりのからくりの特徴		
第六章 木造町神輿		190
第一節 神輿の概要		
第二節 岐阜まつりの神輿の構造と意匠		
第三節 木造町神輿の特徴		
第七章 山車・神輿の金工		220
第一節 はじめに		
第二節 各山車の鋳金具		
第三節 木造町神輿の鋳金具		
第四節 補記		
第八章 山車のお囃子		236
第一節 囃子について		
第二節 岐阜まつりの囃子の特色		
第三節 囃子の担い手		
第四節 楽器と奏法		
第五節 稽古と楽譜		
第六節 楽曲について		
第七節 他地域との関係		
第九章 総括		276
第一節 岐阜まつりと岐阜県内の祭りの比較		
第二節 全国の都市祭礼と岐阜まつり		
第三節 岐阜まつりの特徴と地域性		

岐阜まつり関連年表

西暦	和暦	おもな出来事
一三五九	延文四	三月三日から六日まで八講を開き、厚見郡平田東西庄以下の郷から頭人が出て奉幣する。
一四九六	明応五	「濃州第三宮因幡大菩薩の祭礼再興の題辞」に、このころ、伊奈波神社の祭礼が衰えてきたと記載。
一五九六 一六一五	慶長年中	祭礼が復興して、三月三日に岐阜町全体から二十四台の山車が曳かれる。
一七〇〇	元禄十三	慶長年中から縮小されて、この年から山車が二台を飾るのみとなる。
一七二五	享保十	上大桑町から白髭、東材木町から郡鄂の山車が曳かれる。からくりを披露。
一八二七	文政十	岐阜奉行所の意向により狂言が禁止になる。
一八七三	明治六	太陽暦の採用にあわせて、祭日が四月四日・五日に改められる。
一八八八	明治二十一	安宅車の大改造が行われ、弁慶・義経のからくり山車に改装される。
一八九〇	明治二十三	この年から山車の当番を籤引きで決めるようになる。
一八九一	明治二十四	濃尾震災。車之町、加茂町、中鉄屋町・下鉄屋町共有を除くすべての山車が焼失。
一八九四	明治二十七	加茂町の山車が武儀郡関町に売却される。

西暦	和暦	おもな出来事
一八九八	明治三十一	神幸祭が再興される。
一九〇四	明治三十七	玉井・元浜・湊の三町が共同で清影車を新造する。
一九〇八	明治四十一	このころ、若戎車が加納本町三丁目から金屋町に移ったか。
一九三八	昭和十三	戦争のため山車の奉曳がなくなり、神事のみとなる。
一九四二	昭和十七	戦争激化により、この年（または前年）から神幸祭が中止される。
一九四五	昭和二十	岐阜空襲により、安宅車・若戎車・清影車・踊車を除く山車が焼失する。
一九四七	昭和二十二	神幸祭が再開。
一九五八	昭和三十	安宅車が岐阜市重要有形民俗文化財に指定される。
一九五九	昭和三十四	神幸祭に初めて自動車を導入される。
一九六〇	昭和三十五	伊勢湾台風により清影車からくり人形の破損など各山車に被害が生じる。
一九六二	昭和三十七	神幸祭においてはじめて登輦祭・還幸祭が実施される。
一九六七	昭和四十二	岐阜まつり終了後、安宅車が伊奈波神社に奉納される。伊奈波神社に安宅車の山車蔵が完成。 このころ若戎車が伊奈波神社に奉納されたか。

西暦	和暦	おもな出来事
一九六八	昭和四十三	若戎車を明徳地区が、清影車を京町地区が奉曳する。このころ、清影車が伊奈波神社に奉納されたか。
一九七三	昭和四十八	岐阜まつりを協賛する形で、第一回道三まつりが開催される。
一九七八	昭和五十三	若戎車・清影車・踊車が岐阜市重要有形民俗文化財に指定される。
一九八八	昭和六十三	この年からボーイスカウト岐阜第十六団が神賑会から踊車の曳行を引き継ぐ。 岐阜市制百周年を記念して、木造町が四十年ぶりに本神輿を担ぐ。
一九九五	平成七	岐阜まつり宵宮実行委員会、岐阜神輿連が発足する。
一九九六	平成八	この年から道三まつりとともに宵宮・神幸祭が四月第一土曜日に変更される。
一九九七	平成九	木造町神輿三基が岐阜市重要有形民俗文化財に指定される。 神幸祭と宵宮が荒天のため中止になる。
二〇〇八	平成二十	この年から神幸祭にて伊奈波・金・檀森の三社による合同祭典を行う。
二〇一一	平成二十三	東日本大震災により、神幸祭と宵宮が中止になる。
二〇一九	平成三十一	「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」が岐阜市重要無形民俗文化財に指定される。
二〇二〇 二〇二一	令和二 令和三	新型コロナウイルス感染症拡大により、宵宮が中止になる。



第一章 岐阜まつりとその現況

第一節 岐阜まつりの概要

(一) 春の祭り、「岐阜まつり」

うらかな日差しに恵まれた春。年度も新たになった四月の岐阜の町は、まさに春祭りの季節である。この地を訪れた観光客も、また地元の人々も、口々に「岐阜まつり」のことを口にする。

ところが、ひと口に「岐阜まつり」とはいうものの、そのとらえどころは様ではない。人によって「岐阜まつり」の示す意味が異なるのである。

「岐阜まつり」という単語の示す意味の第一は「岐阜市における祭礼の日」という意味で、概ね各地の神社で行われる祭りである。明治二十二年（二八八九）以来、合併を何度も繰り返してきた岐阜市内は、当然、かつての村々だったところにはそれぞれの村社があり、そこでの信仰がまだ篤く残っていることがある。本来は「どこどここの春祭り」と呼んでいたものが、岐阜市域への合併があり、また、祭礼日も、もともとは何月何日とそれぞれいろいろあったのが「四月の第一土日曜日」とされてしまうと、単なる「岐阜まつり」と名を変えてしまうこともある。

第二は市内の伊奈波神社の春季祭礼のことである。次第は後で詳しく述べるが、神幸祭や山車奉曳、からくり奉納、神輿奉納、宵宮などの神事・行事である。同時期に開催される道三まつり（NHKの大河ドラマに端を発する商業祭。岐阜商工会議所をはじめ商店街振興組合や青年会議所などの諸団体、岐阜市までもが名を連ねる実行委員会の主催で、今でも岐阜駅前や柳ヶ瀬通りなど、いわゆる市の目抜き通りは多くの人で賑わう）があ

るが、「岐阜まつり協賛 道三まつり」とパンフレットで述べているように、「岐阜まつり」は道三まつりに協賛するものとして別物に扱っている。また同じパンフレットに「岐阜まつり 宵宮」、つまり伊奈波神社のまつりが「岐阜まつり」となるわけである。

これで収まっていればよかったのだが、昭和四十八年（一九七三）に始まった道三まつりは期日を伊奈波神社の祭礼と同じにしたため、本来は異なる両者のまつりが融合したかのような場面もあった。神社の神事かそうでないか、容易に判断がつかかねることもままある。今日でいえば、道三まつりの神輿パレードの中で、伊奈波神社の神幸祭の行列がおこなわれる、というようなことである。今できの神輿隊の後ろに伝統的な衣装を身につけた者が続く、などという光景は、識者の中には眉をひそめたくなるようであるが、一般見物者の中には何とも感じない人もいることだろう。つまりは、伊奈波神社の祭礼日に合わせて、伊奈波神社でおこなわれる神事のみならず、神事に関係ないことまで含めた賑わいを「岐阜まつり」と呼ぶ。これが第三の「岐阜まつり」である。

今回の調査は「岐阜まつり総合調査」で、報告書は「岐阜まつり総合調査報告書」である。また、平成三十年度の岐阜市重要無形民俗文化財に指定されたのは「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」であり、この「岐阜まつり」とは「伊奈波神社例祭に係る一連の祭礼行事と、岐阜まつり中の伊奈波神社に係る行事」を指す。すなわち本調査、ならび本調査報告書で取り扱う岐阜まつりとは、第二の意味合いである。この点、紛らわしいが、ここに違いを述べておく。

(二) 岐阜まつりの構成

まず、「伊奈波神社例祭に係る一連の祭礼行事」を見てみよう。令和六年



(二〇二四)の例祭次第を見ると、四月五日(金)におこなわれる例祭、六日(土)におこなわれる神幸祭(発幸と帰着)と宵宮^{よみや}が挙がっている。神幸祭については次節で述べる。宵宮の中には山車曳出、神輿奉納、岐阜神輿連、仕掛花火が名を連ねている。

このうち岐阜神輿連は伊奈波神社本来の祭礼行事かといえ、そうではない。岐阜まつりに登場する御輿には二系統あり、そのひとつが本造町が持っている本神輿である。これは天保年間以来の仕事を感じさせる本格的な造作で、市の重要有形民俗文化財にも指定されている。これについては本章第三節(二)、および第六章を参照いただきたい。それが神前に奉納されるのが神輿奉納で、こちらは伊奈波神社本来の祭礼行事に数えてよいと思われる。

今ひとつは造り神輿と呼ばれるもので、明治年間の日露戦争戦勝記念の年あたりから起こった、比較的新しい、時流を反芻させたものである。伊奈波神社の祭礼に来る人は、神輿を持っているところの人はよいものの、神輿を持たない人々は祭礼が楽しめない。であれば、そういった人々が、新しく神輿を作って祭礼に参加する動きが出てくる。もちろん、明治の頃のもの、今、担いでいるわけではないが、その流れが、現代にも通じているのであろう、現代おこなわれている神輿パレードの源流ともいえる。その中枢をなすのが岐阜神輿連であり、そこから七基(令和六年)が宵宮に参加している。

仕掛花火は伊奈波神社の主催で、昔ながらの祭礼行事に入っている。

また、話は前後するが、宵宮がおこなわれる日、伊奈波神社境内ではなく各町内では、山車の曳行がおこなわれる。山車は現在、四台ある。安宅車、清影車、若戎車、踊車で、これらは岐阜市の重要有形民俗文化財に指定されている。このうち踊車は町内によって支えられているわけでないた

め、町内曳行はおこなわないが、残り三者はそれぞれの町内の辻々でからくりの披露をするともに、町内を練り歩く。いずれもお囃子を奏でながらの曳行であるが、その音色には子どもたちの参加もあるから、大人も子どもも入り混じっての行進となる。

そのほかには奉告祭がある。これは山車の清め払いで、三月下旬の日曜日におこなわれる。伊奈波神社の春の祭礼が始まる合図みたいなものである。岐阜まつりには四台の山車が登場し、各町内を練り歩く。その山車の特徴もまちまちで、様子を語るのも面白いのであるが、それらが行く行程がまた通り一遍で語れるものではなく、実に興味深い動きをする。これらについては次々節で述べる。

次に「岐阜まつり中の伊奈波神社に関連する行事」であるが、先に述べた岐阜神輿連の活動がそれにあたる。

(三) 岐阜まつりの期日と行事の進行次第

岐阜まつりの期日は年によって異なる。元来、伊奈波神社の祭礼日は三月三日とされていたが、新暦が導入された明治六年(一八七三)、四月五日(四日は神幸祭と宵宮)に改められた。合わせて岐阜市に合併された町や村の祭礼日も四月五日となった。昭和四十年頃になると、伊奈波神社の祭礼以外は四月の第一土・日曜日へと変更された。これが続いていたが、平成八年(一九九六)、岐阜商工会議所や岐阜市観光協会からの要請に対し伊奈波神社が折れる形で祭礼を二分割し、例祭は四月五日におこない、神幸祭や宵宮など試楽祭に相当する部分を四月の第一土曜日と翌日曜日におこなうようになった。

加えて令和元年からのコロナ禍によってまつりの開催自体に困難が生じ、期日が便宜的に変えられたりもした。そこでここではコロナ禍に騒ぐ



写真 1-2 例祭（式典前の整列）
（令和四年四月五日）



写真 1-1 例祭
（令和四年四月五日）



写真 1-4 例祭（黒龍神社前の式典）
（令和四年四月五日）



写真 1-3 例祭（本殿での祝詞奏上）
（令和四年四月五日）



以前の平成三十年（二〇一八）を例に、まつりの期日とそこでなされる行事の実態について述べる。

四月第一土曜の一週間前の日曜日（平成三十年四月一日）

奉告祭がおこなわれる。この日、伊奈波神社から宮司が出て、それぞれの山車ごとに時間を変えて、山車蔵前でお祓いをする。この日から、各山車は祭礼の準備をする。

四月第一土曜の前日（平成三十年四月六日）

山車二台（安宅車と清影車）が会所に運ばれ、会所の設営や山車の飾り付けなどの準備をおこなう。

四月四日

前夜祭で、夕方から伊奈波神社でお祓い、祝詞、神楽、玉串奉納などがおこなわれる。

四月五日

例祭で、午前中、伊奈波神社でお祓い、祝詞、神楽、玉串奉納などがおこなわれる。

四月第一土曜（平成三十年四月七日）

伊奈波神社では神幸祭（正確には午前中に発輦祭、午後になつての神幸祭、還幸祭に分かれる）がおこなわれる。夜は宵宮で神社への人だかりはおさまらず、山車や神輿のお祓いなどをする。一方町衆では、三台の山車がそれぞれの行程を行い、各所であらうの披露がおこなわれる。また夜は宵宮で、伊奈波神社に集まり、神社のお祓いを受けた後、あらかりの披露をおこなう。

四月第一土曜の翌日（平成三十年四月八日）

山車の片付けである。安宅車と清影車は町内各所であらうを披露しつつ伊奈波神社の蔵へと戻り、若戎車は町内の奉曳はなく伊奈波神社

の蔵前に到着し、正午過ぎまでに片付けを終える。

ただしこれはあくまでも平成三十年の事例である。伊奈波神社の例祭は毎年変わらずなされているのに対し、岐阜まつりの期日は年によって異なってくる。またコロナの影響で、まつりの内容が変わってしまったことも否めない。今後、祭りも復活してくるものと思われるが、それがコロナ禍以前の様子に戻るかどうかは、実は誰にもわからない。それは期日だけでなく、まつりそのものについても同様である。

第二節 伊奈波神社の神事

(一) 伊奈波神社の祭神と岐阜まつり

伊奈波神社は垂仁天皇の第一皇子、五十瓊敷入彦命いにしきいりひこのみことを主祭神として祀る。社伝によれば、五十瓊敷入彦命は朝廷の命により奥州を平定した。この功から土地の開拓神として名を高め、やがては農耕の神となった。しかしその成功を妬んだ陸奥守の諫言により、朝敵とされて、この地で討たれたという。

妃である淳熈斗姫命ぬのしひめのみこと（景行天皇の第六皇女）がこの地を訪れ、五十瓊敷入彦命を慰霊しつつ生涯を終える。妃神を祀っているのが金神社で、御旅所のひとつである。妃は私財を投じて町の発展に寄与したこと、後から「財をもたらず神」として祀られるようになったといい、そこから「金大神」と呼ばれて信仰されるようになったといわれる。

五十瓊敷入彦命と淳熈斗姫命の間の子が市隼雄命いちはやのおののみことである。檀森神社の祭神で、安産祈願、夫婦和合、子どもの守り神として信仰されている。

岐阜まつりは伊奈波神社を主舞台としているが、その妃を祀る金神社や子を祀る檀森神社が神幸祭（御旅所祭）の場として重要である。三つの神社の祭神には、このような関係がある。

(二) 前夜祭と例祭

毎年、四月四日が前夜祭、四月五日が例祭に当たっている。祭礼日が今のように四月の第一土曜になる前からの慣習である。ともにお祓い、祝詞、神楽、玉串奉納などがおこなわれるが、前夜祭は、翌日に例祭をおこなうことを神に告げるもので、定型的なことを形式通りにおこなう。よって、時間も短く、せいぜい三十分程度である。

対して例祭は本祭日であって、賓客も地元の総代であったり、また伊奈波神社に関わりの深い神社の宮司など、さまざまな者に声がかかる。このため時間も二時間を超えることもある。

(三) 神幸祭次第

神幸祭（広義と狭義）

広義の神幸祭とは伊奈波神社の神・五十瓊敷入彦命の御魂を輿に移して（発輦祭）、金神社、檀森神社などの御旅所を渡御し（狭義・神幸祭）、再び帰ってくる（還幸祭）ことをいう。正しくは、午前中におこなわれる発輦祭、午後になつておこなわれる神幸祭（狭義）、夕方におこなわれる還幸祭からなっている。このうち発輦祭は昭和三十五年（一九六〇）に始められたもので、昔ながらの純然たる神事というわけでもない。

狭義・神幸祭は、場所が良長橋通でおこなわれる。付近は道三まつりに参加する神輿パレードの真つ最中である。プロの司会者が賑やかに進行し、神輿とそれの見物人たちで、非常に賑わしい限りであるが、その中の決まった時間、神幸祭がおこなわれることは、あらかじめ報じてある。一四時を挟んで前後の三十分は、伊奈波神社からの行幸が金神社での御旅所祭を終え、檀森神社と合わせての三社合同祭典があり、檀森神社での御旅所祭へと出かける途上である。神幸祭が始まったことが知らされると、神輿を担う者たちは静かになる。ざわめきが収まって先ほどまで騒ぎ切っていたその場が、急に静かになる。その中を、古風な衣装をつけた行幸の者たちが、静々と歩を進めてゆく。一種、独特の感がある。

令和五年のスケジュールに沿って見てみる。なお、北野神社は隔年で渡御しており、当年は渡御の年にあたっている。



発輦祭

一〇時二〇分

手水の儀 関係者が手水にて手洗いする。

神職が宮司に一礼し、先頭に立って本殿に移動開始する。

順番は、権禰宜（青色の装束）、宮司（黒色の装束）、禰宜（赤色の装束）、権禰宜。

修祓 神職二人がそれぞれ榊と塩湯を持って、お祓いする。

宮司一拝 宮司に合わせて神職が祭神に一礼。

宮司御扉開扉 宮司が本殿御扉へ進み扉を開ける。その間、扉を開け終わるまで神職が「オー、オー、オー」と警蹕を

発声する。宮司が扉を開けた後、御簾を上げる。

献饌 神職が神饌を供える。

祝詞奏上 宮司が案の前に移動し、祝詞を奏上する。

玉串奉典 宮司が案に玉串を供え、拝礼する。それに合わせ、神職も拝礼する。

撤饌 神職が神饌を下げる。

出御 宮司と神職が本殿へ移動し、本殿前で一礼する。

宮司が本殿に入り、御霊を箱に遷す。

宮司が御霊を遷した箱を持って、本殿から下りる。

神職が御簾を垂らす。

神職が先頭に立ち、榊を振り、警蹕を発声しながら先導を務める。鳳輦に向かう。順番は、神職（先導）、宮司（箱持ち）、

神職、神職二名。

鳳輦に箱を移し、終了する。

一〇時四六分

神幸祭

一一時四五分

手水の儀 関係者が手水にて手洗いをする。その後、太鼓

橋前に奉安してある鳳輦の前に整列する。

神社関係者が手水にて手洗いする。

一二時一五分

神社関係者が鳳輦の前に整列。

修祓 神職によるお祓い。

宮司による玉串奉典

一二時二五分

神幸行列が伊奈波神社前を出発する。並び順は以下のとおり。

神職

社名旗

猿田彦

獅子

伶人

太鼓持ち

五色旗

神職

四神のうちの二神旗（朱雀、青龍）

神職

鳳輦

神職

四神のうちの二神旗（玄武、白虎）

宮司

責任役員、氏子総代

稚児

巫女四名

神職

一二時三〇分 広場にて鳳輦を儀装車に積み込む。一行もバスに乘車する。

一二時三九分 神幸行列が伊奈波神社を出発する。

一二時四二分 神幸行列が「矢島町1」交差点を通過する。

一二時四五分 神幸行列が「今小町」交差点を通過する。

一二時四八分 神幸行列が「裁判所前」交差点を通過する。

一二時五四分 神幸行列が「金町5」交差点過ぎの交差点を左折する。

一二時五五分 神幸行列が金神社前に到着する。

儀装車が金神社の鳥居前に到着し、鳳輦を下ろす。神幸行列と鳳輦が金神社境内へ入る。

神幸行列・金神社関係者が本殿前に鳳輦を並べて整列する。

「金神社の御旅所祭」

一二時〇二分 宮司対揖 伊奈波神社と金神社宮司が向かい合い互いに一礼する。

修祓 金神社神職が伊奈波神社神職、金神社神職、神幸行列関係者を櫛でお祓いする。

宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ、一同鳳輦に一礼する。

一二時〇七分 献饌 金神社神職が神饌を供える。

一二時一分 祝詞奏上 伊奈波神社宮司が祝詞を奏上する。

一二時一五分 神楽奉奏 伊奈波神社巫女による、櫛乃舞（二人舞）、速神楽（四人舞）を奉奏する。

一二時二〇分 玉串奉典 伊奈波神社宮司に合わせ、伊奈波神社関係者が

拝礼する。

金神社宮司に合わせ、金神社関係者が拝礼する。

一二時二三分 撤饌 金神社神職が神饌を下げる。

一三時二七分

宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ、一同鳳輦に一礼する。宮司対揖 両神社宮司が一礼する。

伊奈波神社の神職と関係者が金神社本殿内に移動する。

伊奈波神社宮司に合わせ、一同二礼二拍手一礼にて拝礼する。

金神社での御旅所祭が終了する。

一三時三〇分

伊奈波神社の神幸行列が金神社鳥居から徒歩で出発する。隊列は先と同じ。伊奈波神社の神幸行列に続き、金神社の神幸行列が続く。金神社南東角を右折し、次の交差点を左折。

神幸行列が長良橋通りに出たところで榎森神社神幸行列と合流。伊奈波神社、金神社、榎森神社の順で長良橋通りを北進する。

「三社合同祭典」

一三時五二分

「神田町4」交差点付近で三社が整列。東から西に榎森神社、伊奈波神社、金神社。

修祓 伊奈波神社神職が祝詞を奏上する。その後、金神社神職が櫛を持って、観衆にお祓いをする（東側↓西側）。

伊奈波神社巫女四人が神楽を奉奏する（速神楽）。その後、鈴祓い。

玉串奉典 三社宮司の拝礼に合わせ観衆も拝礼する。

合同祭典が終了する。

神幸行列、徒歩で長良橋通りを北進開始。金神社、榎森神社の神幸行列が続く。

伊奈波神社と榎森神社の神幸行列が「神田町3」交差点を

東に、金神社の神幸行列が西に曲がる。

神幸行列が榎森神社に到着する。



「檀森神社の御旅所祭」

一四時二〇分	宮司対揖 伊奈波神社宮司と檀森神社宮司が、向かい合い互いに一礼する。	一五時〇四分	「金町2」交差点を左折して若宮町通りを西進する。
	修祓 檀森神社神職が伊奈波神社神職、檀森神社神職、神幸行列関係者を榊でお祓いする。	一五時〇五分	「若宮町7」交差点を左折して北進する。
	宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ、一同鳳輦に一礼する。	一五時〇七分	菅原町二丁目の交差点を左折して西進する。
	献饌 檀森神社神職が鳳輦前に神饌を供える。	一五時一三分	北野神社にて、伊奈波神社神職による修祓、宮司による玉串奉典を行う。
一四時二六分	祝詞奏上 伊奈波神社宮司が祝詞を奏上する。	一五時一九分	神幸行列が北野神社を出発。
一四時三〇分	神樂奉奏 伊奈波神社巫女二人が榊乃舞（二人舞）、速神樂（四人舞）を奉奏する。	一五時二一分	「真砂町5」交差点を左折して南進する。
		一五時二二分	「本郷町1」交差点を右折して西進する。
一四時三四分	玉串奉典 伊奈波神社宮司、檀森神社宮司、檀森神社氏子二名の順に行う。	一五時二五分	赤口神社にて、伊奈波神社神職による修祓、宮司による玉串奉典を行う。
一四時四一分	撤饌 檀森神社神職が神饌を下げる。		神幸行列が赤口神社を出発。若宮町通りを西進する。
一四時四四分	宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ一同拝礼する。	一五時三五分	「都通1」交差点を右折し北進する。以下、「大縄場大橋東」
	宮司対揖 伊奈波神社宮司と檀森神社宮司が、向かい合い互いに一礼する。	一五時三七分	交差点を右折した後、「西野町7」交差点と「真砂町3」
	伊奈波神社の神職と関係者が本殿内に移動する。		交差点を西に直進し、「今小町」交差点で左折して北進、「本町3」交差点、「本町1」交差点を経由して「岐阜公園前」
	伊奈波神社宮司に合わせ、一同二礼二拍手一礼にて拝礼する。		交差点を右折して南進、靱屋町の交差点を左折して南進し、
	檀森神社の御旅所祭が終了する。		「伊奈波通1」交差点を左折して東進する。
「北野神社・赤口神社の渡御」		一六時一〇分	参集殿前に鳳輦を載せた儀装車が到着する。
一四時四八分	神幸行列の威儀物や釣り太鼓、鳳輦などを儀装車に積み込む。	一六時一三分	鳳輦を降ろし、太鼓橋の前に奉安する。一同が鳳輦前に整列する。
一四時五九分	鳳輦が檀森神社の鳥居前を出発する。		
一五時〇三分	神幸行列が「金園町3」交差点を右折する。	一六時一六分	宮司一拝 宮司が鳳輦の前に移動し、鳳輦に一礼する。神職と関係者も合わせて一礼する。
	神幸行列が「金町5」交差点を右折して金華橋通りを北進		



写真 1-6 発輦祭（令和五年四月一日）
鳳輦に箱を移す



写真 1-5 発輦祭開始（令和五年四月一日）
権禰宜、宮司、禰宜、権禰宜の順に本殿に移動



写真 1-8 神幸祭（金神社での御旅所祭（令和五年四月一日）
伊奈波神社と金神社、両宮司の対揖



写真 1-7 神幸祭（令和六年四月六日）
伊奈波神社を出立



写真 1-10 神幸祭（令和五年四月一日）
三社の宮司による玉串奉典
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-9 神幸祭（令和五年四月一日）
神田町 4 交差点付近で三社が合同で祭典を行う



写真 1-12 神幸祭（榎森神社での神楽奉納）
（令和六年四月六日）



写真 1-11 神幸祭（榎森神社での御旅所祭）
（令和六年四月六日）



写真 1-14 神幸祭（赤口神社での御旅所祭）
（令和五年四月一日）



写真 1-13 神幸祭（北野神社での御旅所祭）
（令和五年四月一日）



写真 1-16 神幸祭（令和五年四月一日）
宮司が鳳輦に一礼後、参加者にあいさつして終わる



写真 1-15 儀装車に乗せて移動する鳳輦
（令和五年四月一日）

神幸行列参加者にあいさつをする。その後、宮司と神職三人を残して参加者は解散する。

一九時〇〇分

還幸祭

一六時一八分

神職が鳳輦を開け、御霊を遷した箱を取り出す。宮司と神職三人が本殿に移動を始める。

一六時二二分

神職が本殿内神座に「お遷し」を行う。
本殿内の御簾を上げる。

一九時三〇分

献饌 神職が神饌を供える。

祝詞奏上 宮司が祝詞を奏上する。

玉串奉典 宮司が案に玉串を供え、拝礼する。それに合わせ、神職も拝礼する。

撤饌 神職が神饌を下げる。

御扉閉扉 宮司が扉を閉める。その間、神職が警蹕を発声する。

二〇時一五分

一六時三七分

宮司一拝 宮司の一礼に合わせて神職も一礼する。
宮司、神職が本殿から退出して還幸祭が終了する。
関係者は解散する。

二〇時四五分

来賓紹介。岐阜市長と伊奈波神社宮司による挨拶。
各神輿の代表がステージ前に集まり、神輿の表彰が行われる。

(四) 宵宮次第

宵宮は、山車や神輿を神社へ練り込む夜の祭礼である。宵宮実行委員会の主

二二時〇〇分

導のもと、神賑わいの行事が進められる。

ここでは、平成三十年（二〇一八）の記録から留めておく。

一八時〇〇分

一八時〇五分

宵宮が始まる。実行委員長がステージにて挨拶する。
高富青雲組が太鼓の演奏をする。

なお、令和七年の宵宮では、太鼓の演奏を県立岐阜総合学園高等学校太鼓部が実施している。また、神輿の練り込みは、岐阜睦、木造「町神輿」、岐阜祭粋會、（松阪太鼓）、神輿愛好会、神加勢、岐阜心女、金華神輿の順に行われた。

神輿は木造町に、四台の山車は伊奈波通にて待機する。
山車が宵宮の会場へ入ってくる。司会者は各山車の説明をする。山車は踊車を先頭に入場し（これは毎年、決まっている）、神社のお祓いを受けて、所定の位置に着く。残り三台がこれに続く（入場順は年により異なる）。
神輿が伊奈波通にて練り込みをしながら宵宮会場を目指す。
神輿が宵宮の会場へ、順次入ってくる。司会者は各神輿の説明をする。

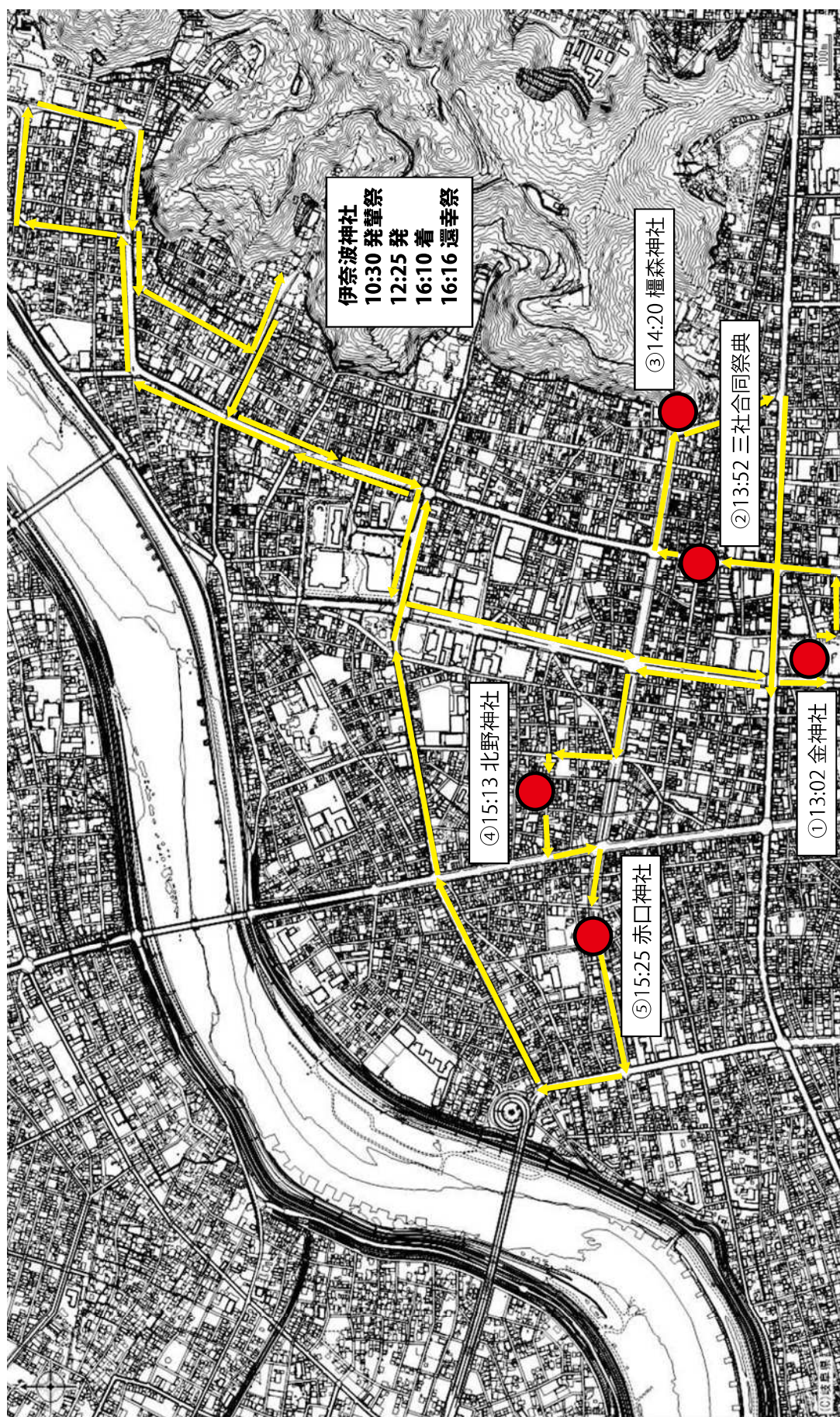


図 1-1 神幸祭 順路（令和五年四月一日）



写真 1-18 宵宮の安宅車（令和五年四月一日）



写真 1-17 宵宮の踊車（令和七年四月五日）
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-20 宵宮の清影車（令和五年四月一日）
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-19 宵宮の若戎車（令和六年四月六日）
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-22 宵宮の岐阜心女会の後ろに木造町町神輿
（平成二十九年四月一日）



写真 1-21 宵宮の木造町の町神輿
（平成二十九年四月一日）



第三節 山車奉曳、神輿奉納、その他

(一) 山車奉曳 各種の山車

古くはもつとたくさんの山車があったというが、現在、岐阜まつりで出される山車は、安宅車、清影車、若戎車、踊車の四台ある。このうち踊車は町内によって支えられているわけでないため、町内曳行はおこなわないが、残り三者はそれぞれの町内の辻々でからくりの披露をするともに、町内を練り歩く。いずれもお囃子を奏でながらの曳行であるが、その音色には子どもたちの参加もあるから、大人も子どもも入り混じっての行進となる。

山車は、本来は伊奈波神社のものではなかったが、各町内からの意向で伊奈波神社に寄付され、同社の所有となった。

安宅車

名古屋型の人形山。運営は金華地区と安宅車奉曳支援会で、山車曳行は金華地区を十六地区に分け、うち二地区が担当して次へ回す輪番制である。からくりは幣振り人形のほか、弁慶人形・義経人形で、能「安宅」が奉納される。

山車については、地元では次のようないい伝えが残っている。元は上今町が所有していた山車である。弘化元年（一八四四）の作で、明治二十一年（一八八八）の改修の時からからくりが設置されて人形山となった。

昭和三十三年（一九五八）、岐阜市重要有形民俗文化財として、安宅車とからくり人形三体が指定される。

若戎車（蛭子車）

名古屋型の人形山。四台の中では最も古い。運営は岐阜若戎車奉曳会で、山車曳行は明郷校区を中心に曳き手を毎年募集している。からくりは采振り（唐子）と若恵比寿で、能「岩船」の一部を取り入れた演目が奉納される。

采振りは享和二年（一八〇二）、若恵比寿は嘉永五年（一八五二）の作で、両人形とも、平成三年（一九九一）に修復された。

山車については、地元では次のようないい伝えが残っている。元々は加納本町三丁目が所有する山車で、加納天満宮の祭礼で曳かれていたが、濃尾震災で加納天満宮の祭礼が縮小され、金屋町に売却された。その後も、加納天満宮の祭礼には曳き出された。製作は享和二年（一八〇二）である。

昭和五十四年（一九七九）、岐阜市重要有形民俗文化財として指定される。

清影車

名古屋型の人形山。運営は京町地区と清影車からくり保存会で、山車曳行は京町地区を七つに分け、うち一地区が担当して次へ回す輪番制である。からくりは采振り（前人形）のほか、彦火火出見尊（大人形）と豊玉姫（龍神）で、能「玉ノ井」が奉納される。ただこれは、元々の人形は昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風で損傷し、以後、所在がわからなくなってしまったため、平成九年（一九九七）、伊奈波神社の板絵をもとに復元したものである。

山車については、地元では次のようないい伝えが残っている。元は湊町、もしくは湊町、玉井町、本浜町の三町が所有していた山車である。製作は江戸末期ともいわれる。明治二十四年（一八九一）、濃尾震災でからくり以外のものは焼失し、大正年間に復元された。

昭和五十四年（一九七九）、岐阜市重要有形民俗文化財として指定される。

踊車

他の三台とは異なり、二階部が高欄付きの舞台形式になったもの。運営はボリースカウト岐阜第十六団で、山車曳行はおこなわない。

伊奈波神社で四台が並ぶ時は、一番初めに曳き出される。平成元年（一九八九）頃、伊奈波神社神賑会という団体から譲り受けた。

山車については、元は矢島町が所有していた山車で、舞台上で踊りを踊っ

た、とも、小熊町の所有していた山車で、台車部分を残して焼失したものを、簡素な山を組み、からくり出しの副山車として子どもや荷物を乗せて回った、とも伝えられている。

昭和五十四年（一九七九）、岐阜市重要有形民俗文化財として指定される。

山車の奉曳

四月第一土曜の一週間前の日曜日から各山車は祭礼の準備が始まる。町内が山車を保有していない踊車を除くと、第一土曜には朝、会所で儀式をおこなった後、町内を練り歩き、夜には宵宮がおこなわれる。ここでは各町内における山車の曳行について述べたいのであるが、これがなかなか容易ではない。

例えば安宅車であるが、この山車は金華地区十六に分け、うち二地区が今年の当番となる。この地区は決まった曳行順路があり、それにしたがって山車を曳行する。ところがその翌年になると異なる二地区が当番となり、前年の担当地区とは異なった地区を、異なった順路で山車が通る。会所も変わる。単純計算をすると、山車が今年と同じところを巡行するのは八年後ということになる。

清影車も同様である。こちらは七地区の輪番制であるから、順路の数は七通りある。

このように、岐阜まつりの山車曳行といってもその巡行過程は年によって違い、三つの山車がそれぞれ同じ順路を通ることは何十年も先のことといえる。いや、経路が同じであっても会所の場所が変わることもあるし、会所まで同じであってもからくりの奉納をおこなう場所が違ったりする。こうなると、三つの山車がまったく同じ順路を行くなどということは、確率的に皆無に近い。

山車曳行の隊列の組み方は、平成三十年（二〇一八）の安宅車の場合を

次に記す。

先導高張提灯

奉曳先導（実行委員長）（笠と袴）

相談役（略礼服）

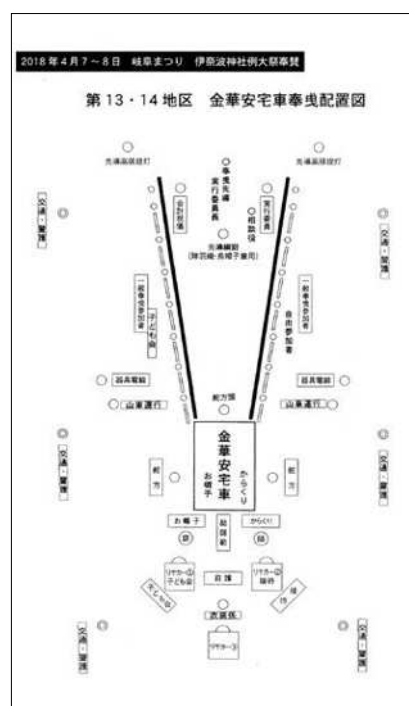


図 1-2 安宅車奉曳配置図

先導綱割（烏帽子と赤陣羽織）

舵方頭（舵方Ⅱ車力用半纏とパッチ、地下足袋）

采振り（宵宮のみ）（専用衣装）

金華安宅車、周囲には舵方（舵方用半纏とパッチ、地下足袋）

囃子師匠（指導者Ⅱ後藤嘉津幸氏、林良一氏、川村陽一朗氏）（着物、白足袋、草履・からくり師匠（指導者Ⅱ高森誠三氏）（からくり衣装）

衣装係

全体の周囲に交通・警護（蛍光ベスト、ジャンパー）

清影車、若戎車も隊列にはそれぞれ決まりがあつて、その組み方を書いておく。

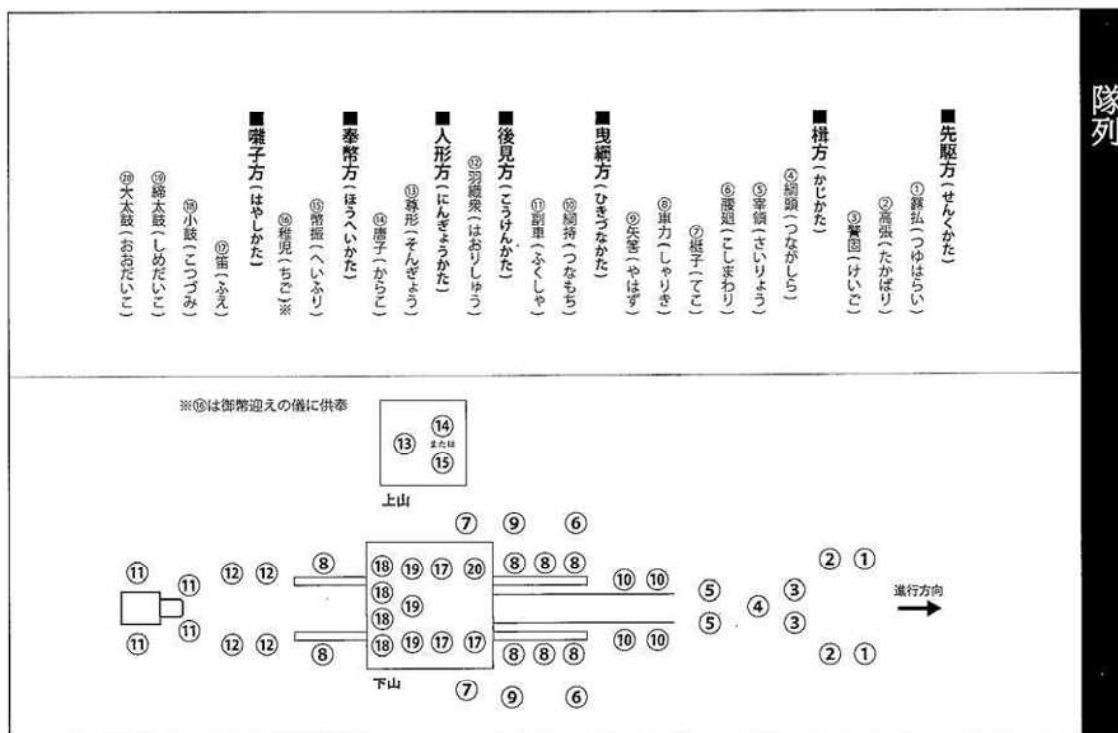


図 1-3 若戎車奉曳配置図

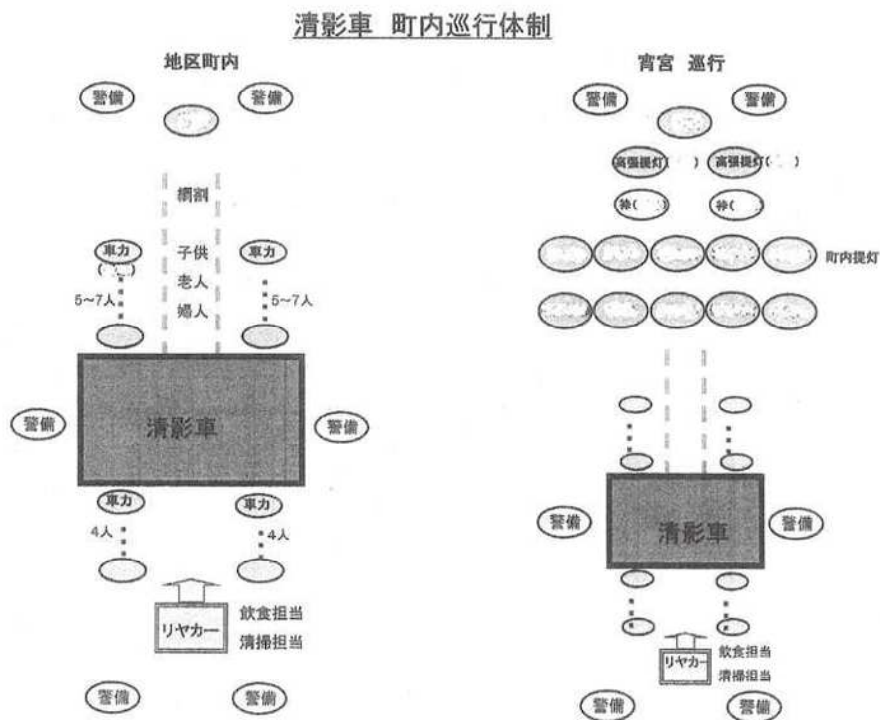


図 1-4 清影車奉曳配置図



写真 1-24 町内でからくり披露する清影車
(平成三十年四月八日)



写真 1-23 出立して山車巡行が始まる
(平成二十九年四月一日)



写真 1-26 山車巡行(安宅車)
(平成三十年四月八日)



写真 1-25 伊奈波神社に着いた若戎車
(平成三十年四月八日)



写真 1-28 山車を蔵に片付ける
(平成二十九年四月二日)



写真 1-27 山車巡行の途中、葛の神輿と出会う
(平成二十九年四月一日)



囃子

山車はいずれも曳行の際、音楽が流れる。これは囃子と呼ばれるもので、各山車ごとに準備される。囃子方は山車に乗り込んで演奏し、それゆえ、囃子は山車の中から聞こえて来る。囃子の内容については第八章をご覧ください。

さて、囃子の準備も各山車ごとに違い、また、巡行の当番に当たった組がおこなう。したがって笛や太鼓を演奏する者は、昨年とは違う。経験があるといっても七ないしは八年前のことであるから、手慣れているといっても毎年演奏するわけではない。毎年、一月下旬から二月中旬ともなれば、各町内でお囃子の練習会がおこなわれている。

以下は令和六年（二〇二四）の囃子の練習風景からである。

安宅車

練習場所は金華公民館である。

演者は、当初は輪番制を取っていたが、最近子どもが少なかったため、他地区の子どもも受け入れている。指導者は能楽師の後藤嘉津幸氏で、締め太鼓と大太鼓を子ども、笛と鼓を大人が担当する。初回は太鼓やバチの扱いから始め、打ち方を指導する。山車に登る子どもは三人ずつであるため指導も三人ずつおこない、指導者の合図で、演者は二〜三分で後ろの演者と交代する。

若戎車

練習場所は明徳公民館である。

演者は公募制であるが、他方、明郷小学校「お囃子クラブ」なるクラブ活動で日常的に練習している経験者もいる。山車は伊奈波神社の所有であり、囃子も本来は明徳小学校の子どもたちだけで演じていたが、最近では小学校が本郷小学校と合併したため、本郷地区の者もいる。指導者は明徳

地区在住の邦楽演奏家・小野崎隆賢氏ら三名で、締め太鼓と鼓は子ども、笛は大人が担当する。パート練習と合わせ練習の二部構成である。

宵宮が終わってから歌う岐阜民謡「おぼば」も練習する。

清影車

練習場所は本覚寺である。

演者は輪番制である。当初は輪番の組も七つあったが、現在は子どもの減少によって六つになった。清影車からくり保存会の指導で、締め太鼓と大太鼓を子どもが担当し、笛はCD（一部、生演奏も混ざる）を用いる。一回の稽古を二分し、前半を小学校低学年、後半を高学年の指導に充てている。高学年しか演奏できない演目もある。ここでも山車に登る子どもは三人ずつであるため指導も三人ずつおこなうが、交代のタイミングは子どもたち自身が覚える。

踊車

練習場所は河合銘木店である。

演者はボーイスカウト岐阜十六団の団員で、初心者と経験者の両方がいる。指導者はボーイスカウト団員の河合喜正氏で、締め太鼓と大太鼓を子どもが担当し、三味線はCD、時には指導者の笛が入る。締め太鼓は安宅車の後藤氏が調整を担当しており、それゆえか練習スタイルも安宅車と似ている。山車に登る子どもは三人ずつであるため指導も三人ずつおこない、次の演者への交代は自らが率先してする。本番は宵宮での曳行だけであるが、練習期間の終わり頃には、実際の曳行時間に合わせて、約四十五分の通し練習をおこなう。

(二) 神輿

木造町神輿

木造町の神輿については、最古の神輿の墨書に「宝暦（一七五一～一七六四）」とあるものの、その変遷は不明である。昭和二十二年（一九四七）、神輿を伊奈波神社へ奉芸した後、柳ヶ瀬へ繰り出したところ、他の神輿と遭遇して、騒動となり、神輿の上の鳳凰が折られてしまい、神輿の奉納は中止された。以後は展示のみがおこなわれたが、昭和六十三年（一九八八）の岐阜市制百周年を記念して木造町神輿（町内の人が担ぎ手となる神輿）を復活させた。

木造町は花神輿や獅子神輿も所有しており、これら三基は平成九年、岐阜市重要有形民俗文化財に指定された。平成二十三年、神輿の大修理がおこなわれた。

以下は、令和六年（二〇二四）四月六日の木造町の行事次第である。

八時一〇分頃	会所の設営が始まる。	一五時五二分	神輿に鳳凰、風鐸を取り付ける。
八時二〇分頃	神輿蔵の扉を開け、神輿を出す。	一六時二八分	飾り紐に鈴、白布、赤布を取り付ける。
八時三〇分	即得寺境内にて、神輿の飾り付けをおこなう。	一七時五九分	「木造町」の木札を取り付ける。
	神輿の掃除が終わると、鏡、瓔珞、御幣、提灯枠、提灯の順に飾り付ける。	一八時一九分	伊奈波神社のお札を、神輿の下から潜って内部に貼る。
九時三六分	神輿を会所に移動させる。	一九時三〇分	提灯を装着する。
一〇時〇七分	高張提灯を会所に取り付ける。	一九時四〇分	会所に盛り塩をして、お清めをする。
一〇時一三分	神輿に補助用担ぎ帽を装着する。	一九時四二分	電飾を準備する。
一〇時五二分	神輿にダテマキを取り付ける。	一四時二四分	提灯に電飾を装着する。
一一時一四分	鳳凰に羽根や電飾を取り付ける。	一六時二五分	電飾用バッテリーを装着する。
一一時四五分	実行委員長より挨拶があり、まつりの開始が告げられる。	一七時四四分	一同、集合する。
		一八時一〇分	出立式をおこなう。
		一八時二九分	電飾に灯火する。
		一八時三二分	神輿が町内の巡行を始める。木造町通を西に進む。
		一八時三五分	神輿が正興寺前で、一八〇度、旋回する。
		一八時三九分	神輿が会所前で、時計回りに三回、回転し、神輿は高く釣り上げられる。
		一九時〇五分	その後、担ぎ手は休憩する。
		一九時〇八分	神輿が移動を開始する。神輿の奉芸へと出発する。
		一九時一二分	高張提灯を先頭に、松阪響座和太鼓、ブラ提灯、リヤカーが同行する。
			神輿が矢島町一丁目交差点で、反時計回りに一回半、回転する。
			神輿がヴィライナバストリート前で、反時計回りに一回、回転する。
			その後、担ぎ手は休憩する。



一九時二一分 再出発する。

一九時二五分 神輿が伊奈波通一丁目交差点西の、松山新聞舗前で高く釣り上げられる。

一九時二八分 神輿が伊奈波通一丁目交差点で、時計回りに三回、回転する。

一九時三五分 神輿はアトリエの前で停止し、高く釣り上げられる。

一九時四四分 再出発する。

一九時四六分 神輿は伊奈波神社手前の交差点で停止する。

二〇時一五分 再出発する。

二〇時一九分 高張提灯を善光寺西にとどめ、神輿のみ、善光寺東坂を登る。神職の前で、神輿は時計回りに三回、回転し、その後、東坂を下る。

二〇時五四分 総練りをおこなう。

二〇時五八分 総練りが終わる。

二二時〇五分 他の神輿団体の代表者らと、修祓をし、お祓いを受ける。

二二時三七分 神輿は会所に向けて移動する。

二二時四六分 神輿が正興寺西交差点付近まで進み、一八〇度、旋回する。

会所到着後、会所前で、時計回りに三回、回転する。

二二時五一分 会所に入る。

二二時〇〇分 自治会長より挨拶があり、まつりの終わりが告げられる。

神輿連神輿

これは伊奈波神社の宵宮に出て来た神輿である。道三まつりには、平成三十年（二〇一八）で三十基の神輿が出た。そのうち宵宮に出場した神輿は、岐阜睦、ぎふ青年神輿、岐阜祭絆會、神輿愛好会、神加勢、岐阜心

女会の六基であった。この六基は伊奈波神社の前を練り込んでおり、ゆえに「岐阜まつりの神輿」に上げることができ、残り二十四基は除外される。一方、道三まつりには出ていないが、宵宮に出た神輿は、先の木造町の神輿以下、松阪太鼓、金華神輿の三基であった。

もちろんこれには年によって数の上下があることは否めない。また、コロナ禍が荒れた令和四年（二〇二二）には二基に過ぎなかった。

（三）からくり

山車が曳行される地区では、人形からくりが披露される。ただその場所が年によって異なることは、山車の巡行のところで述べた。また、人形の作り自体は第五章を参照されたい。ここでは各人形の収蔵場所と練習についてのみ、簡単に述べる。

からくり人形の収蔵場所は、三者とも伊奈波神社である。

安宅車は、安宅車奉曳実行委員会（担当になった自治会が設立）によって披露される。指導者は令和六年まで高森誠三氏である。三月中旬下旬ごろに伊奈波神社から稽古場所（近年は金華公民館）に輸送し、稽古をする。

若戎車は、岐阜若戎車奉曳会によって披露される。指導者はおらず、毎年同じメンバーが操る。三月中旬下旬ごろに伊奈波神社から明徳公民館に輸送し、稽古をする。

清影車は、清影車からくり保存会によって披露される。指導者は会長の後藤勝義氏で、三月下旬に伊奈波神社から本覚寺に輸送し、稽古する。

第四節 岐阜まつり協賛道三まつり

(一) 岐阜まつり協賛道三まつりの組織と目的

岐阜まつり協賛道三まつり（以下、道三まつり）は、毎年四月第一土、日曜日に開催される商業祭である。主催は道三まつり実行委員会、岐阜商工会議所、岐阜市商店街振興組合連合会、岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会、公益財団法人岐阜観光コンベンション協会、一般社団法人岐阜青年会議所、岐阜市自治会連絡協議会、岐阜市議会、岐阜市、岐阜市教育委員会によって組織されている。

道三まつりは、商業、観光、物産等の振興及び中心市街地を含めた地域の活性化を図り、並びに岐阜市を宣伝し、及び市民参加によるにぎわいを創出するために、岐阜まつりを共に盛り上げるイベントとして実施している（注1）。

(二) 道三まつりのはじまり

道三まつりの名称は、岐阜を代表する戦国武将の一人である斎藤道三に由来する。

昭和四十七年（一九七二）六月、司馬遼太郎原作の「国盗り物語」が翌年のNHK大河ドラマに決定すると、ドラマの舞台である岐阜市では、経済、観光を盛り上げるきっかけとすべく、岐阜城や常在寺、崇福寺など、ゆかりの地を巡る観光プランや作品にちなんだ土産品の製作など、様々な取り組みが行われた。そのような動きを背景として、翌四十八年二月三日、岐阜商工会議所と岐阜市観光協会が主催者となって、道三まつりを開催することを報道発表し、四月に初開催した。当時の主なイベントは、「斎藤道三公追悼法要」（平成十六年（二〇〇四）から斎藤道三公追悼式）、「七三年

式の自動車ショー」、「農具ショー」、「土産品まつり」、「民謡踊り大会」、「道三だいこ」など十数種にわたった（注2）。

二年目の昭和四十九年には、初めて若宮町四、五丁目に歩行者天国を設置し、野菜の即売会や日用品の廉売会、自動車ショーなどが開催された。以後、岐阜産業会館、大龍寺などで岐阜まつり協賛行事が開催されるなど、黎明期における道三まつりの規模は拡大していった（注3）。

(三) 神輿パレード

昭和五十一年（一九七六）の道三まつりでは、岐阜青年会議所が伊奈波神社の本神輿を担ぎだし、伊奈波神社から金神社、美江寺観音まで練り歩いた。この神輿は、昭和十五年に伊奈波神社が県社から国幣小社に昇格したことを記念に、伊奈波神社が市内の川村一郎氏から寄贈を受けたものである（注4）。この神輿は、当初例祭の時に氏子により担がれていたが、戦後担ぎ手の不足等により出されなくなったといわれており、二十年ぶりの練りこみとなった。この神輿の練りこみは、岐阜青年会議所が設立二十五周年を迎えるにあたり、「草の根文化を掘り起こそう」という活動方針のもと実施したものであるが、かつての岐阜まつりで岐阜市中心部だけでなく、加納、長良、早田など市内各地からもにぎにぎしく行われた神輿の練りこみに着想を得たものであった。

岐阜青年会議所は、伊奈波神社本神輿の練りこみを毎年続けていく一方で、市内のほかの団体にも参加を呼びかけ、昭和五十四年の道三まつりでは、本神輿十一基、子供みこし八十基あまりの参加を得た。これ以後、各団体によるみこしの練り歩きは、道三まつりのメインイベントとして位置づけられ、昭和五十五年に「神輿パレード」が始まった（注5）。これは、参加団体が伊奈波神社と金神社にわかれて練り歩き、「みこし広場」に集結



するものである。「みこし広場」は、若宮町交差点から徹明町交差点を十三時から十四時まで車両の通行を規制し、みこしの集結場所として設置された。この年、大人の神輿は二十数基、子どもみこしは百基余りが参加し、翌五十六年には大人神輿が前年の約二倍となる四十二基が参加し、「みこし広場」のエリアを美江寺町交差点まで北に延長し、開始地点を四か所に増やすなど、神輿パレードの規模がより一層拡充した。その後、たびたび出発点やパレードの規模などの変更があり、令和六年は、神輿パレードは金公園を出発地点とし、「神田町通3」交差点から「神田町5」交差点までの区間で実施された。

また、「みこし広場」以外にも、市内各地で子どもみこしが担がれるようになった。これは、岐阜市子ども会育成連合会の「まつりに積極的に参加させ、子どもたちに郷土を愛する気持ちを身につけさせよう」という考えのもと、大半の子ども会が実施したためである(注6)。

(四) 岐阜まつりへの影響

岐阜まつりを協賛する形で始まった道三まつりは、当初岐阜まつりの開催日である四月四日と五日に開催されていたが、平成八年(一九九六)から四月第一土・日曜日の開催に変更した。この年から、岐阜まつりの神幸祭と宵宮も四月第一土・日曜日におこなうこととなった。この日程変更は、前年の秋に道三まつり実行委員会から依頼があり、伊奈波神社が応えたものである(注7)。変更の背景には、人手や神輿・山車の担い手の確保、週休二日制による勤労・就学体制の変化が挙げられている。

また、平成二十年の神幸祭では、伊奈波神社の鳳輦が金神社から樞森神社に向かう途中で神輿パレード会場に徒歩で寄り、金神社、樞森神社の神輿とならんで三社合同の祭祀を実施することとなった(注8)。これも、岐

阜まつりの神幸祭や神輿パレードを盛り上げるため、パレードを担当するNPO法人ぎふ睦の依頼に応えたもので、以後、今日にいたるまで恒例となっている。加えて、翌二十年には岐阜市からの依頼を受け、芸妓団体による手古舞が三社の神輿練り歩きの先導を務めることとなり、以後も続いている。

以上のように、道三まつりが岐阜まつりのありように変化をもたらしたことがうかがえた。道三まつり開催以前にも、岐阜まつりの協賛事業として様々なイベントが開催されたが、岐阜まつりの在り方を変えるものではなかった。単なる商業祭というだけにとどまらず、協賛している岐阜まつりに影響を及ぼしている点が、道三まつりの特徴の一つといえる。



写真 1-29 神輿パレードの中を行く神幸の行列
(令和五年四月一日)

(五) 現在の道三まつり

道三まつりは、昭和四十八年の開催以来、東日本大震災（平成二十三年）、新型コロナウイルス感染症拡大（令和二、三年（二〇二〇、二〇二一））により三度の中止を挟みながら現在まで続いている。

令和六年の第五十二回道三まつりでは、主催、協賛あわせて二十一の事業が開催された。このうち、神輿パレードでは十八団体がみこしを担いだ。当日に実施した参加団体への聞き取り調査（表1-1）によると、八団体がみこしに神社の御札を収めており、そのうち七団体が伊奈波、金、樫森神社いずれかの御札を入れていた。また、一般社団法人岐阜青年会議所は御札を入れていないが、祭り当日朝に伊奈波神社で木遣りを奉納している。前述のとおり、道三まつりは宗教と切り離れた商業祭であるが、神輿パレード参加者には岐阜まつりへの参加意識、もしくは伊奈波神社など岐阜まつりゆかりの神社への信仰心や氏子としての思いがみられる団体もあるといえる。令和六年四月三日に実施された神輿パレード説明会にて参加団体への配布資料のうち、「お約束事項」に以下の文言が記載されている。

神輿パレードは岐阜まつりに伴う催しです、御神幸は敬意をもってお迎えしてください。みこし広場ですれ違う際には事前には神輿を路肩に寄せ停止させて、鳴り物がある場合は音をださないでください。

この文章からも、岐阜まつりや神幸祭への敬意があらわれている。

(注)

(注1) 道三まつり実行委員会「概要―岐阜まつり協賛 道三まつり―」

<https://gifuomatsuri.jp/dousan/dousan-organization/>

(注2) 岐阜日日新聞 一九七三年二月四日朝刊

(注3) 岐阜日日新聞 一九七四年四月四日朝刊、一九七五年四月四日朝刊

(注4) 伊藤泰雄『神輿大好き 岐阜のまちに神輿が復活するまで』伊藤泰雄デザイン室 二〇一五年

(注5) 岐阜日日新聞 一九八〇年四月二日朝刊

(注6) 岐阜日日新聞 一九八二年三月二十八日朝刊

(注7) 伊奈波神社「責任役員会議事」一九九五年十一月三十日付

(注8) なお、金神社も当日に神幸祭を行っている。三社合同祭典終了後、黒岩神社と北野神社（千手堂と鍵屋西町を隔年）を渡御する。

(参考文献)

伊藤泰雄『神輿大好き 岐阜のまちに神輿が復活するまで』伊藤泰雄デザイン室 二〇一五年

寛 真理子「神幸祭と金神社・樫森神社」『伊奈波さん』平成二十四年七月号 伊奈波神社 二〇二二年

No.	参加団体名	神輿台数	神社御札
1	樫森神社 子供みこし	1	●
2	女神輿 岐阜心女	1	●
3	木之本まちづくり協議会	2	×
4	華陽子ども会・華陽ジュニアリーダー	1	×
5	株式会社 十六フィナンシャルグループ	2	×
6	シーシーエヌ 株式会社	1	×
7	岐阜信用金庫	2	●
8	岐阜市職員みこしパレード実行委員会	1	?
9	株式会社電算システム	1	×
10	株式会社 大垣共立銀行	2	●
11	ぎふ農業協同組合	1	×
12	岐阜商工信用組合	1	?
13	岐阜新聞社・岐阜放送グループ	1	●
14	長良西まちづくり協議会	1	●
15	一般社団法人 岐阜青年会議所	1	×
16	岐阜祭粋会	1	●
17	金神社神輿奉賛会 岐阜睦	1	●
18	日本南京玉すだれ協会	1	×
合 計		22	有：8 無：12 不明：2

表 1-1 みこしパレード参加団体と御札の有無（令和六年）



西暦	和暦	主要新聞記事、伊奈波神社記録要約（黒…岐阜まつり、赤…道三まつり）	主な出来事
1945	昭和 20		終戦
1947	22	戦後初の神輿渡御	
1950	25	この年の神幸祭ルート：伊奈波神社 — 樫森神社 — 金神社 — 伊奈波神社	
1957	32	この年の神幸祭ルート：伊奈波神社 — 樫森神社 — 金神社 — 赤口神社 — 伊奈波神社	
1958	33	神輿渡御で神主らは乗馬 38 年ぶり踊車曳行	
1959	34	この年の神幸祭ルート：伊奈波神社 — 樫森神社 — 金神社 — 伊奈波神社 初めて儀装車使用（鳳輦は台車に載せ牽引）	伊勢湾台風
1960	35	宵宮の山車は小熊町のみ、金屋町は 5 日展示 本町五丁目、湊町は台風により故障 初の発輦祭	
1961	36	宵宮は踊車のみ曳行される	
1962	37	岐阜まつり終了後、安宅車を伊奈波神社に献納 安宅車の山車蔵完成	
1963	38	宵宮で山車 2 台奉納	
1964	39	神幸祭ルート 初めて金神社 — 樫森神社の順に	
1966	41	宵宮 小熊町など 3 台の山車が曳かれる 手力雄神社の火祭りが岐阜まつり協賛行事として初出	
1967	42	宵宮 山車 4 台そろそろ	
1973	48	2 月に道三まつりの開催決定 第 1 回道三まつり開催	
1974	49	若宮町に歩行者天国設置	
1976	51	岐阜青年会議所によって伊奈波神社本神輿練り歩き	
1980	55	みこしパレード開催、みこし広場設置	
1982	57	樫森神社本神輿 54 年ぶり復活	
1985	60	安宅車からくり披露	
1988	63	踊車 曳行する団体が神賑会からボーイスカウトへ変更	
1989	平成元		平成改元
1992	4	若戎車からくり復元完成	
1995	7		阪神・淡路大震災
1996	8	例祭を除く岐阜まつりの日程が 4 月第 1 土曜日に開催するようになる	
1998	10	38 年ぶりに清影車からくり奉納	
1999	11	神幸祭において、若宮町の歩行者天国の区間のみ練り歩き	
2002	14	みこしパレード、この年から市役所、金公園出発	
2004	16	みこしパレード企画に NPO 法人ぎふ睦参加	
2008	20	神輿パレード内で伊奈波、金、樫森三社による合同祭典が始まる 岐阜芸妓組合が神輿パレードで三社神幸行列の先導役をつとめる	
2011	23	道三まつり中止	東日本大震災
2019	31		令和改元
2020	令和 2	道三まつり中止	新型コロナ流行
2021	3	道三まつり中止	新型コロナ流行
2022	4	駅前道三楽市を初めて設置（若宮町歩行者天国を廃止）	

表 1-2 戦後の岐阜まつり・道三まつり関係年表

第二章 岐阜まつりの歴史

第一節 岐阜町から岐阜市へ

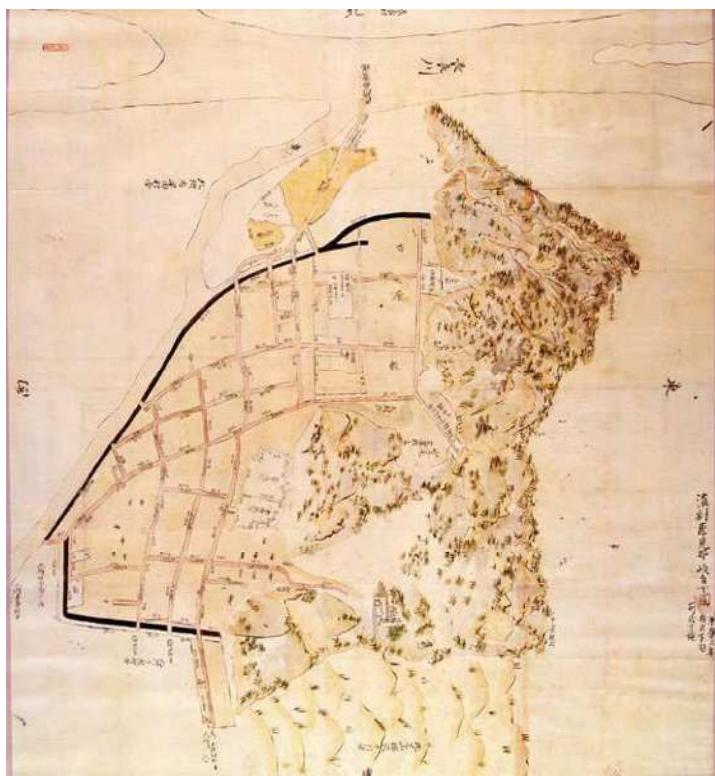
明治二十二年（一八八九）七月一日、岐阜市が発足した。その中核となったのは、戦国時代の城下町から近世の商工業・水運の町へと発展した岐阜町である。

岐阜町の東にそびえる金華山（稲葉山）上には鎌倉時代に城が築かれたと伝えるが、詳細は不明である。十六世紀初め、美濃守護土岐氏は拠点となる守護所を厚見郡革手から長良川対岸の福光・枝広へ移し、さらに大桑城（山県市）を築いた。この時期、井口（のちの岐阜町）周辺は有力家臣である長井氏の勢力範囲であったと考えられる。天文四年（一五三五）に起こった長良川の大洪水で枝広・井口の間で二万余の死者が出たと伝え『巖助往年記』、この時期には井口もかなりの集落だったのであろう。長良川は厚見郡と方県郡との境界を流れていた（古川）が、おそらくこの洪水の影響で、小河川であった井川（現在の長良川）の流れが大きくなり、その分岐点に位置する井口の水運上の重要性も増したと考えられる。

土岐氏を逐って美濃を掌握した斎藤道三は稲葉山城を拠点に、神社の移転や新たな町並の造成など、井口に城下町を整備した。道三の孫である龍興に代わって美濃を支配した織田信長は金華山麓に壮大な居館や庭園などを造り、岐阜の町屋の整備をさらに進め、伊奈波神社周辺に寺院を移転させた。城主は信長の子である信忠に代わり、信忠が父とともに本能寺の変で死去したのち城主は変転する。慶長五年（一六〇〇）に信長の孫である岐阜城主織田秀信は西軍に与し、関ヶ原合戦の前哨戦で敗れた。

合戦後に岐阜城は廃され、慶長六年に徳川家康の娘婿である奥平信昌が初代

加納藩主となり、廃城となった岐阜城の資材も活用して、岐阜町から約4km南の厚見郡加納に城が築かれた。一方、家康から美濃国奉行に任じられた大久保長安は新たに稲屋町裏に家康の滞在のための御殿を建て、その南に隣接して陣屋を設けた。政治・軍事・経済・水運の要地を幕府が直接掌握しようとしたのである。しかし元和五年（一六一九）、岐阜町は初代尾張藩主である徳川義直（家康の九男）へ与えられて尾張藩領の辺縁地域となり、ここで商工業・水運の町へと性格を変える。長安の陣屋の場所には、新たに尾張藩主のための御殿が造られた。承応三年（一六五四）に作られた絵図（資料2-1）は、道三・信長たちが造った十六世紀の城下町のようなすをとどめていると考えられる。東に金華山がそびえ、



資料 2-1 濃州厚見郡岐阜図（名古屋市蓬左文庫所蔵）



北部に長良川が流れて、川沿いと西端・南端には堤が築かれ、全体が総構えで囲まれる町であった。町の一部は総構え内から主要街道沿いに南部の堤を超えて伸びている。このうち、城下町時代に武家屋敷であった地区（総構え東部の古屋敷新田と、総構え内の周縁部に散在する明屋敷村）と北の川沿いに位置する中河原新田は江戸時代には村方とされ、中河原新田には長良川の水運を管理して役銀を徴収する川役所が置かれていた。元禄八年（一六九五）に岐阜町を統治する専任の岐阜奉行が新設され、藩主用の御殿の場所に岐阜奉行所ができる。それまで岐阜町は町内各町のゆるやかな連合体であったが、岐阜奉行創設とともに町政システムが作られ、近世的な岐阜町が成立した。

岐阜町の西にある忠節村、南の今泉村・小熊村は、町の区域ではないが家並みが続いており、岐阜町と同じときに尾張藩領となっている。

明治七年（一八七四）に今泉村に岐阜県庁舎が新築され、岐阜町周辺は県政の中核地となった。明治八年に古屋敷新田・中河原新田が合併して富茂登村、忠節村と明屋敷村が合併して稲束村が成立する。米原・大垣と東進してきた鉄道は明治二十年一月に加納まで達し、同年四月には加納・名古屋間も開通した。加納駅（現在の岐阜市元町に所在）は翌年に西に移動し、岐阜駅と名を変える（大正二年＝一九一三に現在地へ移転）。明治二十一年には上加納村（岐阜町と加納町の中間に当たる）に遊郭（金津廓）が開業する。明治二十二年に発足した岐阜市は、岐阜町と富茂登・稲束・小熊・今泉の各村と、上加納村の一部を合わせたものであった。市役所は初め今泉西野町、明治二十四年の濃尾地震でこれが倒壊したのちの同二十七年には白木町に置かれた。道路網も県庁などの官庁、金津廓、岐阜駅を中心として整備されていく。このうち明治三十六年に上加納村、昭和六年（一九三一）から同十五年の間に本荘・日野・長良・加納など十二か村、戦後の昭和三十八年までに鏡島・方県・厚見など十六か村、さらに平成十八年（二〇〇六）に柳津町が合併して、現在の岐阜市となっている。

第二節 伊奈波神社の歴史

伊奈波神社の名の文字は、古くは因幡を主として伊奈波も使われている。正式に因幡から伊奈波へと改めたのは明治五年八月のことであるが、ここでは古い時代も含めて「伊奈波神社」と記載する。

（一）伊奈波神社の縁起

伊奈波神社には、その祭神・由来を書いた縁起が伝わっている。それによると、垂仁天皇（古事記・日本書紀で十一代天皇）が皇后のヒバスヒメノミコト（日葉酢媛命）との間に生まれた二人の皇子に望みを尋ねたところ、兄のイニシキイリヒコノミコト（五十瓊敷入彦命）は弓矢を、弟のオオタラシヒコノミコト（大足彦尊）は皇位を望んだ。天皇はその希望を叶え、兄皇子に弓矢を賜り、弟皇子は垂仁天皇が亡くなった後に即位して景行天皇となる。景行天皇はイニシキイリヒコノミコトを大変重んじたが、兄弟の仲を裂こうとした陰謀により、ミコトは因幡守として赴任させられる。一方、都では天皇家の宝剣が毎夜姿を消すという大事件が起こり、占ったところ宝剣が奥州の金石に心を寄せたためと分かった。そこで金石を都に召し寄せることになり、イニシキイリヒコノミコトが命じられて因幡国の兵とともに奥州に向かい、高さ約1・1m、周囲約2・4mの丸石（金石）を無事手に入れた。ところがそれを都に運び帰る途中で、ミコトの成功をねたんだ者の陰謀により、景行天皇がミコトを討つために大軍を派遣した。両者が対戦したのが美濃国厚見郡（現在の岐阜市南部）で、戦闘の間、金石は椿原に安置されていたが、一夜で高さ約110mの山となり、ミコトとその王子たちはそこに姿を隠した。ミコトは因幡大菩薩となって「金山」で衆生に利益を施され、奸計を信じて兄を討伐してしまったことを知った景行天皇は椿原の麓に社壇を造らせ、ミコトと王子たち、母後のヒバスヒメノミコ

トを祀らせた。

古い縁起が紛失したため、延文四年（一二五九）に卜部兼前が調進して神社に納めた。それが「漫滅」したので、文明四年（一四七二）に守護代の斎藤妙椿が世尊寺行高に書写させて奉納したのがこの縁起で、原本は天正十一年（一五八三）に岐阜城主織田信孝が羽柴秀吉らと戦った戦乱で焼失し、現在残るのは写本である（岐阜県重要文化財）。文明五年に美濃を訪れた公卿の一条兼良は、その紀行文『藤河の記』に「此山（※因幡山）は奥州より金の化来せるよし、因幡社の縁起にあるとかや」と記しており、この時点で伊奈波神社の縁起があったことは確実といえる。現在の伊奈波神社の主神はイニシキイリヒコノミコトで、金神社（岐阜市金町）はミコトの後であるヌノシヒメノミコト（淳熈斗姫命）、檀森神社（同若宮町）は二人の間に生まれた王子イチハヤオノミコト（市隼雄命）を祭神とする。また県神社（同県町）はイニシキイリヒコノミコトと毛里倫満娘との間に生まれたタラチネノミコト（擁烈根命）が祭神である。なお、「伊奈婆大神」の名は九世紀初頭に成立した『日本霊異記』の「女人産生石、以之為神而斎縁」に美濃国厚見郡の神としてすでに登場している。祭神の神階は、承和十二年（八四五）の従五位下から次第に昇り、正一位となった。前述の縁起には「美濃国第三宮」と書かれ、美濃国内でも社格の高い神社であった。近代には明治六年（一八七三）正月に県社、昭和十四年（一九三九）十一月に国幣小社に列している（昭和二十一年に社格制度は廃止された）。

縁起にある「椿原」は金華山の麓にある丸山のことと考えられている。この周辺の発掘調査で、七世紀には古墳、平安時代には古墳の石室を利用した祭祀関連かと思われる施設、十四世紀には「大寺」墨書遺物・五輪塔・石積など、十五世紀には梵鐘鑄造遺構が発見されており、ここに宗教施設があったと見てよいであろう。金華山北の「御手洗の池」は神社に参拝する者が身を清めた場であると伝えられている。

（二）神社の遷座

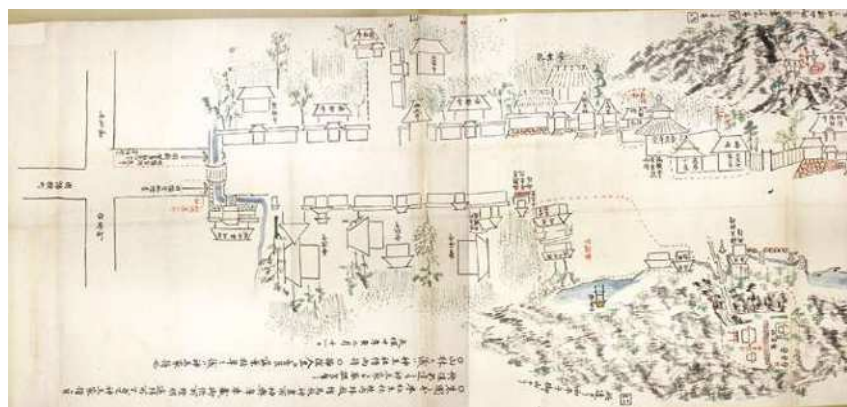
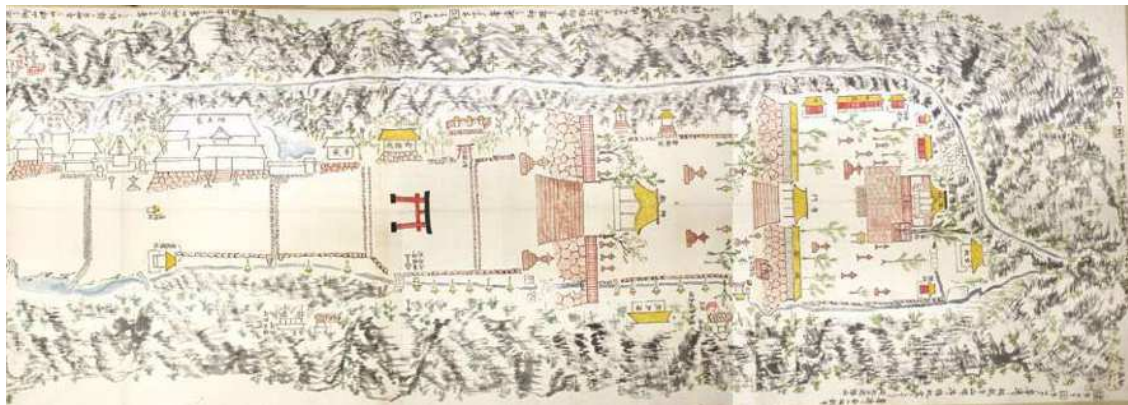
丸山から現地へ神社が移った時期については、『濃陽志略』（宝暦六年＝一七五六成立）などの江戸時代の地誌類では、斎藤利長が稲葉山の古城を再修した応永年中（一三九四～一四二八）とする。一方、慶長十八年（一六一三）の年紀がある「濃州厚見郡因幡大菩薩社之御事」『伊奈波神社略誌』掲載）では斎藤道三が天文八年（一五三九）に現地に移したと記載する。この文書の原本は確認できないが、延宝三年（一六七五）に書かれた「中島両以記文」『岐阜市史 史料編 近世一』所収）に、道三が因幡山を在城にするため神社を現地に移したと記述されている。応永年中・天文八年のいずれも神社の移転について同時代の史料は残されていないが、後者が傍証もあり信憑性が高いと考えられ、ここでは天文八年説を採用する。

所在地である丸山には、その後は長く烏帽子岩があるだけであった。烏帽子岩は、長良川のほとりに住む男性が物狂いのようになって鏡岩の下に沈む大石を引き揚げ神前に供えよとしきりに言っただけに従って、水底から引き揚げて伊奈波神社に運んだものと伝えられている（現在の神社境内、神門に向かって左手にある烏帽子岩は丸山の烏帽子岩を模したものという）。十九世紀中ごろに社殿が再建されたと伝え、江戸時代末には丸山山頂に建物が確認できる（小田切春江筆「岐阜町鳥観図」、伊奈波神社所蔵）。明治七年（一八七四）には伊奈波神社撰社「元伊奈波神社」となっており、現在も毎年四月二十五日に祠の前で丸山神社祭が斎行されている。

（三）氏子と境内建物の変遷

1 氏子の区域

室町時代以前には、美濃国厚見郡全体が氏子域であったらしい。これは、『日本霊異記』や、伊奈波神社縁起・『梅花無尽蔵』（後述）を根拠とする。



資料 2-2 天保 10 年 (1839) 伊奈波神社境内図 (伊奈波神社所蔵)



資料 2-3 安政 4 年 (1857) 伊奈波神社々景図 (伊奈波神社所蔵)

しかし江戸時代になると、金神社などが加納藩領に含まれることになり、氏子域も縮小した。十九世紀前期に書かれた『美濃雜事紀』に「産子四十五町に六ヶ村あり」と書かれているのは、岐阜町（四十五か町）と、岐阜町周辺の古屋敷・明屋敷・中河原・忠節・今泉・小熊の六か村を指す。

2 境内社殿

天文八年に斎藤道三が神社を移転したときには社殿が整備されたであろうが、詳しいことは分らない。天正十一年の戦乱で社殿も焼失したと考えられるが、再興されたであろう。延宝八年（二六八〇）には宮殿の廻廊・門・拝殿を再び造営した。天和二年（一六八二）の覚書（伊奈波神社所蔵）には、三間四面（約5・5m四方）の本殿、五間×三間の拝殿を初め、末社二十一社・鐘楼堂・神宮寺の満（万）願寺・薬師堂などの建物があつたことが記されている。鐘楼堂は、正保二年（一六四五）に小熊村が寄進したものであつた。貞享二年（一六八五）には破損が進んだ社殿の新築がなされ、尾張藩主徳川光友により遷宮の儀がおこなわれた。このときの棟札（伊奈波神社所蔵）には「郡郷氏子等以所寄之造営料新建立」とあり、氏子の尽力が大きい。正徳元年（一七一）九月に拝殿が焼失したが、享保十六年（一七三二）に復旧した『鸚鵡籠中記』『岐阜志略』。安政四年（一八五七）冬には、参道両側に石灯籠がずらりと寄進された。このきっかけは不明だが、『伊奈波神社略誌』では国難克服を願つてのものとする。あるいは、安政元年の地震で社殿も一部破損し、その復旧を記念してのものかもしれない。十九世紀中ごろの境内のようすは、37ページの二つの絵図により知ることができる。天保十年（一八三九）の資料2-2では、参道に木製と思われる灯籠が並ぶ。また、このころすでに伊奈波神社境内は花の名所でもあり、安政四年の資料2-3でも参道両側に桜が立ち並びピンクの花を咲かせている。

明治維新後の神仏分離により満願寺・仏堂・鐘楼堂などは姿を消した。さらに、明治二十四年（一八九二）の濃尾震災で神輿庫など以外は全て焼失してし

まう。社殿が面目を一新して復興されたのは明治三十年のことであつた。同三十五年には参道入口に石の大鳥居が寄進され、同四十一年ころには愛宕山に日露戦争の忠魂碑が建てられた。参道は同四十三年に敷石施工され、昭和十三年（一九三八）に舗装される。矢島町通りから神社へ続く東西の道は大正元年（一九一）に幅八間（約15m）に拡張されて桜が植樹された。さらに、震災復興工事に続く拝殿などの新築工事は昭和八年に竣工した。

3 因幡芝居のにぎわい

江戸時代から明治時代にかけての伊奈波神社周辺は、岐阜町最大の娯楽の場でもあつた。その始まりは、満願寺境内で手芝居・見せ物の興行が尾張藩から許可された延宝四年（一六七六）のことである。享保二十一年（一七三六）には大門に板葺きの水茶屋が建ち、見せ物の興行も許可された。資料2-2では特徴のある屋根の善光寺の隣に「芝居小屋」とその隣・向かいに茶店が、資料2-3にも檜皮葺きらしい大きな建物（芝居小屋）を確かめることができる。この芝居小屋は文化二年（一八〇五）出版の『木曾路名所図会』には描かれておらず、このちに建てられたのであろう。ここには三代目中村歌右衛門など有名な役者が出演した。天保十三年（一八四二）に幕府の改革令に触れて江戸十里四方追放となつた七代目市川団十郎（海老蔵）が、嘉永三年（一八五〇）に赦免の知らせを受けたのは、この芝居小屋に出演していたときであつた。

満願寺境内の芝居小屋は、明治初期の神仏分離にもなつて姿を消したのではないかと思われる。それに替わつて明治十年（一八七七）前後には、かつて岐阜奉行所があつた場所（伊奈波神社の北）に末広座、伊奈波善光寺前に国豊座、神社参道入口南に相生座、その西に栄座など劇場や寄席が次々と建ち、料理屋も多く、伊奈波神社周辺は新たなにぎわいを見せるようになる。これらの建物では歌舞伎だけでなく軽業・手品・講談・落語・演説会などが催され、伊奈波広小路の仮小屋でもさまざまな見せ物が興行された。国豊座などはいずれ



も明治二十四年の濃尾震災で焼失したが、震災後も芸妓屋・待合・料理屋が愛宕山の裏あたりから伊奈波山の上まででき、国豊座（のち明治座）・末広座は再建、米屋町の南東角に伊奈波座も建てられて再び活気づく。しかし、明治四十一年ころ愛宕山に忠魂碑が建設されるのにもない、麓の芸妓屋・待合が取り払われた。大正から昭和にかけて繁華街のにぎわいが柳ヶ瀬付近へと南下するとともに、伊奈波神社周辺の芝居小屋も姿を消した。大正六年（一九一七）には、忠魂碑前の広場を模範的公園（伊奈波公園）にする計画が立てられている。

第三節 伊奈波神社の祭り ―濃尾震災まで―

（一）中世以前

前述の延文四年（一二三九）の縁起には、「三月三日より六日まで、厚見郡平田東西庄以下の郷が八頭を勤めて八講を開き、奉幣する」と書かれているが、詳しいことは分からない。室町時代の学僧である万里集九が残した詩文集『梅花無尽蔵』には「濃州第三宮因幡大菩薩、祭礼再興之題辞」という文がある。そこには、伊奈波神社の祭礼は厚見郡全体として祭儀をおこなっていたのに、近年衰えてわずかに加納・井口の両郷住民だけとなったのを神が夢のお告げで嘆かれたので、神職が守護代役所に伝え、厚見郡の富裕な者の力で昔どおり盛んにすると述べられている。日付は明応五年（一四九六）三月三日で、これは祭礼当日だったと考えられる。祭儀の内容は不明だが、因幡大菩薩（伊奈波神社の祭神）が厚見郡全体で祀られていたのを知ることができる。

明治初期と思われる「美濃国第一大区 厚見・各務両郡由縁神社明細調」（岐阜県歴史資料館所蔵）の金神社の項目に「昔伊奈波神社ノ例祭ニハ其神輿上加納村金神社へ神幸ノ式アリシト云、今此式絶タリ、是ハ両神御夫婦ノ御神ナレハ、

カクアルヘキ御事ナルヘシ」と書かれている。この時点で「昔は伊奈波神社から金神社へ神輿を渡す神幸式があったそうだ」とかなり以前のことと記されており、江戸時代よりも前、おそらく中世以前の話として語り伝えられていたのであろう。同時代の史料では全く確認できないが、厚見郡全体で祀る神社であった時期には伊奈波神社から金神社へ神幸式がおこなわれていた可能性はある。祭日については、延享四年（一七四七）成立の『岐阜志略』および尾張真清田神社の祠官である佐分清円（一七六五年没）があらわした『美濃国古蹟考』の物部神社（伊奈波神社）の項目に、かつては三月朔日（一日）から六日であったと書かれている。いずれも後世の編纂物であり、根拠となる史料は見つからない。

しかし、中世の祭儀は伊奈波神社の社領が無くなった文禄年中（一五九二―一五九六）には廃れてしまったという。社領は『岐阜志略』に、かつては七百貫、道三から信長の時代には三百貫あったが、証文が天正十一年の戦乱で失われて豊臣秀吉の検地のときに社領は無くなったとする。

（二）江戸時代

しかし、慶長年中（一五九六―一六一五）には祭礼は復興したと伝える。『岐阜志略』には「慶長年中岐阜町中より車二十四輛渡ししとなり」、「美濃国古蹟考」にも「慶長年中三月三日、阜下民挙出餉車二十輛、儀祭礼」と、慶長期の祭礼復興を記す。ここでは山車を曳き出しているが、その数は両者で異なり、同時代の史料も残されていない。ただ、伊奈波神社には慶長二十年の年紀がある獅子頭（岐阜県重要文化財）が残されている。これは岐阜町の大工や杣らが造ったもので、かなり後ではあるが文久三年（一八六三）に岐阜町商人連中から獅子頭の屋台が寄進されている（ただし、江戸時代の祭礼で獅子屋台が出された記録は確認できない）。この獅子頭は、慶長年中の祭礼復興をわずかではあるが裏付けるものと考えられる。この時期の祭儀はまったく分からないが、前述の

慶長十八年「濃州厚見郡因幡大菩薩社之御事」では「三月三日於社頭神拝、次二本地之秘軌一座相勤申候」とあり、因幡大菩薩の本地仏である薬師如来にささげる儀式をおこなったのであろう。

このち、『岐阜志略』は「亦略して今三月三日に社頭にて軽き車二輛しぼらく飾り祭礼とす」、『美濃国古蹟考』は「事亦過奢美、鬭争之事アリ、町家制ノ止ム也、元禄十三年（一七〇〇）以来渡車二輛、到于今爾」と、盛んになった祭礼は十八世紀中ごろには山車二台のみになっている。『美濃国古蹟考』にいう山車をめぐる「鬭争」というのは確認できないが、岐阜町の各町が自分たちの山車の豪華さを競い合つて争うほどの状況だったのだろう。

享保十年（一七二五）に釜石町（現在の本町三丁目）に住む有力商人の柴田与市は、三月三日の祭りのようすを「祭礼首尾よく渡ル。天氣好。上大桑町・東材木町右両町也。上大桑町白髭、東材木町邯鄲。白髭からくり町嚙（※丁寧）也。邯鄲前代未聞のからくり、結構至極事共也。尤仕損シ候へとも、結構至極の事共故、諸人ゆるす。毎年の事ながら、余り替りたる事故、留置ク」と日記に記録している。からくり山車二台が出され、上大桑町は白髭、東材木町は邯鄲のからくりであった。これが、伊奈波神社例祭に曳き出すからくり山車の演目に分かる最初である。「毎年の事」と書いているので、このとき初めて山車が渡ったわけではない。あるいは、『岐阜志略』などという山車二台というのは、他にもある山車のうち当番で出された数をさすのかもしれない。後掲の表2-1では幕末に上大桑町は胡蝶のからくり山車、東材木町は踊り山車であり、いずれも変更があつたかと考えられる。なお、伊奈波神社の祭礼には岐阜奉行所の役人が見物するための棧敷も造られたことが柴田の日記に記されている。

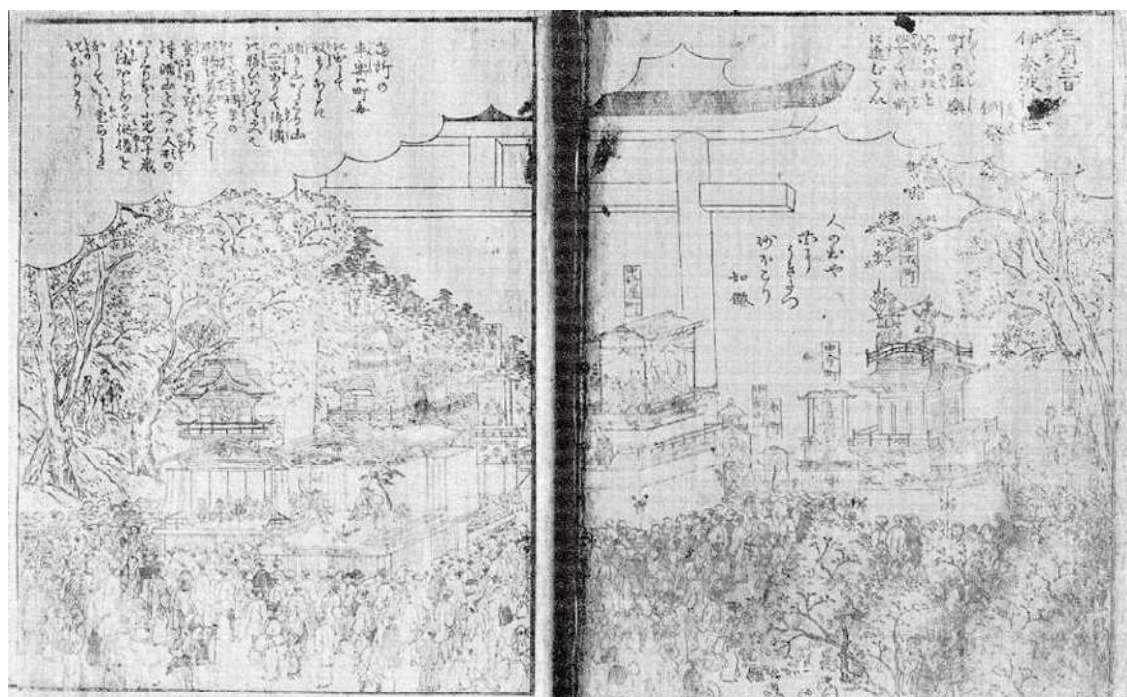
文化十年（一八一三）三月には、岐阜町の下笹土居町に新しいからくり山車ができた。川出家文書の『歳鑑』に「一、新山出来 笹土居えは山井からくり 謡囃子方迄不残引請（中略）此時ギフ下笹土居町御祭礼請取」と記録がある。

川出家は、長良川の岐阜町対岸に当たる真福寺村の豪商であつた。山車の代金は十七両で、川出家は謡方・囃子方まですべて請け負つた。

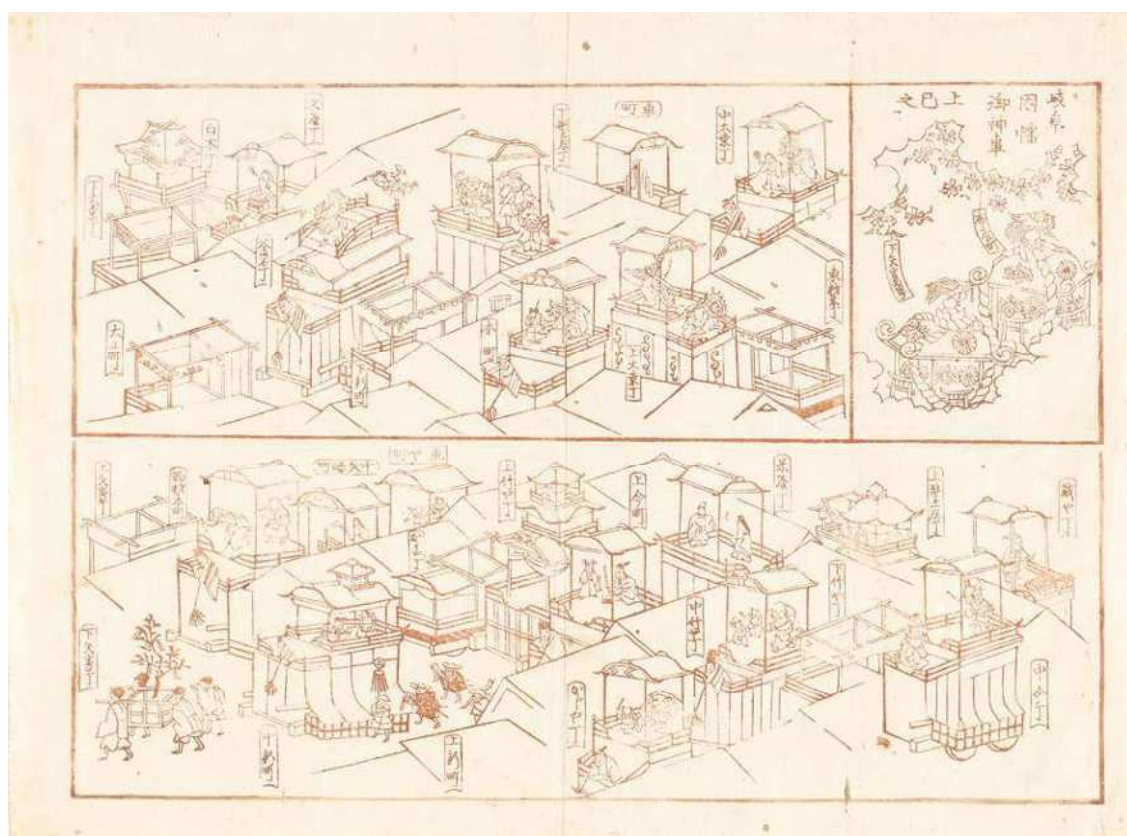
また『美濃雜事紀』には、「例祭三月四日、狂言あり」と書いた欄外に「岐阜奉行の思召にて狂言を止め、文政十丁亥年（一八二七）より山車に成る」と書き込まれている。山車はこれ以前から曳き出されているので、文政十年に初めて山車に変更したわけではない。後述する『手前味噌』や近代の新聞記事から見ると、踊り山車の上では歌舞伎狂言が演じられており、岐阜奉行がこれを禁じたということであろう。

布屋町は神輿を所有しており、その道具箱には享保二十一年（一七三六）の墨書があつた『金華史誌』。木造横町（木造町）の獅子頭には宝暦五年（一七五五）の箱書、本神輿の鳳凰などには安永三年（一七七四）の箱書がある。箱の墨書からは、木造町の獅子神輿・本神輿・花神輿はこのち現代にいたるまで修復などが重ねられてきたことが分かる（詳細は第六章）。もとは中矢島町（加茂町。現在の矢島町一丁目中組）の山車で現在は関まつりで曳かれる加茂山車は天保十二年（一八四二）制作といい、現在も岐阜まつりで奉曳される安宅車の車は幕末から明治初期の制作と考えられる。このように、江戸時代後半には山車が新たに造られ、町神輿もかたがていた。

本居大平（本居宣長の養子。一七五六～一八三三）は、「三月三日御祭を見奉りて」という長歌を詠んでいる（伊奈波神社所蔵）。「春風の 伊奈波の里の ゆきとほる 大路はろはろ 畏きや 神の御幸と うるハしく ねりゆく見れと 里人も こと里人も 遠近ゆ 袖引つらね 玉鉾の 道のちまたに 佐受岐（※棧敷） ゆひ さはにつとひて 大路のや 左みきりに 家毎に うすくまりをり 物見ると なみある見れは（後略）」と詠まれている。路傍で多くの人がうずくまつて拝するという姿勢は、山車に対するのではなく神輿、つまり神幸式がおこなわれていたことを示す。どのようなルートであつたかは不明だ



資料 2-4 伊奈波神社例祭（『伊奈波神社略誌』掲載）



資料 2-5 岐阜因幡御神事（岐阜市歴史博物館所蔵）

が、御旅所はあるいは伝承が残る下大桑町上ヶ門付近（現在の岐阜小学校あたりか）だったかもしれない『岐阜市史』。

また、前述した七代目市川団十郎と一緒に伊奈波の芝居小屋に出演した三代目中村仲蔵の自伝『手前味噌』には、祭礼のようすが記されている。嘉永三年（一八五〇）のことで、「三月三日、権現様の祭礼は中々立派なものにて、三十六町の内より隔年に十八ヶ町づゝ家台を出す例なりとぞ。この家台の上にて町々の童男童女十二歳より以下の者狂言を催ほすが毎年極りなり。これも種々例あつて、一切、切る事と殺す事を忌ゆゑ、狂言は一の谷陣屋、近江源氏の陣屋、廿四孝の竹の子と極め、われらこの子供等に稽古してやる。二日の宵宮賑はしく滞ほりなく祭礼済み（後略）」というもので、ここには踊り山車上で子どもたちが歌舞伎を演じること、岐阜町全体の半分ずつが隔年で山車を出すこと、三月三日が祭礼で二日に宵宮が催されたことが分かる。

また、江戸時代後半から明治時代末にかけて、若者たちが唄や踊りをしながら喜捨を集めるときに歌われた台本「柳津の七墓」（岐阜市歴史博物館所蔵）のうち、江戸時代末と思われる「岐阜御祭礼」には「帰命長来を好なれバ やりま正 是よりきたの金花山 ふもとに名高キ岐阜町の 祭礼あら／＼申そなら三十六町みなそろへ 三月三日の晴天に おいなば様え山を引く ミな壺式ばんのばんをつけ ○祭礼や山のばんづけハ拾六文と通りぬる（後略）」と唄われている。

江戸時代の祭礼は、『岐阜志略』では三月三日、『美濃雜事紀』では三月四日と書かれているが、少なくとも幕末には『手前味噌』から二日が宵宮、三日が本祭であった。また本居大平の長歌から、神幸式も三日に斎行されたものと考えられる。

このころの祭礼のにぎわしさを描いた絵画が二点残されている。一点は尾張藩士の小田切春江（一八一〇～一八八八）が描いた「岐阜名所図会」の中の一

枚で、写真が『伊奈波神社略誌』に掲載されている（資料214）。そこには、三月三日に各町から出された山車が神社前の坂を登るのを見物する群集が描かれる。人物には洋装は全くなく男性は全員まげを結っているのが、江戸時代末期のものである。添えられた文章には「三月三日 伊奈波神社例祭 町々の車楽いなバの坂を登りて神前に進むてい」と題して「当町の車楽ハ町毎に出して数多あるに、踊り山・からくり山の二品ありて、錦繡の粧ひハいふも更也、うてな・高欄等の彫物に善美をつくし、実に目を驚かせり。殊ニ踊山といへるハ、人形のからくりなく、小児の十歳未満ほどなるが俳優をなして、いと愛らしき観なりけり」と書き、上竹屋町・釜石町・中今町などの山車が神社鳥居前でからくりや歌舞伎を奉納している。

もう一点は「岐阜因幡御神事」（資料215）と題する木版印刷物（岐阜市歴史博物館所蔵）で、二十七台の踊り山車・からくり山車、鷹狩りの仮装行列、神輿、榊が家並みの間を進み、「上巳之日」つまり三月三日に催された山車の勢ぞろいのようなものである（明治六年に祭日は四月に変更）。このような刷り物が、「柳津の七墓」に唄われる「山のばんづけハ拾六文」の番付に該当するのである。これは観客はなく服装などで年代は確定できないが、販売するものであれば毎年増し刷りされたであろうから、特定の年代ではなく長く使われた可能性がある。『手前味噌』では岐阜町内の各町の半数ずつが交代で山車を出すとしているが、この「岐阜因幡御神事」はすべての山車・神輿などが描かれたオールスターキャストであり、どの年でも通用したであろう。ただし、十八世紀中期から十九世紀にかけて造られた木造横町の本神輿などが描かれていないが、この理由は分からない。

なお、「岐阜因幡御神事」に描かれた町はすべて岐阜町の内であり、氏子である周辺の中河原新田・小熊村などは含まれていない。中河原新田に住んで長良川役所の改役という役職を勤めた西川家の日記（岐阜県歴史資料館所蔵）に



も、祭礼を見物に行くのみで参加しているようすはない。また、祭礼の名称は「伊奈波神社例祭」「因幡御神事」とある以外に、「柳津の七墓」では「岐阜御祭礼」、西川家の日記に「岐阜祭礼」の名で記される。下佐波村（現岐阜市）の青木久兵衛が残した日記『岐阜大学教育学部郷土資料』では明治四年（一八七二）以後に家族が毎年のように岐阜町へ祭り見物に出かけているが、そこには「岐阜祭り」と書かれている。岐阜町の外からは、伊奈波神社の春の例祭が遅くとも幕末には「岐阜祭礼」「岐阜祭り」と呼ばれていたことが分かる。

（三）明治時代前半 ―濃尾震災まで―

版籍奉還、廃藩置県を経て、明治四年十一月に岐阜県が成立した。この翌五年三月の祭礼にあたり、二月に小熊村庄屋・岐阜町惣年寄から岐阜県庁へあてて、祭礼に山車・神輿・櫓飾りなどをおこなう届が提出された。『伊奈波神社略誌』にはその内容が掲載され、「山車数多二付、神前おみて両日二而執行」とあるが、『笠松県・岐阜県庶務掛日記』（岐阜市史 史料編 近代一）所収）には「来月（※三月）二日・三日、躍車等為牽申度願出」とあり、祭礼は二日宵宮、三日本祭であったと思われる。この届は村方・町方だけの作成で伊奈波神社は作成者に含まれておらず、山車などが町・村の主催であったことを示している。また、小熊村が含まれているのは、明治四年三月三日に「岐阜祭礼 但当年ヨリ鉄屋・小熊一緒ニナル」と『上加納村旧記』（岐阜市史 史料編 近代二）所収）にあるのに対応するもので、小熊村が伊奈波神社の祭礼に直接関与するようになったためであろう。

ここには、からくり山車十一、踊り山車十三、神輿三、神前への供え物六、櫓飾り一の合計三十四か町が挙げられている。おそらく、岐阜県成立という大きなできごとに対する祝賀として、たくさん町の町から奉芸や供え物がなされたのであろう。小熊町・中鉄屋町（いずれも小熊村）も踊り山車を出している。

また、現在も続く清影車の前身であるからくり山車が玉井町（中河原新田）で新造されたのは明治六年のことで、この時期に初めて祭礼に岐阜町区域以外から奉芸されるようになった。

祭日は太陽暦採用により明治六年から四月四日・五日に改められた。明治七年には上加納村の金神社・溝畑社・粕森（榎森）社・住吉社・県社の祭日を正月二十日から四月三日に改定するとの届が岐阜県へ出されており、『岐阜市史 史料編 近代一』掲載）、さらに明治九年に金神社の祭日を四月三日から伊奈波神社と同じ四月五日に改めたいと願っている『上加納村旧記』が、すでに「美濃国厚見・各務郡神社明細帳」（岐阜県歴史資料館所蔵）では明治七年五月時点で金神社を初めとする上加納村の諸神社は例祭日を四月五日としている。また、今泉村西野の天満神社も明治初期に「近來四月五日を祭礼日に加えた」（岐阜県歴史資料館所蔵「美濃国第一大区 厚見・各務両郡由縁神社明細調」という。明治二十二年に岐阜市が発足し、のち周辺地域が岐阜市と合併していく中で例祭日を伊奈波神社と合わせていった例は多い。昭和十六年（一九四一）に岐阜まつりと同じ四月四日・五日に例祭を斎行した神社二十一社は、すべてこの時期に岐阜市内に所属している（岐阜日日新聞 同年三月三十一日記事）。現在、岐阜まつりの日に市内各地の神社で例祭がおこなわれるが、その動きはすでに明治七年に始まっているといえる。

このち、岐阜まつり（以下ではこの名称を用いる）のようすが具体的に明らかになるのは明治十九年以後である。十九年にはからくり山車九、踊り山車六、造り山車一、神輿一が出された。このときには「当番」が決まっており、『手前味噌』に記されたとおり山車などが全て曳き出されるのではなく、順番で出されたことが確認できる。また、山車の曳き出しについては当番町と各町総代らが伊奈波神社で集会して決めており、町民の合議に基づいて実施されていた。実はこの年は不景気で節約のため例祭延期の意見もあったが、各町はすでに準



資料 2-6 からくり人形の板絵（伊奈波神社所蔵）



備にかかつており、当番町・各町総代が執行と決めたものであった。

このとき、末広町（旧岐阜奉行所跡に明治八年に成立）では「新趣向」として車の上に八重桜を模した樹を立てて周囲に作り花を飾り、町内の若者が三弦・太鼓で囃しながら市中を回った。これが、のちにたびたび登場する「造り山車」であろう。こののちの記録には「造り（作り）物」という語が毎年のように出ており、また『岐阜市史 通史編 民俗』には「造り山車」に趣向を凝らすようすが記されている。「造り物」と「造り山車」の区別ははっきりしないが、造り物は同じ奉納物を「造り山車」と書いている場合もあり、車に載せて曳いたものらしい。なお、西川家の慶応三年（一八六七）の日記『岐阜県史 史料編 近世9』所収）には大八車二台で「踊り山・からくり山」をこしらえたという記事があり、丈高い山車でなくとも臨時に踊り山車などを作ることができた。

明治二十一年には岐阜まつりの「祭典掛」という役名が初めて確認できる。氏子総代や各町総代とは別に選ばれ、祭典のとりまとめや紛議のときの調停役を勤めた。この年にはからくり山車八・踊り山車四・造り物二・神輿五で、二か町が櫛を出した。新聞では、四月三日に各町の山車は岐阜県庁（このころは司町に所在）前に曳きつける予定と報道されている。これは明治十年に、四月三日は神武天皇祭日でもあることから「山車引初」を復活させたいと小熊村・岐阜町と神社から岐阜県へ願い出て許可されたもの（伊奈波神社所蔵『伊奈波神社史稿 祭儀篇』で、各山車は県庁前で囃を演じたうえで点燈し、あちこちを曳き回した。明治十九年には確認できないが、このうち三日の「引初」は断続的ながら続けられ、「三日の夜宮」とも呼ばれている。四日の宵宮では車之町（現在の本町五丁目）・七曲町（同六丁目）ですべての山車などが点燈して伊奈波神社へ向かった。六日には「山車卸し」として町民が岐阜公園などで行楽をしているが、これはおそらく江戸時代から続くものであろう。また、茶屋町（旧古屋敷新田）・忠節町（旧忠節村）・美園町（上加納村のうち。小熊村の南に位置し、

岐阜町と加納町をつなぐ街道上に江戸時代から町場を形成していた）から神輿が出されている。小熊村は明治四年以来まつりに参加し、玉井町（中河原新田）は同六年に山車を新造しているが、それらに続いて明治二十一年には岐阜まつりでの奉納区域が旧岐阜町外にさらに拡大している。

明治二十二年はからくり山車六、踊り山車三、造り物三、神輿二であった。また、俄・手踊りが市中を回り歩いた。

明治二十三年は陸海軍の大演習により兵士が各町に止宿するため、祭日が四月八・九日に変更され、奉納はからくり山車八、踊り山車三、造り物三、神輿二と、櫛が二か町、鏡餅が一か町であった。この年から、山車の当番をくじ引きで決めることとなる。また、二月の社務所における会議で「本年ハ上加納へ氏子総代之内より誘導^{かたがた}旁通知有之筈」と議決されており、岐阜まつりへの勧誘を上加納へおこなうとしている（伊奈波神社所蔵「例祭関係書類綴」）のは、前年七月に岐阜市制が施かれて旧上加納村の北部が岐阜市となったのに伴うものであろう。

明治二十四年はからくり山車六、踊り山車三、造り物二、神輿二と、櫛が二か町、鏡餅が一か町であった。この年の「例祭議決之書類留」（伊奈波神社所蔵）には、からくり山車・踊り山車と造り物・神輿・櫛・鏡餅を出す町のリストがある。からくり山車は十四（すでに無かった上大久和町を除く）、踊り山車は十一、造り物は十、神輿は三である（このうち明治二十四年に実際に奉納した町は表2-1では赤字で示してある）。からくりの内容も書かれており、この時期の各町の奉芸の全容を知ることができる。そのからくり人形のようなすは明治二十三年に奉納された板絵（資料2-6）に描かれている。筆者は牧田種麿（一九〇八年没）で、繊細で華麗な絵を得意とし、伊奈波神社のすぐそばに住んでいた。翌年の濃尾震災で山車も被害を受けたことを思うと、この絵は失われた山車のからくり人形の記録としても貴重なものである。

「例祭議決之書類留」には、祭礼の日程をまとめた「祭典定約」が含まれている。それによると、

◎三日 引初。からくり山車は正午までに県庁前に揃い演技。踊り山車・造り物は午後一時から適宜県庁前に引つけ、都合次第芸事をする。

◎四日 試楽。午後二時に神拝式。夜宮神事。からくり山車は番号通り列をなす。踊り山車・造り物などは最寄りの場所より、からくり山車の後に引き渡る。

◎五日 本楽。午前八時に神拝式。午前十時から、からくり山車が奉納。正午から造り物奉納。午後一時から踊り山車奉納。

という次第であった。ここには神社から神輿を出す神幸祭が記載されていない。四月四日の岐阜日日新聞記事には「同社の神輿は今明の両日市内を歩き廻るなり」と書かれているが、これは町の神輿であろう。

この時期の岐阜まつりに出された山車などは、本章末尾の表2-1にまとめている。ただし、上大久和町は明治十七年に所有していたからくり山車を売却し、三年の間に山車を新造する約束であったが果たせなかった。明治二十四年には、他の町から借りて出車している（「例祭関係書類綴」「例祭議決之書類留」）。資料2-16に同町のからくり人形が描かれていないのはこのためである。米屋町は所有するからくり山車が小さいため造り替える予定で明治十年ころに加納天神町へ売却し、新造からくり山車の図面まで引いたものの実現しなかった『岐阜米屋町史』が、資料2-16に「御湯花」のからくり人形が描かれており、この理由は今明らかにできていない。また明治二十三年に常盤町は踊り山車をからくり山車に変更したいと願っている（「例祭関係書類綴」）が、これは他町から借りるということであろう。

このころに各町で所有していた山車は、町内に保管場所があったと考えられるが、くわしいことは分からない。わずかに米屋町が現在の伊奈波通一丁目の町有地にある山車蔵（間口二間、奥行三間）にからくり山車と人形などを納め、

その東の借家を会所として奉芸の稽古や山車卸しの会場とした『岐阜米屋町史』こと、車之町の山車（からくり山車）蔵は木造町へ続く道とT字路になった部分にあったが、戦争中の強制疎開で取り壊されたこと『岐阜町金華の誇り』が分かる程度である。下新町では十九世紀に町所有の屋敷に祭礼道具を入れる小屋を建てていた（『下新町家並帳』、『岐阜市史 史料編 近世一』所収）が、あるいはここに踊り山車も納めていたのかもしれない。

なお、踊り山車の稽古は三月初旬から始まった。学校に通う児童たちは休業して励み、勉強がおろそかになると識者が心配するほどという。確認できるかぎりは踊り山車の上で演じられるのは歌舞伎の演目であった。また、踊り山車は稽古のため引初以前から町内路傍で上演したり隣町へ曳き出したりしている。

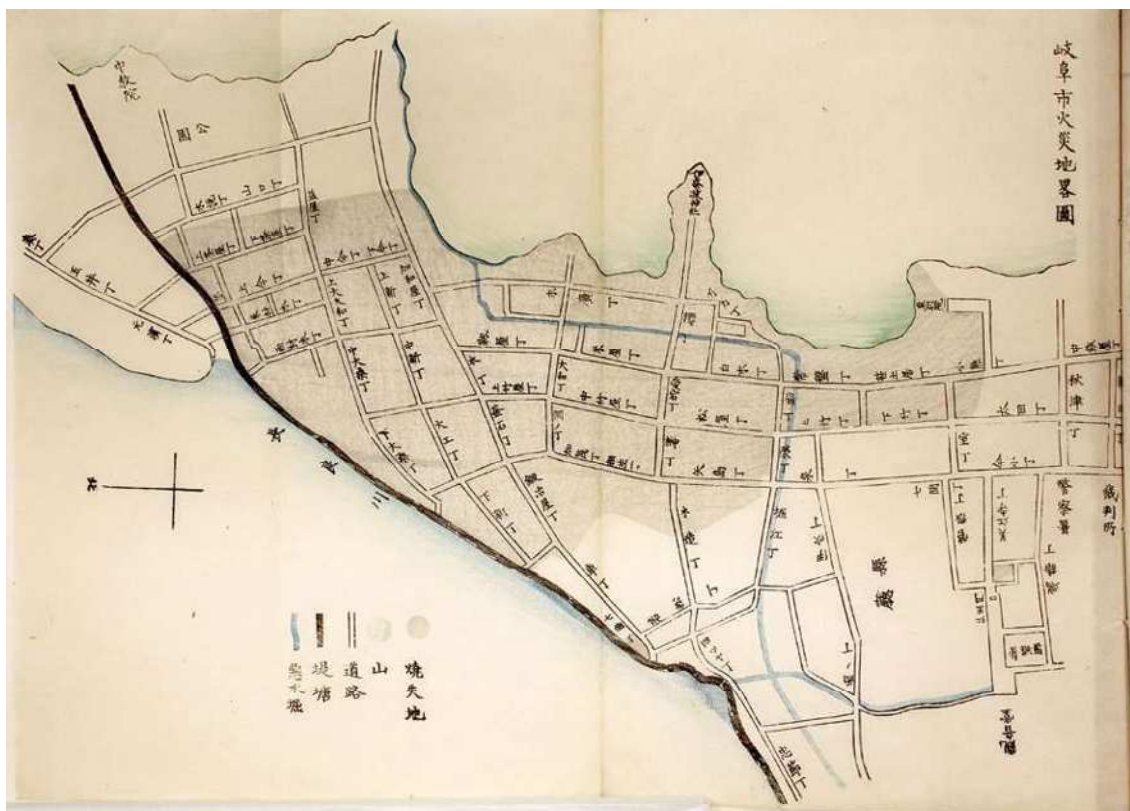
第四節 濃尾震災から終戦まで

（一）濃尾地震による被害

明治二十四年十月二十八日午前六時三十七分、マグニチュード八・〇を超える大地震が岐阜県を中心とした地域を襲った。測候所の地震計を破壊するほどの激震のちも余震が繰り返し、二十八日午後だけでも百回以上の震動が記録されている。そして、直後に起こった火災がさらに被害を大きくした。最初に出火したのは岐阜市秋津町にあった蚕糸組合事務所と伝えるが、すぐに木造町・下新町・七曲町・鍛冶屋町（現在の本町四丁目）にも火の手が上がる。家族や家を失って狼狽する市民は消火につとめる者も少なく、秋津町・七曲町・木造町はようやく消し留めたものの、他の二町の火は東北に向かって広がり、さらに強い西北風にあおりたてられた火勢は東南方向へと町を焼き尽くし、地震から九一日以上たった二十九日の午後二時になってようやく鎮火した。この大災



資料 2-7 伊奈波神社周辺の震災被害写真（岐阜市歴史博物館所蔵）



資料 2-8 岐阜県下震災景況の中の岐阜市火災地略図（岐阜市歴史博物館所蔵）

害は「濃尾震災」と呼ばれている。

このとき、かなりの人数が家財とともに伊奈波神社に避難していたが、西北風をともに受ける境内は、延焼を防ぐ手立てはない。伊奈波神社祠官であった塩谷幸満は御神体・神宝・古額・棟札などを運び出したが、伊奈波神社に近付いた火の手はまず近くの民家に及び、そこから「摂社愛宕神社ニ移り、其撰末社鳥居ヲ焼払フト見ル間ニ、本社・遥拝所・大鳥居ヨリ水琴亭・雲錦楼及ヒ我県家花ノ寮ニ燃移り、延テ塔ノ稻荷社及ヒ境内ニ堆積セル市民ノ家財ニマテ齊シク発火スルニ至レリ。是ヨリ前、本社・拝殿ハ既ニ飛火附着シテ北部屋根ヨリ火焰ヲ揚ケ、徑チニ神饌所・神廐・行事殿・宮門左右回廊・手水所及ヒ四近ノ立木ニ移り、終ニ本殿撰末社ヲ併セテ焼失スルニ至リシナリ」（塩谷幸満著『震災記』伊奈波神社所蔵）。山上も山下も一面の火の海となり、午後三時ごろには宏壮な社殿はただ礎石を残し、鬱蒼と茂っていた老樹も枯れた幹を見せるだけとなったしまった。資料2-7は伊奈波神社参道付近の惨状の着色写真（岐阜市歴史博物館所蔵）で、山ぎわまで見通せるほど全てが失われた中に枯木が突っ立ち、瓦礫が散らばっている。石灯籠や石垣も崩れ落ち、境内の建物で焼け残ったのは神輿庫と社務所だけであった。

濃尾震災で、岐阜市では死傷者約一五〇〇名、総戸数の三分の一が全焼し、それを合せて三分の二が全半壊した。各町の山車もほとんど焼失し、残るのは車之町・加茂町のからくり山車と、上鉄屋・下鉄屋両町共有の踊り山車のみであった（岐阜日日新聞 明治二十七年三月二十日記事）。この「上鉄屋」は「中鉄屋」の誤記と思われるが、明治二十四年には中・下鉄屋町はそれぞれ踊り山車を所有とされている。震災を免れた一台が両町共有となったのであるうか。

伊奈波神社では二十九日に類焼を免れた社務所に御神体や宝物を遷し、十一月十四日には本社仮殿が造営されて仮遷座式が挙行された。翌明治二十五年から再建のための寄付を全国に募り、罹災した氏子たちも明治二十六年二月から

三年間の日掛けで積み立てを始めた。内務省や市内有志からの提供、上有知町（現美濃市）・揖斐町（現揖斐郡揖斐川町）など市外からの寄附も合わせた資金をもとに、明治三十年十一月二十一日に本社・幣殿などが竣工し、正遷宮をおこなうことができた。

（二）震災後から終戦時までの岐阜まつり

震災直後の明治二十五・二十六年にも四月の例祭は斎行された。二十六年には四屋町の若者たちなどの俄や興行がおこなわれ、「昨年に比べれば幾分か祭典の氣を増した」と報道されている（岐阜日日新聞 同年四月七日記事）。

このち、岐阜まつりはさまざまな新しい様相を見せる。まつりそのものは、皇室の慶弔や戦争、伊奈波神社の慶事、景氣の良しあしなどで盛り上がりにも強弱がある。ここでは、非常に盛んにおこなわれた明治二十七年・同三十九年だけを個別でとりあげ、それ以外は毎年のようすを詳述することはず、震災後にあらわれる新しい動向についてまとめる。

1 山車・神輿の新造・売却・奉納

震災により岐阜まつりの多くの山車は失われた。それ以後の奉納物は表2-1から3にまとめたが、もう少し詳しく述べる。

現在も奉曳される安宅車は、車之町（現在の本町五丁目）の山車であった。同町は「岐阜因幡御神事」では造り山車と見えるものを曳いているが、明治二十一年に大改修して弁慶義経のからくり山車に改装、「安宅車」と呼ばれるようになった。表2-1では明治十九年に車之町はからくり山車を曳いているが人形は分からず、これが現在の安宅車と同じだったか、あるいは他町から借りたものかは不明である。

同じく若戎車（蛭子車）は、加納本町三丁目の山車が金屋町に移ったものと伝える。加納天満宮（岐阜市加納天神町）の祭礼もからくり山車などが多数奉



納される非常に盛んなものであった。嘉永五年（一八五二）の天満宮九百五十年神忌の祭礼に本町三丁目が「蛭子山」を曳いており『加納藩士 田辺氏見聞録』、若戎車の人形の箱書に「三丁目」「三丁目」とあることも加納本町三丁目からの山車の移動を裏付けている。譲渡先と伝承される「金屋町」は表2-1・2の中鉄屋町・下鉄屋町を指すであろう。明治二十七年に両町と小熊町は連合して「下山車に造り物」と俄を出し、同三十二年には中鉄屋町が「旧踊り山車台」に紙雛の造り物を載せる造り山車を曳いている。これらは、震災で残された踊り山車を使用したであろう。明治三十四年には下鉄屋町がからくり山車、同三十九年には中鉄屋町が蛭子の鯛釣りのからくり山車を曳いている。この年の山車を描いた「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之図」の中鉄屋町の山車（資料2-9右上）を見る限りでは蛭子は成人であり、現在の若戎車と同じとは断定しにくい。同じ年に加納天満宮の祭礼では三丁目がからくり山車を出しており、同四十一年以後の加納の祭りには三丁目の山車が確認できないので、このころに加納から金屋町へ移ったと考えられるが、時期はまだ特定できていない。

清影車は、今回の調査で山車蔵から見つかった「玉井町」の札の裏書からその歴史が分かる。「明治六年九月玉井町先輩、一町独立山車ヲ新造シ伊奈波神社ノ祭儀ニ列ス。同二十四年十月大震災ニ罹リ全市殆ト焦土トナリ、山車亦焼失セリ。同三十六年十一月玉井町・元浜町・港町ノ三町協同、更ニ山車ヲ造ランコトヲ議シ、同三十七年一月起工、同三月竣功、自今三町当番挽之、永以為例。明治三十七年三月誌之」というものである。明治六年に中河原新田のうち玉井町が一町で造った山車（これも清影車の名であった）が震災で焼失し、明治三十七年に玉井・元浜・湊の三町で協同して新造されたものであった。

踊車は太鼓の収納箱に「小熊町」の墨書があった。小熊町は明治初期から踊り山車を曳いているが、新聞報道では焼け残った山車に含まれていない。このうち同町は造り物（おそらく造り山車）を出しており、若戎車が金屋町へ譲

られてのち、中・下鉄屋町共有の踊り山車が小熊町へ移った可能性が考えられる。以上の現存四台以外に、松屋町では明治三十九年に日露戦争の戦勝気分が盛り上がり山車を新造し、加納本町へ譲つていた唐子の人形を買い戻した。人形は司馬温公の甕割が題材であった『岐阜市史 通史編 民俗』。ただし、資料2-9で松屋町は蛭子の鯛釣りのからくり山車となっている。

また、明治三十二年に常盤町は「融のからくり山車」を曳き出し、同三十四年に上加納区内の金津青年会がやはり「融のからくり山車」を出している。この二つが同じものかどうかは不明で、常盤町がからくり山車を新造した記録は見つからない。

新造以外に、売却された例もある。加茂町のからくり山車は明治二十七年三月に武儀郡関町（現関市）へ売却された。震災でわずかに焼失を免れた山車が市外へ移るのを惜しむ人から取り戻しを求める動きもあったが、実現していない。

神輿については、明治二十七年に柳沢・藍川・東川端・鉄屋横町が連合して新造している。末広町も昭和初期ごろに新造してまつりでかついだ。戦前にも子ども神輿があり、昭和十二年の本楽に境内へ子どもたちがかついで繰り込んでいることが確認できる。一方では、矢島町が所有する神輿二基を明治三十四年八月に伊奈波神社へ奉納し、神庫に納められることになった。ただし、同町が祭礼で神輿を出すときには申し出に応じると約束されている（伊奈波神社所蔵 明治三十四年『日誌』）。布屋町も昭和十九年に神輿を神社に奉納した（『金華史誌』）。

表2-1から3で見られるように、山車は震災後にもかなりの町から出されている。しかし、それらは全て各町が所有していたのではなく、他町から借り出したものも多かったと考えられる。明治三十九年の岐阜まつりでは「竹ヶ鼻・加納町あたりから丈高いからくり山車を借りた」（岐阜日日新聞 同年四月四日記事）といい、同四十三年には加納町のからくり山車借用について祭典掛が打診している（伊奈波神社所蔵『例大祭雑誌』）。松屋町・車之町のからくり山車

は自町で曳く以外に、要望があれば他町へも貸し出した『岐阜市史 通史編 民俗』。大正八年に泉町は伊奈波神社から「奉芸車台」を借りており（伊奈波神社所蔵 大正八年『日誌』）、造り物を載せる車台だけを神社から借りることもあった。

表2-1から3は、以上のように借用山車などが含まれていることを意識してみる必要がある。

なお、昭和五年にはまつりのにぎわいを増すために伊奈波神社から山車二台を出したと報道されている（大阪朝日新聞岐阜版 同年四月二日記事）。戦前に山車自体を伊奈波神社に奉納した事例は全く見当たらず、この二台の山車の由来はまだ解明できていない。

2 明治二十七年の岐阜まつり

明治二十七年は、震災後最初の本格的なまつりとなった。新聞では「お祭りの中興」とまで表現されている。神社はまだ本格的な再建ができていないものの、四月三日に引初、四日試楽と宵宮、五日本楽がおこなわれた。

社務所では「にぎにぎしい祭典執行」を各町に依頼し、その準備状況を調べている。祭典掛も震災前と同じように選任された。奉納内容は表2-1にあげたが、震災前のからく山車・踊り山車は車之町以外全て姿を消している（米屋町もからく山車を出しているが、どのような山車か不明）。それに替わって、各町は造り物や俄を工夫して祭礼を盛り上げた。造り物は末広町の巨大な笙（しょう）、美江寺町の牡丹唐獅子などで、新聞には「鯛・太鼓・湯立て釜・神酒樽・天狗・桜・馬・神樂獅子・長刀鉾・鳥居に狐・神鏡・松に月狸・桜に瓢箪・石橋獅子・狸々・桜に鼓・浦島玉手箱・達磨・岩戸神樂そのほか」と書かれており（岐阜日日新聞 同年四月七日記事）、各町の熱気がうかがえよう。山車・造り物や俄を出した町は二十一か町、神輿も古くからある木造町を初め四基が練り出された。

この年の特徴は、旧古屋敷村・旧今泉村（いずれもこのときは岐阜市）から

多くの奉納がなされていることである。祭典掛は初めて上加納地区からも選任され、上加納地区も山車などを出すこととなった（新聞紙上では「上加納からも十数余の山車・造り物」とあるが、具体的には確認できない）。この年には、伊奈波神社へ奉納物を曳くときには上加納へも行き、金神社へ集まるときは岐阜区内も曳くことに伊奈波・金両神社の氏子が合意している。従来の山車などが旧岐阜町を中心とした区域を回っていたのに対して、この時点での「岐阜市」全体を練り歩くこととなったのである。奉納物が多く地域も広がったため、それまでは車之町に全体が揃って神社へ向かったのを、地域を南北に分けて北地域は車之町、南地域は裁判所前（旧岐阜市役所付近）に集まり、そこで点燈して神社へ向かうと変更された。これはのちにも継続され、神前に曳き込む順序の後先は南北で隔年であった。

また、まだ岐阜市には含まれていなかった、長良川対岸の長良区域からも神輿が練り込まれた。大正から昭和初期には鵜飼屋など多くの神輿が長良地区から伊奈波神社へ連合渡御したと伝える（「高見のみこし 長良のみこし」）が、明治中期にも練り込まれていた。

3 明治三十九年の岐阜まつり

明治三十九年は日露戦争の戦勝祝賀で四月一・二日に「凱旋祭」、四日試楽と宵宮、五日が本楽と、岐阜市は一日から五日まで非常ににぎわいを見せた。奉芸は日露戦争開戦の明治三十七年以後見合されていたので、この年は「平和の第一年」としようと、「四ヶ年分（※正しくは三ヶ年分）を一纏」めに奉芸する（岐阜日日新聞 同年三月十五日記事）ため非常に多数に上り、一日は二十五種、二日は三十種、三日は三十八種、四日・五日はそれぞれ三十九種の「祭典余興」がおこなわれた（岐阜日日新聞 同年四月七日記事）。岐阜まつりで出された山車のようすは、朝日堂が出版した「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之図」（護国之寺所蔵、資料2-19）からうかがうことができる（一覧は表2-1に掲載。からく



俄は震災後は明治二十六年から繰り出された。造り物の山車について上演される以外に、単独で「流し俄」もおこなわれている。明治二十九年には俄のた

くなくなっていたのではないだろうか。

濃尾地震後に「余興」と呼ばれるようになるのは、震災で各町の山車のほとんどが失われ、代わって俄（二〇加・二輪加とも。にわか芝居、寸劇。踊りのこともあった）や造り物が多くなったことが背景にあるだろう。それ以前にも踊り山車で演じる演目や衣装などには各町が趣向をこらしてきた。また、からくり人形を操る技術や囃子の演奏には力量や練習が必要であるといえ、これには即興性や独自性が出にくい。震災後に増加した俄や造り物は自分たちの工夫を活かす余地が大きいことから、より華美になり、余興（演芸）の面が強

くなっている。震災以後、岐阜まつりに奉納される山車・神輿・造り物などはしばしば「余興」と表現される。これらは伊奈波神社への崇敬として各町から奉納されるものではなく、氏子とともにまつりを楽しむために催される。次項に述べる神幸祭も含めて、宵宮や本祭の奉芸は神社の「縁日」であり、神社の日記には「神賑行事」などとも記されている。

4 祝祭化と地域の拡大

編 民俗』。

震災以後、岐阜まつりに奉納される山車・神輿・造り物などはしばしば「余興」と表現される。これらは伊奈波神社への崇敬として各町から奉納されるものではなく、氏子とともにまつりを楽しむために催される。次項に述べる神幸祭も含めて、宵宮や本祭の奉芸は神社の「縁日」であり、神社の日記には「神賑行事」などとも記されている。

濃尾地震後に「余興」と呼ばれるようになるのは、震災で各町の山車のほとんどが失われ、代わって俄（二〇加・二輪加とも。にわか芝居、寸劇。踊りのこともあった）や造り物が多くなったことが背景にあるだろう。それ以前にも踊り山車で演じる演目や衣装などには各町が趣向をこらしてきた。また、からくり人形を操る技術や囃子の演奏には力量や練習が必要であるといえ、これには即興性や独自性が出にくい。震災後に増加した俄や造り物は自分たちの工夫を活かす余地が大きいことから、より華美になり、余興（演芸）の面が強



資料 2-9 岐阜稲葉神社祭礼山車引出之図（護国寺所蔵）

めに境内に臨時の舞台まで建てられた。舞台はこのちもまつりのたびに設置されている。明治三十三年に鉾の造り物を出した笹土居町では、若者たちは斜子織ななこの着物の袖や腰に一字に模様を染め出して襦袢の帯を締め、年長者は若者と同じ生地の羽織を着て練り歩くという華やかな行列を繰り広げた。明治三十六年には天道町（現在の木造町内）は高さ二間（約3・6m）、横一間の伊奈波神社社殿の模型を造って、忠臣蔵の俄を催すために衣装を注文している。

また、奉芸に芸妓や会社などの職業集団の参加が増え、個人で加わることもあった。前述のように伊奈波神社の周囲は料理屋・芝居小屋が多く、金津廓も近い。明治二十九年の桜町（現在の伊奈波通一丁目）による桜花の造り山車と町内の芸妓総出の手踊り、明治三十二年の金津廓芸妓連の俄、同三十四年の常盤津連中の俄などが新聞に掲載されている。彼女たちは、岐阜まつりにプロの腕前を発揮したのであろう。職域による奉芸は、日本毛糸株式会社の花神輿、岡本太右衛門方工場連があり、大正十四年（一九二五）には青年団のからくり山車・神輿も繰り出した。今小町の茶商は高さ一丈（約3m）の巨大な紙張りの福助を出して人目を集めた。

俄の盛行とともに、警察署は風紀が乱れることを警戒して、明治三十二年以後は毎年、男子の女装・女子の男装などを禁止する命令を出している。

岐阜まつりに懸賞行灯がおこなわれるようになったのは明治三十八年が初見で、のち中断はあっても続けられた。境内の桜は震災で大半が枯死したが、のち植樹された若木が育ち、明治三十八年ころには残っていた老木も花をつけるようになる。大正元年に矢島町から伊奈波神社へいたる道は八間に拡張されたが、その両側には吉野桜が植えられた。これらの桜に岐阜まつり前後の時期の夜間イルミネーションがされるようになったのは大正二年ころらしい。まつりの夜に煙火（花火）をあげるのは、大正十四年が確認できる最初である。もちろん、神社境内および周辺にはたくさんの露店が並び、緑日気分を盛り上げた。

こうして、まつりは楽しさを増し、より娯楽性が高まった。

既述のように明治二十七年には上加納地区からも祭典掛を選任するようになり、このち奉芸町も新たに岐阜市域となった地区へ拡大している（表2-1から3）。大正八年には金神社・溝畑神社・檀森神社の氏子が山車を岐阜まつりに出すことを決めて金津廓・柳ヶ瀬町・神田町三丁目が同意したこと、四月三日に山車が金神社へも行ったこと、翌九年には「金神社山車二町」が奉芸したと（これは稽古に取り掛かっていると報道された神田町一丁目・柳ヶ瀬町一丁目であろう）が新聞に掲載されている。大正九年の新聞には「伊奈波神社・金神社の氏子中の奉芸当番町」と表現されており、両社の氏子とともに岐阜まつりに奉芸当番を担うと認識されていた（大阪朝日新聞東海版 同年四月四日記事）。

奉芸の地域拡大、俄の増加に伴い、本楽の日の奉芸時間も長くなっている。明治三十三年には正午過ぎから当番町が順次奉芸し、終わったのは午後十時であった。

なお、震災前におこなわれていた三日の引初は、明治二十七年以後は実施されていない。ただし、奉芸する各町の山車などは三日から市内を練り回っている。

5 神幸祭と神事

江戸時代にはおこなわれていた神幸祭は、明治中期までは確認できない。その再興は明治三十年であった。震災で焼失した社殿が再営竣工し、正遷宮が挙行された十一月二十三日には、金神社・檀森神社・県神社の神輿が伊奈波神社へ渡御し、翌二十四日午後帰御した。その行列は、大榎を先頭に、伊奈波神社の総代、唐櫃、御幣、伊奈波神社神官、続いて金神社・檀森神社・県神社の神輿がそれぞれの氏子総代や神職とともに連なり、総勢二百人を超えるものであった。

金神社・檀森神社・県神社はいずれも旧上加納村に鎮座し、明治二十二年に



岐阜市が成立すると岐阜市内となった。祭神はそれぞれ、イニシキイリヒコノミコトの後であるヌノシヒメノミコト、二神の御子であるイチハヤオノミコト、イニシキイリヒコノミコトと毛里倫満娘との間に生まれたタラチネノミコトで、イニシキイリヒコノミコトの家族が伊奈波神社にそろったことになる。

このときは、金神社に三社の神輿がそろい、参道を南に下り、東に折れて長良橋通り（当時は「八間道」）に出て南行、停車場（現在の名鉄岐阜駅付近）にいたり、そこから長住町を東に向かい、旧停車場（現在の名鉄各務原線安良田踏切付近）から北上し、江戸時代のメインロードであった「御鯔街道」をへて伊奈波神社に向かった。帰御のときは伊奈波神社から西へ進み、矢島町から南行したと思われる。

翌三十一年四月の岐阜まつりにおける神幸祭についても、二月ころから協議が重ねられた。その結果、四月四日午前七時に伊奈波神社神輿が金神社へ渡御、金神社・檀森神社・県神社の神輿とともに午前十一時に伊奈波神社にいたり、翌五日午前七時に伊奈波神社例祭、九時に金神社ほか二社の神輿が帰御した。まず伊奈波神社から金神社に神輿が渡御したのち、ともに伊奈波神社に向かう点が前年の正遷宮のときと異なる。

このときのルートは、決定まで何度か変更された。伊奈波神社から金神社への往路は、初案ではまっすぐ西行して矢島町から長良橋通りを南行するルートであったが、最終的には伊奈波神社を出て「御鯔街道」をいったん北に向かい、本町通りを西に進んでから長良橋通りを南行するルートに変えられた。翌日の金神社への帰御も、初案は伊奈波神社から西へ出て現在の伊奈波通二丁目と三丁目の間の角で南に進路を変え、上竹町から下太田町へと進み、そこで西に曲がって裁判所前から南進する予定であった。しかし、伊奈波神社の北に当たる末広町から本町通りを経て南進し、上竹屋町・中竹屋町を通る部分が追加された。変更部分はいずれも、伊奈波神社の北部地域に神輿の巡幸範囲を拡大したこと

になる。金神社から伊奈波神社までは前年の正遷宮のときと同じルートであった。沿道に当たる各町には道の掃除と打ち水をし、二階からの拝観は慎むべきことが伝えられた。

翌年以後も、中断やルート・日時などの変更はあるが、昭和十六年まで継続しておこなわれた（表2-14）。昭和十一年以後は、赤口神社（岐阜市本郷町二丁目）が御旅所となっている。明治四十年の神幸祭は、先導・箒・白杖・祓禊・塩湯・各町総代・主鼻・猿田彦神・前駆馬・辛櫃・神輿・旗・真榊・楯・矛・矢・弓・劔・樂人・紫翳（きぬがさ）のあとに市名誉職・祭典掛・神職が続ぎ、鳳輦・神職・氏子・信徒などが行列をなした（岐阜日日新聞 同年三月二十七日記事）。大正七年の神幸祭の供奉人数は数百名に及ぶ。昭和十三年からは供奉の中に稚児・鎧武者も加わっている。

例祭の神事については、明治四十年四月四日の岐阜日日新聞に詳細に報道されている。

四日 奉幣使（例祭に幣帛を捧げるため参向する県庁職員）や神職が斎戒

※この日、神社では午後三時に試楽神事、午後七時に夜宮神事がおこなわれる

五日 早旦 神職は神殿を装飾

午前九時 奉幣使以下は神門外で手水。祓所に着き祓式。奉幣使以下が幣殿に着く。斎主が儀具することを奉幣使に伝える。斎主が鍵を持ち殿に昇り扉を開き（再拝拍手）側に控える（この間奏楽）。神饌を供する（この間奏楽）。奉幣使が幣物を辛櫃から出し仮の案上に置く。斎主が幣物を取り神前の案上に奉る（再拝拍手）。斎主が祝詞を奏する（再拝拍手）。奉幣使が玉串を献じ拝礼。随行員が拝礼。神職・参列員が拝礼。幣物・神饌を撤する（この間奏楽）。斎主が殿に昇り扉を閉じる（再拝拍手）。復坐して鍵を後取に渡す（この間奏楽）

6 奉芸区域の区分けと割当

岐阜まつりに奉芸する町を決めるには難航することもあった。祭典掛は明治二十九年には各区長へ、区内から一町ずつ造り物または俄を出すように依頼している。この区長は、岐阜市制発足とともに市を十五区に分けて各区に置かれたものを指すだろう『岐阜市史 通史編 近代』。明治三十一年には戸数が少なく奉芸が難しい町は赤丸提灯を宵宮に出すことを求めた。

また、新聞には岐阜まつりが年々寂れていくのを嘆く記事も掲載されている。明治四十一年にはその原因を「電話が架設されてから蜘蛛の巣のように張られた電話線がからくり山車や花車^{だし}の曳き回しに障害になること、祭りを喜ばない移住者が増えたこと、教育の普及と人智の発達若くは衆らの自戒を促したこと」に求めている（岐阜日日新聞 同年四月八日投書）。岐阜まつりの雑踏についての報道、祭りへの熱狂ぶりを批判する投書などもあり、この時期の岐阜まつりが「寂れた」というのは当たらないと感じるが、天候、戦争や景気などの社会情勢で人出や奉芸への熱意が左右されて「寂しい」と報道されている年も確かにある。

こうした勧誘活動を省き、例祭をより盛んにするためだろうか、明治三十二年には例祭奉芸の町を十二区に分け、一区から一か町以上が奉芸することとして抽選で奉芸順を決定した（伊奈波神社所蔵文書。このときの区分けは表2-2）。これは「改正」であるが、これ以前の奉芸地域区分けは確認できない（明治二十三年には当番町を決めるのが従来は「不模通」だったので、今年から毎年くじ引きで決定するとしている）。この十二区は、先に述べた岐阜市制発足時の区分けにほぼ準じている。第一区は旧富茂登村、第二から第七区は旧岐阜町、第八区は旧稲束村、第九から第十一区は旧今泉村、第十二区は旧小熊村である。ただし、旧明屋敷村（明治八年に忠節村と合併して稲束村となった）の若松町などは、地域の結びつきの関係から翌三十三年に第六区へ編入されている。こ

のとき、最も長期間の地区で明治三十九年までの奉芸順が決められ、以後の奉芸はほぼこれに従っておこなわれた。

続いて明治四十年には、各区の明治四十年から同四十六年（明治四十五年に大正と改元）までの奉芸順が決議された（伊奈波神社所蔵「伊奈波神社大祭奉芸車楽各町七ヶ年順番決議録」。区分けは表2-3）。このときはそれまでの十二区を十区に編成替えしている。ここで決まった奉芸順は大正二年に一区切りとなる。このうち、大正五年から同九年（同十四年まで書き込み）の「伊奈波神社例祭余興奉芸年番表」（個人蔵）、大正十五年から昭和五年までの年番表『岐阜市史 史料編 近代』掲載が残されている。

7 金神社の祭礼

明治三十一年以後、神幸祭で伊奈波神社と金神社の神輿が互いに渡御するようになったこと、大正八年には金神社・溝畑神社・檀森神社の氏子から岐阜まつりに山車が出され、伊奈波神社氏子の山車なども金神社へ行つたことなどは、すでに述べたとおりである。このことから、岐阜まつりにおける金神社の存在感が大きくなっていく。

大正九年には、宵宮は金神社で三日に、伊奈波神社で四日におこなわれるようになった。金神社の宵宮は大正十一年までは確認できる。

昭和三年、金神社は郷社から県社へ昇格した。翌四年四月の二日・三日には昇格祭を催し、境内で園遊会を開き、芸妓の手踊り、相撲、花火、獅子舞、餅投げ、懸賞神輿などがあつて大にぎわいであつた。神幸祭は表2-4にあげたように、昭和四年には金神社が単独でおこなっているらしい。このうち中絶を経て復活した昭和十一年以後、伊奈波神社の神輿は赤口神社を御旅所としているが、金神社の神輿はそこに渡御はしていないようである。昭和十二年の金神社の神幸祭のルートが分かるが、それは金神社から徹明町通り・金町四丁目から金宝町の御旅所へ着き、そこから金神社へ還御するものであつた（岐阜日日新



聞 同年四月二日記事）。

金神社は県社昇格を契機として、一社として例祭をおこなうようになったといえる。ただ、祭日は伊奈波神社と同じであり、岐阜まつりとしての一体性は保たれている。

8 戦時下の岐阜まつり

昭和十二年、盧溝橋事件を発端に日中戦争が開始し、九月に国民精神総動員運動が始まり、翌年四月には国家総動員法が公布された。昭和十五年に日独伊三国同盟が結ばれ、第二次世界大戦へ突入していく。

このような情勢のなか、岐阜まつりもそれまでの形を大きく変えた。昭和十三年からは山車の奉曳などは無くなり、神事のみが厳粛におこなわれるようになる。四日の神幸祭は昭和十三年から同十五年までは斎行されているが、十六年は確認できず、十七年から中止された。

しかし、時難克服と武運長久を祈る参詣者が多く、岐阜まつりの日には境内で神楽などが催され、満開の桜とともに社頭はにぎわった。繁華街も例年より少ないとはいえ多くの人が訪れたことが昭和十七年までは新聞で報道されている。

第五節 戦後の岐阜まつり

(一) 岐阜空襲の被害

昭和二十年（一九四五）六月ころから中小都市へも空襲が及び始め、同年七月九日・十二日の二度にわたって岐阜市も激しい空襲にあい中心部は壊滅した。このときには、旧岐阜町区域は常盤町など南部の一部を除いて空襲を免れ、伊奈波神社も無事であったが、明治三十九年に新造した松屋町のからくり山車は

焼失（『岐阜市史 通史編 民俗』、金神社もまた焼失した）。

安宅車は空襲以前に実施された家屋強制疎開で山車蔵を失い、屋根だけの小屋に納められてほとんど雨ざらし状態となる『金華史誌』『岐阜市史 通史編 民俗』。若戎車は岐阜空襲の時には、鶯谷随道に疎開させたと語り継がれている。常盤町もしくは金津地区の融のからくり山車も、やはり姿を消したと思われる。

(二) 戦後の岐阜まつりの流れ —平成二十年まで—

中心部が焦土となった岐阜市だが、昭和二十一年四月には早くも岐阜まつりが始まった。翌二十二年には神幸祭が再開、戦災を免れた清影車と踊車が昭和二十五年には姿を見せている。

このち岐阜まつりはどんどん盛んになり、昭和四十八年に道三まつりが始まる。平成八年（一九九六）には岐阜まつりの神幸祭と宵宮・道三まつりが四月第一土・日曜日へ変更され（伊奈波神社・金神社などの神事は従来通り）、平成二十年になって神幸祭の神輿が伊奈波・金・檀森の三社そろって合同渡御をおこなうようになった。本節では、この時点までを扱う。

(三) 再開した岐阜まつり

焦土の中から立ち上がり、苦しい暮らしのなか、昭和二十一年四月に岐阜まつりが再開した。同年四月四日のようすを、翌五日の岐阜タイムスは「平和に迎へた岐阜まつり」と題して報道している。そこには、柳ヶ瀬の繁華街が人びとであふれ、伊奈波神社境内には咲き初めた桜のもとに「ワッショワッショ」と子ども神輿が練り込んでおり、この日ばかりは物資不足も物価高の悩みも忘れて喜ぶ市民の姿が浮かぶ。

昭和二十二年には四月四日に神幸祭が再開されて町内会の花神輿なども繰り出した。翌五日の伊奈波通りは氣勢を上げる神輿、晴れ着の人たちでにぎわい、

この日の参詣者はざっと三万人にのぼった(岐阜タイムス)。

昭和二十四年四月は、四日に神幸祭と境内の奉芸舞台で各務村(現各務原市)青年団・千疋村(現関市)の獅子舞神楽などが演じられ、造り神輿四十〜五十基が社頭に並んで審査もおこなわれた。五日は例祭ののち仏教会の奉納舞踊があり、町には神輿、笛・太鼓・三味線の音があふれ、華陽芸妓が曳き踊る山車が繰り出す。翌二十五年には伝統の山車の奉曳があり、境内に見世物小屋や露店が立ち並ぶ。二十六年には中絶していた伊奈波社頭の夜桜ライトアップが再開した。このころには、戦前の岐阜まつりのにぎわいがほぼ再現された。

昭和二十六年三月に岐阜まつり振興会が配った「岐阜まつりを盛んに行いませう」というチラシが残されている(個人蔵)。そこには、懸賞造り神輿、山車・造り山車への補助金交付、煙火の打ち上げと、「其の他協賛行事」として美人変装探し・舞踊・歌謡曲が柳ヶ瀬地区一帯で実施されると謳ってある。この振興会は昭和二十四年ころに始まり、岐阜商工会議所内に事務局が置かれていた。二十四年度の岐阜商工会議所の事業報告には「商工業振興対策」として「岐阜まつり振興会に協力して、岐阜市商店街の購買力打開策に協力した」ことをあげている『岐阜商工会議所七十年史』。前述のチラシ冒頭には、祭りを盛り上げ「市民の皆様喜んで頂くと共に観光都岐阜の発展に寄与」するための協力を呼び掛けている。戦前の岐阜まつりにも市外から多くの見物客が訪れているが、戦後の岐阜まつりは伊奈波神社のまつりを核としつつも、商業・観光ペースで再開された。戦災と敗戦で大きな痛手を受けた岐阜市の経済的復興に、岐阜まつりが寄与することが期待されていたといえる。

(四) 伊奈波神社の神事

戦後における伊奈波神社の例祭神事は、次のように斎行されている。

四月四日 発輦祭、神幸祭、還幸祭(これらについては後述)。前夜祭(神楽)。

このち宵宮となる。

四月五日 例大祭。このようすは昭和三十八年四月六日の岐阜日日新聞に、本殿の扉が開かれ、宮司の祝詞のあと神社庁の献幣使が金幣を献上、氏子代表が氏子幣を捧げ、神楽奉納、関係者の玉串奉納と報道されている。戦前にあつた県庁からの奉幣が、神社庁の奉幣に替わった以外は、大きな変更はない。このち神賑行事となる。

道三まつり・岐阜まつりの宵宮と神幸祭が四月第一土・日曜日に変更されてのちは、曜日に関わらず四日に前夜祭、五日に例大祭がおこなわれ、神幸祭や宵宮は四月第一土曜日となる。

(五) 道三まつりが始まるまでの岐阜まつりの特徴

1 伊奈波神社の求心力の強まり

造り神輿コンクールは昭和二十四年から始まったらしい。その入賞者の新聞報道を見ると、伊奈波神社に奉納される神輿の地域は戦前よりも広がっているのが分かる。戦前にも長良地区から神輿の練り込みがなされたのは確認できるが、戦後は長良地区だけでなく鷺山・梅林・鍵屋・加納など、岐阜市の北部・岐阜駅南部へと拡大した。伊奈波神社から離れた地域からも、多くの神輿が練り込まれたのである。

また、大人の造り神輿の参加者は、町内会以外に青年団・消防団や会社・商業団体など多様であり、のちの神輿パレードへとつながる傾向が表れている。

2 催しの多様化

戦前に多かった造り山車・俄や行列に加えて、のど自慢大会、美人変装探し、商店街連盟による景品引き換え券配布など新しい催しが登場した。

昭和二十八年からは信長行列と信長追悼行事が加わる。追悼行事および宝物展は崇福寺(岐阜市長良福光)で四月三日に、信長行列は四月五日に実施された。



騎馬武者と槍隊・鉄砲隊がホラ貝・陣太鼓を先頭にして進む行列は、岐阜駅から柳ヶ瀬を経て伊奈波神社へ（岐阜公園までの年もある）いたるもので、昭和三十一年には行列人数は三百名にものぼった。岐阜まつり振興会によるこのころのチラシ（個人蔵）には「岐阜市発展の礎を成した織田信長公に関する行事を中心として、本市独自の「岐阜まつり」を実施し、岐阜市商工業の振興発展に資することを目的とする」と書かれている。信長行列は昭和三十一年の新聞報道では「お祭りのヤマ」とまで表現されているが、翌三十二年から秋の「ぎふ信長まつり」が始まるとともに、岐阜まつりではおこなわれなくなった。

3 まつりの面的拡大

昭和二十五年には市内各所で楽曲を披露するオーブン演奏会が実施された。これは戦前の流し俄の系譜をひくものといえるだろうか。これ以後、岐阜市公会堂（岐阜市美江寺町。現在の岐阜市民会館の前身）でミス岐阜の発表会と歌謡ショー、岐阜市民センター（岐阜市金町。現在の岐阜市文化センターの前身）でプロレスや日米合同演奏会、自転車まつり、橋幸夫ショーなどが岐阜まつりの日に開催されている。昭和三十八年には岐阜駅・岐阜公園など各所で谷汲踊りが披露された。同四十一年には柳ヶ瀬の丸物百貨店で美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」発表会。前述の信長行列も岐阜駅を中心街を通ったが、これが無くなつてのちは神幸祭がより盛大になり、昭和三十九年からはブラスバンド・バトンガール・鼓笛隊などによる「日の丸大パレード」が伊奈波神社を出発して目抜き通りを行進した。

このように、伊奈波神社とは直接関わらない性格の催しが増え、まつりをより盛り上げるために神社から離れた地域でも盛んにおこなわれるようになった。これらは、のちの道三まつりへと直接つながっていくものといえよう。

（六）神幸祭の移り変わり

戦時下で一時中断していた神幸祭は、昭和二十二年に再開した。このときの渡御順路は不明だが、翌二十三年には伊奈波神社の神輿が金神社・樫森神社へ渡御したことが確認できる。こののちも両神社へ渡御することは変わらないが、昭和三十三年には赤口神社（岐阜市本郷町二丁目）、同三十四年には北野神社（岐阜市菅原町三丁目）が巡幸ルートに入っている。両社とも伊奈波神社と格別の由緒はないが、巡幸ルートに近いことから立ち寄ることになったのだろう。のち、赤口神社には毎年、北野神社には隔年で巡幸するようになった。

昭和三十五年からは、神幸祭に先立って発輦祭（発輦祭とも。昭和二十四年

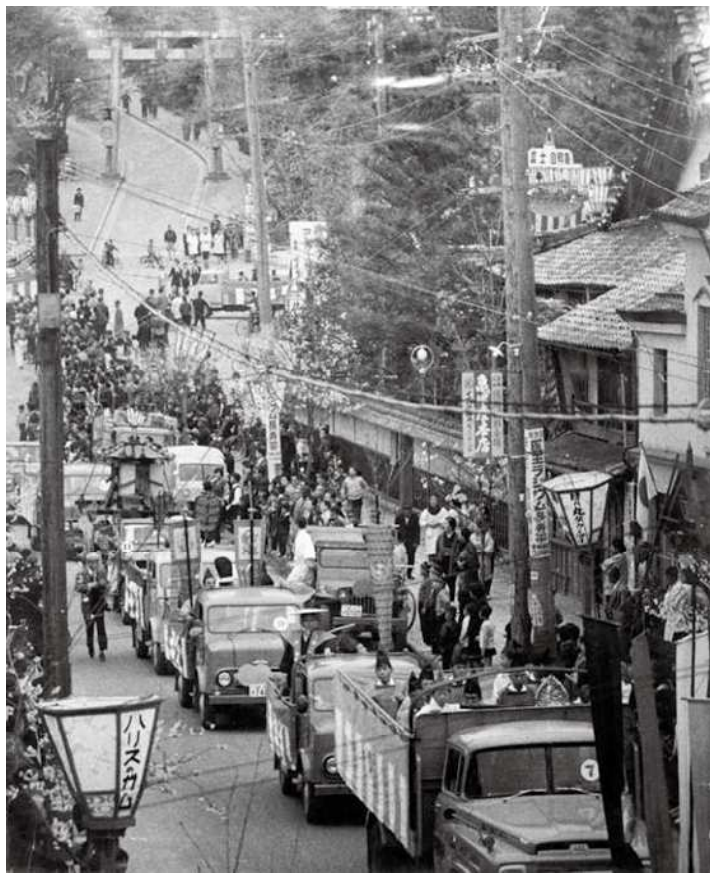


写真 2-1 参道を下る神幸祭行列（昭和 35 年ごろ）（伊奈波神社所蔵）

におこなわれているが、のち中断したと思われる、伊奈波神社に還御してのち還幸祭が斎行されるようになる。発輦祭は神霊を神社境内の神橋前に据えた鳳輦に奉遷する儀式で、のち神橋前で修祓があつてから神幸祭の行列が発する。還幸祭は還御した鳳輦を神橋前に安置して拝礼し、神霊を本殿にお戻しして神楽が奉納された。

昭和三十三年の神幸祭は、雅楽が奏でられるなか、獅子、猿田彦、錦旗に「ほろ」「みこ」数百名が続き、神主ら祭典関係者二十数名が騎馬で巡幸した。昭和三十四年からは、神幸祭に自動車を導入される。これは岐阜タイムス社の宣伝カーを先導に、神主・稚児ら約千人の行列で、鳳輦はこのために新調した台車に安置し、別の車で牽引した。この年には鳳輦以外は徒歩であつたが、翌年には神職・氏子総代なども車に乗り、オープンカー二十九台を連ねた「新企画」の神幸祭となつた。同じ年には前述した発輦祭・還幸祭も始まつている。昭和三十二年以後は信長行列が岐阜まつりから姿を消したため、神幸祭をまつりの花形とする演出だつたのではないかと思われる。あるいは、前年に日本全国を熱狂させた皇太子御成婚パレードに着想を得たのかもしれない。車の数は年により異なるが、およそ二十から三十台余であつた。しかし、昭和四十四年には交通事情により十五台に減らされ、これ以後は十数台となつている。

(七) 山車と神輿

戦後、最初に曳き出されたのは清影車と小熊町の山車の二台であつた。小熊町は昭和三十年には子ども踊りの山車を出しており、これが現在の踊車である。戦後の山車の奉曳は表2-15のとおりである。当時の新聞記事・『金華史誌』と、昭和三十九～四十一年および同四十六年以降は社務日誌（伊奈波神社所蔵）をもとに作成したもののだが、報道で漏れている年（表では空欄とした）でも山車が奉曳されている可能性が大きい。また、奉曳町が分かるだけで、どの山車

を曳いたか確定できないものは、推定を（ ）で示している。

安宅車は本町五丁目（旧 車之町）所有であつたが、曳き出すことにも費用がかかるうえ、修復・維持が困難となつて、昭和三十七年の岐阜まつりの宵宮と本楽の日に曳き出し、そのまま四月五日に伊奈波神社へ奉納された。このとき神社前広場に山車蔵も新築されている。伊奈波神社では、祭り囃子保存会をつくり、当番町を決めて毎年曳き出す計画と伝えており（岐阜日日新聞 昭和三十七年四月三日記事）、これ以後の岐阜まつりには毎年姿を見せた。昭和四十六年などには京町地区が安宅車、金華地区は清影車を曳いているが、それ以外は金華地区が奉曳を担っている。

若戎車（蛭子車）は昭和三十二・三十九年に大門町が奉曳したと推定され、同三十五・四十二年に金屋町が奉曳している。しかし同四十二年には伊奈波神社所有として今沢町が奉曳しているので、このころに伊奈波神社に奉納されたのであろう（山車の名はこの時点で「若恵比須」となっており、昭和四十六年以後の伊奈波神社の社務日誌でも「若恵比寿」である）。翌四十三年からは明徳地区氏が奉曳してきた。ただし、からくり奉納はできなかったが、平成四年に人形二体を復元修理して、この年の岐阜まつりから愛らしい若戎が舞うからくりが披露されるようになった。

清影車は昭和二十五年以来、五回は川原町の三町（湊町・玉井町・元浜町）が奉曳している。しかし昭和三十四年の伊勢湾台風でからくり人形が大きな被害を受けた（このうち、一時期は山車上に替わりの人形を飾っていたらしい）。同四十二年には三町合同で奉曳されたが、翌年には京町地区の奉曳と思われる。おそらく、このころに清影車も伊奈波神社へ奉納されたのであろう。このうち、前述のように金華地区と曳き手が替わる年もあつたが、ほとんど京町地区の氏子により岐阜まつりに曳き出されている。平成八年に京町地区から、からくり人形の復元について伊奈波神社へ要望が出された。この時点で安宅車・若戎車



ではからくりが演じられており、清影車のみからくり人形がないのは残念だということであった(伊奈波神社所蔵「役員・総代会議事」)。この議案は承認され、伊奈波神社の板絵(資料216)をもとに人形が復元されて平成十年に三十八年ぶりに豊玉姫のからくり人形が舞を見せた。

踊車は昭和四十二年まではほとんど小熊町が曳き出しているが、同四十三年の曳き手は本郷と思われる。やはりこのころに伊奈波神社に奉納されたのではないだろうか。同四十五年には伊奈波神社神賑会が担当して同六十二年まで続けられた。この時期の山車は「福槌車」と表現されており、現在も踊車の上に飾られる金色の大きな槌がすでに載っていたのであろう。昭和六十三年には神賑会とボーイスカウト、それ以後はボーイスカウトが曳き手となって現在に及んでいる。

いずれの山車も何度も大きな修理を重ねながら現在まで続けられてきた(山車・人形の修復については第四・五章)。操車技術・人形操作や囃子の稽古、曳き手の確保などの努力に加え、山車や人形の修復、からくり人形の復元、囃子の生演奏の復活などには、神社に奉納する山車にかける住民の心意気を感じることができよう。

かつて岐阜まつりに練り回った神輿のうち、木造町の神輿は昭和二十二年にまず姿を見せた『岐阜のまちに神輿が復活するまで「神輿大好き」』。ついで昭和四十年四月五日に、隣の町内からも応援を受けて再び練り出されたが、このときの新聞記事では「昭和二十九年に練り出して以来」と書かれている(岐阜日日新聞)。これ以後、昭和五十四年からは岐阜青年会議所メンバーなどが担ったが、その後は木造町内で展示するのみとなっていた。しかし昭和六十三年、岐阜市制百年を機会に復活して岐阜まつりの宵宮に練り込まれた。

また、伊奈波神社が国幣小社に昇格したのを記念して昭和十五年に奉納された伊奈波神社本神輿は、昭和五十一年の岐阜まつり宵宮に岐阜青年会議所が借

り出して市内を練った。のち一時期は問屋町に譲られていたが、現在は「金華神輿」として岐阜まつり宵宮に練り込まれる。

平成七年、岐阜神輿愛好会(岐阜神輿連)が結成された。平成八年の宵宮では練り込む神輿が増え、現在もおこなわれる神輿練りコンクールが始まって一層の盛り上がりを見せることになった。

このほか、子ども神輿、大人神輿は造り神輿コンクールの開催もあって、昭和二十八年には数十基、同三十四年には百基以上を数えるほどになる。同四十年にコンクールが中止されると数は減少するが、道三まつりの始まりとともに再び盛り返しを見せた(詳細は第一章第四節参照)。

(八) 道三まつりの開始と土・日曜日開催への変更

昭和四十八年、道三まつりが始まった。これは前年のNHK大河ドラマ「国盗り物語」を直接の契機とするが、道三が伊奈波神社を現在地へ遷座したというゆかりがあることも背景にあったかもしれない。

道三まつりの詳細は第一章第四節に譲るが、この始まりとともに岐阜まつりにおける神社境内での催事は数を減らしている。もちろん山車の奉曳やからくり奉芸、神輿の練り込み、花火打ち上げはあるが、演芸や踊りなどが姿を消した。数を増やしてきた子ども神輿・大人神輿が集まる「みこし広場」は第一回の昭和五十三年には伊奈波神社境内に設けられたが、同五十五年には神田町通りに変更されている。新聞報道でも、神幸祭があまり取り上げられず、歩行者天国や神輿パレードなどが大きな割合を占めるようになった。

岐阜まつりの宵宮は、昼間の華やかな行事が一転した幻想的なものとして報道されている。昭和五十八年四月六日の岐阜日日新聞には「まつりの本家はどちら? 商工パワーに伝統かすむ 時代のすう勢反応さまじま」のタイトルで、「道三まつりと同日だと華やかさの点で岐阜まつりは陰に隠れてしまう。道三まつ

りの日程をずらしてもいいのでは」との伊奈波神社宮司の意見、「岐阜まつりだけで、これだけの人は集まらない。決して神事をないがしろにしているわけではなく、時代に合ったまつりの形がある。市民が盛り上がりげれば、それもまつりの一つの姿だと思う」との岐阜商工会議所事務局長の意見が掲載されている。

このような状況の中、すでに昭和五十四年には「まつりを四月第一土・日曜日にするよう働きかけていきたい」と岐阜青年会議所文化財特別委員会委員長が話している（岐阜日日新聞 同年四月四日記事）。平成七年（一九九五）十一月に伊奈波神社責任役員会議では、岐阜まつりを四月第一土・日曜日に変更したいとの岐阜まつり協賛・道三まつり実行委員会などからの依頼を受け、「市民の声であり、商店街・企業も多く参加できる。時代の流れ」として了承した（伊奈波神社所蔵「責任役員会議事」）。これにより翌平成八年から、神幸祭・宵宮は四月四日から四月第一土曜日へ変更し、例大祭はそれまでと変わらず四月五日に斎行されることとなった。

このうち、平成十一年には神幸祭における徒歩での練り歩きが樫森神社から赤口神社の区間で復活する（のち区間の変更あり）。さらに、平成十九年に伊奈波神社と金神社の鳳輦が神田町通りを並んで渡御することとなる。伊奈波神社の鳳輦は金神社の鳳輦と神田町で別れ、樫森・北野・赤口神社へ巡幸して伊奈波神社に還御した。翌二十年には伊奈波・金・樫森の三社の鳳輦がそろって渡御し、若宮町交差点で三社合同祭典をおこなう現在の形になる。これは神輿パレードにおいて神社の存在感を高める意義があり、岐阜まつりの新たな一ページともなった。

（史料）

『日本書紀』 新日本古典文学大系30 岩波書店、一九九六年
市木武雄『梅花無尽蔵注釈』第四巻 続群書類従完成会、一九九四年

『尾濃葉栗見聞集 岐阜志略』 一九三四年に平塚正雄により編纂発行

『美濃国古蹟考』 郷土出版社、一九八八年

『濃州徇行記 濃陽志略』 一九三三年に平塚正雄により編纂発行

『美濃明細記 美濃雜事紀』 一九三三年に平塚正雄により編纂発行

三代目中村仲蔵『手前味噌』 青蛙房、一九六九年

『下佐波村 青木久兵衛日記（抄）』〔二〕岐阜大学教育学部郷土資料12、岐阜大学教育学部、一九八一年

西村寛良解説・解説『加納藩士 田辺氏見聞録』 岐阜県郷土資料研究協議会、一九八二年

（参考文献）

『岐阜市史』 岐阜市役所、一九二八年

稲葉繁吉編纂・発行『岐阜米屋町史』 一九三五年

『伊奈波神社略誌』 国幣小社伊奈波神社、一九四一年

『岐阜商工会議所七十年史』 岐阜商工会議所、一九六三年

平塚正雄『濃飛史譚』 岐阜県人協会、一九六七年

平田穰「常盤町軼事 祭典記録」 一九六八年

藤田黎三「美濃地方の山鉾の分類と分布」『美濃民俗』一一五号、一九七六年

和田唯男「山車の譲渡移行追及異聞覚書」 同前

『岐阜市史 通史編 民俗』 岐阜市、一九七七年

『岐阜市史 通史編 近代』 岐阜市、一九八一年

『高見のみこし 長良のみこし』 高見青年団OB会、一九九一年

『金華史誌』 金華史誌編集委員会、一九九三年

清信重『ふるさと岐阜の物語』 福富屋、一九九四年

清信重著・発行『ふるさと岐阜の物語（大正編）』 一九九五年

『岐阜町金華の誇り』 NPO法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館、二〇〇九年



寛真理子「近世岐阜町の成立と岐阜奉行」岸野俊彦編・清文堂出版発行『尾張藩社会の総合研究』第四編所収、二〇〇九年

伊藤泰雄『岐阜のまちに神輿が復活するまで「神輿大好き」』伊藤泰雄デザイン室、二〇一五年

第二章 岐阜三つりの歴史



表 2-1 各町の幸納（江戸時代から明治 39 年まで。明治 32 ～ 36 年は表 2-2）

旧町村	町名	享和町名 (明治 42 年 まで)	享保 10 (1725)	文化 10 (1813)	伊奈波神社例祭 (資料 2-4)	岐阜国難御神事 (資料 2-5)	明治 5 (1872) 伊奈波神社略誌	明治 18 岐阜日日新聞	明治 21 岐阜日日新聞	明治 22 岐阜日日新聞	明治 23 例祭関係書籍編纂	明治 23 からくり人形板治 (資料 2-6)	明治 24 例祭議決之書編纂 岐阜日日新聞	明治 24/26 濃尾震災	明治 27 例祭新書編纂	明治 39 山車引出之図 (資料 2-9)
中河原 新田		玉井町						からくり山車 ※1 明治 6 / 9 新造	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (清影車)	からくり山車 (清影車)			からくり山車 (清影車) ※1 明治 37 / 38 新造
古屋敷 新田		渡町 元浜町													造り物と供	造り山車 (宝船)
明屋敷村		四屋町							坂屋町 (茶屋町) 神奥						造り物と供	造り山車 (石橋)
岐阜市 (町名は 岐阜市志 略に 掲載順に 記載)	下笹土居町	笹土居町		からくり山車 新造	人形山車 (二福神) 名古屋型	供え物	からくり山車		からくり山車 (二福神)		からくり山車 (二福神)	からくり山車 (二福神)	からくり山車 (二福神)		造り物と供	造り山車 (黄馬)
	上笹土居町	常盤町			踊り山車か 長浜型か	踊り山車	踊り山車				踊り山車	踊り山車	踊り山車		造り物と供	
	白木町				踊り山車 (歌舞伎の 長浜型)	踊り山車か 長浜型か	踊り山車		踊り山車				踊り山車		造り物と供	造り山車 (雪洞鉄納)
	米屋町				人形山車 (廻り明) 名古屋型	人形山車 ※2 明治 10 年ころ 加納天神町へ売却	からくり山車				からくり山車	からくり山車 (御霊車)	からくり山車 (御霊花)		からくり山車	造り山車 (神馬)
	飯屋町	鞠屋町			人形山車 (廻り明) 名古屋型	人形山車 (廻り明) 名古屋型	人形山車				からくり山車	からくり山車 (御霊王車)	からくり山車 (御霊花)		造り物と供	造り山車 (担子孔蓋)
	魚屋町				人形山車 (輪吹き舟子) 名古屋型 ※3 明治 7 / 10 常盤 町 (美濃市) へ売却			造り物					造り物 (曳)			
	久屋町				人形山車 (尚花?) 名古屋型	踊り山車							踊り山車			踊り山車 (元時踊り・御霊納)
	西材木町				人形山車 (聖々) 名古屋型	人形山車				からくり山車		からくり山車 (聖々車)	からくり山車 (聖々車)			
	柴材木町		からくり山車 (御霊)		踊り山車 屋根なし	踊り山車			踊り山車				踊り山車			
	上大桑 (久和) 町		からくり山車 (白蛇)		人形山車 (御霊) 名古屋型 ※4 明治 11 年売却	人形山車			からくり山車			からくり山車	からくり山車			からくり山車 (天神)
	中大桑町				人形山車 (御霊) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車			からくり山車	からくり山車 (御霊車)	からくり山車 (御霊車)			からくり山車 (唐子人形)
	下大桑町				踊り山車 屋根なし	供え物							造り物			
	下竹屋町	松屋町			踊り山車 屋根なし	踊り山車							踊り山車		造り物と供	からくり山車 (軒子の欄干) ※5 明治 39 年新造
	中竹屋町				人形山車 (布袋権子) 名古屋型	人形山車 (布袋権子) 名古屋型		からくり山車	からくり山車		からくり山車	からくり山車 (道公車)	からくり山車 (道公車)			造り山車 (猪飼馬)
	上竹屋町				踊り山車 (歌舞伎) 長浜型	踊り山車か 長浜型	踊り山車			踊り山車		踊り山車	踊り山車		餅敷縄の献供	
	布屋町				神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥	神奥			
	鉢屋橋町															
	上矢島町	篠原町			踊り山車 屋根なし	踊り山車	踊り山車				造り物	造り物	造り物			
	中矢島町	加茂町			人形山車 (加茂) 名古屋型	人形山車				からくり山車		からくり山車 (加茂車)	からくり山車 (加茂車)	→	※6 明治 27 / 30 間町へ売却	
	下矢島町 上段	相生町			神 (下矢島町)	神飾り			神		神	神	神			
	下矢島町 下段	矢島町			神奥 (下矢島町)	神奥				神奥		神奥	神奥		造り物と供	造り山車 (鏡の上に鏡子)
	菰右衛門町												造り物			からくり山車 (鞍馬山)
	今町北之端 (北々町)							造り物					造り物			
	上今町				人形山車 (小殿治) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車			からくり山車	からくり山車 (小殿治車)	からくり山車 (小殿治車)		造り物と供	

岐阜市(市名は「岐阜志略」掲載順に記載)	中今町				人形山車(胡蝶カ) 名古屋型	人形山車(題不明) 名古屋型	人形山車				からくり山車 ※7 明治22年竣工		からくり山車 (胡蝶車)	からくり山車 (胡蝶車)			
	下今町						供え物				造り物	鏡餅		鏡餅		御祝献供	造り山車 (太刀を乗上る宮主)
	加和屋町					踊り山車 屋根あり	踊り山車	踊り山車				踊り山車	踊り山車	踊り山車		造り物と俵	
	本町				人形山車(題不明) 名古屋型	人形山車(鞍馬山) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車			からくり山車	からくり山車 (鞍馬車)	からくり山車 (鞍馬車)		酒を供える	からくり山車 (鞍馬橋正坊)
	逢石町				人形山車(弁慶) 名古屋型	人形山車(美経弁慶) 名古屋型	人形山車				からくり山車		からくり山車 (弁慶車)	からくり山車 (弁慶車)			
	船治屋町					人形山車(大黒唐子) 名古屋型	踊り山車				踊り山車			踊り山車			
	車之町					造り山車カ(御幣)		からくり山車	からくり山車 ※明治21年に改装 して安宅車となる			からくり山車	からくり山車 (駒進帳)	からくり山車 (駒進帳)	→	からくり山車	からくり山車 (安宅)
	七番町						供え物	踊り山車			造り物			造り物			
	上ッ門町						供え物										
	上新町					鷹賀行列	踊り山車					造り物		造り物			
	中新町				人形山車(題不明) 名古屋型	人形山車(寿山) 名古屋型	人形山車	からくり山車	からくり山車			からくり山車	からくり山車 (寿山車)	からくり山車 (寿山車)			造り山車(鏡献上)
	大工町					踊り山車 屋根なし	供え物	踊り山車			造り物				造り物		
	下新町					踊り山車 屋根なし	踊り山車				踊り山車			造り物(踊りトナリ)			造り山車 (桃太郎宝取り)
	東福橋町	大和町															
	西福橋町	岡之町															
	米屋橋町	逢石町															
	矢島橋町	柳町															
	木造橋町	木造町					神輿	神輿	神輿			神輿		神輿		神輿	
	東土居原 横町	岡町															
	西土居原 横町	栄町															神輿
	(旧松島 御行所跡)	末広町						造り山車(花柳)						造り物		赤り物 (長9尺の笠) と俵	
	(唐光寺大門)	坂町										造り物		造り物			造り山車(種御流)
小瀬村	小瀬町						踊り山車					踊り山車	踊り山車				造り山車(長足に曳)
	中鉄屋町	金屋町 1丁目					踊り山車		踊り山車					踊り山車			造り山車(長足に曳)
	下鉄屋町	金屋町 2丁目						踊り山車						踊り山車	→	下山車に造り物 と俵	からくり山車 (蛸子の横約)
		南沢・堀川・ 堀川端・ 鉄屋橋町															からくり山車 (御宮が天神になる)
忠節村		忠節町							神輿							神輿	神輿
今泉村		上太田町														旗	造り山車 (轡の上に鞍子)
		栄江寺町														造り物 (牡丹寄獅子) と俵	轡臺
		釜町															造り山車(金銅龍)
		泉町														造り物と俵	
		七軒町														造り物と俵	造り山車(司馬屋公)
		下竹町														造り物と俵	
		中西野・ 下西野町														造り物と俵	
	上加納村	美園町							神輿								

例祭関係書類・例祭議決之書類留・例祭能事記録は伊奈波神社所蔵。明治23年の「からくり人形車絵」はこの年に奉告した町ではなく、人形のみが描かれている。明治24年の赤字は実際に奉納した町。
※1 清影車付風の「玉井町」札裏書 ※2 岐阜米屋町史 P63 ※3 荒瀬町町史 祭典記録 ※4 例祭関係書類留 3月5日議決 ※5 岐阜市史 通史編 民俗 P264 ※6 岐阜日日新聞 明治27年3月20日記事 ※7 例祭議決之書類留 3月14日記事



表 2-2 明治 32 年の区分けと明治 36 年までの奉納内容

区	構成町 () 内は明治 33 年の変更	明治 32 年 (1899)	明治 33 年 (1900)	明治 34 年 (1901)	明治 36 年 (1903)
第 1 区	玉井、湊、元浜、上・下茶屋、木挽、山口、益屋、大宮上・下、松ヶ枝、山下	玉井町 (象の造り物)	上茶屋町 (からくり山車)	湊町 (唐獅子の造り山車と俄)	元浜町 (金時の造り物と俄)
第 2 区	北・上・中・下今、東材木、加和屋、上新、上大久和	中今町 (布袋の軍配のからくり山車)	上今町 (布袋の造り物)	東材木町 (牛の造り山車と俄)	上新町 (からくり山車と俄)
第 3 区	大工、西材木、中・下大桑、魚屋、釜石、久屋、中新、蜂屋、本	大工町 (からくり山車)	西材木町 (からくり山車)	下大桑町 (手踊り山車)	釜石町 (福槌の造り山車と俄)
第 4 区	米屋、鞆屋、上・中竹屋、間之、大和、愛宕、末広	米屋町 (二福人からくり山車)	鞆屋町 (狸々に瓶)	中竹屋町 (からくり山車)	末広町 (三宝に鏡餅の造り物)
第 5 区	常盤、笹土居、白木、桜、万力、扇	常盤町 (融のからくり山車)	笹土居町 (鉾の造り物)	白木町 (鷹の造り山車と俄)	常盤町 (からくり山車)
第 6 区	矢島、栄、堀江、若松、松屋、木造、相生、榊、(天道、若松、十二軒屋)	矢島町 (若松日出に鶴と俄)	栄・堀江・若松の三町 (生花)	松屋町 (鯨の造り山車と俄)	相生町・榊町 (桜餅の造り物と俄)
第 7 区	車之、加茂、鍛冶屋、珠城、七曲、下新	車之町 (安宅車)	加茂町 (蜻蛉に地球の造り物)	鍛冶屋町 (からくり山車)	七曲町 (兎の造り物と俄)
第 8 区	稲東区、四屋	四屋町 (造花神輿と神馬)	四屋町 (大虎の造り物)	忠節町 (神輿)	(休み)
第 9 区	上・中・下西野、今泉、本郷、今川・上今川、海老河戸、不動、京・南京・北京・西京、日吉、堤下、桑名	中西野町 (大黒の大福槌)	京町・今川町 (巫女)	中西野町 (天狗面の造り山車)	下西野町 (からくり山車)
第 10 区	今小町、美江寺 1・2 丁目、緑、西伊吹、本橋詰	今小町 (大鳥籠に花車と俄)	美江寺町 2 丁目 (狸々の大瓶の造り物)	美江寺町 1 丁目 (からくり山車)	西伊吹町 (からくり山車。車之町から借用)
第 11 区	上・下太田、上・下竹、泉、七軒、室	上太田町 (からくり山車)	下竹町 (達磨の造り物)	下太田町 (手踊り山車)	七軒町 (唐獅子の造り物)
第 12 区	中・下鉄屋、小熊	中鉄屋町 (旧踊り山車台に紙雛造り物と手踊り)	小熊町 (釵に蛇の造り物)	下鉄屋町 (からくり山車)	小熊町 (鶴籠の造り物と俄) 多賀町 (神輿)
番外		茶商林六蔵 (大福助)	木造町・忠節町・東川端町・才勝 (神輿)	上加納区内金津青年会 (融のからくり山車)	天道町 (社殿模型と俄)
		金津廓芸妓連 (俄)	金津町 (浦島太郎玉手箱)	常磐津連中の俄	本橋詰町 (手踊り山車)
典拠		新聞記事	新聞記事	新聞記事・例祭関係書類 日誌 (伊奈波神社所蔵)	新聞記事・例祭関係書類 (伊奈波神社所蔵)

表 2-3 明治 40 年の区分けと大正元年までの奉納内容 ※大正 2 年以後も奉納はあるが、内容が不明のため掲載していない

区	構成町	明治 40 年 (1907)	明治 41 年 (1908)	明治 42 年 (1909)	大正元年 (1912)
第 1 区	湊、中川、元浜、玉井、松下、益屋、大仏、梶川、大宮、松ヶ枝、富茂登、木挽、山口、上・下茶屋	湊町 (からくり山車)	元浜町 (からくり山車)	玉井町 (からくり山車)	山口町 (からくり山車)
第 2 区	北・上・中・下今、加和屋、東材木、上大久和	中今町 (からくり山車)	上今町 (からくり山車)	加和屋町 (造り物)	北今町
第 3 区	大工、中・下大桑、上・中新、魚屋、西材木、久屋	下大桑町 (からくり山車)	上新町 (大鈴の造り物)	魚屋町 (胡額の造り物)	中新町
第 4 区	布屋、蜂屋、甚衛、鍛冶屋、釜石、七曲、上ヶ門、本、下薪、車之	布屋町 (神輿)	鍛冶屋町 (高麗狗の造り物)	釜石町 (造り物と手踊り)	車之町
第 5 区	松屋、愛宕、榊、上・中竹屋、大和、間之、末広、靱屋、米屋	松屋町 (からくり山車)	愛宕町・榊町 (神輿)	上竹屋町 (錦旗)	中竹屋町 (からくり山車)
第 6 区	常盤、相生、笹土居、珠城、加茂、白木、桜、万力、栄、扇、堀江	常盤町 (からくり山車)	相生町	笹土居町 (人形の造り物)	桜町・万力町
第 7 区	木造、若松、啓運、緑、柳、西野 1～8 丁目、御杉、不動、伊吹 1・2 丁目、四屋、矢島、天神	木造町ほか 6 町聯合 (神輿)	緑町・柳町 (献納品)	中西野町 (荷太鼓)	矢島町 (造り物)
第 8 区	金屋横町、大門、初音、下太田、今沢ノ横町 4 軒、多賀、藍川、柳沢、今沢、秋津、小熊、金屋 1・2 丁目	金屋横町ほか 2 町聯合 (神輿)	下太田町 (献納品)	多賀町 (献納物)	金屋町 1 丁目 (造り物)
第 9 区	司、岩根、泉、七軒、上・下竹、上太田、京 1・2 丁目	司町・岩根町 (献納物)	泉町 (随神の造り物)	七軒町 (献納物)	京町 1 丁目 (石製獅子)
第 10 区	今川 1・2 丁目、海老、梅ヶ枝、鷹見、明徳、本・東・南橋詰、美江寺、今小町、本郷 1・2 丁目、堤下、小屋前、室	今川町・海老町 (献納物の花車)	梅ヶ枝・鷹見・明徳 3 町聯合 (献納品)	端詰町 (大幕献納)	本郷町ほか 4 町
番外		加和屋町の慢狂連 (大桜と瓢の造り物)		俄	
典拠		新聞記事	同左	同左	同左



表 2-4 神幸祭の変遷 ※日は予定を含む。実際には天候による順延あり

明治 31 年	1898	本文に記載
明治 32 年	1899	4 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。祭典後に両神社と樫森神社・県神社の神輿がそろって伊奈波神社へ。午後、金神社など 3 社の神輿は還御
明治 33 年	1900	3 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。祭典後に両神社と樫森神社・県神社の神輿がそろって伊奈波神社へ。4 日午前、金神社など 3 社の神輿は還御
明治 34 ～ 36 年	明治 32 年に同じ	
明治 37 年	1904	戦時（日露戦争）につき中止
明治 38 年	1905	明治 32 年に同じ（樫森・県神社については確認できない）
明治 39 年	1906	伊奈波神社から金神社へは渡御せず、金神社からは伊奈波神社へ渡御
明治 40 年	1907	4 日に伊奈波神社・金神社の神輿が樫森神社へ。祭典後に伊奈波神社神輿のみ伊奈波神社へ還御
明治 41 年	1908	明治 40 年に同じ
明治 42 年	1909	4 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。祭典後に両社神輿が伊奈波神社へ（午後、金神社神輿は還御か）
明治 43 年	1910	4 日午前に神輿が伊奈波神社から金神社へ。樫森神社へも神幸
明治 44 ～ 大正 4 年	不明	
大正 5 年	1916	4 日午前に神輿が伊奈波神社から樫森神社へ
大正 6 年	1917	4 日午前に伊奈波・金神社の神輿が樫森神社へ。祭典後に伊奈波神社神輿のみ伊奈波神社へ還御か
大正 7 年	1918	大正 6 年に同じ
大正 8 年	1919	4 日午前に神輿が伊奈波神社から樫森神社へ。祭典後に伊奈波神社神輿のみ伊奈波神社へ還御か
大正 9 年	1920	不明
大正 10 ～ 13 年	4 日に神幸祭は斎行するが詳細不明	
大正 14 ～ 昭和元年	大正 5 年に同じ	
昭和 2 年	1927	諒闇中につき中止
昭和 3 年	1928	不明
昭和 4 年	1929	4 日に神幸祭あり（金神社単独か。伊奈波神社については不明）
昭和 5 ～ 10 年	中絶	
昭和 11 年	1936	伊奈波神社新築と躍進日本大博覧会開催を契機に再開。3 日午前に神輿が伊奈波神社から赤口神社へ。祭典後に伊奈波神社へ還御（金神社は祭典に加わっていない）
昭和 12 年	1937	伊奈波神社については昭和 11 年に同じ。金神社は別に神幸祭をおこなっている
昭和 13 年	1938	4 日に斎行
昭和 14 年	1939	4 日午前に神輿が伊奈波神社から赤口神社へ渡御したのち還御。金神社は別に神幸祭を斎行
昭和 15 年	1940	伊奈波神社については昭和 14 年に同じ
昭和 16 年	1941	不明。金神社は 4 日に神幸祭を斎行している
昭和 17 年以後	中止。昭和 19 年には金神社は 4 日に神幸祭を斎行している	

新聞記事、伊奈波神社所蔵資料から作成

昭和 54	1979	4 台	金華・京町・明徳地区		神賑会
昭和 55	1980	4 台	金華・京町・明徳地区		神賑会
昭和 56	1981		雨天で宵宮など中止		
昭和 57	1982	4 台	金華地区・京町地区・明徳地区氏子中		
昭和 58	1983	4 台	京町地区	明徳地区氏子	神賑会
昭和 59	1984	3 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 60	1985	4 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 61	1986	4 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 62	1987	4 台	金華地区	明徳地区	神賑会
昭和 63	1988	4 台	金華地区	明徳	神賑会 ボーイスカウト
平成 1	1989	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト
平成 2	1990	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト第 16 団
平成 3	1991	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト
平成 4	1992	4 台	京町地区	明徳 人形修復、26 年ぶりにカラクリ奉納	ボーイスカウト
平成 5	1993	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト
平成 6	1994	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト岐阜第 16 団
平成 7	1995	4 台	金華地区	明徳奉山会	ボーイスカウト岐阜第 16 団
平成 8	1996	4 台	金華地区	明徳	ボーイスカウト岐阜第 16 団
平成 9	1997		雨天で宵宮など中止		
平成 10	1998	4 台	金華地区	明徳奉山会	ボーイスカウト岐阜第 16 団
京町地区 人形復元、38 年ぶりにカラクリ奉納					ボーイスカウト岐阜第 16 団

新聞記事、『金華史誌』P155、伊奈波神社社務日誌などから作成



表 2-5 戦後の山車の奉曳（平成 10 年まで）（ ）の町名は推定

年代	西暦	総数	安宅車	若戎車	清影車	踊 車
昭和 25	1950				湊町	小熊町
昭和 28	1953				湊・元浜・玉井 3 町（3 町所有）	
昭和 30	1955					小熊町〈子ども踊り〉
昭和 31	1956					小熊町
昭和 32	1957	3 台		(大門町)	玉井町	小熊町
昭和 33	1958		(笹土居町)			神田町 1・2 丁目
昭和 34	1959				湊町	(出車しているかは不明)
昭和 35	1960	2 台	故障	金屋町 ※昨年の台風で破損、飾のみ	※昨年の台風で破損	小熊町 1 丁目〈唐獅子牡丹造り物〉
昭和 36	1961	1 台				小熊町 2 丁目
昭和 37	1962		本町 5 丁目 奉曳後、伊奈波神社に奉納			
昭和 38	1963		(出車しているかは不明)			
昭和 39	1964	3 台	矢島町 2 丁目	(大門町)		小熊町 1 丁目
昭和 40	1965	2 台	金華			小熊町 2 丁目
昭和 41	1966	3 台	安宅車保存会	金屋町 1・2 丁目 このうち伊奈波神社に奉納か		小熊町 1・2 丁目
昭和 42	1967	4 台	本町 5 丁目	伊奈波神社所有 今沢町広報会 奉芸	湊・元浜・玉井 3 町合同 このうち伊奈波神社に奉納か	小熊町
昭和 43	1968	4 台	金華	(明德)	(京町)	(本郷)
昭和 44	1969	4 台				
昭和 45	1970	4 台	金華	明德	京町	伊奈波神賑会
昭和 46	1971	4 台	京町地区	明德地区氏子中	金華地区	神賑会〈福艇車〉
昭和 47	1972	4 台	京町地区	明德地区氏子中	金華地区	神賑会〈福艇車〉
昭和 49	1974	4 台				
昭和 50	1975	4 台		金華地区・京町地区・明德地区氏子中		神賑会
昭和 51	1976	4 台	金華地区	明德地区	京町地区	神賑会〈福艇車〉
昭和 52	1977	4 台		金華地区・京町地区・明德地区氏子中		神賑会
昭和 53	1978	4 台		金華・京町・明德地区		神賑会

第三章 岐阜まつりの組織と行事

第一節 はじめに

岐阜まつりは、伊奈波神社をはじめとする、多くの団体によって成り立っている。本章では、岐阜まつりに関わっている団体の組織について、関係者への聞き取りや新聞記事、文献資料から明らかにしたい。

第二節 伊奈波神社の組織

(一) 伊奈波神社の組織

令和六年度の伊奈波神社の組織の内訳は、宮司一名、禰宜一名、権禰宜六名、出仕二名、巫女七名、囑託一名である。

おもな氏は、岐阜市の金華、京町、明德、本郷地区の住民が多くを占めている。現在の神社の運営は、代表役員である伊奈波神社宮司および氏子総代の代表である責任役員四名からなる責任役員会と、責任役員会にすべての氏子総代二十名（令和六年は二名欠員）を加えた役員・総代会によって行われている。責任役員会が必要に応じて開催され、神社の決算報告、予算や諸事の決定を行っており、役員・総代会においては、責任役員会にて決定した事項を協議し、これを承認している。責任役員の任期は三年で再選がある。

(二) 伊奈波神社と岐阜まつり

伊奈波神社の責任役員会や、役員・総代会は、これまで岐阜まつりの在り方

についても議論を行ってきた。例えば、岐阜まつりの実施日の変更（平成七年（一九九五）、清影車のからくり復元（平成八年）、神幸祭における伊奈波・金・檀森三社による合同祭祀（平成十九年）など、重要事項の決定を行っている。宵宮で曳行される山車は、かつては各地区が所有していた。昭和三十七年（一九六二）、経済的理由により管理が難しくなったため、安宅車を所有していた本町五丁目、山車を伊奈波神社に奉納した。この後、若戎車、清影車、踊車もおそらく昭和四十年代前葉に伊奈波神社に奉納されたと思われる（五八頁参照）。現在は、まつりの時に伊奈波神社が各地区・団体に貸出す形をとっており、メンテナンスなどは各地区・団体が伊奈波神社と協議の上で行っている。宵宮の一週間前の土曜日に、各団体の関係者が決められた時間に伊奈波神社参集殿に集まり、団体ごとに奉告祭が執り行われる。ここで、山車曳行の安全を祈願している。

第三節 岐阜まつりの組織

(一) 岐阜祭実行委員会

岐阜祭実行委員会は、岐阜まつりをとおして市民の集い・地域の振興のための活動を行う団体で、事務所を伊奈波神社に構える。委員は伊奈波神社役員・総代会の構成員からなり、毎年岐阜まつりの期日が近づくたびに開催されている。



写真 3-1 岐阜まつり宵宮実行委員会
（令和六年二月二十二日）



(二) 岐阜まつり宵宮実行委員会

岐阜まつり宵宮は、かつては伊奈波神社が主催して実施していた。平成七年（一九九五）、宵宮の山車、神輿の入場や演出の調整、会場づくりなどの運営をプロデュースする組織として、岐阜青年会議所OBと自治会連合会長をはじめとする地元住民の代表者、神輿・山車等宵宮に参加する団体の代表者などによる岐阜まつり宵宮実行委員会が組織された。

令和六年の岐阜まつり宵宮実行委員会の構成員は、委員長、相談役各一名、副委員長四名、会計、監査各一名、幹事十六名、伊奈波神社神職二名で、これに岐阜市経済部職員が加わっている。

委員会はまつり前に二回、まつり後に一回、伊奈波神社参集殿にて開催される。まつり前の委員会では、スケジュールの確認、委員各自の役割分担、前年の決算と当年の予算、宵宮のポスターの配布先・配布量、当日の各山車、神輿の動き、関係先への申請書・依頼の提出、機材・物品の調達などについての審議と、宵宮の「のぼり」「提灯」の奉賛の呼びかけなどが行われ、まつり後には収支報告を含めた反省会が行われている。

第四節 各山車保存会・運営組織と自治会

(一) 安宅車奉曳実行委員会・金華安宅車支援会と金華地区

1 安宅車

安宅車は、もともと車之町（大正五年（一九一六）に本町五丁目に改称）が所有していた。地元では、安宅車は江戸時代後期から幕末にかけての作（注1）で、明治二十一年（一八八八）の大改修の時に弁慶、義経のからくり山車に改装し、能「勧進帳」を演じることから、作中に登場する安宅関にちなみ、「安宅車」

と呼ばれるようになったと伝わっている。また、明治二十四年の濃尾震災、第二次世界大戦による焼失を免れたとされている。

山車蔵は、かつて本町五丁目内の木造町へ続く道路との丁字路付近に存在したが、戦時中の建物疎開のために撤去されたという（注2）。

2 安宅車奉曳実行委員会

安宅車の運営は、おそらく昭和四十三年以来輪番制が採用されている（注3）。すなわち、金華地区の自治会を図3-11のように十六の地区に分割し、一年につき二地区ずつが担当する（表3-1）。かつては一年につき一地区のみの担当であったが、お囃子や車力などの担い手不足の対策として、平成十一年（一九九九）から現在の体制になった。

担当となった自治会は、安宅車奉曳実行委員会（以下、実行委員会）を設立する。実行委員会の設立時期は、早いところでは前年のまつり終了直後の四月に設立するところもあるが、おおむね七月前後に立ち上げる自治会が多いようである。

実行委員会の役員構成は各自自治会により多少の差はあるものの、おおむね実行委員長のもと、企画・総務係、山車運行係（舵方^{かじかた}）、器具・電線係、接待・救護係、交通・警固係、衣装係、お囃子世話係、お囃子演奏係、子ども会連絡係、からくり係の各係の責任者からなる。

実行委員会が行う事前の準備として、曳行のルート決め、回覧板や子ども会を通じての舵方、車力、お囃子の人員の募集がある。また、祝儀や各戸からの負担金を集めるなどの資金調達を行う。

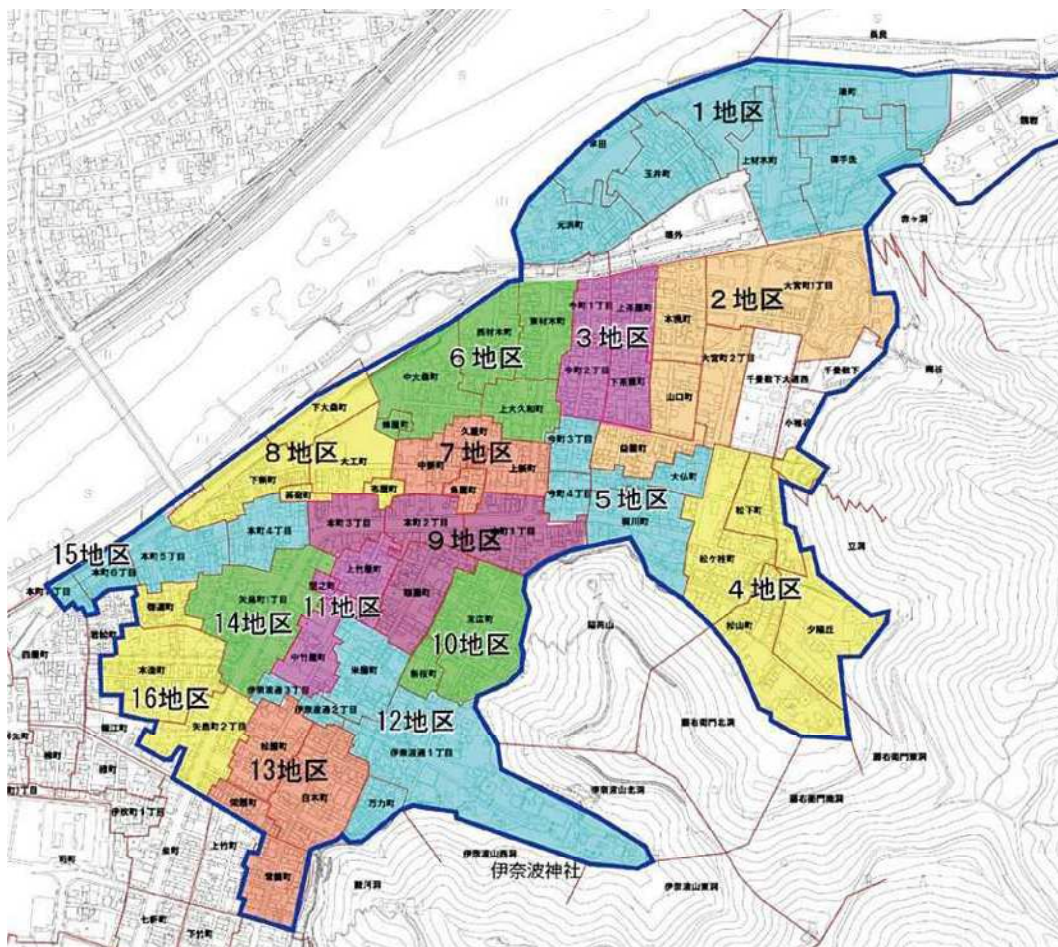


図 3-1 金華地区地図

①	1 地区	湊町 上材木町 御手洗町 玉井町 元浜町 川畔町 ライオンズマンション メイツ長良川 ウェリスリビオ岐阜公園
	3 地区	上茶屋町 下茶屋町 今町一丁目 今町二丁目
②	2 地区	大宮町一丁目 大宮町二丁目 木挽町 山口町 益屋町
	4 地区	松下町 松山町 夕陽ヶ丘 夕陽ヶ丘県営住宅 松ヶ枝町北組 松ヶ枝町南組 松ヶ枝町東組
③	5 地区	今町三丁目 今町四丁目 大仏町 梶川町
	6 地区	東材木町 西材木町 神大久和町 中大桑町 蜂屋町
④	7 地区	久屋町 魚屋町 上新町 中新町
	8 地区	大工町 甚衛町 下大桑町 下新町 布屋町
⑤	9 地区	本町一丁目 本町二丁目 本町三丁目 靱屋町 ユーハウス岐阜
	10 地区	末広町北組 末広町南組 末広町西組 新桜町
⑥	11 地区	上竹屋町 中竹屋町 キャッスルハイツ 間之町 大和町
	12 地区	米屋町 ユーフォリア岐阜米屋 伊奈波通一丁目 伊奈波通二丁目 伊奈波通三丁目 万力町
⑦	13 地区	白木町 常磐町 松屋町 栄扇町
	14 地区	矢島町一丁目上組 矢島町一丁目中組 矢島町一丁目下組
⑧	15 地区	本町四丁目 本町五丁目 本町六丁目 本町七丁目
	16 地区	矢島町二丁目 啓運町 木造町

表 3-1 金華地区の輪番



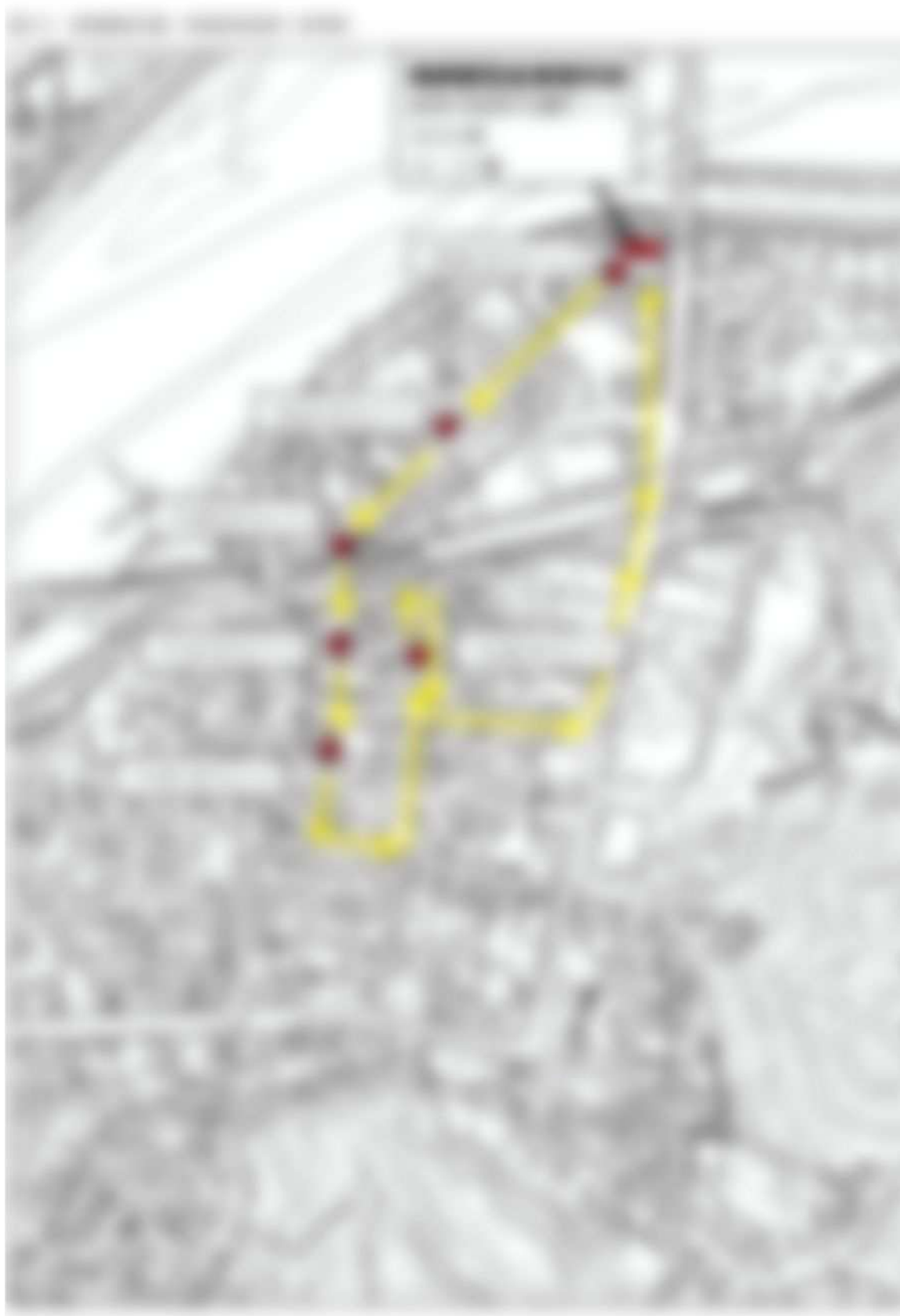
3 金華安宅車支援会

金華地区における輪番制のメリットとして、地区の子どもの多くが小学校在学中に一度はまつりに関わることができ、安宅車を継承する風土や郷土への愛着を醸成していることが挙げられる。一方、毎年参加する人員が変わり、運営をはじめ、お囃子やからくりの実演、山車の用意や取り扱いなどのノウハウの積み重ねが困難であるという一面も持つ。これは、輪番制の採用以来長年の課題であった。

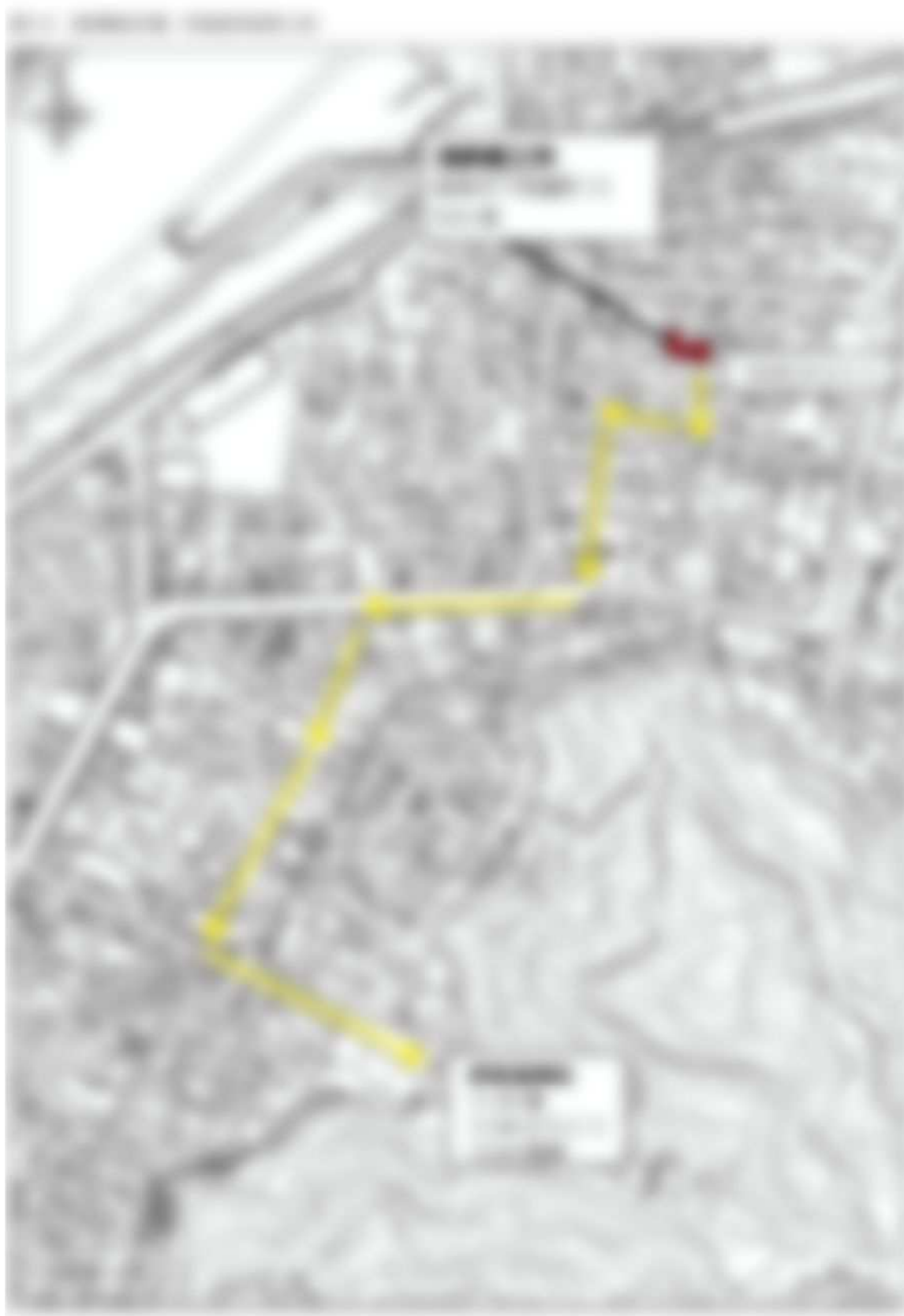
これらの課題を解決するため、令和元年（二〇一九）十二月、金華自治会連合会地区長や各地区の安宅車奉曳実行委員会委員経験者が集まり、安宅車の奉曳をサポートする団体の設立に向けた会合が開かれた。その結果、翌年に金華安宅車支援会（以後、支援会）が発足した。支援会は、規約によれば、「安宅車奉曳実行委員会活動を支援し、その要請に応じて奉曳事業に補完的に取り組み、七百年の伝統を誇る岐阜まつり安宅車奉曳事業の伝統護持と向上発展に努め、よって地域のコミュニティづくりに寄与すること」（原文ママ）を目的としている。

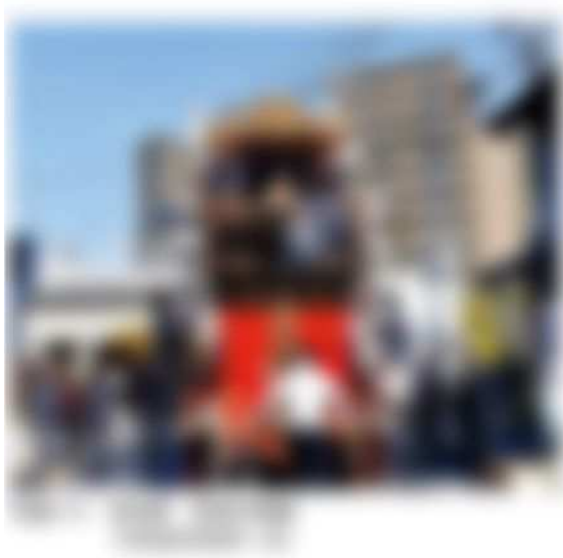
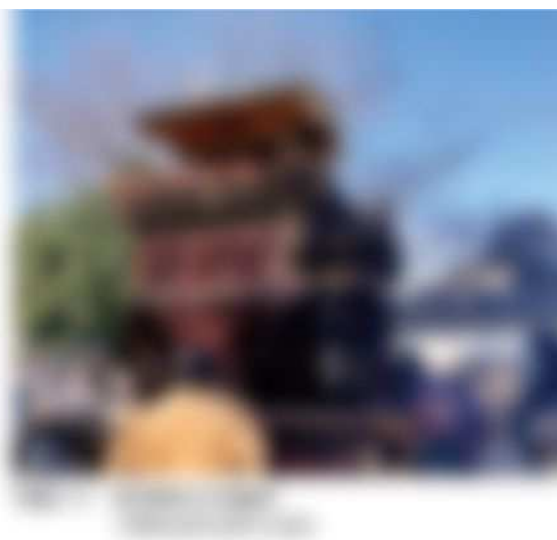
役員は、会長一名、副会長二名、事務局長一名、事務局次長一名、書記一名、会計一名、部会担当若干名、常任理事若干名、監事一名からなる。役員の任期は二年で、前年・前々年度に安宅車の奉曳を行った地区から役員が選出され、順番に全地区が対象となる。

また、支援会の下部組織である専門部会（山車運行・舵方・お囃子・からくり人形・交通警備・器具電線・接待救護・衣装・記録等）は、毎年の奉曳事業経験者の中から希望者に加わってもらう登録メンバー制を採用し、順次その年から当該年度の不足する部門にメンバーを派遣し支援している。最近では、からくり人形の操作方法や演技内容を動画にまとめてマニュアル化する取り組みを行っており、各地区における後継者の育成に努めている。











(二) 岐阜若戎車奉曳会と明郷校区

1 若戎車

若戎車は、蛭子命（ひるこのみこと）のからくりが山車に搭載されていたことから、もともと「蛭子車」と呼ばれていたが、伊奈波神社では、すでに昭和四十六年に「若恵比寿」という呼ばれ方がされており（注4）、現在では「若戎車」と一般的に呼ばれている。

現存する若戎車の建造年代は定かではない。地元では、もともとは加納本町三丁目の山車で、享和二年（一八〇二）に建造され、濃尾震災後に岐阜市金屋町に移ったと伝わっている。過去の新聞記事によると、金屋町は昭和三十五年に山車を曳いた（注5）ことがわかっているのが最後で、その後は昭和四十二年に今沢町が曳いたと思われる新聞記事（注6）がみられる。翌四十三年、「明德」地区によって曳かれ（注7）、現在にいたっていると思われる。

2 岐阜若戎車奉曳会

若戎車の運営は、安宅車、清影車のような輪番制を採用しておらず、岐阜若戎車奉曳会（以後、奉曳会）が一括して行っている。比較的人れ替わりがみられるお囃子方や楯方（たてかた）の人員などをあわせると、年ごとに入れ替わりがあるものの、およそ百名ほど在籍している（令和七年三月現在）。お囃子や楯方などの人員は毎年募集を行っており、近年では、かつてお囃子を経験した子どもたちが大人になって帰省し、山車奉曳に加わる好例が出てきた。また、奉曳会の会員は、以前は明德地区の住民やその出身者や縁者などから構成されていたが、平成二十四年に明德小学校が本郷小学校と合併して明郷小学校が発足したことを機に、会員の対象地域は本郷地区にも広がられた。

奉曳会は、山車の曳き出し、からくり人形の操作、お囃子の演奏など、若戎車曳行に関するあらゆる運営を行っている。

からくり人形の操作を行う人形方、お囃子を演奏する囃子方、山車を曳く楯

方の各セクションには、長年の経験者が多数在籍しているのが特徴である。

また、若戎車の歴史を重んじ、資料や調査に基づいた復元を試みていることも、奉曳会の特徴として挙げられる。お囃子は、かつては能管の音色を収録したテープをスピーカーによって流し、地域住民が指導した子どもたちによる縮太鼓と大太鼓の演奏を加える形で行われてきた。平成二十四年から、お囃子の生演奏の実施に向けて岐阜市内外の山車祭を聞き取りや文献資料などによる調査を行い、同二十七年に明郷小・岐阜中央中の児童生徒二十五人が小鼓と太鼓を、保護者十名が笛を担当するかたちで、生演奏を実現させた。





写真 10-10-1 展示風景



写真 10-10-2 展示風景



写真 10-10-3 展示風景



写真 10-10-4 展示風景



写真 10-10-5 展示風景



写真 10-10-6 展示風景



(三) 清影車せいえいしゃからくり保存会ぼぜんかいと京町地区

1 清影車と京町地区

清影車は、もともと金華地区の玉井町が所有していた山車である。地元では、先代の清影車は江戸時代後期に製造されたものの、濃尾震災で焼失したと伝えられている。現存する清影車について、明治三十六年（一九〇五）に湊町、玉井町、元浜町の三町が共同で建造し、翌三十七年に完成したことを記した棟札が残されている。

新聞記事によると、昭和四十二年に清影車を曳いたのは「川原（湊、元浜、玉井町合同）」で、翌四十三年には「京町校下」（ただし、山車名は不記載）が初出であった。同四十五年には「京町四」が曳行している（注8）。記事が正しければ、このことから、輪番制が採用されていた可能性があり、翌年の伊奈波神社社務日誌には、金華校下が清影車を曳き、安宅車を曳いた団体（後述）として、「京町校下 西野町五丁目 北野町 天神町南 九丁内 第五、六地区」と記載されている。

清影車における輪番制は、京町地区を七地区（五地区と六地区は合同）に分割（表2、図2）し、六年に一度担当することになっている。すなわち、京町地区の子どもたちは、小学校在籍中に、必ず一度はお囃子を経験することになっている。また、清影車の巡行ルートやからくりの披露場所の策定も、担当の地区が行っている。

からくり人形は、彦火々出見命、豊玉姫、弊振り人形の三体を搭載し、能「玉井」の一場面を演じている。これらのからくり人形は江戸時代に作られたが、昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風等の水害で被災してしまったという。以後は木偶人形が乗せられるのみでからくりは行わなかった。

平成四年（一九九二）、金華地区山車の交換曳行がなされた。この後、安宅車を曳いた経験から、清影車にもからくり人形がほしいという意見が地元の間

で高まった。この機運を背景に、同八年に京町地区の有志が伊奈波神社に清影車のからくり人形の復元を要請したところ、八月に開催された伊奈波神社の役員・総代会において承認され、製作が行われることとなった。平成十年にからくり人形が完成し、当年の岐阜まつりにおいて、三十八年ぶりに「玉井」が披露された。

2 安宅車と清影車の入れ替え

前述のとおり、もともと安宅車は本町五丁目、清影車は湊町・元浜町・玉井町が曳いていたが、おそらく昭和四十年代に金華地区が安宅車、京町地区が清影車を輪番で曳くようになり、現在にいたっている。例外として、昭和四十六年、五十八年、平成四年には、安宅車と清影車を入れ替えて曳いている。地元では、清影車の元の所有者が金華第一地区の玉井町・湊町・元浜町だったため、ここが山車の担当になったときに安宅車と清影車を入れ替えたといわれており、昭和五十八年に金華第一地区が担当した年に安宅車と清影車を交換している。実際のところは、その他の地区が担当した時でも入れ替えた年があったようである。例えば、昭和四十六年には、松屋町・白木町・栄扇町・常磐町の第十三地区が、平成四年には、久屋町・魚屋町・上新町・中新町の第七地区が清影車を曳いている。



写真 3-14 安宅車山車蔵に保管されている「金華校下 清影車」招き札

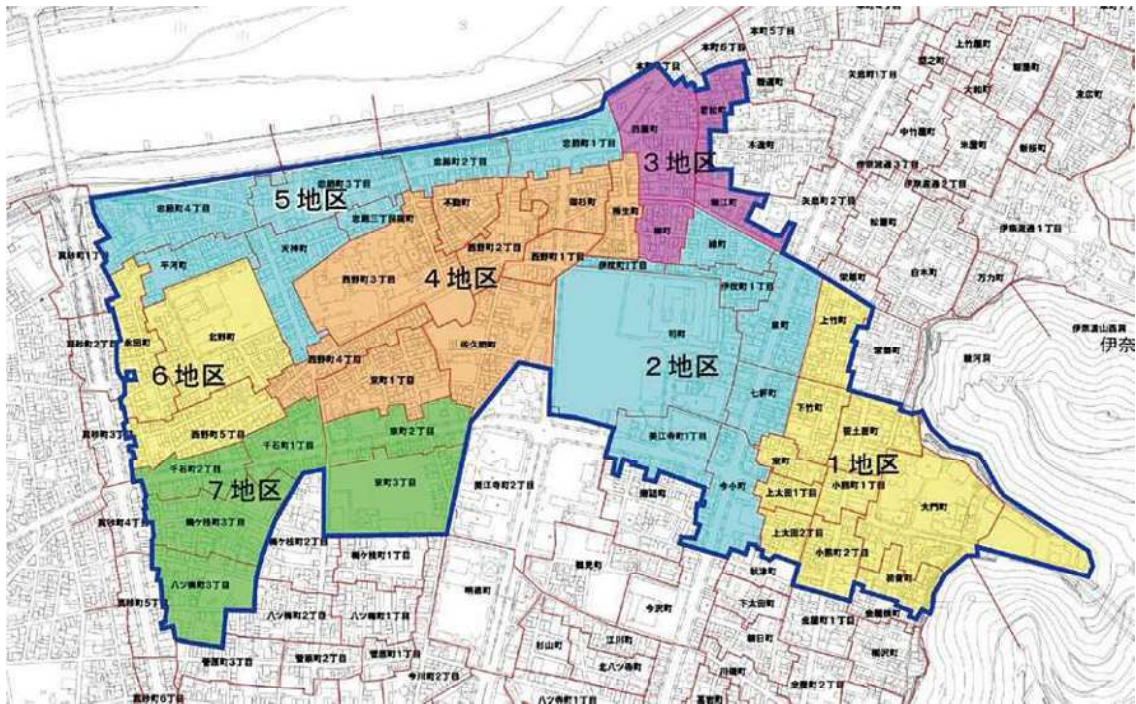


図 3-6 京町地区地図

3 清影車からくり保存会

前述の平成八年における役員・総代会の席上において、当時の宮司である宇都宮正氏より保存会を設立する提案が出され、からくり人形の復元品が完成した平成十年に、京町地区住民の有志によって清影車からくり保存会（以下、保存会）が立ち上げられた。保存会は、からくり人形の操作を担うほか、山車の

①	1 地区	上竹町、下竹町、室町、笹土居町、上太田一丁目、同二丁目、小熊町一丁目、同二丁目、鶯谷町、大門町、初音町、鶯谷
②	2 地区	緑町、伊吹町一丁目、同二丁目、司町、泉町、七軒町、今小町、美江寺町一丁目
③	3 地区	若松町、四屋町、柳町、柳生町、堀江町
④	4 地区	不動町、御杉町、西野町一丁目、同二丁目、同三丁目、同四丁目、佐久間町、京町一丁目
⑤	5 地区	忠節一丁目、同二丁目、同三丁目、同三丁目南町、同四丁目、平河町、天神町
⑥	6 地区	北野町、永田町、西野町五丁目
	7 地区	千石一丁目、同二丁目、京町二丁目、同三丁目、梅ヶ枝町三丁目、八ツ梅町三丁目

表 3-2 京町地区輪番制

現在の保存会員は、京町地区などの有志から成り、まつり当日に関心を持った者への勧誘や、会員の友人等による加入を行っており、会員の増加に努めている。

● ● ● ● ●

[illegible][illegible][illegible][illegible]

● 新刊圖書

© 2000 Blackwell Science Ltd *Journal of Internal Medicine* 247: 115–121

3

© 2006 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 260: 103–110

100% 100% 100%

1. 在下列各题中，选择正确的答案，并说明理由。

Figure 1. The effect of the concentration of the *Agrobacterium* suspension on the transformation efficiency of *Agrobacterium* strains.

[illegible][illegible]

1. 本報社址：台北市中正區延平南路77號5樓505室
2. 電話：(02) 2311-2311
3. 傳真：(02) 2311-2311
4. 郵政信箱：10001
5. 郵政劃撥：10001
6. 郵政特准掛號：認爲新聞紙類
7. 登記證：警字第一〇八八號
8. 登記證：警字第一〇八八號
9. 登記證：警字第一〇八八號
10. 登記證：警字第一〇八八號

Copyright © 2007 by John Wiley & Sons, Inc.

[illegible]

11000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000 00000000

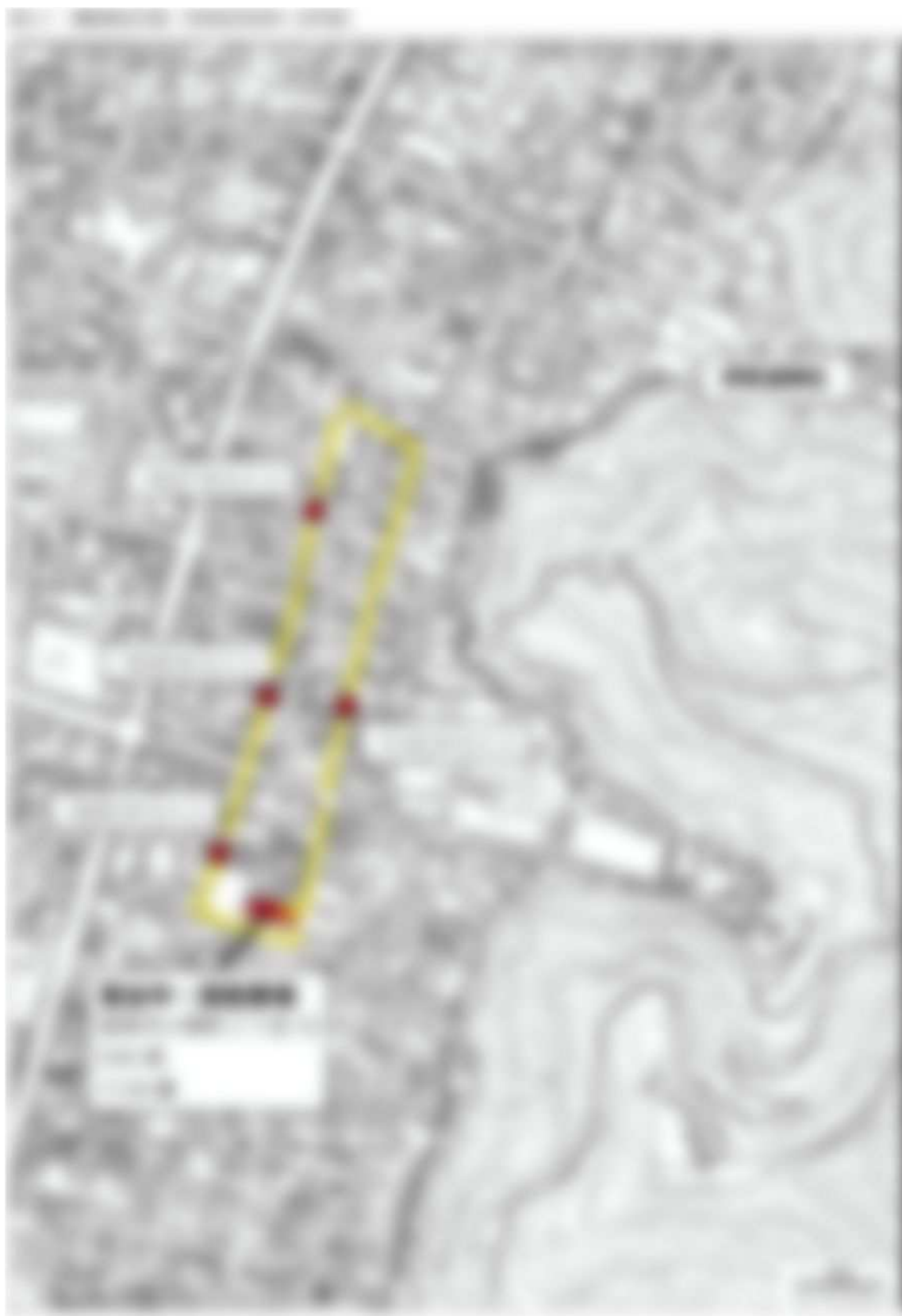
© 2006 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 260: 103–110

© 2006 The Authors
Journal compilation © 2006 Blackwell Publishing Ltd

Figure 1 The effect of the number of trials on the mean accuracy of the responses.

1. 書 100頁
 2. 書 100頁
 3. 書 100頁
 4. 書 100頁
 5. 書 100頁
 6. 書 100頁
 7. 書 100頁
 8. 書 100頁
 9. 書 100頁
 10. 書 100頁
 11. 書 100頁
 12. 書 100頁
 13. 書 100頁
 14. 書 100頁
 15. 書 100頁
 16. 書 100頁
 17. 書 100頁
 18. 書 100頁
 19. 書 100頁
 20. 書 100頁
 21. 書 100頁
 22. 書 100頁
 23. 書 100頁
 24. 書 100頁
 25. 書 100頁
 26. 書 100頁
 27. 書 100頁
 28. 書 100頁
 29. 書 100頁
 30. 書 100頁
 31. 書 100頁
 32. 書 100頁
 33. 書 100頁
 34. 書 100頁
 35. 書 100頁
 36. 書 100頁
 37. 書 100頁
 38. 書 100頁
 39. 書 100頁
 40. 書 100頁
 41. 書 100頁
 42. 書 100頁
 43. 書 100頁
 44. 書 100頁
 45. 書 100頁
 46. 書 100頁
 47. 書 100頁
 48. 書 100頁
 49. 書 100頁
 50. 書 100頁
 51. 書 100頁
 52. 書 100頁
 53. 書 100頁
 54. 書 100頁
 55. 書 100頁
 56. 書 100頁
 57. 書 100頁
 58. 書 100頁
 59. 書 100頁
 60. 書 100頁
 61. 書 100頁
 62. 書 100頁
 63. 書 100頁
 64. 書 100頁
 65. 書 100頁
 66. 書 100頁
 67. 書 100頁
 68. 書 100頁
 69. 書 100頁
 70. 書 100頁
 71. 書 100頁
 72. 書 100頁
 73. 書 100頁
 74. 書 100頁
 75. 書 100頁
 76. 書 100頁
 77. 書 100頁
 78. 書 100頁
 79. 書 100頁
 80. 書 100頁
 81. 書 100頁
 82. 書 100頁
 83. 書 100頁
 84. 書 100頁
 85. 書 100頁
 86. 書 100頁
 87. 書 100頁
 88. 書 100頁
 89. 書 100頁
 90. 書 100頁
 91. 書 100頁
 92. 書 100頁
 93. 書 100頁
 94. 書 100頁
 95. 書 100頁
 96. 書 100頁
 97. 書 100頁
 98. 書 100頁
 99. 書 100頁
 100. 書 100頁

1. 研究の目的と意義
 2. 研究の背景と動機
 3. 研究の範囲と対象
 4. 研究の方法と手順
 5. 研究の結果と考察
 6. 研究の結論と今後の展望



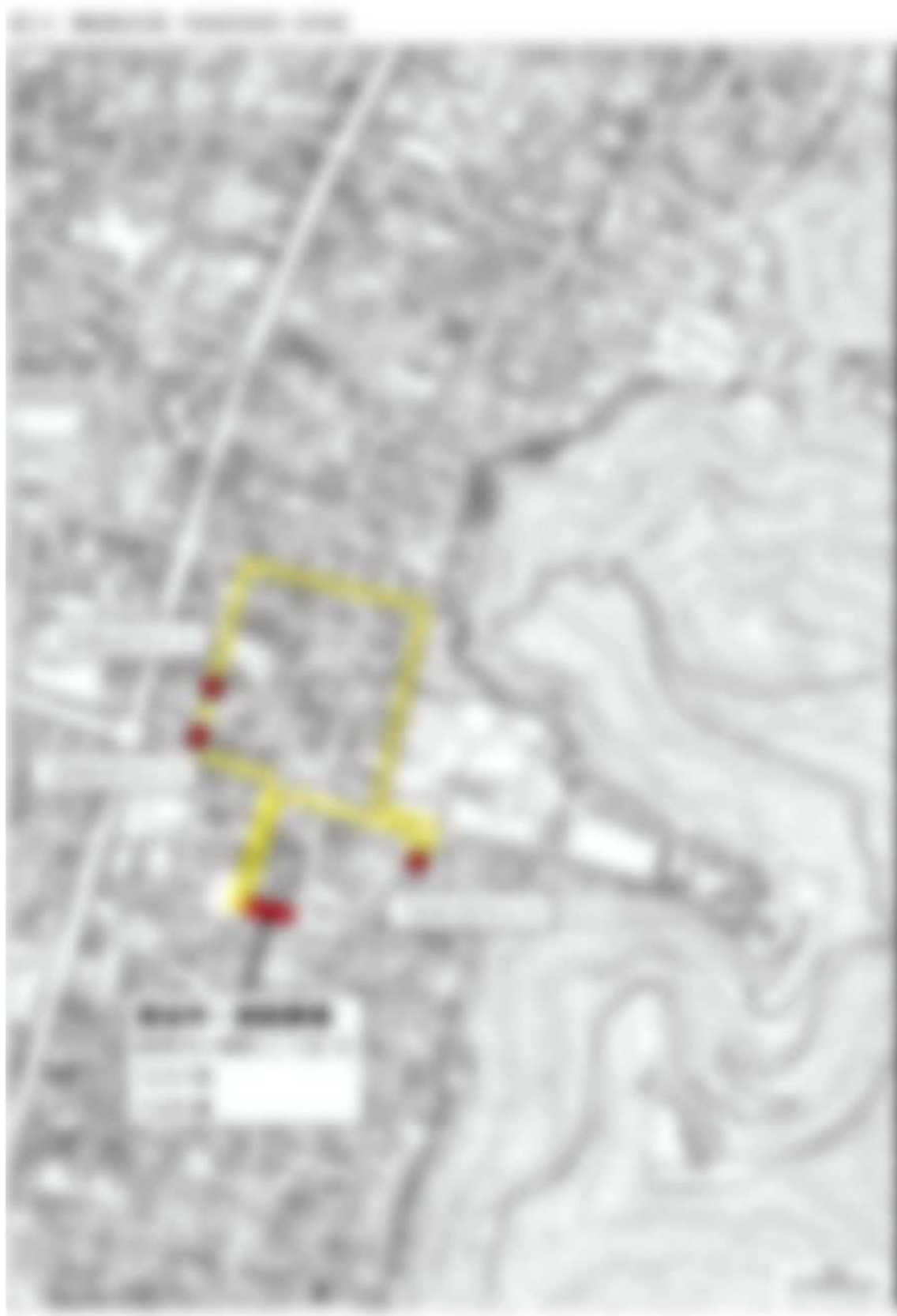








写真 2-16 運動会 中央の1年生組
(市立中央小学校)



写真 2-17 運動会 2年生の1年生組
(市立中央小学校)



写真 2-18 運動会 市立中央小学校の運動会
(市立中央小学校)



写真 2-19 運動会 市立中央小学校
(市立中央小学校)



写真 2-20 運動会 市立中央小学校
(市立中央小学校)



写真 2-21 運動会 市立中央小学校
(市立中央小学校)



(四) 踊車とボーイスカウト岐阜第十六団

1 踊車と曳行団体の変遷

踊車は、現存する岐阜まつりの山車の中で唯一名古屋型ではなく、屋台状の形状をしている。からくり人形を持たず、屋形の上層に三方と槌が乗せられている。

踊車の建造年代や由来は資料がなく不詳である。もとの所有は、矢島町とも小熊町ともいわれているが、昭和二十五年（一九五〇）四月四日付の新聞記事に、「小熊町」の招き札をかけた踊車の写真が掲載されており、以後小熊町の山車の曳行に関する記事が見られることや、山車と同時に引き継がれた大太鼓の収納箱に「小熊町」の墨書があることから、少なくとも昭和二十五年以降は小熊町が曳いていたことが言えそうである。

小熊町が確実に山車を曳いていたことが最後にわかるのは昭和四十二年である（注9）。その後同四十五年には神賑会（氏子による組織）が曳いた。（五九頁参照）神賑会は、お囃子など担い手不足が深刻化し、昭和六十三年にボーイスカウト岐阜第十六団に踊車を引き継ぎ、現在にいたっている。

なお、岐阜まつりの宵宮において、例年踊車が四台の山車の先頭を切って伊奈波神社に入るようになっていたが、これはかつて踊車を担った神賑会が伊奈波神社の氏子組織であるからといわれている。

2 ボーイスカウト岐阜第十六団

ボーイスカウト岐阜第十六団（以下、ボーイスカウト）は、岐阜小校区、明郷小校区など、おもに旧市街地を中心としたエリアの小学・高校生の団員からなる。お囃子は団員の小学生が担当し、保護者らが山車を曳く。山車運営に必要な経費は、伊奈波神社からの補助金のほかは、ボーイスカウトの運営費から支出されている。

なお、金華地区などに在住の団員がほかの山車の担当に当たった場合は、そ

ちらを優先することになっている。

1478-7675/05/0000-0000\$05.00/0

© 2006 Blackwell Publishing Ltd

© 2000 Blackwell Science Ltd *Journal of Internal Medicine* 247: 395–402

© 2004 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 255: 103–110

1. The first step is to identify the problem or question that needs to be answered. This involves understanding the context and the specific requirements of the task.

1. The first step is to identify the problem or question that needs to be answered. This involves understanding the context and the specific requirements of the task.

Source: *Author's calculations*.

© 2005 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 258: 103–110

Source: *Journal of the American Statistical Association*, 1997, Vol. 92, No. 439, pp. 1092-1103.



写真 3-12 タニの宮祭りの旗燈籠（旗灯籠）
（岐阜市東山地区）



写真 3-13 旗燈籠（旗灯籠）
（岐阜市東山地区）



写真 3-14 旗燈籠（旗灯籠）
（岐阜市東山地区）



写真 3-15 旗燈籠（旗灯籠）
（岐阜市東山地区）



写真 3-16 旗燈籠（旗灯籠）
（岐阜市東山地区）



写真 3-17 旗燈籠（旗灯籠）
（岐阜市東山地区）

(五) 岐阜神輿連

1 岐阜神輿連

岐阜神輿連（以後、神輿連）は、宵宮への参加を行う神輿の団体で、平成七年（一九九五）に発足した。神輿連の設立の目的は、「①岐阜まつりへの参加・寄与、②神輿を通して楽しむための情報収集と発信、③神輿を通じてお互いの親睦を計る」で、岐阜まつり宵宮の活性化を願うものであった。結成に先立って行われた設立準備会では、「金華神輿」、「木造「町神輿」」、「岐阜フアツション連合会青年部」、「馬「九會」」、「岐阜代官所」、「めばえ会」、「岐阜睦神輿」、「長良高見神輿」、「岐阜流通団地」（いずれも名称は当時のもの）の九団体が参加した。

令和七年現在では、「金華神輿」、「木造「町神輿」」、「金神社神輿奉賛会 岐阜睦」（以下、岐阜睦）、「女神輿 岐阜心女」（以下、岐阜心女）、「神輿愛好会 葛」、「岐阜祭粋會」、「岐阜 あばれる（漢字は造字で糸へんに「装」）、「加納天満宮神輿会 神加勢」の八団体が所属している。このうち、「岐阜 あばれる」は実際に神輿を担ぐことはなく、裏方として神輿の練り込みの運営のサポートに当たった。

2 岐阜神輿連と「岐阜まつり神輿パレード」

岐阜神輿連に加盟している神輿団体のうちいくつかは、道三まつり初日に行われる「岐阜まつり神輿パレード」にも参加している。令和七年は、岐阜心女、岐阜祭粋會、岐阜睦が参加している。このうち、岐阜睦は、令和五年より主催者としてパレードの運営を担っている。

3 岐阜神輿連のこれから

神輿連に所属する団体は神輿愛好家の集まりで、居住地域を限定せず構成しているところが多い。一方、金華神輿や木造「町神輿」は、元々地域住民が主体となっているため、人口の減少とともに担ぎ手や裏方などの人員不足が課題

となっている。実際に、木造「町神輿」は担ぎ手が集められなかったために、令和五年の練り込みを断念した経緯がある。そこで、翌年に初めて公募制を実施し、担ぎ手を確保することに成功し、まかないを従来は自治会の班長や女性たちが手作りで準備していたまかないを買い出し形式に変更して負担を軽減させた。また、「金華神輿」では、従来は回覧板にて募集案内を行っていたのを、令和七年にはQRコードをつけたチラシを全戸配布して周知を行った結果、初参加の応募もあった。このように、神輿の担ぎ手・運営不足解消のための取り組みが始まった。



写真 3-27 宵宮に向かう「岐阜睦」の神輿
（令和七年四月五日）



第五節 むすびにかえて

岐阜まつりを支えている組織は、神社が主体のものと、氏子など地域の団体が主体となっているものに大別できる。伊奈波神社では、宮司等の神社職員と、氏子総代からなる岐阜祭実行委員会によって重要事項の決定を行っていた。

地域の団体では、宵宮を運営する宵宮実行委員会、山車・神輿を運営する各団体が挙げられる。山車の曳行は、安宅車、清影車は金華安宅車支援会、清影車からくり保存会が支援する形で輪番制を採用し、若戎車と踊車は岐阜若戎車奉曳会、ボーイスカウト岐阜第十六団といった特定の団体が行っている。神輿については、岐阜神輿連が主体となつて、各神輿団体の支援を行っていた。

これら地域の団体の多くには、人的または経済的な不足といった課題が見られるが、後継者育成を意識したお囃子・からくりの稽古や、新規参加者の募集方法の見直しなど、それぞれの特色を出しながら持続可能なものにするよう取り組み姿が明らかになった。

(注)

(注1) 『金華史誌』は嘉永年間、『2018岐阜まつり―伊奈波神社例大祭奉賛―岐阜市重要有形民俗文化財 金華安宅車奉曳行事ガイドブック』は天保五年(一八三四)および弘化元年(一八四四)の伝承を挙げている。

(注2) 岐阜日日新聞 昭和三十七年(一九六二)四月三日四面

(注3) 岐阜日日新聞 昭和四十二年四月五日十二面記事には「本町五」、同新聞翌四十三年

四月四日五面記事には「金華」と記載されていることによる。

(注4) 伊奈波神社『昭和四拾六辛亥年 社務日誌』による。

(注5) 岐阜日日新聞 昭和三十五年四月四日六面

(注6) 岐阜日日新聞 昭和四十二年四月五日五面

(注7) 岐阜日日新聞 昭和四十三年四月四日五面

(注8) 岐阜日日新聞 昭和四十三年四月四日五面、同四十五年四月五日十五面

(注9) 岐阜日日新聞 昭和四十一年四月四日五十一面

(参考文献)

特定非営利活動法人わいわいハウス金華編 『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』 岐阜市歴史博物館 二〇〇九年

金華一二三六編 『わたしたちの子供の頃の金華の町』 岐阜大学地域科学部監修 二〇一〇年

林佑和三、佐藤哲雄編 『加納天満宮誌』 加納天満宮誌出版委員会 二〇〇五年

小野崎隆賢、伊深民俗研究所 『岐阜若戎車 奉曳資料集 第二集 山車囃子』 岐阜若戎車奉曳会 二〇二三年

小野崎隆賢、伊深民俗研究所 『岐阜若戎車 奉曳資料集 第二集 役職・衣裳』 岐阜若戎車奉曳会 二〇二二年

伊藤泰雄 『神輿大好き 岐阜のまちに神輿が復活するまで』 伊藤泰雄デザイン室 二〇一五年

第四章 山車の構造

第一節 山車の概要

(一) 祭礼における山車

我が国には山そのものを神とする神体山が全国各地に存在し、聖地として人の立ち入りを禁じてきた。神霊の鎮まる聖なる山への信仰は、我が国古来のものであり、ヤマ・ホコはそのような心意を背景として成立した神の依代であった。その神が依りつく神座は、時と場に対応して変化する。ヤマもホコもその一つであり、それが形態や装飾に趣向を凝らした「作り物」へ展開したのが山・鉾である。ホコは、本来は聖なる柱を意味したといわれる。ヤマは平安時代の大嘗祭における標山しめやまがその典型といわれている。このようなヤマ・ホコが山・鉾という祭りの造型として、恒常的に現れたのは鎌倉時代のこと、京都の祇園御霊会からであるといわれている。

1 山・鉾・屋台の類型

山・鉾は現在、非常に多様なあり方で全国各地に伝承されている。祭りごとに特色があり、差異を問えば限らない分類が可能である。

鉾系は縦型の作り物で、鉾型と笠鉾型の二形態に分けられる。鉾型は祇園祭の鉾が典型的に示すような柱主体の造型が特色であり、笠鉾は袴状に広がる笠や台の斜面に作り物が飾られる。

山系は横型の作り物で、いわゆる山車（だし・やま）と呼ばれる飾り山である。大形の人形一体を主体とするのが基本形であるが、小形のからくり人形を伴うものもあり工芸的な造型を特色とする。名古屋型と呼ばれる山車が一典型とされる。囃子系は踊りや歌舞伎狂言などの芸能や囃子を演じる移動舞台となる屋台である。

2 京都祇園祭の山鉾行事

京都の祇園祭は貞観十一年（八六九）に疫病や天災をもたらす祟り神を鎮め、他界へ送り出すために始まったと伝えられている。

祇園祭の山鉾は、当初は毎年趣向を凝らして作り変えたといわれているが、ほぼ現在のような形になったのは南北朝時代のことと考えられている。その後、一五世紀後半の応仁・文明の乱（一四六七～七七）により山鉾の大半は失われたが、明応九年（一五〇〇）に祭りが再興された。この中絶の後、町衆の繁栄とともに山鉾はいよいよ華麗を究め、安土桃山時代以降、中東・西アジアの絨毯、中国の綴や錦、ヨーロッパの飾毛綴等を懸装品に用いるようになり、やがて京都の刺繍・織物・鍔金具等も加わり、今日にいたっている。

豪華絢爛な山鉾巡行は京文化とともに全国に伝播し、各地で行われている祇園祭・天王祭などに大きな影響を与え、その地域ごとに創意工夫・洗練されて独自の山車文化が形成された。

(二) 山車の基本構造と部材名称

1 名古屋型山車

名古屋型と呼ばれる山車は、名古屋市中心とする尾張地方広域に分布する山車形式の一つで、元和五年（一六一九）に名古屋東照宮の祭礼のために建造されたものを基に一七世紀後半頃に完成されたと考えられている。

その特徴は、前山・胴山・台輪たいわから成る下山と四本柱上に唐破風屋根を載せた上山の二層構造（内部は三層）で、台輪の外側に四輪の車輪を付ける外輪形式とされ、車輪は格子状の車掛（車輪覆）で覆われる。

上山は上下に昇降する構造で、この上からくり人形が載る。下山は内部を上二段とし、下段に囃子方が乗り、下山前端部の前山上段は前棚まてなと呼ばれ、采振り（幣振り）人形が置かれる。下山後方の胴山上段は、からくり人形の人形方が

第二節 岐阜まつり各山車の歴史と構造・意匠

三台の名古屋型山車の形態・構造・意匠は概ね同様で、四輪、外輪、二層、上山には唐破風屋根が載り、からくり人形が付く。上山の昇降機構については各山車で若干の相違がみられる。細部の部材については、特定の呼称はないようであり、図4-1に一般的な名称を示した（図は若戎車を用いた）。なお、下山の土台となり、車輪が取り付けられる台座部分を「台輪」と呼ぶが、この台輪を構成する前後左右の部材も「台輪」と呼称される。さらに、柱上に載る偏平断面の横架材も「台輪」というので、混同に注意が必要である。

なお 四台の山車は現在、伊奈波神社の山車蔵(岐阜市伊奈波通二丁目二)に収蔵されている。



写真 4-1 伊奈波神社山車蔵

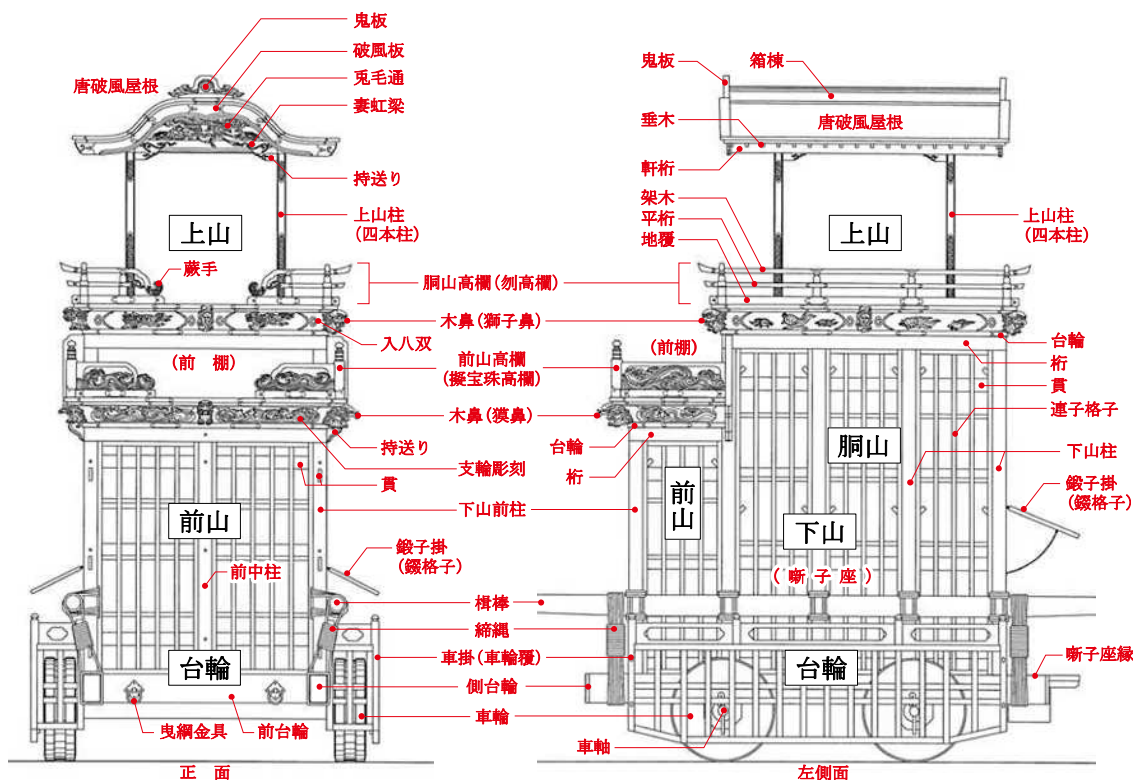


図 4-1 岐阜まつりの山車の部位と部材名称（若戎車）

(一) 安宅車(岐阜市重要有形民俗文化財 昭和三十三年十一月十三日指定)

1 歴史・由来

安宅車の由来に関しては不明な点が多く、地元では車之町(現・岐阜市本町五丁目)が所有する山車で、その装飾彫刻は嘉永年間(一八四八〜五三)に諏訪立川流の二代目棟梁・立川和四郎富昌によって製作されたと伝承されており、安政(二八五四〜五九)の大地震で大破した後、修復再建を繰り返し、明治二十一年(二八八八)の改修に際して、からくり人形が設置されたと伝えられてきた。

安宅車のからくり人形は「勸進帳」の義経・弁慶の細工人形で、安宅車の名称も勸進帳の安宅関に由来するものと考えられる。人形収納箱の墨書に明治二十一年の年記と細工人として名古屋裏門前町・荒川正兵衛造と記されており、五代目・玉屋庄兵衛の作と推定されている。

山車の建造年代に関しては、それを示す具体的な資料が無いので詳らかにし難いが、部材を留める釘に和釘が使われており、虹梁の絵様彫刻の様式が幕末から明治初期頃のものとして推定されることから、安政地震後から人形が製作された明治二十一年頃の再建とみてよいであろう。ただし、彫刻については『岐阜県の祭り屋台』(岐阜新聞社 2003年)で水野耕嗣氏(国立岐阜工業高等専門学校名誉教授)が「現在の山車では立川流彫刻は見いだせない」と述べており、立川和四郎富昌の作という伝承は誤った解釈であつたと考えられる。

明治二十四年(一八九二)十月二十八日に発生した濃尾地震で岐阜まつりの山車の多くは焼失したが、安宅車は焼け残ったといい、第二次世界大戦中の昭和二十年(一九四五)七月九日の岐阜空襲でも戦火を免れたという。その後、昭和三十四年(一九五九)頃に木製の車軸が折損したため、地元業者によって鉄製パイプに取り替える修理が行われ、昭和六十年(一九八五)には大規模な解体修理(修理記録あり)も実施され、本部の全解体、全ての金具の取り外しが行われ、屋根野地板・箱棟・前山および胴山の高欄・車掛・緞子掛などの修復が行われている。

また、平成十一・十二年(一九九九・二〇〇〇)にはからくり人形の補修と衣装の新調も行われている。

平成十一年以降は金華地区十六地区のうち二区が毎年輪番で奉曳することになり、令和元年(二〇一九)には金華安宅車支援会が発足し、曳行のサポートを行っている。

2 構造・意匠

安宅車は名古屋型と呼ばれる形式の山車であり、前山・胴山・台輪で構成される下山と四本柱上に唐破風屋根を載せた上山からなる二層構成で、車輪は台輪の外側に配される外輪式とされる。

前後の台輪は幅145mm・成270mm、左右の側台輪は幅145mm・成265mmで側台輪の断面が若干小さく、長さは前後の台輪が1349mm、側台輪が3326mmとされる。前後の台輪の間隔は2568mmで側台輪に二段の柄差(ぼさ)で固定され、側台輪の両端は前後の台輪より前方で343mm、後端で415mm跳ね出す。なお、台輪には樺材が使われている。左右の台輪を繋ぐ梁行の大引(幅85mm・成91mm)を中央に一本通し、この上に直交する桁行の根太と際根太(幅54mm・成54mm)をそれぞれ二本架け渡して下山を載せる台輪が組まれている。前台輪の正面には曳綱(ひきづな)を結わせるための鉄金具が二箇所(二箇所)に打たれているが、現在曳綱は使われていない。

車軸は下山の中心から前後均等の位置に配置され、車軸間隔は1560mmとされている。現在の車輪の芯棒は径90mmの鉄製で、側台輪の内外両側にU字型の鉄製ボルトを取り付けて芯棒を吊り、台輪上に鉄板を置いてボルトをナットで締め付けて固定している。芯棒を通す車輪の軸穴は径114mmの鉄製パイプとされており、心棒と軸穴の芯には12mm程のズレがある。車軸は当初、木製であつたが、昭和三十四年頃に改造されている。ただし、車軸の位置は変えられておらず、現在も側台輪に旧車軸を取り付けたと考えられる柄穴が残っている。



車輪は直径810mm・幅212mmの樺材で、外周に二条の鉄製輪締め(幅75mm・厚9mm)を廻らせている。側台輪に金具を打って取り付けられた格子状の車掛(車輪覆)が車輪を覆う。

下山は桁行四間(前山一間・642mm、胴山三間・1926mm、四間とも柱間寸法同一)、梁間二間(正面二間・1509mm)とされ、左右の台輪上に五本、前台輪上の中央に一本(前中柱)の合計十一本の角柱(85×85mm)を立てる。正面三本の前山柱は長さを1475mmとし、これより後方の胴山柱は長さを2082mmとしている。前山正面の柱上には94×94mmの桁を廻らし、柱間には18×79mmの貫を二段通す。胴山柱上では94×94mmの桁を四周に廻らし、側面の柱間に貫を三段通す。さらに前山の正面と胴山の側面各柱間には貫の外側に連子格子をはめ込む。下山の床板(厚12mm)は地盤面から613mmの高さで根太に取り付けられ、曳行時には畳を敷いて囃子座として使用される。

胴山側面前端の梁行柱間には台輪天端から1211mmの高さに中段梁(幅85mm・成106mm)が架けられ、柱の前面に際根太(幅18mm・成85mm)を打ち、前山柱にも同高に際根太(幅18mm・成175mm)を打って、前棚の床板(厚21mm)が受けられる。なお、前棚床板は取り外しが可能で、前山が胴山上段への昇降口として使用される。胴山中央二本の柱間には台輪天端から1156mmの位置に根太(56×56mm)を架け、胴山前柱と後端の柱には際根太を打って胴山上段の床板(厚30mm)を受ける。なお、現在は中央柱の根太端部を支える根太受けが柱に打ち付けられ、補強がなされている。胴山後端の柱間には台輪天端から1212mmの位置に二本溝を彫った差鴨居(幅85mm・成86mm)を渡し、後台輪との間に引違い建具(現在建具なし)を入れて囃子座への出入口としている。差鴨居上部には貫を一本通して貫の外側に連子格子をはめる。後台輪の後方には台輪天端と高さを揃えて囃子座縁(奥行497mm・厚33mm)を張り出し、縁板の下方にも棚板(奥行312mm・厚36mm)を新補して正面に建具のない棚

を造っている。また、下山の側面と背面には緞子掛(緞格子)が吊られる。

楫棒は145×144mmの八角断面で、先端では径106mmの円形に削られている。全長は5280mmとされ、前方へは柱芯から1549mm、後方へは1164mm跳ね出し、地盤面から楫棒の天端までの高さを1157mmとしている。楫棒は正背面と中央の下山柱三か所で、縄で結わい付けて緊結し、側台輪の前後両端部でも締縄を用いて楫棒と台輪が固定されている。山車曳行時には楫棒の持ち手棒は担ぎ上げられ、後方の持ち手棒には曳手がぶら下がるため、前者は楫棒の下側に後者は上側に取り付けられる。

前山の桁上には箱壇(高さ172mm)を構成する上下の框(幅127mm・成41mm)と框間の欄間(成89mm)が載る。箱壇の上には支輪(高さ91mm)と平框(幅265mm・成82mm)を重ね、その上に前山の縁板(幅155mm・成30mm)が取り付け、箱壇の格狭間には正側面とも「亀と流水」の彫刻がはめられ、支輪板の表面には「波に千鳥」の彫刻が飾られる。さらに平桁の格狭間には「桜と流水」の彫刻がはめられる。前山の縁板上には前山柱芯から205mm前方に擬宝珠高欄が置かれる。擬宝珠柱は73mmの角柱で、表面に雲の彫刻をはめ、地覆と平桁の間には「舁つなぎ」の透かし彫り彫刻が付き、正面中央では高欄の架木を舁手に納めている。山車曳行時にはここに采振り人形が設置される。

胴山の桁上には台輪(幅128mm・成71mm)を廻らし、その上に平桁(幅173mm・成39mm)と支輪(高さ112mm)を載せ、この上に箱壇(高さ169mm)を置いて最上部に胴山の縁板(幅136mm・成30mm)を載せる。胴山の縁板上には刳高欄を廻らせ、正面中央では架木の先端を舁手に納めて龍頭の彫刻としている。台輪の格狭間には雲の彫刻をはめ、支輪の四隅には舁手状の隅木を配して支輪板の表面には正面に「波に鶴」、背面に「竹林の虎」、右側面に「松に猪」、左側面に「梅に水牛」の彫刻がそれぞれはめられている。箱壇は上下の框(幅

294 mm・成39 mm)と欄間(高さ91 mm)で構成され、欄間の四隅と中央には木製の入八双を配し、八双間に龍の彫刻がはめられる。なお、支輪の隅木と入八双は黒漆塗に金蒔絵が施されている。また、刳高欄の内側、胴山柱の上部には高さ248 mmの低い蹴込高欄が廻らされている。

胴山の内部には滑車と綱を用いた「鯨巻き」と呼ばれる上山の昇降機構が設置されている。胴山内の四隅に凹型断面の迫上樋(長さ2436 mm)を胴山上段の床を貫いて配置し、左右の樋の溝がそれぞれ向かい合うように内側に向かって立つ。迫上樋は130 mm×80 mmの互平断面で、溝は幅58 mm・奥行34 mmで奥行が浅く、溝の中に両端部を挿し込むように幅97 mm・成94 mmの梁行方向の上山土台を渡す。上山土台の両端下部に滑車受けと土台受けを兼ねた束(幅130×82 mm・高さ242 mm)を取り付け、束の外側は凸型にして迫上樋の溝内に納まり、溝より外に出る部分の内部には滑車が付く。ただし、現在の束は当初材ではない。この束より下方の迫上樋には溝を覆う横蓋(幅130 mm・厚24 mm・長さ1050 mm)が打ち付けられているが、これを留める釘には洋釘が使われているので、後補の可能性がある。四本の上山柱は梁行土台上に立ち、柱間寸法を梁間1040 mm・桁行1298 mmとし、胴山のほぼ中央に納まる。



写真 4-2 安宅車 胴山桁上の装飾



写真 4-3 安宅車 滑車受けと上山土台受けを兼ねた束(取替材)

上山土台は梁行方向のみで桁行の土台はなく、上山柱の側面外側に添って二段の根元繋ぎ(厚51 mm・下段成144 mm・上段成156 mm)を梁行土台上に置き、梁行にも柱の外側に添わせて根元繋ぎ(厚51 mm・成182 mm)を桁行根元繋ぎの二段目の位置に通し、この根元繋ぎで上山柱を蒸籠状に囲って安定させている。胴山両側面の中央柱間に鯨巻きの巻芯を受ける軸受けとなる「鯨梁」(幅35 mm・成191 mm)を取り付け、床から1175 mmの高さに巻芯を固定する。巻芯は径136 mmの丸棒で、両端部に巻上綱の端部を固定し、巻芯を回転させて綱を巻き取り、上山を上昇させる。

両側面の迫上樋間には床から1175 mmの高さで中段の滑車受け(幅48 mm・成51 mm)を桁行に架け、さらにこの上方825 mmの位置(胴山頂部)には前後の蹴込欄間にいたる上段の滑車受け(幅67 mm・成76 mm)を架け渡す。中段の滑車受けには中心から前後386 mmの位置(滑車軸間772 mm)にそれぞれ滑車を取り付け、上段の滑車受けには中心から前後110 mm(滑車軸間220 mm)と580 mm(滑車軸間1180 mm)の位置にそれぞれ滑車を取り付ける。六個の滑車の直径はいずれも51 mmで、滑車受けは中段・上段とも櫓材が使用されている。鯨巻きの巻芯から中段滑車受けの前後の滑車にそれぞれ巻綱を伸ばし、これを經由して綱先は上段滑車受けの内側の滑車へ登り、ここから前後の滑車に向かって滑車受けの天端に彫られ



写真 4-4 安宅車 胴山側面
中段・上段滑車受け



写真 4-5 安宅車 上山土台固定棒



た綱溝内を伝って巻綱が伸ばされ、上段前後端の滑車からは上山柱に沿って下方へ巻綱が伸び、上山土台下部に取り付けられた土台受け束の滑車で反転して再び上方へ立ち上がり、上段の滑車受けに巻綱の終端を結び留める。上山の落下を防止する装置として、引き上げた土台受け束の下方に樋溝を埋めるように凸型の土台固定棒をはめ込む。長さの異なる固定棒を使い分けることにより上山の高さが調節される。

安宅車の鯨巻きは他の二台の山車に比べて綱廻しが複雑で、胴山両側面に沿って菱形を描くように巻綱が配されている。また、使用される滑車の数も八個と多い。

上山は桁行一間（1290mm）・梁間一間（1040mm）で、柱は51×51mm・長さ1714mmの几帳面取角柱とされる。屋根は板葺の向唐破風屋根で、上部に箱棟と鬼板（鬼面）を置き、軒は二軒繁垂木とされる。柱頂には頭貫（幅20mm・成50mm）と台輪（幅59mm・成26mm）を廻らし、頭貫端に獅子の彫刻木鼻を出す。柱上に実肘木付きの出三斗を載せ、中備には正面に「梅に山鳥」、背面に「松に鶴」両側面に「蘇鉄に山鳥」の彫刻を配している。斗棋上の桁行には幅54mm・成76mmの軒桁を載せ、梁行には同寸の妻虹梁を架ける。妻飾りは虹梁上の中央に大瓶束を立て、束上に大斗を置いて棟木（幅54mm・成75mm）を受け、大瓶束の両脇には雲の彫刻が飾られる。また、唐破風の兎毛通には「雲と鶴」の彫刻を吊る。天井は四周に支輪を廻らした折上げ小組格天井とされる。

台輪・下山柱・桁・車掛は春慶塗、箱棟・上山柱・桁・蹴込高欄・前山と下山の壇箱・台輪・縁板・平桁などは黒漆塗、屋根・胴山高欄・前山高欄の欄間板は朱漆塗とされ、鬼板・破風板・兎毛通・垂木・大瓶束・天井・垂木・軒桁・妻虹梁・斗棋・台輪・頭貫・彫刻木鼻・上山柱の几帳面などは金箔押しとされている。祭礼の際には下山の四周に無地の緋羅紗大幕（下段幕）、胴山上段の側背面には無地の白羅紗幕（水引幕）が掛けられる。

3 安宅車の特徴

- ① 台輪・前山・胴山からなる下山と唐破風屋根を載せた上山の二層構成で、車輪を台輪の外に配した名古屋型の山車である。
- ② 台輪を井桁状に組み、梁行の大引一本とこれに直交する根太四本で下山の床組を構成する。
- ③ 車軸は鉄製に取り替えられており、旧状は不明であるが、車軸間隔は変わっていない。
- ④ 前山の床（前棚）は、胴山の上段床よりも若干高く、前山の床板を取り外して胴山上段への昇降口とする。
- ⑤ 下山背面の柱間には引違い建具（現在なし）を入れて囃子座への出入口とし、後方に高欄付きの囃子座縁を張り出す。
- ⑥ 迫上樋は互平で溝の奥行が浅く、迫上柱は無く土台下に滑車受けを兼ねた束を取り付ける。また、迫上樋の下半部は横蓋を打って塞がれる。
- ⑦ 上山土台は梁行方向のみで、上山柱はこの上に立ち、柱の根元を蒸籠状の横材で囲み固定する。
- ⑧ 鯨巻き機構は比較的複雑で、胴山の側面に滑車受けを二段架け、上段に四個、中段に二個の滑車を取り付けて巻綱を菱形に廻らせる。
- ⑨ 上山の高さ位置は、迫上樋の溝に凸型の横蓋を挿し込んで固定される。
- ⑩ 鯨巻きの巻芯は丸棒で、巻芯に開けられた孔に角棒を挿し込んで回転させる。
- ⑪ 前山・胴山とも柱上から縁板まで部材を重層的に積上げて装飾し、彫刻も豊富でその題材も多様である。
- ⑫ 上山の柱上には頭貫・台輪・彫刻木鼻・実肘木付き出三斗・中備彫刻を用い、天井は折上げ小組格天井とされる。
- ⑬ 漆塗・金箔押しの部材も多く、入八双や蔵手状隅木には蒔絵も使われている。

三台の山車の中で最も装飾的要素が多く、豪壮な印象がある。「鯨巻き」と呼ばれる昇降機構も複雑で発展した形を見せており、幕末から明治初期頃に建造された名古屋型山車の一形式として貴重である。

(二) 若戎車（岐阜市重要有形民俗文化財 昭和五十四年三月十九日指定）

1 歴史・由来

若戎車は「蛭子車」（えびすしや・ひるこしや）とも称される山車で、その来歴・由来については不明な点も多く、建造年代は不詳である。もとは加納天満宮（岐阜市加納天神町四丁目）の山車であったと伝承されており、唐子人形の箱書きに「三丁目」「享和二年戌年二月吉日」「唐子」の墨書があり、加納天満宮の享和二年（一八〇二）の記録にも加納本町三丁目が「恵比寿山」を所有したという記載があるので、加納町に現在の若戎車の前身となる山車が存在したことが推察される。なお、現在の唐子人形（采振り人形）は嘉永二年（一八四九）の製作、若恵比須人形は嘉永五年（一八五二）の製作であり、享和二年まで遡るものではない。

明治二十四年（一八九二）の濃尾地震で市内の多くの山車が被災したが、若戎車は焼失を免れたという。しかし、罹災後の祭礼の簡素化に伴い、山車は加納町三丁目から金屋町に譲渡されたという。その後、昭和二十年（一九四五）の岐阜空襲の際には鶯谷隧道に疎開されて、若戎車は戦火による焼失を再び免れたという。戦後は、曳行されることなく伊奈波神社境内に置かれていたが、明徳地区の有志がこれを曳き出し、現在も明郷校区と岐阜若戎車奉曳会が奉曳を続けている。

現在の若戎車は、様式的には享和二年まで遡る遺構とは考えに難く、幕末から明治初期のものと推定され、安宅車（安政年間～明治二十一年）よりも様式的には若干古い点も見受けられるので、細工人形が新調された嘉永二～五年（一八四九～五二）頃に再建されたものと推定される。なお、地元の伝承では、もとは名古屋市内（所在地不明）の祭礼で奉曳されていた山車を譲り受けたとも伝えられて

いるが真偽は定かではない。

昭和六十一年（一九八六）に大規模な修理（修理記録あり）が実施されており、木部を全解体して柱・梁・貫・格子などの破損部材を取り替え、高欄や彫刻などの補修を行い、金物も全て取り外して修復した後、メッキの塗り直しを行っている。また、平成三年（一九九二）にはからくり人形の補修と衣装の新調も行われている。さらに令和六年に右側面の側台輪にひび割れが見え、曳行の安全を確保するため応急的な補強措置を行っている。

2 構造・意匠

若戎車は名古屋型と呼ばれる形式の山車であり、前山・胴山・台輪で構成される下山と四本柱上に唐破風屋根を載せた上山からなる二層構成の山車で、車輪は台輪の外側に配される外輪式とされる。

前後の台輪は幅130mm・成206mm、左右の側台輪は幅133mm・成218mmで側台輪の断面が若干大きく、長さは前後の台輪が1504mm、側台輪が3339mmとされる。前後の台輪の間隔は2619mmで側台輪に柄差しで固定され、側台輪の両端は前後の台輪より300mm弱跳ね出す。なお、台輪には櫓材が使われている。また、前後の台輪を繋ぐ大引（幅91mm・成88mm）を一本通し、この中央に直交して大引受け（幅244mm・成76mm）を架け渡して下山を載せる台輪が組まれている。前台輪の正面には曳綱を結わえるための鉄金具が二箇所打たれており、曳行時に曳綱が取り付けられる。

車軸は下山の中心から前後均等の位置に配置され、車軸間隔は1382mmとされている。現在の車輪芯棒は径70mmの鉄製で、これを覆う車軸は径114mmの鉄製パイプとされており、車軸に溶接された二枚の鉄板で側台輪を挟み込み、ボルト留めされている。車軸は当初、木製であったと考えられるが、改造の時期は不明である。安宅車では昭和三十四年（一九五九）に車軸を木製から鉄製に取り替えているので、若戎車も昭和三十年代頃に取り替えが行われたのではないであ



ろるか。側台輪には現在の車軸よりも前後に200mm強外側の位置に旧車軸が取り付けられていたと考えられる柄穴が残っており、現在よりも車軸間隔が400mm程広がったことが分かる。

車輪は直径724mm・幅224mmの木製で、外周に二条の鉄製輪締めを廻らす。側台輪に金具を打って取り付けられた格子状の車掛（車輪覆）が車輪を覆い、車掛の上部には稚児柱の高欄が付く。

下山は桁行四間（前山一間・666mm、胴山三間・1953mm）、梁間一間（正面二間・1656mm）とされ、左右の台輪上に五本、前台輪上の中央に一本（前中柱）の合計十一本の柱（98×98mm）を立てる。正面三本の前山柱は長さを1671mmとし、これより後方の胴山柱は長さを2340mmとしている。前山正面の柱上には98×98mmの桁を廻らし、柱間には94×21mmの貫を三段通す。胴山柱上では98×100mmの桁を四周に廻らし、側面の柱間に貫を四段通す。さらに前山の正面面と胴山の側面各柱間には貫の外側に連子格子をはめ込む。下山の床は側台輪の側面に溝を彫って床板（厚24mm）をはめ込み、大引の天端両側にも欠き込みを作って床板を受けている。床板は地盤面から578mmの高さに設けられ、曳行時には畳を敷いて囃子座として使用される。

囃子座の床天端から1298mm上方で両側面の柱を繋ぐ梁行の根太（幅83mm・成100mm）を架け、根太の天端を欠き込んで前山と胴山の上段床の床板（厚24mm）を載せている。ただし、胴山後端の左側半間は床板を張らずに開放し、上段への昇降口としている。胴山背面の柱間の根太は下端に二本溝を彫った差鴨居（幅98mm・成110mm）とされ、後台輪の天端にも溝を彫って引違いの建具が納まるようにし、囃子座への出入口としている。ただし、現在建具は建て込まれていない。また、差鴨居上の中央に中柱（98×98mm・長さ1051mm）を立て、両脇の柱間に連子格子をはめている。後台輪の後方には台輪天端と高さを揃えて囃子座縁（奥行512mm・厚39mm）を張り出し、縁の下に幅1296mm・

奥行291mm・高さ228mmの下駄箱を吊っている。下山の側面と背面には緞子掛（緞格子）が吊られる。

楫棒は151×151mmの八角断面で、先端では径106mmの円形に削られている。全長は5159mmとされ、前方へは柱芯から1303mm、後方へは1237mm跳ね出し、地盤面から楫棒の天端までの高さを1196mmとしている。楫棒は側面の各柱と縄で結わい付けて緊結され、側台輪の前後両端部でも締縄を用いて楫棒と台輪が固定されている。

前山の桁上には平台輪（幅100mm・成36mm）が廻り、平台輪の上には円弧状の板に「波に千鳥」の彫刻を施した支輪（成128mm）を載せ、その上に前山の縁板（幅147mm・成53mm）を取り付く。前山の縁板上には前山柱芯から139mm前方に擬宝珠高欄が置かれる。前山の側面後端では前山の桁から胴山の桁までいたる袖板をはめ、袖板の下端には持送り状の彫刻が施される。高欄の地覆と架木の間には「立浪」の彫刻が付き、正面中央では高欄の架木を蔵手に納めるが、蔵手の先端は波の彫刻となっており、山車曳行時にはここに采振り人形が設置される。また、彫刻板支輪の正面両端には隅行方向に猿の彫刻木鼻を出し、正面中央には獅子の彫刻木鼻を出す。

胴山の桁上には平台輪（幅100mm・成36mm）を廻らし、その上に高さ129mmの欄間をはめ、欄間上に胴山の縁板（幅167mm・成54mm）を載せる。さらに胴山縁板上には刎高欄を廻らせ、正面中央では架木の先端を蔵手に納めて口から気を吐く霊獣「蜃」の彫刻としている。欄間の四隅と中央には木製の入八双を配し、隅では獅子の彫刻木鼻、中央では樹葉の籠彫り彫刻木鼻を出している。正面の八双間には麒麟の彫刻背面には鳳凰、



写真 4-6 若戎車 胴山高欄「蜃」

左側面には亀、右側面には龍の彫刻をはめている。

洞山の内部には滑車と綱を用いた「鯢巻き」と呼ばれる上山の昇降機構が設置されている。洞山内の四隅に堅板三本を凹型に組んだ迫上樋(長さ2678mm)

を洞山上段の床を貫いて配置し、左右の樋の溝がそれぞれ向かい合うように内側に向けて立て、溝の中に70×70mm・長さ1796mmの迫上柱を納める。迫上柱上に梁行方向の上山土台(厚83mm・幅は溝の内で70mm・外で83mm)を渡し、迫上柱芯から176mm内側には桁行方向の上山土台(83×83mm)を架け、土台を井桁状に固める。四本の上山柱は桁行の土台上に立ち、柱間寸法を梁間1094mm・桁行1245mmとしている。

洞山両側面の中央柱間に鯢巻きの巻芯を受ける軸受けとなる「鯢梁」(幅44mm・成146mm)を取り付け、床から1109mmの高さに巻芯を固定する。巻芯は径132mmの八角棒で、両端部に内側へ向かって先細りにした傾斜(テーパー)を二段付けている。また、巻芯の中央には径356mm・厚108mmの綱巻輪(リール)が付き、その右側に径326mm・厚23mmの止め歯車(24歯)が添えられている。

迫上樋の外側、洞山上段床の下方で上山を引き上げる巻綱の端部を固定し、綱先を樋内へ入れて迫上柱との間を下方へ伸ばし、迫上柱の下端から158mm上の柱内部に取り付けられた滑



写真 4-7 若戎車 迫上樋と上山土台



写真 4-8 若戎車 鯢巻き 綱巻輪と止め歯車

車を経由して柱の反対側へ綱を反転し、今度は上段床のすぐ下まで綱を立ち上げて樋の枠内に取り付けられた滑車を経て、再び樋の外側に綱を出し、上段床下に沿って鯢巻き端部のテーパーに巻綱を巻き付けている。二段あるテーパーのうち、内側のテーパーでは前方の迫上柱、外側のテーパーでは後方の迫上柱を昇降する綱を巻き取るようになっている。巻芯に付けられたテーパーは巻き取った綱がもつれないように内側から順に巻き付くように工夫されたものである。また、この巻

芯中央の綱巻輪に巻かれている綱を引くことによつて巻芯を回転させ、四本の迫上綱を巻芯に巻き取つて上山が上昇する仕組みである。この時、巻芯の逆回転による上山の落下を防止する装置として止め歯車が機能する。上段床の昇降口脇の根太に取り付けられた止め爪の先端が歯車の歯に断続的に落ち込むことによつて巻芯の逆回転を防ぐ機構である。迫上樋には下端から高さ206mm・388mm・551mmの三か所に穴が開けられており、ここに鉄製ボルトを挿し込むことで上山の高さを三段階に固定できるようになっている。なお、昇降機構を構成する巻芯・綱巻輪・止め歯車・止め爪・軸受けには樺材が使用されている。

上山は桁行一間(1245mm)・梁間一間(1094mm)で、柱は61×61mm・長さ1912mmの凡帳面取角柱とされる。屋根は板葺の向唐破風屋根で、上部に箱棟と鬼板を置き、垂木は一軒疎垂木とされる。柱上の桁行には幅61mm・成71mmの軒桁を載せ、梁行には幅61mm・成91mmの妻虹梁を架け、妻虹梁の両端は持送り(幅35mm・成51mm・長さ167mm)で支えられる。妻飾りは虹梁上の中央に大瓶束を立て、束上に大斗を置いて棟木を受け、大瓶束の両脇に菊の彫刻が飾られる。また、唐破風の兎毛通には「雲と鶴」(正面は嘴を開き、背



写真 4-9 若戎車 鯢巻き 止め爪



面は閉じる)の彫刻を吊る。天井は四周に板支輪を廻らした折上げ鏡天井かがみてんじょうとされる。

上山は非常に華奢な構造であるため、柱の根元には梁行方向の繋ぎ材(45×45mm)が補強として添えられ、各柱から上山土台に向かって鉄製の筋交も入れられている。

台輪・車掛は春慶塗、桁・平台輪・縁板・刎高欄・木製八双・上山柱・軒桁・妻虹梁・破風板・箱棟・鬼板は黒漆塗、擬宝珠高欄は朱漆塗とされ、彫刻木鼻・支輪彫刻・大瓶束・天井支輪・鏡天井・垂木・軒天井・虹梁の絵様・柱の面取部・兎毛通などは金箔押しとされる。祭礼の際には下山の四周に無地の鉄色(暗い青緑)の羅紗大幕(下段幕)、胴山上段の側背面には無地の緋羅紗幕(水引幕)が掛けられる。

3 若戎車の特徴

① 台輪・前山・胴山からなる下山と唐破風屋根を載せた上山の二層構成で、車輪を台輪の外に配した名古屋型の山車である。

② 台輪を井桁状に組み、梁行に幅244mmの大引受け一本を架け、これに直交する大引も一本で下山の床組を構成する。下山の床板は側台輪に欠き込みを入れて納めている。

③ 車軸は鉄製に取り替えられており、旧状は不明であるが、車軸間隔は400mm程狭められている。

④ 前山の床(前棚)と胴山の上段床は同高に張られており、胴山後端左側に553×730mmの開口を設けて上段への昇降口としている。

⑤ 下山背面の柱間には引違い建具(現在なし)を入れて囃子座への出入口とし、後方に高欄の付かない囃子座縁を張り出す。縁の下方に下駄箱を備える。

⑥ 凹型断面の迫上樋は三材で構成され、溝内を迫上柱と上山土台が上下に移動する。

⑦ 上山土台は井桁状に組まれ、上山柱は桁行に架けられた土台上に立つ。

⑧ 鯨巻き機構の巻綱は上段の床下と迫上樋内で処理される。

⑨ 上山の高き位置は、迫上樋に開けられた三か所の孔にボルトを挿し込むことで固定される。

⑩ 鯨巻きの巻芯は八角で、両端部を丸くして内側に二段の傾斜を付けた巻綱のもつれ防止機能が付く。また、巻芯の中央にはこれを回転させる直径356mmの綱巻輪と上山の落下防止装置としての止め歯車と止め爪が付いている。

⑪ 前山・胴山とも柱上から縁板までの間を金箔押しの彫刻で飾っている。

⑫ 上山の柱上には斗拱はなく、直接妻虹梁と軒桁を受ける。天井は折上げ鏡天井で金箔押しとされる。

金箔押しの彫刻が目を引き華やかな印象の山車で、最大の特徴は綱巻輪と止め歯車を用いた鯨巻きである。上山昇降機構の発達した形式と考えられ、江戸後期の名古屋型山車の一形式を示している。この形式の山車は名古屋広井神明社(中村区名駅五丁目)の「二福神車」「唐子車」などに類例がある。

(三) 清影車(岐阜市重要有形民俗文化財 昭和五十四年三月十九日指定)

1 歴史・由来

清影車は、地元の伝承によると明治二十四年(一八九一)の濃尾震災でからくり人形を残して山車本体は焼失し、その後、大正時代に再建された山車であると伝えられてきた。また、もとは湊町・玉井町・元浜町の三町が共有する山車、或いは湊町が単独で所有する山車であったとも言われてきた。

この度の調査で山車蔵内から発見された「玉井町」と記された掛札(山車の前面に掲げる町名を記した板札)によって、現在の清影車の建造経緯が明らかとなった。明治三十七年(一九〇四)に作成された掛札の裏面には、以下のような記載

がある。「明治六年九月玉井町先輩一町独立山車ヲ新造シ伊奈波神社ノ祭儀ニノ列ス同二十四年十月大震災ニ罹リ全市殆ト焦土トナリ山車亦焼失セリ同三十六年ノ一月玉井町元濱町港町ノ三町協同更ニ山車ヲ造ランコトヲ議シ同三十七年一月ノ起工同三月竣功自今三町當番挽之永以為例ノ明治三十七年三月誌之」これによつて現在の清影車が明治三十七年に玉井町・元濱町・港町の三町によつて再建されたことが明らかに、これまでの伝承の一部が証明された。また、現在の清影車は構造が安宅車と類似しており、再建の際には安宅車を手本にしたことが推察される。



写真 4-10 清影車「掛札」裏面

以前は三町の輪番で曳行されたが、昭和四十三年（一九六八）頃から京町地区の八区の輪番制となり、現在は清影車からくり保存会も曳行に加わっている。

濃尾震災で焼失を免れたからくり人形は昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風の影響で損傷し、修理のため京都まで出かけたが予想以上に費用が掛かることが分かつて修理を断念したという。その後、からくりの奉芸は行われなくなるが、平成九年度（一九九七）にからくり人形が復元新調され、翌年から奉芸が再開されている。

山車本体の修理は、昭和五十八年（一九八三）に実施されており（修理記録あり）、上山の屋根および昇降機構・前山と胴山の高欄・車掛（車輪覆）などの一部部材の取り替え、色あけ塗装などの部分修理が行われている。

2 構造・意匠

清影車は名古屋型と呼ばれる形式の山車であり、前山・胴山・台座で構成される下山と四本柱上に唐破風屋根を載せた上山からなる二層構成の山車で、車輪は台輪の外側に配される外輪式とされる。

前後の台輪は幅130mm・成264mm、左右の台輪は幅129mm・成264mmで断面はほぼ同寸とされ、長さは前後の台輪が1442mm、側台輪が3645mmとされ、材には櫟が使用されている。前後の台輪の間隔は2778mmで側



写真 4-11 清影車 下山床組

台輪に柄差しで固定され、側台輪の両端は前後の台輪より前方で368mm、後方で499mm跳ね出す。前台輪の正面には曳綱を結わえるための鉤状の鉄金具が二箇所（幅144mm・成165mm）を台輪天端から72mm下げた位置に一本通し、この中大引から左右の側台輪へほぼ等間隔で根太（幅54×54mm）を五本ずつ架け渡し、下山を載せる台輪が組まれている。根太上には厚18mmの床板が敷かれ、この上に畳が置かれて囃子座とされる。また、台座後端の跳ね出し部分は、左右の側台輪間に天端を合せて幅376mm・厚36mmの縁板をはめて囃子座縁とし、縁の正側面には擬宝珠高欄を廻らせている。高欄の擬宝珠柱は八角で、地覆と架木の間に格狭間入りの羽目板をはめる。囃子座縁の下部には地袋（じふくろ）を吊り、正面に引違い板戸を入れて囃子方の下駄箱としている。

側台輪の下端と内側面に車輪の車軸を受ける鉄製金具をボルトで固定し、この金具に直径102mmの鉄製パイプを取り付けて直径74mmの芯棒を通して、車軸の間隔は1447mmで、前後の台輪の中央より107mm程前へ寄せて取り付けられている。鉄製の車軸に取り替えられた時期は不明であるが、もとは櫟の木



を使った車軸であったと伝えられている。また、車輪を覆う車掛の格子の横棧下端には芯棒の先端を除ける半円の穴が開けられているが、後方の穴は現在の芯棒の位置より格子二つ分(約200mm)後方にあり、一つ後方の格子間にも同様の穴がある横棧が入っている。このことから、後輪の車軸は二度位置が変更されており、徐々に車軸間隔が狭められたことが知られる。なお、現在の芯棒位置の横棧は取り除かれて心棒が納められている。

車輪は台座の外側に配される外輪式とされ、直径870mm・幅218mmの櫟材で、外周に二条の鉄製輪締め(65×9mm)が巻かれている。また、近年の改造として、前輪の中央に山車曳行時の旋回を補助する小型車輪が取り付けられている。

下山は桁行四間(前山一間・558mm、胴山三間・1447mm、梁間一間(1571mm)で、94×94mmの角柱を側台輪上にほぼ等間隔で五本ずつ立てる。前山柱は長さを1512mm、胴山柱は2208mmとし、前山の正面柱間には台輪天端から1092mmの位置に差鴨居(94×94mm)を通して鴨居の下端と台輪の天端に二本溝を彫り、格子戸を引違いに入れて離子座への出入口としている。前山側面では差鴨居と同高に貫と際根太を通し、この上に前山の床板を敷く。床は正面の差鴨居から奥行476mmとされ、これより奥の118mmには床板を張らずに開放し、手前の床板も二枚敷きとして、奥の床板(幅218mm)を折り畳み式の可動床とし、ここを胴山上段への昇降口としている。

楯棒は幅128・成165mmの八角断面で、前後の先端部を細めて楯円形にしている。全長は5529mmで、前方へは柱芯から1562mm、後方へは1189mm跳ね出し、地盤面から楯棒の天端までの高さを1279mmとしている。楯棒は



写真 4-12 清影車 車掛格子 後輪車軸部

側面前後端の柱では、柱に取り付けられた鉄製の輪金具に通されて固定され、その他の柱ではボルトで直接柱に緊結されている。さらに側台輪の前後両端部では締縄を用いて楯棒と台輪が固定されている。なお、曳行時には楯棒後端の上部に車切(山車の前輪を持ち上げての旋回)の際に曳手がぶら下がって重りとなるための持ち手棒を綱留めして取り付けられている。

前山柱上の正側面には桁(幅94mm・成112mm)を載せ、その上に台輪(幅140mm・成68mm)を廻らし、さらにその上に欄間(成89mm・平桁(成36mm)・支輪(成100mm)を重ね、最上部に前山の縁板二段(各成36mm・上段は40mm迫出し)を載せている。台輪の表面には唐草の彫刻をはめ、欄間には隅に木製入八双を配して正面の格狭間に「獅子と飛龍」、側面の格狭間に鯉の彫刻を飾っている。さらに支輪には隅に花(鉄線か)の籠彫りを付け、正側面に唐草彫刻をはめている。前山の縁板上には柱芯から192mm外側に擬宝珠高欄を廻らし、正面中央で架木を蔵手に納め、ここに采振り人形が設置される。現在、前山内部の正面中央には采振り人形を設置する棚が新補されている。前山正面中央の差鴨居と桁の間に角束を立て、この間に貫を一本通して束の両脇に連子格子をはめて前山側面の柱間にも貫の外側に連子格子をはめている。

胴山では離子座の床天端から1348mm上で左右の柱間に上段床を受ける根太(幅82mm・成100mm)を架け、後端の柱間では根太を二本溝を彫った差鴨居とする。根太上には厚18mmの床板を敷き詰め、ここからくり人形の操作が行われる。背面の柱間には引違いの格子戸が入れられて出入口とされ、側面の各柱間には貫の外に連子格子がはめられる。胴山柱上には桁(幅92mm・成112mm)



写真 4-13 清影車 前山正面彫刻(獅子と飛龍)

が廻らされ、その上に台輪（幅144mm・成65mm・平桁（幅189mm・成36mm・支輪（成113mm）・欄間（成118mm）が重ねて置かれ、最上部に胴山の縁板二段（下段成36mm・上段成38mm・40mm迫出し）を載せている。台輪には「双龍」の彫刻をはじめ、支輪には隅に雲の籠彫り彫刻の持送りを配し、正側面に「波に千鳥」の彫刻を飾っている。さらに欄間の格狭間には牡丹の彫刻が配されている。縁板上には柱芯から230mm外側に擬宝珠高欄が廻らされ、正面中央の架木を蔵手に納めている。擬宝珠柱は73mm角の角柱で、柱の側面にも唐草の彫刻が付けられている。また、地覆と平桁の間には線型付きの幕板（まくいた）をはめている。さらに胴山の縁板の先端部には蹴込高欄が廻らされている。蹴込高欄は架木天端までの高さを265mmとする低い高欄で、四周の束間には渦巻状の円形模様の透かし彫りを施した幕板がはめられている。

胴山の内部には滑車と綱を用いた「鯨巻き」と呼ばれる上山の昇降機構が設置されている。胴山内の四隅に凹型断面に加工した一材の迫上樋（長さ2728mm）を胴山上段の床を貫いて配置し、左右両側の樋の溝をそれぞれ向かい合うように内側に向けて立て、溝の中に70×70mm・長さ1518mmの迫上柱を納める。迫上柱上に梁行方向の上山土台（幅は溝の内で70mm・外で98mm・成70mm）を渡し、迫上柱芯から163mm程内側には桁行方向の上山土台（幅91×成70mm）を架け、土台を井桁状に固める。四本の上山柱は梁行の土台上に立ち、柱間寸法を梁間1078mm・桁行1323mmとしている。さらに土台の上方179mmの位置にも根がらみとなる土台を廻らし、上山柱の根元を安定させている。根がらみ土台は上山土台より幅を若干広げ、厚みを若干減じている。さらに現在は根がらみ土台



写真 4-14 清影車 迫上樋と上山土台

の梁行に補強の繋ぎ材と背面左隅に水平筋交も後補され、上山の揺れ防止が行われている。

胴山両側面の中央柱間に鯨巻きの巻芯を受ける軸受け（幅53mm・成130mm）を取り付け、床から1305mmの高さに巻芯を固定する。なお、この軸受けには「鯨梁」の墨書があり、この材を「しゃちばり」と呼ぶことが知られる。巻芯は径106mmの丸棒で、中央付近に二か所直交する方向に角孔があげられており、この孔に角棒を挿して巻芯を回転させる。



写真 4-15 清影車 「鯨梁」墨書

迫上樋の外側、胴山上段床の下方で上山を引き上げる巻綱の端部を固定し、綱先を樋内へ入れて迫上柱との間を下方へ伸ばし、迫上柱の下端近くの柱内部に取り付けられた滑車を経由して柱の反対側へ綱を反転し、今度は上段床のすぐ下まで綱を立ち上げて樋の枠内に取り付けられた滑車を経て、再び樋の外側に綱を出し、上段床下に沿って巻芯の端部に巻綱を巻き付けている。前方の迫上柱からいたる綱は巻芯の下から、後方の迫上柱からいたる綱は巻芯の上から巻き取られる。上山は桁行一間（1323mm）・梁間一間（1078mm）で、柱は58×58mm・長さ1670mmの几帳面取角柱とされる。屋根は板葺の向唐破風屋根で、上部に箱棟と鬼板（獅子面）を置き、垂木は二軒繁垂木とされる。柱頂には頭貫（幅24mm・成60mm）と台輪（幅85mm・成27mm）を廻らし、頭貫の端部に獅子の彫刻木鼻を出す。柱上には実肘木付き出三斗を載せ、中備に龍の彫刻を配している。斗棋上の桁行には幅54mm・成92mmの軒桁を載せ、梁行には同寸の妻虹梁を載せる。妻飾りは虹梁上の中央に大瓶束を立て、東上に大斗を置いて棟木（幅54mm・成72mm）を受け、大瓶束の両脇には龍の彫刻が飾られる。また、唐破風の坪みには鬼毛通を吊る。天井は四周に線型付きの廻り縁と板支輪を廻らし、



この上に天井廻り縁を置いた折上げ鏡天井とし、天井板には黒漆塗の上に金泥塗の鳳凰が描かれている。

清影車は素木造の山車で、塗りや彩色は極めて少ない。鬼板と緞子掛に春慶塗箱棟に黒漆塗、車掛は溜塗とされる。また、彫刻は比較的豊富であるが、彩色は鬼板に極わずかに施される程度である。彫刻の意匠は独特で、中国的な趣があり、一部に唐木が使用されている。祭礼の際には下山の四周に無地の緋羅紗の大幕(下段幕)、胴山上段の側背面には無地の白羅紗幕(水引幕)が掛けられる。

なお、近年の改造として胴山内の蛍光灯の設置、宵宮時の提灯のロウソクを電灯に換えるなどが行われており、これらの電源となるバッテリーを載せる鉄製棚が下山の床下に取り付けられている。

3 清影車の特徴

① 台輪・前山・胴山からなる下山と唐破風屋根を載せた上山の二層構成で、車輪を台輪の外に配した名古屋型の山車である。

② 台輪を井桁状に組み、桁行の大引一本とこの左右に架けられた五本ずつの根太で下山の床組を構成する。

③ 車軸は鉄製に取り替えられており、旧状は不明であるが、車軸間隔は二度変更されており、その度に後輪が前方へ移され、車軸間隔が狭められている。

④ 前山の床(前棚)は、胴山の上段床よりも若干低く、前山の床板半分を折り畳んで胴山上段への昇降口としている。

⑤ 前山正面と下山背面の柱間には引違い建具(背面は現在建具なし)を入れて、囃子座への出入口とし、後方に高欄付きの囃子座縁を張り出す。縁の下部に下駄箱を備える。

⑥ 凹型断面の迫上樋は一材で造られており、溝内を迫上柱と上山土台が上下に移動する。

⑦ 上山土台は井桁状に二段生まれ、上山柱は梁行に架けられた土台上に立つ。
⑧ 鯨巻き機構の巻綱は上段の床下と迫上樋内で処理される。
⑨ 鯨巻きの巻芯は丸棒で、巻芯に開けられた孔に角棒を挿し込んで回転させる。

⑩ 上山の高さ位置は、巻芯に差し込まれた角棒の先端が上段床の根太に当たることによって逆回転を止めて固定される。

⑪ 前山・胴山とも柱上から縁板まで部材を重ね層的に積上げて装飾し、彫刻も豊富でその意匠は中国的な趣を見せる。

⑫ 上山の柱上には頭貫・台輪・彫刻木鼻・実肘木付き出三斗・中備彫刻を用い、天井は折上げ鏡天井とされ、金泥による鳳凰が描かれる。

⑬ 素木造の山車である。

三台の名古屋型山車の中で唯一の素木造であり、素朴な重厚感がある。「鯨巻き」と呼ばれる昇降機構は簡潔で古式な形式を残している。濃尾震災後の明治三十七年(一九〇四)に再建された山車であるが、名古屋型山車の形式を遵守した復古的な山車である。

(四) 踊車(岐阜市重要有形民俗文化財 昭和五十四年三月十九日指定)

1 歴史・由来

踊車の建造や由来に関しては資料が無く、不明である。もとは矢島町、或いは小熊町が所有する山車であったと伝えられており、屋形内(下層)に囃子方が乗り込んで囃子を演じ、露台(上段の舞台)で子供や芸妓が手踊りを舞った屋台山車であったと地元で伝承されている。昭和六十三年(一九八八)頃に伊奈波神社の神賑会からボーイスカウト岐阜第十六団が引き継ぎ、現在もボーイスカウトによって運営されているが、踊りの公演は行われていない。山車と共に引き継いだ大太鼓の箱書きに「小熊町」の墨書があったことから小熊町が所有した山車と推

定されていた。また、現在露台上には作り物である「三万と槌」が飾れているが、これも引き継いだ時点で既に載せてあったといい、当時は「福槌車」と呼ばれていた。

江戸時代後半に描かれたとされる「岐阜因幡御神事」(四二頁・資料215)には七台の踊り山が確認でき、からくり山車と共に祭礼で奉曳されていたことが知られる。また、伊奈波神社古文書(博物館蔵)には明治二十三年(一八九〇)に踊り山三台と三ヶ町の作り物、翌二十四年(一八九一)に踊り山三台と二ヶ町の作り物が曳行された記録がある。しかし、濃尾震災後の明治二十七年(一八九四)には踊り山はなし、作り物とにわか芝居は二十五町とされており、明治二十四年十月の濃尾地震で踊り山車の大半が焼失したと考えられる。さらに明治三十九年(一九〇六)発行の「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖」(五一頁・資料219)には踊り山車一台と作り物山車十五台が描かれており、この図では小熊町は「具足に鬼」の作り物山車、矢島町は「鯛の上に蛭子」の作り物山車を曳行している。絵図からは両町ともこの時、踊り山を所有していなかったことが推定できる。

現在の踊車は昭和六十三年(一九八八)に行われた修理(修理記録あり)によって台輪全ての取り替え、軸部損傷部(柱・大引・貫の大半)の取り替え、高欄損傷部および床板の一部取り替え、漆および春慶塗の塗り直し、金箔押しの補修などが実施されており、主要部材の殆どがこの時に新材に取り替えられており、部材から建造年代を推定できる状態ではなくなっている。また、年代推定の基準となるような絵様彫刻なども無く、現状から建造年代を推測することは困難である。ただし、構造形式や残された部材などから判断すると、江戸時代まで遡るものではなく、濃尾震災後の明治時代後半以降に再建されたものと考えられる。明治三十九年に描かれた「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖」の踊り山・作り物山と一致する姿形のは見受けられないので、これ以後に再建されたものであろう。

2 構造・意匠

踊車は岐阜まつりの四台の山車のなかで唯一の屋台型の飾り山車で、台輪上に上下二段の屋台(本山)を組んで下段内部を囃子座とし、上段は屋根を設けない露台としている。

台輪は幅115mm・成235mmで、前後の台輪の両端に二段の平杓ひらほしを刻んで側台輪に通し、鼻栓はなせんで留めて井桁状に組まれる。側台輪の前後両端は273mm程張り出して納め、先端部の下端を曲面に削って仕上げている。前台輪の正面中央に一か所、曳綱を結わえる金具が打ち付けられている。桁行の中央に幅120mm・成100mmの大引を一本通し、これに直交する梁行の根太を四本渡している。さらに側台輪にも車輪をよけて45mm角の際根太を打っている。根太上には厚12mmの梁行方向の床板が張られる。

車輪は台輪の内側に配される四輪の内輪式で、前後の車軸を山車の中心より若干後方にずらして取り付けしており、車軸間隔は1590mmとされる。側台輪の下端を削って45mm角の鉄製パイプの車軸を埋め込み、下から鉄板を添えて台輪の上から落とし込んだボルトで車軸受けを固定している。台輪の外側には三つ葉形の板を打ち付け、車軸受けの欠き込み穴が隠されている。車輪は直径530mm・幅132mmの木製で、外周に二条の鉄製輪締めを付けている。

車輪の半径よりも台輪の成が短いため、車輪の上部が台輪上に張られた床板の上へ飛び出している。そのため、飛び出した部分を囲うように床板と同材を使って箱型を造り、乗車者に危険が無いように車輪を覆っている。

屋台(本山)は桁行三間(2840mm)・梁間一間(正面二間・1930mm)で、台輪上に100mm角の柱を九本立てる。柱上に桁を直接置き、側面の桁は先



写真 4-16 踊車 側台輪側面 車軸部分



端を柱より少し前後に延ばし、肘木状に下端を曲面にして納めている。正面では中央にも柱を立てて梁間を二分し、側面と正面の各柱間には貫を三本通してその外に連子格子をはめている。背面では内法位置に溝の無い差鴨居を入れ、柱間を開放して屋台内への出入口としている。両側の桁間に幅70mm・成100mmの根太を七本渡し、前後に跳ね出した出桁間にも受梁を通し、前後の受梁までを上段の床として厚18mmの床板を張っている。上段床の後方左側に597×458mmの開口を設け、側桁に木製の梯子を掛けて上段への昇降口としている。

屋台両側面の柱の外側に長さ4910mm・太さ117×136mmの丸面取りの楫棒がボルト締めによって取り付けられている。側台輪の前後両端部には締縄を通す角穴が開けられており、これに締縄を通して楫棒を固定している。また、山車曳行時の旋回の際に、前輪を持ち上げるための重りとなる曳手がぶら下がるための持ち手棒を後端柱から346mm後方の楫棒間に渡し、縄締めによって固定している。

上段は屋根のない露台で、四周に高欄が廻らされる。高欄は根太と受梁に73mm角・長さ597mmの束柱を立てて束柱間に貫を一本通し、その下に中刳りを施した蹴込板をはめ、束柱上に架木を



写真 4-18 踊車 正面彫刻欄間（詳細）



写真 4-17 踊車 背面（祭礼時）

載せている。比較的がつしりした構造とされ、高さも十分あって落下防止の手摺的な高欄といえる。露台上の中央には幅1552×1248mm・高さ1090mmの三方とその上に全長1773mm・幅910mmの木槌の作り物が置かれている。

屋台の外周には無地の緋羅紗の大幕が桁に打たれたL型の金具によって吊られている。また、正面の桁先には波に珊瑚と鮑の彫刻欄間が飾られている。この欄間は金箔押し華やかなものであるが、桁先の形状から考えると後世に付加されたものではないかと推察される。山車に飾られる作り物が木槌であることから海中の宝を題材にした欄間を正面に掲げたのではないであろうか。台輪・柱・貫・差鴨居は弁柄春慶塗、桁・高欄には黒漆と朱漆塗が施されており、桁と高欄の架木に提灯枠の竿を挿し込む金具が打たれている。提灯枠は桁からの高さを2000mm程とされ、高欄の周囲に六本の竿を立てて三段の貫で固め、宵宮では最上段の貫から提灯が吊るされる。

3 踊車の特徴

岐阜まつりにおける踊り山の奉曳が確認できる資料として江戸時代後半に成立した「岐阜名所圖會」（四一頁・資料214）と「岐阜因幡御神事」（四一頁・資料215）がある。前者には名古屋型の山車に混じって長浜型の山車三台が描かれている。長浜型は前部を舞台とし、後部は亭（ちん）と呼ばれる重層の屋根を載せた芸能山車である。後者には二七台の山車と三基の神輿、一台の神山、仮装行列が描かれており、二七台の山車のうち三台は長浜型で、一八台が名古屋型の山車である。残る六台は露台式の山車で、露台上に六本柱を立てて前後二室に分割し、前部は正側面を開放した天井の無い舞台状の室とされている。後部は側背面を壁とし、正面には建具を入れて祭壇のようにされている。人物や作り物などは描かれておらず、どのように使われていたかは不明である。

明治三十九年（一九〇六）発行の「岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖」（五一頁・資料219）には三五台の山車が描かれており、このうち九台が名古屋型の山車

である。この他、露台上に作り物を載せた飾り山車が一五台と踊り山が一台描かれており、いずれも台輪の外に車輪を配した外輪式の山車である。踊り山は高欄付きの露台上に提灯枠が組まれ、和服の女性と洋装の男性が踊る様子が描かれている。

三点の絵図資料に描かれた山車の中には現在の踊車の形態と一致するものは見当たらず、「山車引出之圖」の飾り山車と踊り山を合成したような形式が踊車の原形と言えよう。

現在の踊車は、鉄製車軸に改造されているが、当初は木製車軸であったと考えられ、現状の車軸の納まりを見ると以前は台輪の外に車輪を配する外輪式であった可能性がある。その時は現在よりも車輪径が大きく、車高も高かったのではないかと推察される。車軸を取り替えた時に車輪を小さくして床を低くし、子供や芸妓が乗り降りし易いように改造したのではないだろうか。その際、運航の安全を図って車輪も外輪から内輪に変更されたものと思われる。

露台上の高欄に関しても、子供や芸妓が登段しても危険の無いよう頑丈な構造に改造されたものと察せられる。ただし露台中央には木槌の作り物が置かれたままで、公演には大変不都合であり、作り物と芸妓の踊りがどのように両立していたかは把握し難い。

踊車は他に類例のない特殊な形式の踊り山車であり、華やかな飾りは殆どなく、正面に掲げられた彫刻欄間が唯一の装飾といえる。山車本体の豪華さを競うような志向は踊車には見受けられないが、ここで行われた奉芸が祭りに花を添えたものと思われる。絵図資料には多様な形式の山車が曳行された様子が描かれており、現在の祭礼における踊車の奉曳は、その伝統が継承されている証であり、踊車の存在は意義が大きいといえよう。

第三節 岐阜まつりの山車の特徴

現在の岐阜まつりで奉曳される山車は安宅車・若戎車・清影車・踊車の四台であるが、このうち安宅車・若戎車・清影車は名古屋型の山車で、踊車は屋台型の飾り山車である。また、四台の山車のうち、建造年次が明らかなものは清影車のみであり、掛札によって明治三十七年（一九〇四）の再建であることが知られ、再建の経緯も知ることができる。他の三台に関しては建造に関する具体的な資料がなく、建造年次を詳らかにすることはできないが、江戸時代後期から明治時代後期に建造されたと推定され、安宅車と若戎車は明治二十四年（一八九二）の濃尾地震以前の建造と考えられる。

清影車は当地で再建された山車であるが、他の山車はその来歴も不明な点が多く、伝承に頼らざるを得ないが、他所で使われていた山車を譲り受けたものなのか否かも明らかにし難い。したがって、造営に係わった大工や彫物師も不明であり、これに関しては清影車も同じである。また、四台とも車軸が鉄製に取り替えられており、木製車軸であった当初の形状や納まりが不明な点も惜しまれる。

安宅車・若戎車・清影車の三台の名古屋型山

表 4-1 山車 主要寸法比較 (mm)

	下 山				上 山			車 輪			髙 棒			高 さ (G Lから)					
	桁行柱心			梁間柱心	柱寸法	桁行柱心	梁間柱心	柱寸法	軸間隔	直径	幅	全長	太 さ	台座	樹棒	前山縁板	胴山縁板	箱棟	
	桁行全長	前山桁行	胴山桁行										中 央	先端	天端	天端	天端	天端	天端
安宅車	2,568	642	1,926	1,509	85×85	1,298	1,040	51×51	1,560	810	220	5,280	121×144	103丸	671	1,157	2,616	3,268	4,868
若戎車	2,619	666	1,953	1,656	98×98	1,245	1,094	61×61	1,382	724	224	5,159	151×151	106丸	630	1,196	2,616	3,289	4,857
清影車	2,778	682	2,096	1,571	94×94	1,323	1,078	58×58	1,447	888	218	5,529	124×165	97丸	751	1,276	2,722	3,403	5,326
踊 車	2,840			1,930	100×100				1,590	554	132	4,910	117×136	117丸	486	1,210		2,382	

	天井高		綱巻芯	柱 長		胴山桁	迫 上 柱	巻芯	迫 上 樋		滑車	屋 根	妻虹梁寸法			
	前 山	胴 山		床大か	前山柱				胴山柱	上山柱			寸法	断面	長さ	直径
安宅車	1,335	1,270	1,175	1,475	2,147	1,714	94×94	無 し	136	130×80	58×34	2,436	8	1,927×2,214	54×76×989	
若戎車	1,317	1,317	1,179	1,504	2,340	1,912	98×98	70×70	1,796	132	159×112	83×76	2,678	2	1,931×2,078	61×91×1,033
清影車	1,225	1,448	1,305	1,512	2,208	1,670	94×112	58×58	1,518	106	167×127	70×58	2,728	2	1,986×2,418	54×92×1,024
踊 車	1,866				2,216		103×148									



写真 4-19 清影車の鯨巻き機構



写真 4-20 安宅車の鯨巻き機構



写真 4-21 若戎車の鯨巻き機構

車は、各部材・各箇所の寸法は大差なく(表4-1)、最も新しい清影車が他車より若干大きく再建されたようであるが、ほぼ同じ規模といつてよいであろう。名古屋市内の広井神明社(中村区名駅五丁目)の祭礼で奉曳される「二福神車」は天保年間(一八三〇〜四四)に旧車に倣って再建されたという名古屋型の山車で、若戎車と同じ綱巻輪と止め歯車を備える鯨巻き機構をもつ山車である。この山車と規模を比較しても大きな違いはなく、岐阜まつりの山車も名古屋型山車の基本的な姿形と規模を変えることなく、踏襲していると考えられる。

三台の山車各々の特徴については既に述べたが、特に注目されるのは鯨巻き機構の違いである。三台のうち最も簡潔な機構を見せるのは清影車で、巻芯は円形断面とされ、これに開けられた孔に角棒を挿し込んで回転させる形式である。巻綱の綱廻しも単純で迫上樋と迫上柱に取り付けられた滑車を伝って、胴山上段の床下と迫上樋内で処理されている。建造年が一番新しい清影車に古式な鯨巻き機構が残されている。

安宅車の鯨巻き機構は綱廻しが複雑で、胴山の上段に二段の滑車受けを架け渡し、中段に二個、上段に四個の滑車を取り付けて胴山の側面を巻綱が菱形を描くように廻らされているが、その結果、下山の轆子座はすつきりとした空間となる。巻芯は清影車と同様の円形断面で、回転の方法も同じである。若戎車の鯨巻き機構は巻芯の回転方法に特徴があり、八角形断面の巻芯の両端へ内側に向かって径を細めた傾斜を二段付け、ここに巻綱を巻き取る形式である。巻芯の中央には綱巻輪と止め歯車を取り付けられ、綱巻輪に巻かれた綱を引いて巻芯を回転させる。止め歯車は逆回転の防止装置である。巻綱の綱廻しは清影車と同じで、滑車二個を使って上段の床下と迫上樋内で処理されている。

若戎車の鯨巻き機構は、清影車のそれより進歩した形式といえ、綱廻しに関しては安宅車が最も発展した形式といえよう。濃尾震災後に当地で再建された清影車が最も簡潔で古式な鯨巻き機構を採用したのは、手本とした安宅車と若戎車のそれぞれの複雑さが、敬遠された結果ではないかと推察される。

岐阜まつりの三台の名古屋型山車が、それぞれ形式の異なる鯨巻き機構を有することは特筆される。

(参考文献)

- 『伊奈波神社略誌』 国幣小社伊奈波神社奉賛会 1941年
- 『岐阜市史 通史編 民俗』 岐阜市 1977年
- 水野耕嗣 『岐阜県の祭り屋台』 岐阜新聞社 2003年
- 『日本の美術 No.516 山車』 独立行政法人国立文化財機構 2009年
- 『大山祭総合調査報告書』 犬山市教育委員会 2005年
- 『大垣祭総合調査報告書』 大垣市教育委員会 2014年
- 近藤 豊 『古建築の細部文様』 光村推古書院 1989年
- 『広井神明社祭「二福神車山車 唐子車山車」図面集』 名古屋市教育委員会 2001年



踊車 正面



清影車 正面



若戎車 正面



安宅車 正面



踊車 正側面



清影車 正側面



若戎車 正側面



安宅車 正側面



踊車 側面



清影車 側面



若戎車 側面



安宅車 側面



踊車 宵宮



清影車 宵宮



若戎車 宵宮



安宅車 宵宮



2 安宅車 前山・胴山・上山正面



3 安宅車 下山正面



1 安宅車 正面全景



5 安宅車 下山側面 車掛



4 安宅車 下山正面（台輪）



7 安宅車 下山車輪軸受け



6 安宅車 下山台輪（床組）



9 安宅車 下山内部 上段床見上げ 鯨巻き



8 安宅車 下山内部 下段正面



11 安宅車 下山内部 上山柱下部背面



10 安宅車 下山内部側面 鯨梁・巻芯



13 安宅車 上山内部 背面



12 安宅車 下洞内部 上段滑車受け下端見上げ



15 安宅車 上山内部 天井見上げ



14 安宅車 上山内部 柱上部



17 安宅車 前棚内部



16 安宅車 前山・胴山正面隅



19 安宅車 前棚柱上正面隅



18 安宅車 前棚正面



21 安宅車 胴山柱上正面



20 安宅車 前棚正面 高欄



23 安宅車 上山 唐破風正面



22 安宅車 胴山正面 高欄



2 若戎車 胴山・上山背面



1 若戎車 正面全景



3 若戎車 下山正面



5 若戎車 下山側面 車掛



4 若戎車 下山台輪正面



7 若戎車 下山車輪軸受け



6 若戎車 下山床組見上げ



9 若戎車 下山内部 上段床見上げ 鯨巻き



8 若戎車 下山内部 下段正面



11 若戎車 下山内部 上山柱下部背面



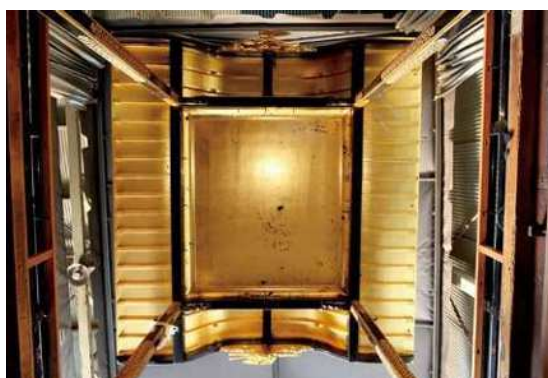
10 若戎車 下山内部側面 鯨梁・巻芯



13 若戎車 上山内部 背面



12 若戎車 上山内部 上段側面見上げ



15 若戎車 上山内部 天井見上げ



14 若戎車 上山内部 柱上部



17 若戎車 前棚内部



16 若戎車 前山・胴山正側面



19 若戎車 胴山柱上正面隅



18 若戎車 前棚正面



21 若戎車 胴山柱上正面



20 若戎車 前棚正面 高欄



23 若戎車 上山 唐破風正面



22 若戎車 胴山正面 高欄



2 清影車 胴山・上山背面



3 清影車 下山正面



1 清影車 正面全景



5 清影車 下山台輪側面 車掛



4 清影車 下山台輪正面



7 清影車 下山車輪軸受け



6 清影車 下山台輪 床組



9 清影車 胴山内部 上段床見上げ 鯨巻き



8 清影車 下山内部 下段正面



11 清影車 胴山内部 上段背面



10 清影車 下山内部側面 鯨梁・巻芯



13 清影車 上山正面 柱上



12 清影車 胴山内部 上段 上山台輪



15 清影車 上山内部 天井見上げ



14 清影車 上山内部 柱上部



17 清影車 前棚内部



16 清影車 前山・胴山正側面



19 清影車 前棚柱上正面隅



18 清影車 前棚正面



21 清影車 胴山柱上正面



20 清影車 前棚正面 高欄



23 清影車 上山 唐破風正面



22 清影車 胴山正面 高欄



2 踊車 正面上部



1 踊車 正面全景



3 踊車 正面



5 踊車 側面



4 踊車 正側面



7 踊車 下山車輪軸受け



6 踊車 床組



9 踊車 内部上座床見上げ



8 踊車 内部側面



11 踊車 正面見付彫刻



10 踊車 内部床 車輪箱



13 踊車 上座隅 床・高欄



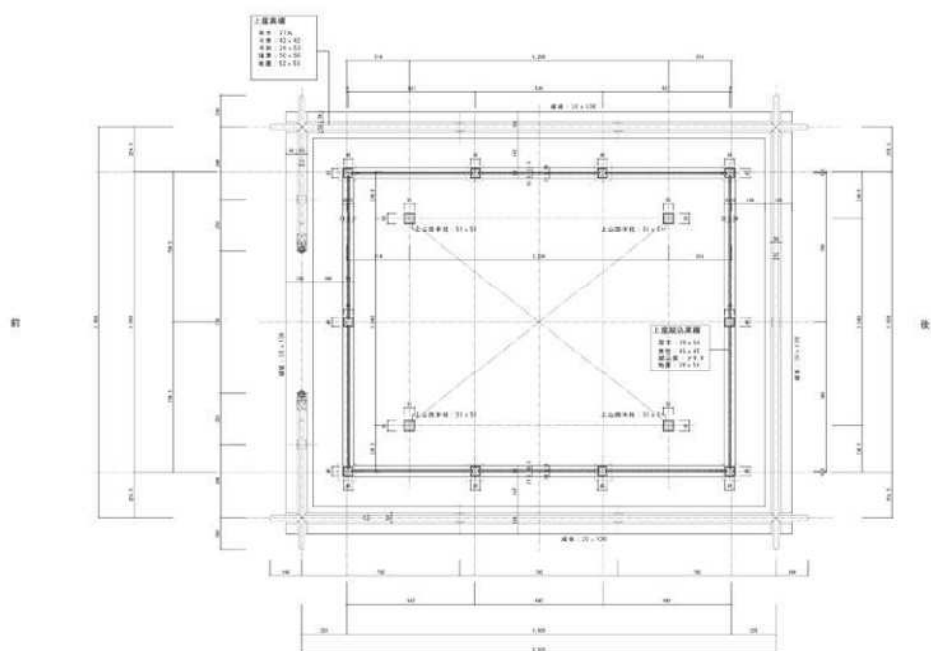
12 踊車 正面見付見上げ



15 踊車 側面全景

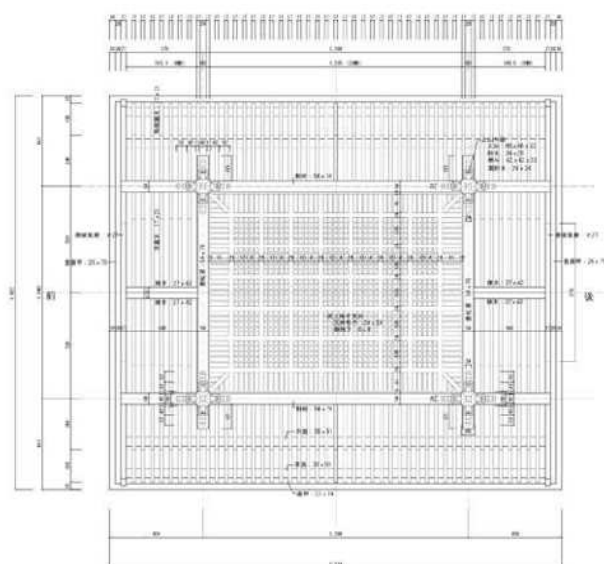


14 踊車 上座 飾り物・提灯枠

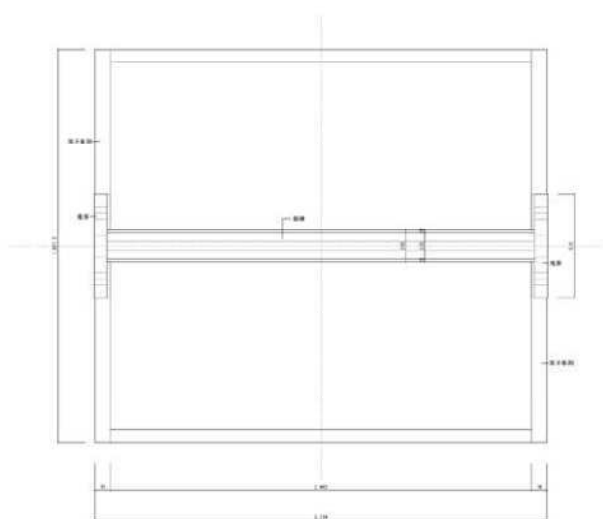


上山高欄部 平面図

安
全
車

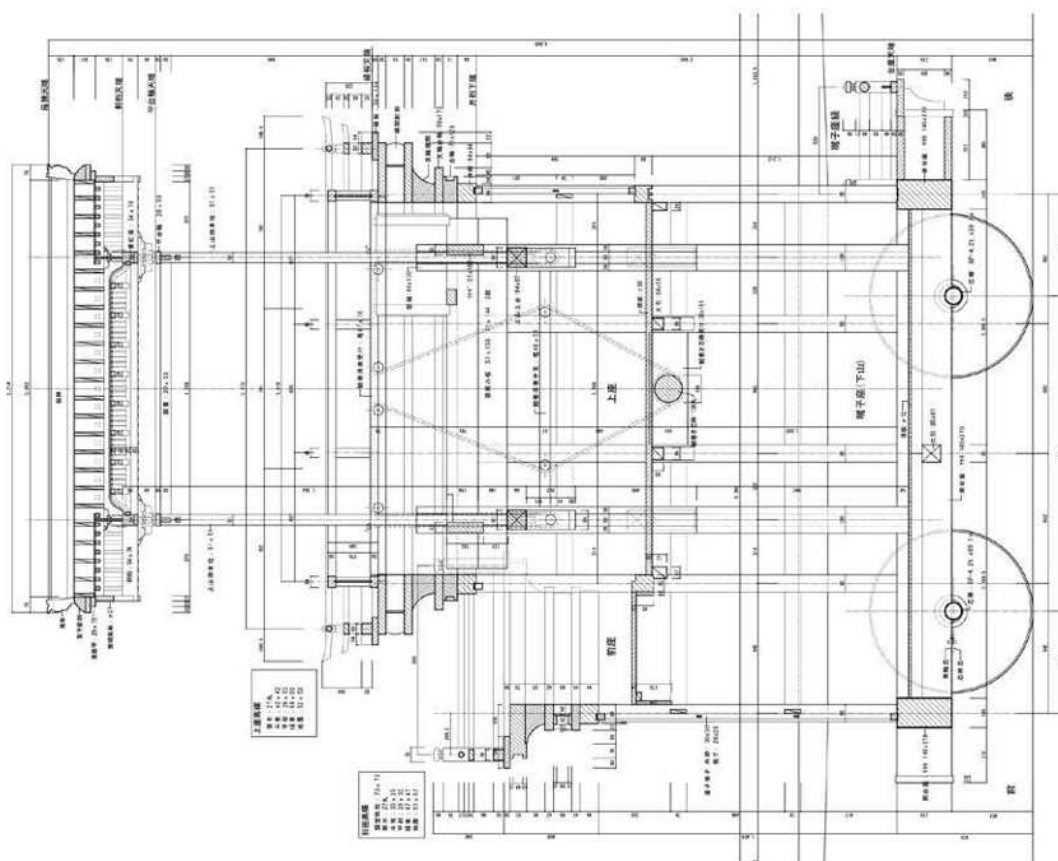


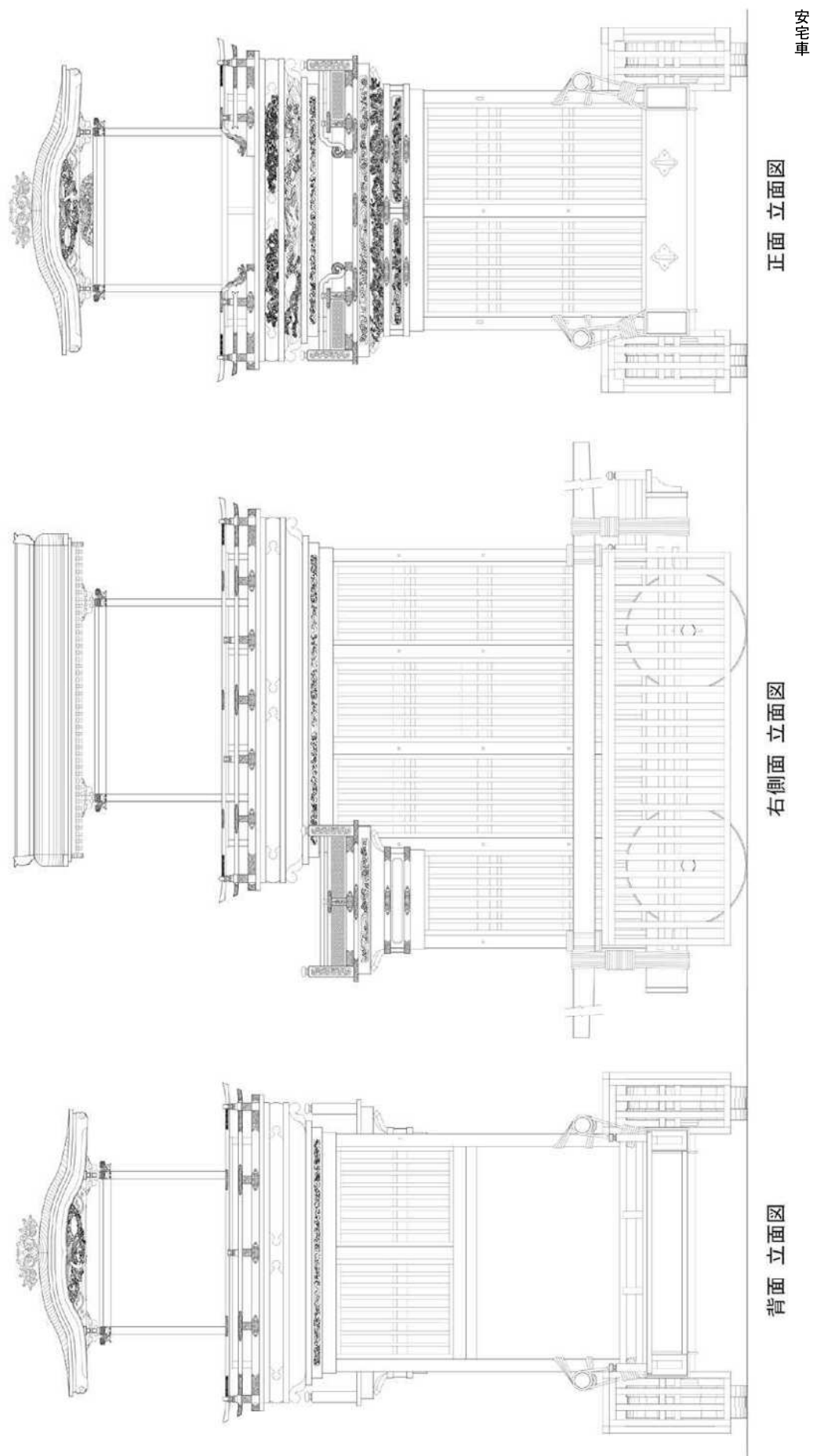
上山 天井見上げ図



上山 屋根伏せ図

桁行 断面图

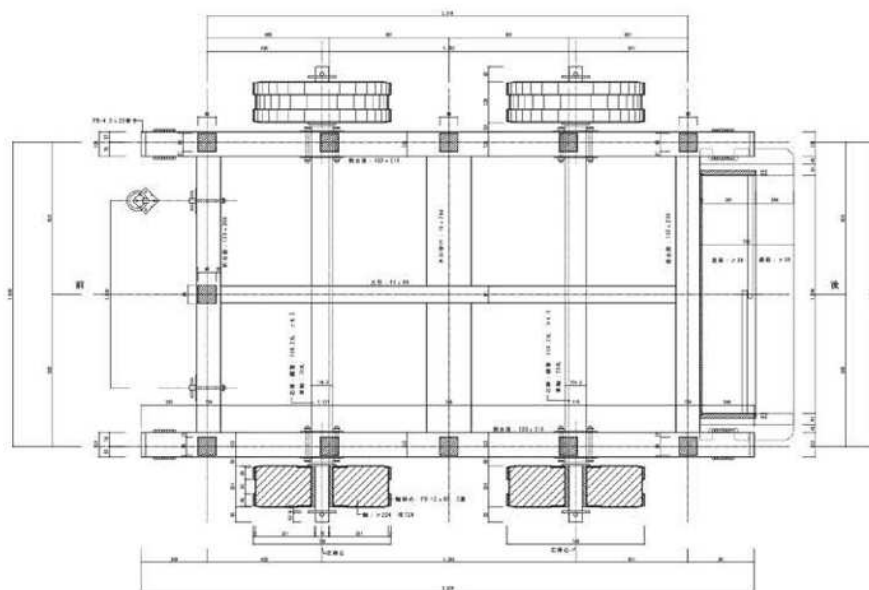




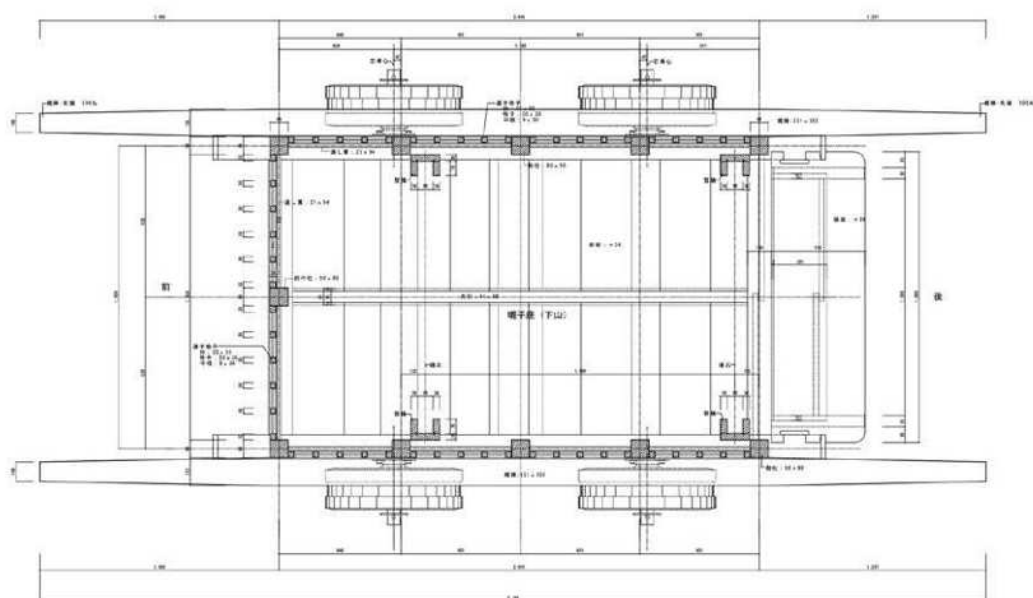
安
山車

若戎車

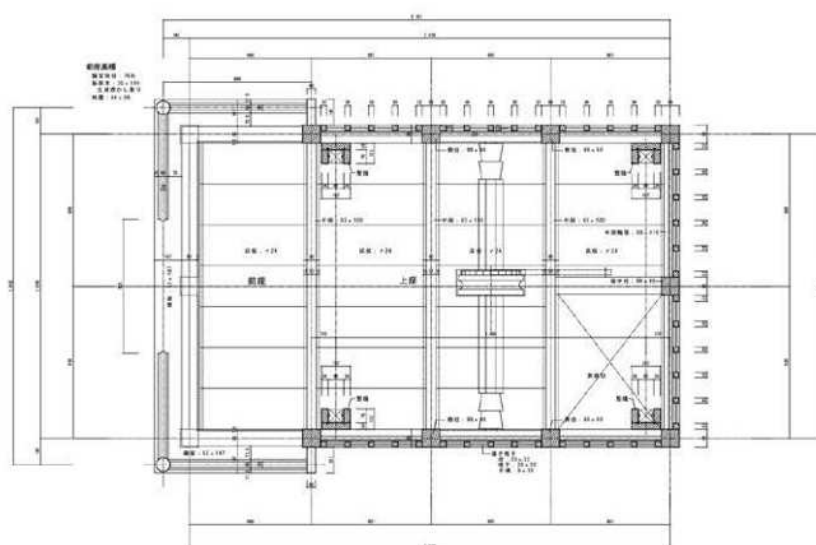
台輪部 平面図



下山部 平面図

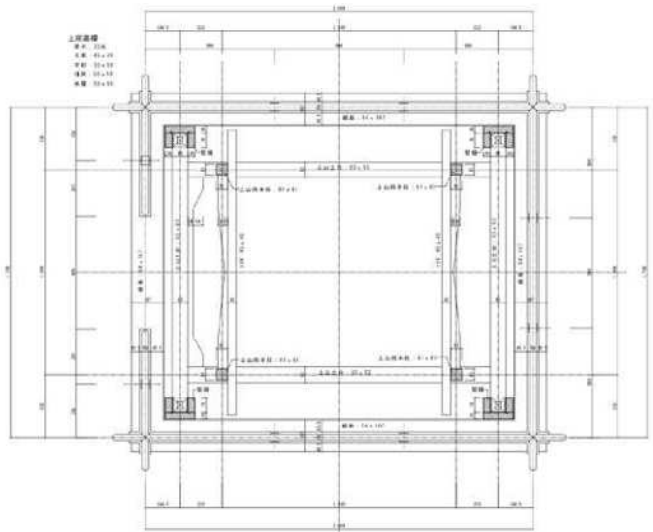


前棚・胴山部 平面図

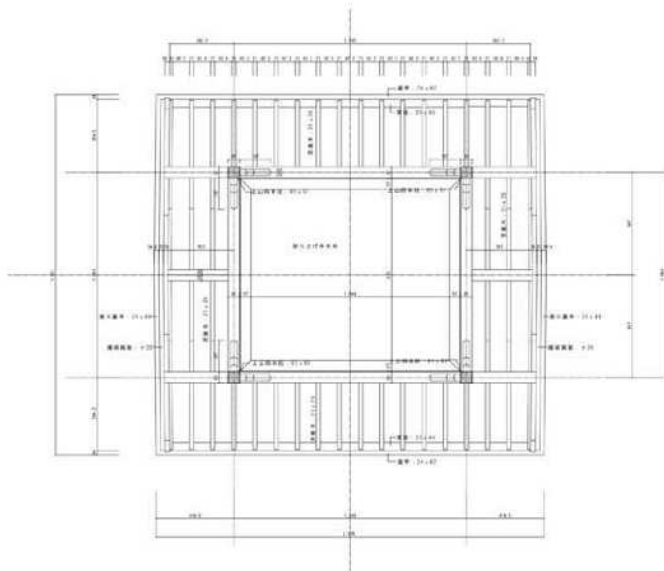




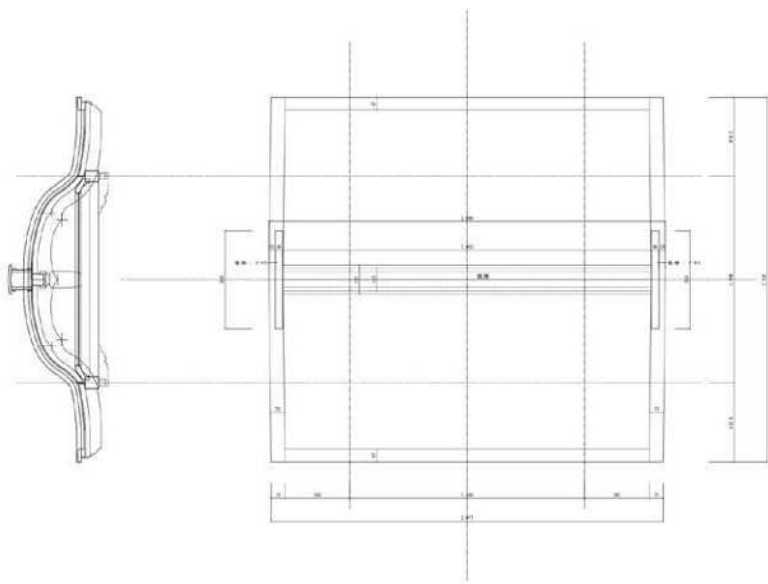
若戎車



上山部 平面図

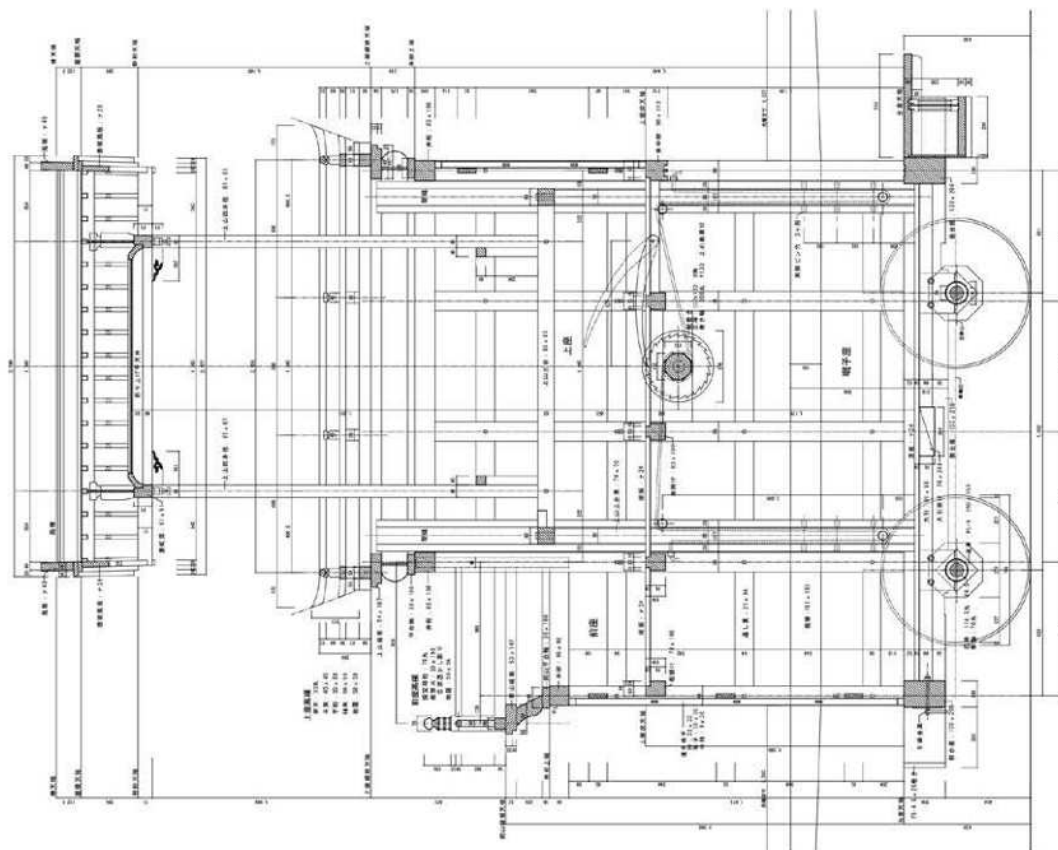


上山 天井見上げ図

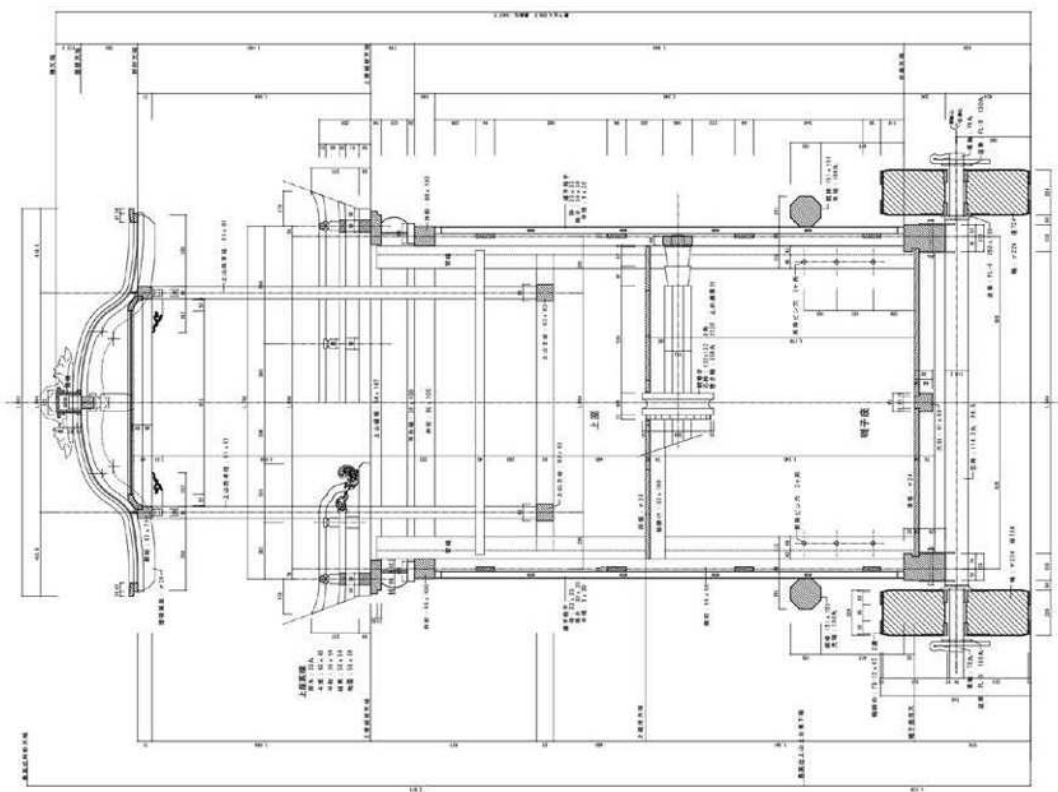


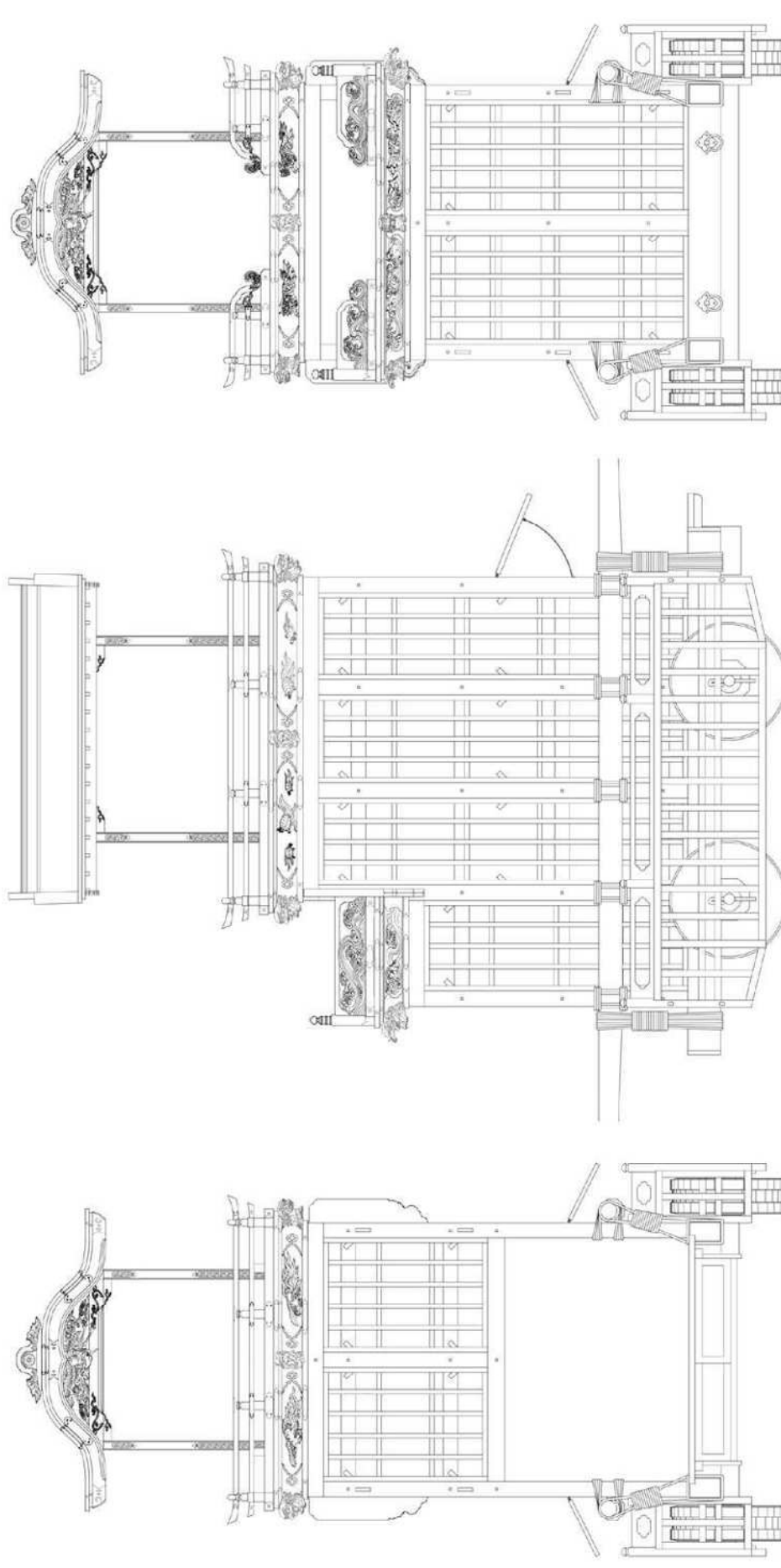
上山 屋根伏せ図

桁行 断面図



梁行 断面図





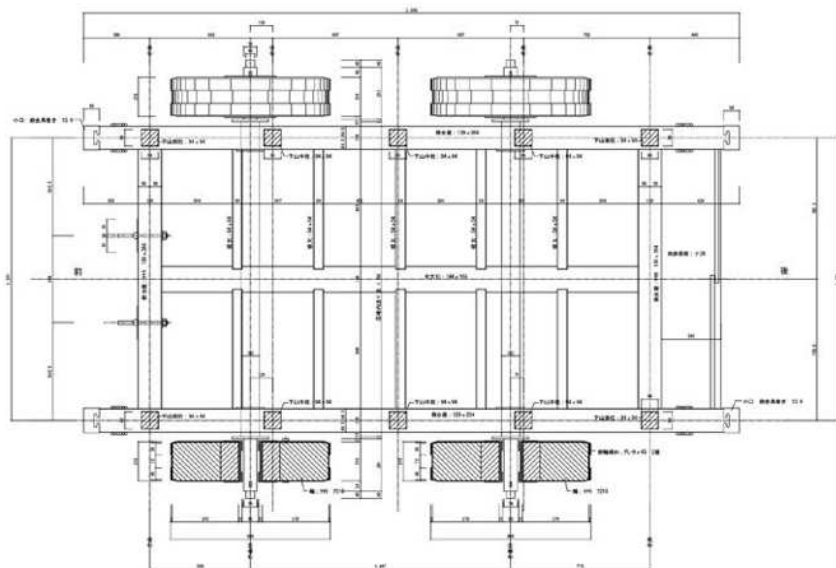
若戎車

正面 立面図

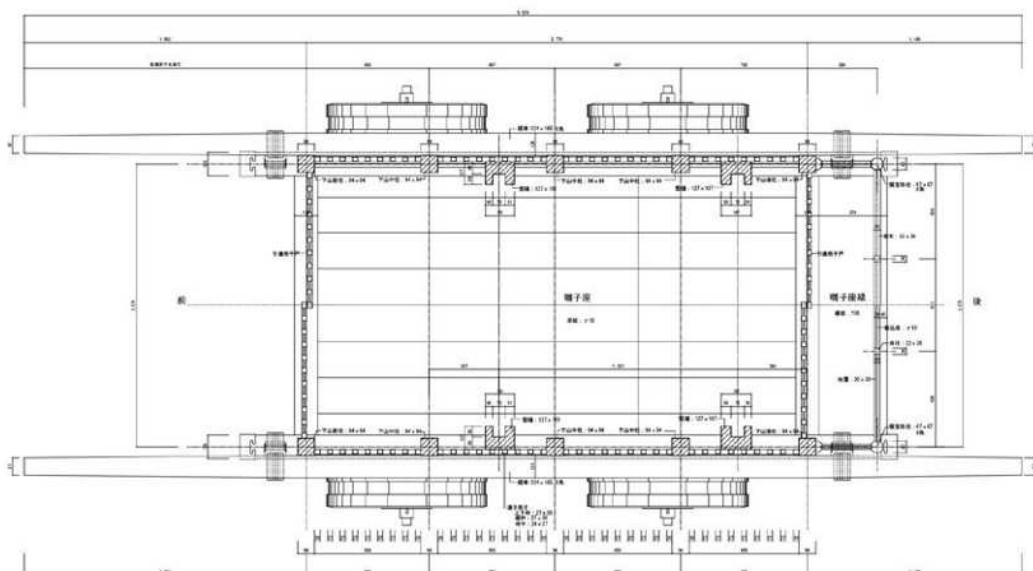
右側面 立面図

背面 立面図

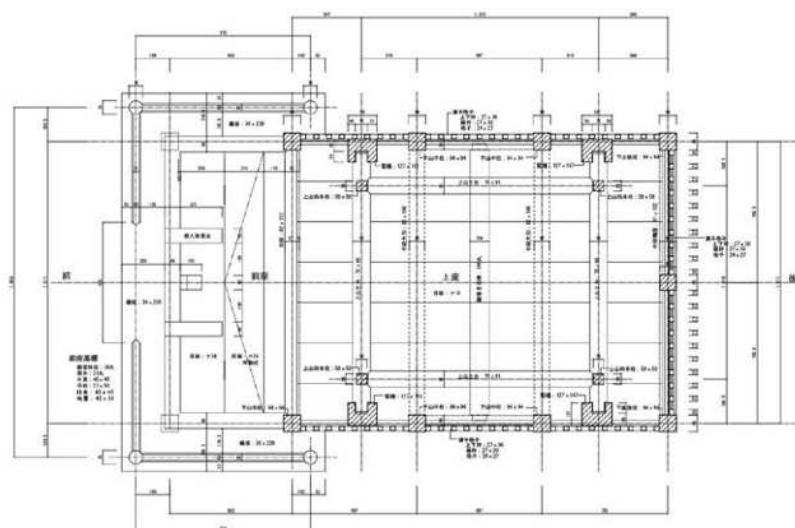
台輪部 平面図



下山部 平面図

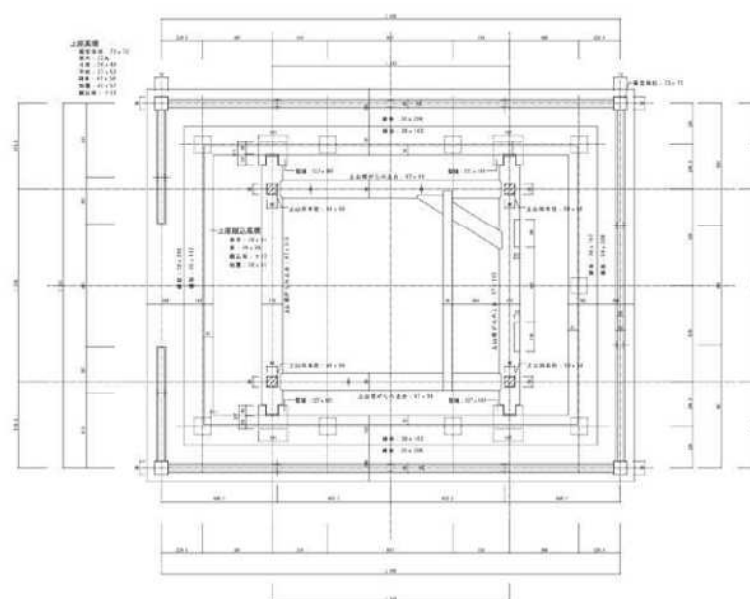


前棚・胴山・上山部 平面図

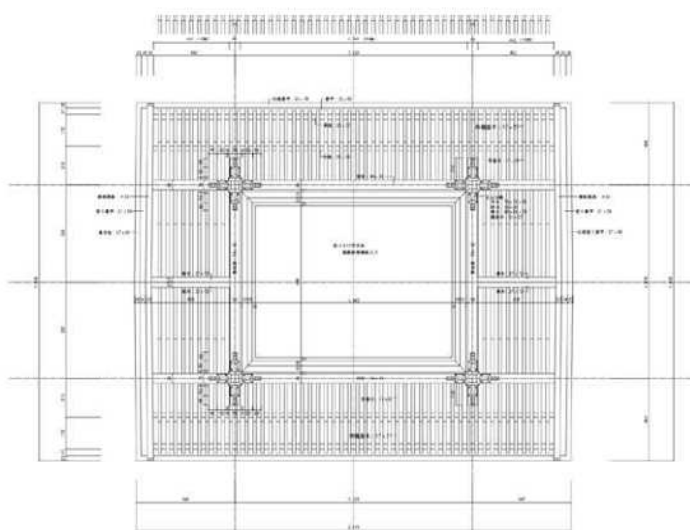




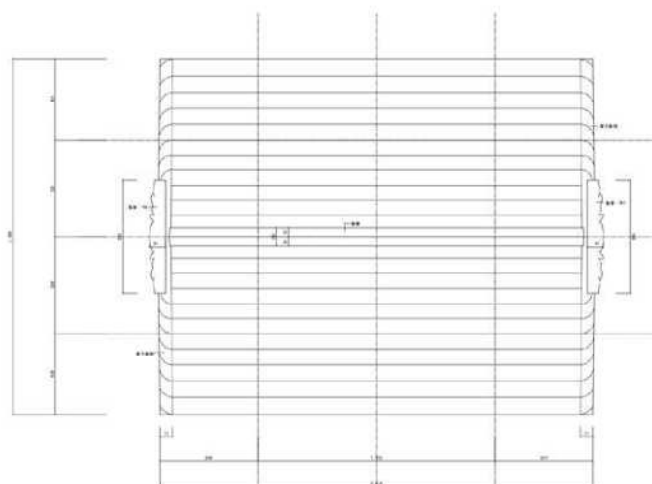
清影車



上山高欄部 平面図

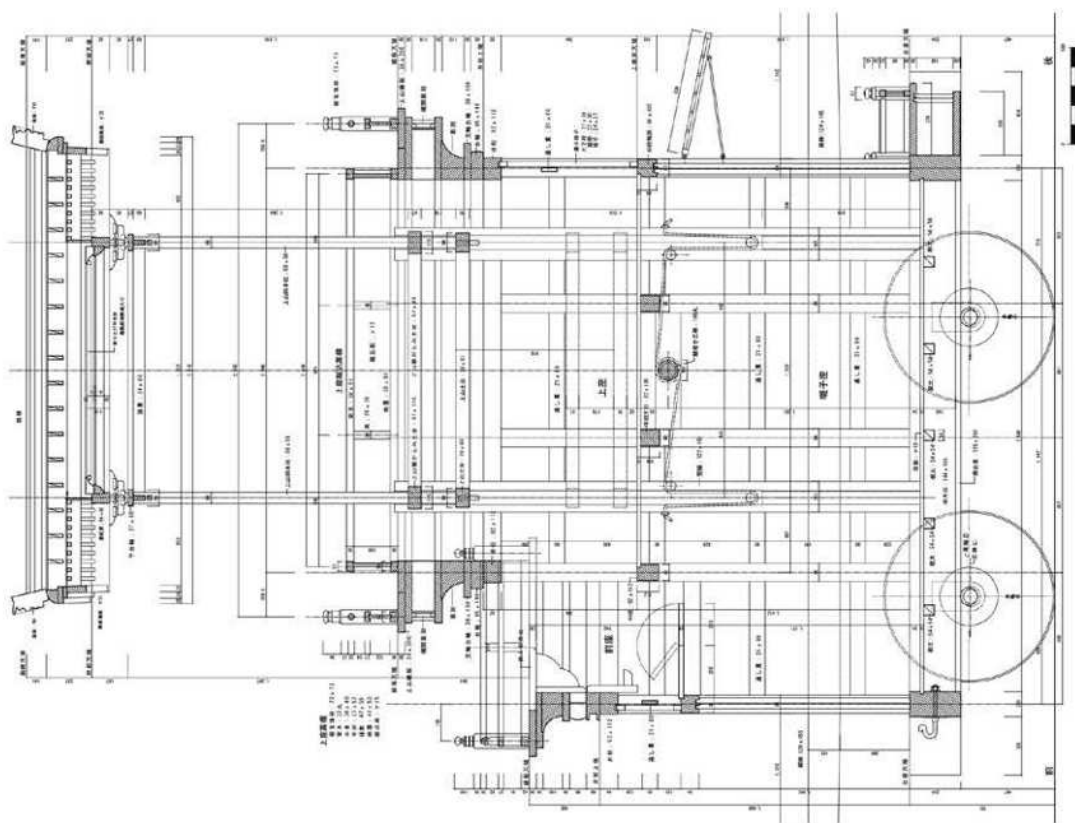


上山 天井見上げ図

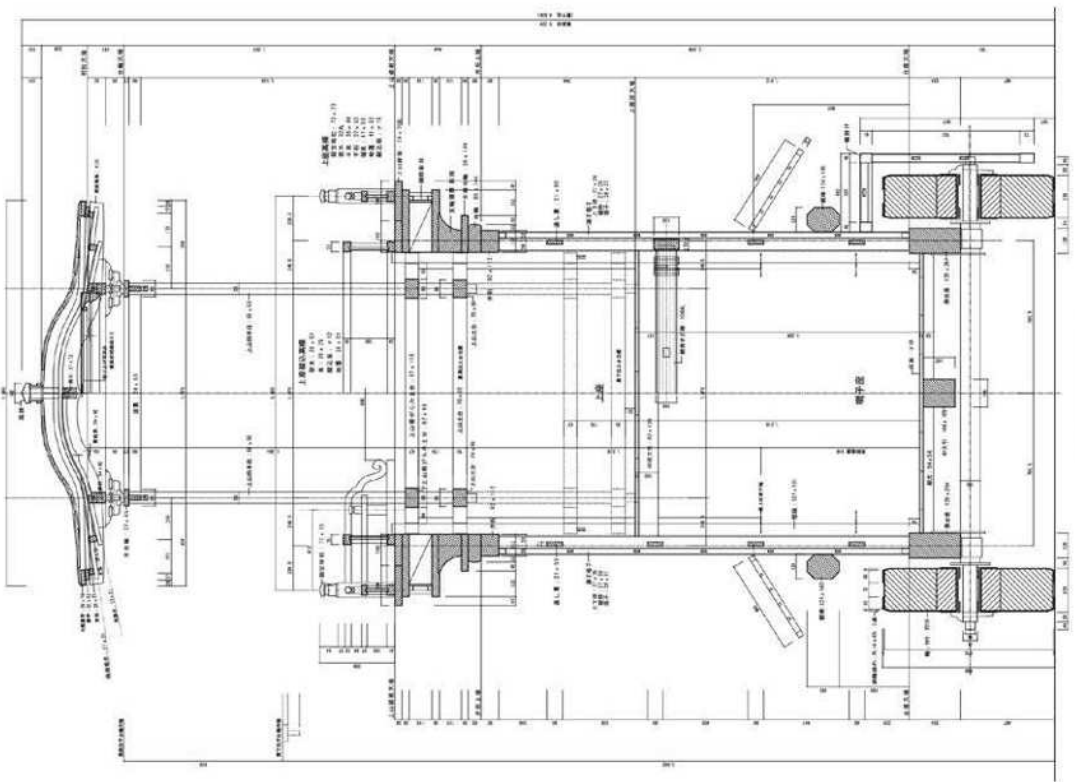


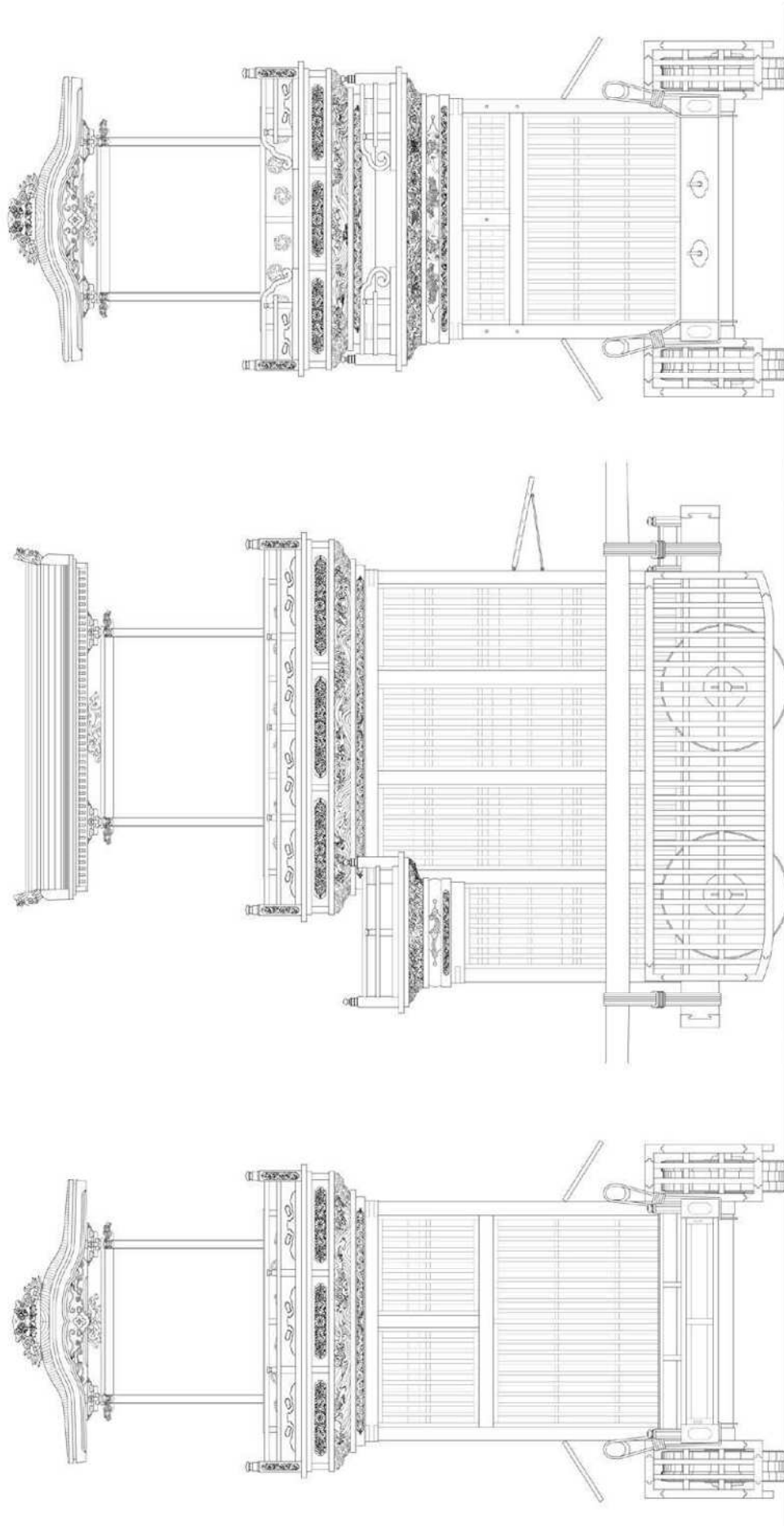
上山 屋根伏せ図

桁行 断面図



梁行 断面図





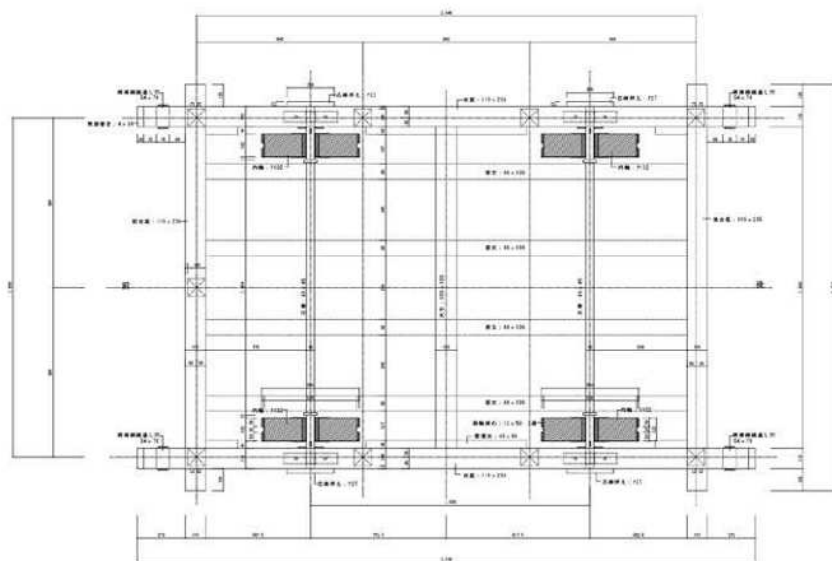
清影車

正面 立面図

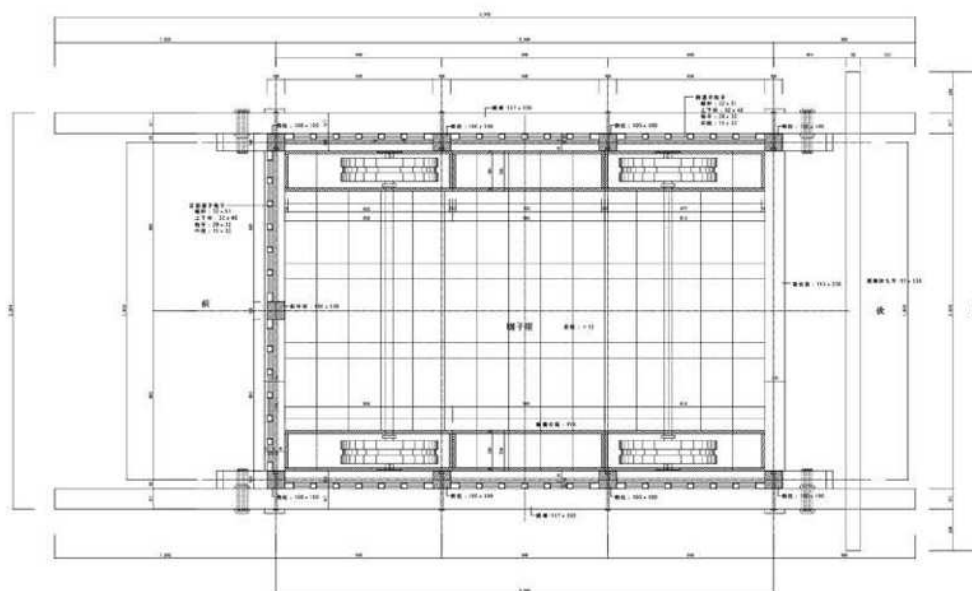
右側面 立面図

背面 立面図

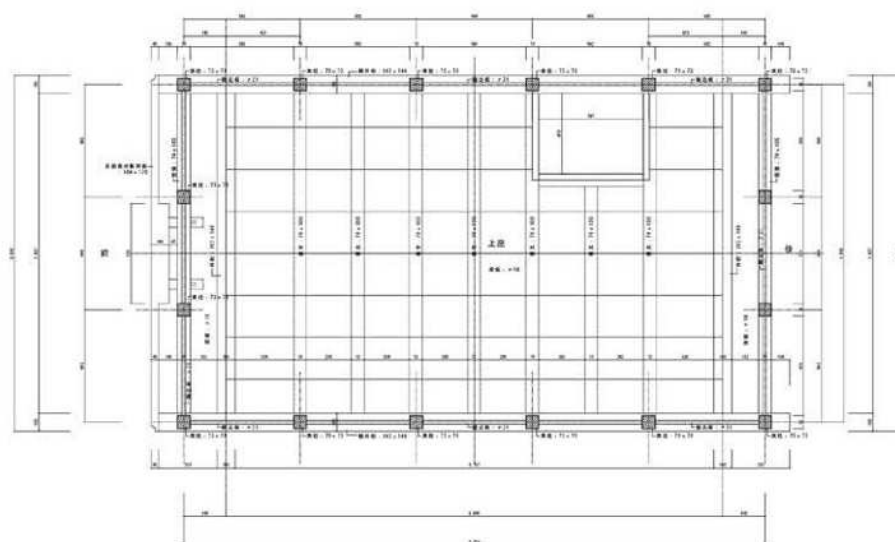
台輪部 平面図

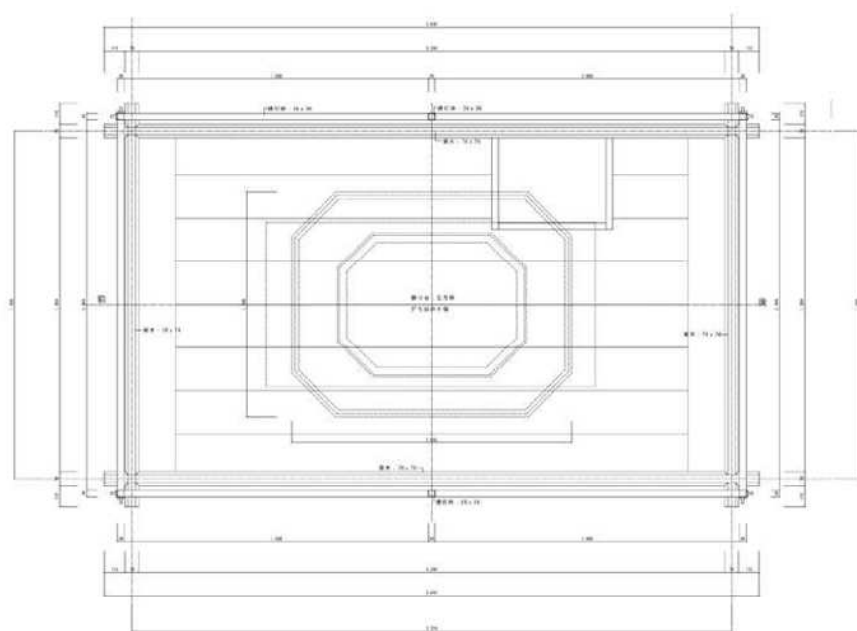


嚙子座 平面図

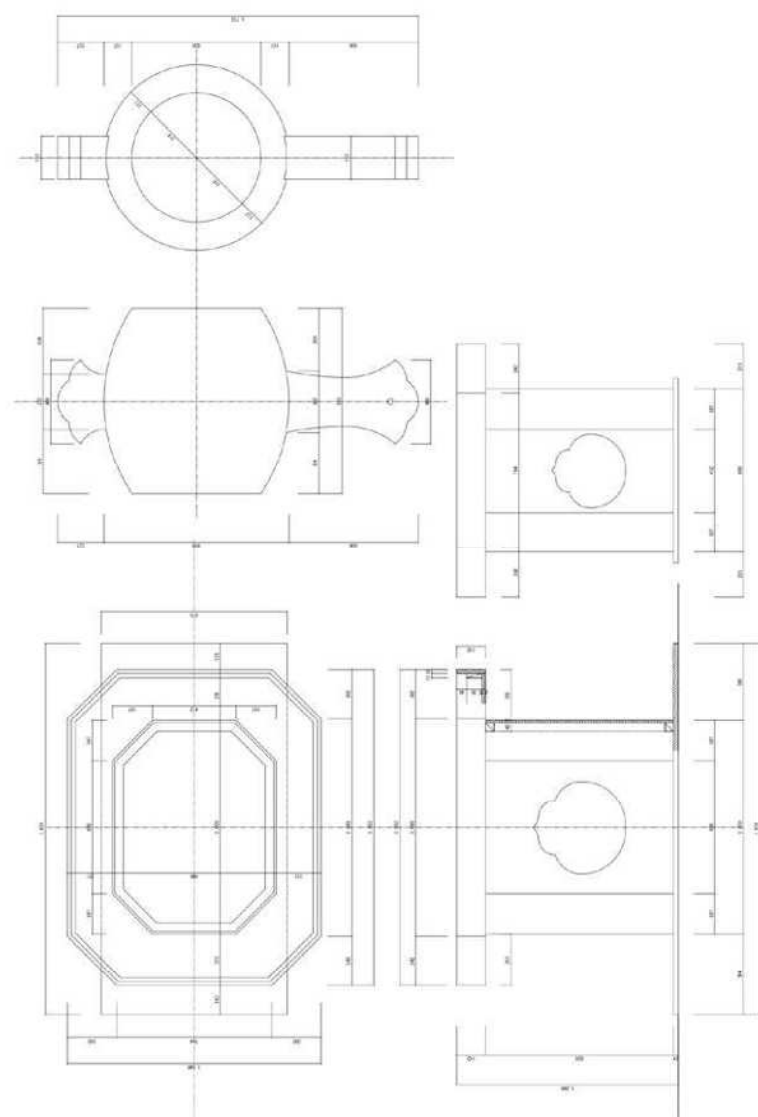


上座 平面図

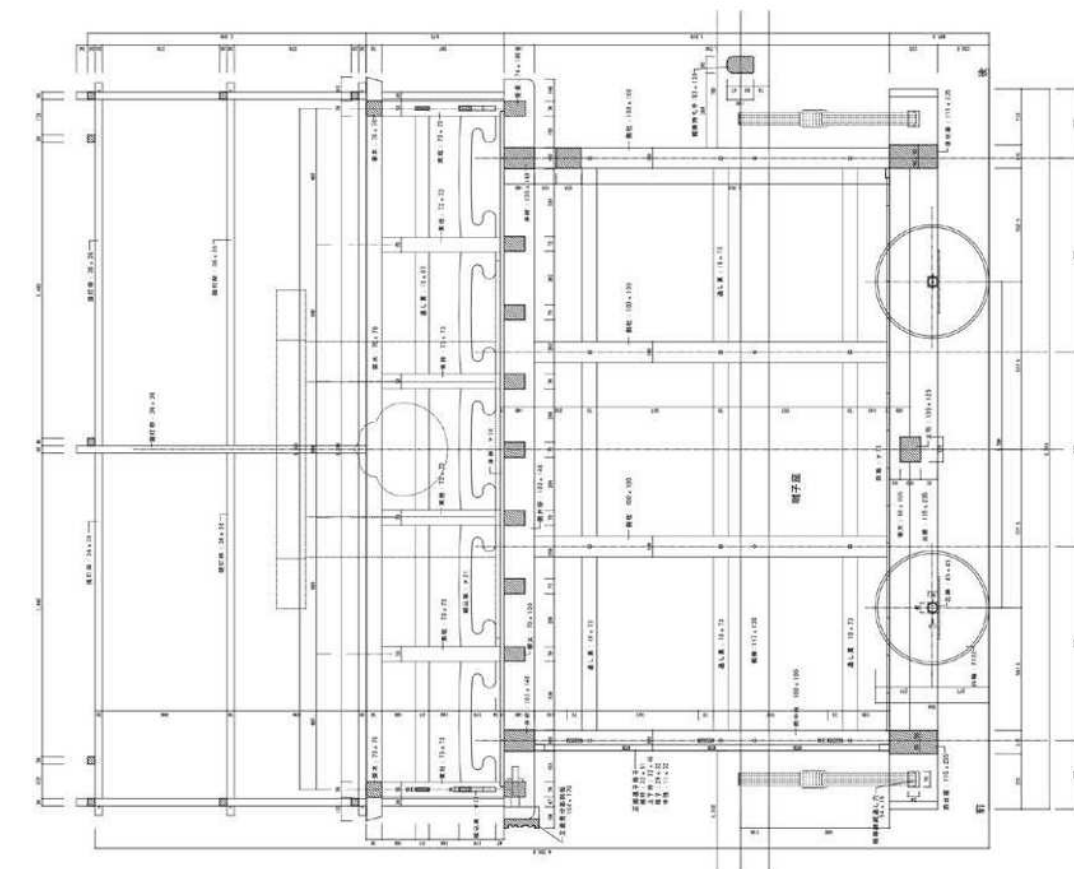




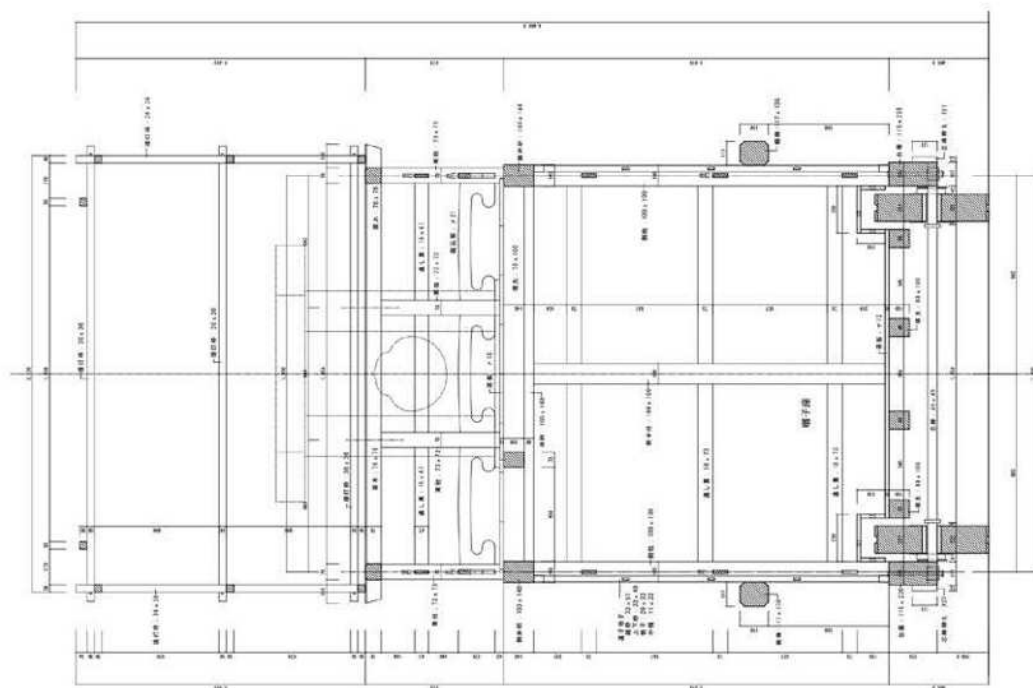
上座高欄部平面図



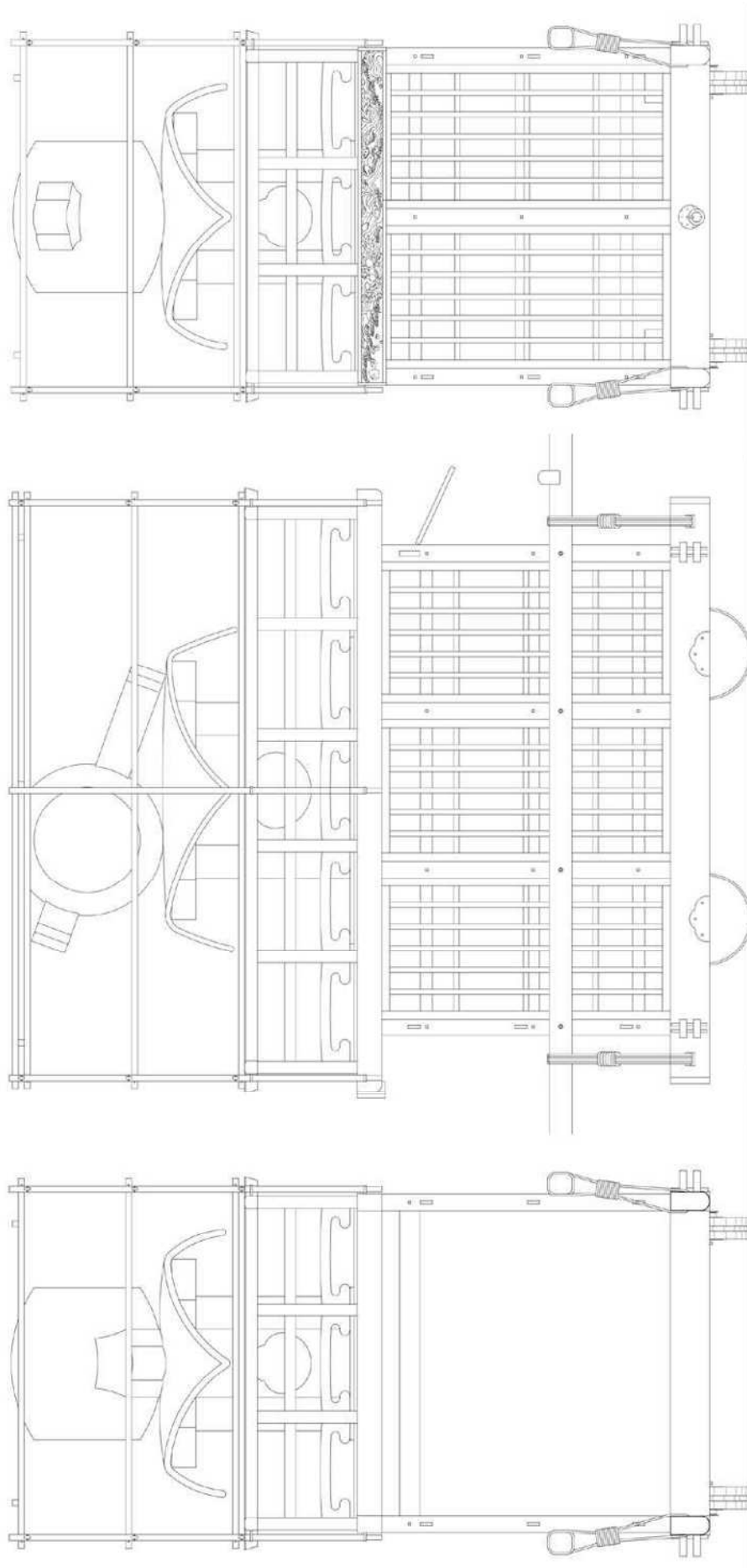
飾り物詳細図



桁行断面図



梁行断面图



踊車

正面 立面図

右側面 立面図

背面 立面図

第五章 山車のからくり

第一節 からくりの概要

(一) 祭礼におけるからくり人形

山車からくりは、山車に人形を載せて、間接的に操作して演技を行うからくり人形の一種である。愛知・岐阜両県には、江戸時代から祭礼の主役にからくり人形を載せた山車を曳く祭りが多く、現在でも二百台を超える山車が保存されており、全国の山車からくりの八割以上ともいわれている。

濃尾平野には中世から大山・車楽おおやま だんじりと呼ばれる山車があり、この大山にからくり人形を載せたのがはじめとされている。そして、大阪の竹田からくり芝居を通して、からくりの知識や技術が伝わると、様々な機構を搭載した人形へと発展し現在にいたっている。

(二) からくり人形の演技

人形を操作する方法は、糸を操作する糸からくりと差し金さしや胴串どうくしと呼ばれる操作棒で操作する離れからくりに大別することができる。また、人形の動きの種類は、手、足、首を動かす所作から、倒立、肩車、宙吊り、文字書き、綾渡り、大車輪、乱杭渡り、面破り、変身、変顔、出現、舞いなど技をみせるものがある。所作や技を実現するには、機械的なしくみ機構が必要である。操作することによって生じる力の伝達や変換を目的とした仕組みを機構という。機構にはいくつかの機械要素があり、カム、歯車、滑車、てこなどである。これらの機械要素技術の組み合わせた機構がからくりである。

所作のうち、うなずき、会釈、お辞儀については、図5-1に示すとおり、

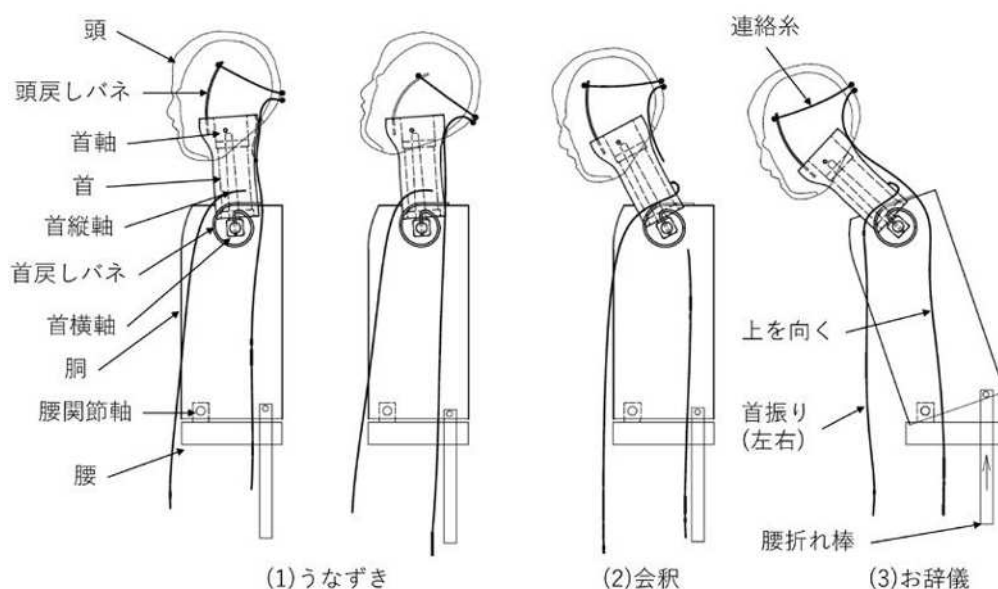


図5-1 うなずき、会釈、お辞儀の区別

うなずきは頭を首軸で振ること、会釈は首縦軸に直交する首横軸で振ること、お辞儀は腰折れ棒で胴を押し上げることそれぞれ表現している。



第二節 各山車のからくり・操作方法

安宅車、若戎車、清影車の各からくりは、前人形と上山人形から構成され、各々の人形には複数の関節や台座、樋を駆使して動きを表現している。本節では各からくり人形の所作と動くしくみについて述べる。

(一) 安宅車

安宅車では前人形に幣振り人形、上山人形には弁慶と義経を配置し、弁慶が能狂言『安宅』を舞う。

1 義経

右手に扇子を持ち座位のままで動きはない。大将人形ともいわれ構造はシンプルである。動作は「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「右腕を上げる」の五つのところ、現用では左腕は動かさず四本の紐で操作し、一人の操作者で行う。比較的大きな人形は、一つ一つの部品



写真 5-1 滑車と首縦軸

は重く、操作に必要な力は増し紐を引くことが重く感じる。そこで、紐を引く力を軽減するための工夫が腕滑車と首縦軸にみられる(写真5-1)。前者は、扇子を持ち右腕を上げるしくみに定滑車を使用している。後者は首を左右に振る首縦軸を直接回している点にある。

2 弁慶

可動式の樋にロクロ付きの台車を備え、舞台を縦横に動くことができる。また、右手に扇子をもち、頭、手足を細やかに動かすことができる。特に、腕の構造は複雑で複数の関節軸や滑車を用いている。右の掌の軸に扇子の要を固定し、開ける方の扇子の骨に紐が繋がっており、一方の骨は紐で手のひら側に縛られている。紐を引くと、扇子の骨が動き開けることができ、現用での閉じは扇子の要付近に輪ゴムを巻きつけ反発力で実現している。

動作は、「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「腰落とし」、「左腕を上げる」、「左手を寄せる」、「左腕を開く」、「右腕を上げる」、「右手を寄せる」、「扇子を開ける」、「左足を上げる」



写真 5-2 休眠機構

「右足を上げる」で、十二本の紐と樋の操作を二人から三人で行う。台車の下部の操作部は動作ごとの操作レバーを設け、操作性の簡便化を図っている。

現用では、使っていない滑車や糸案内が複数存在し、また、右腕の回内外や扇子の閉じの動きの痕跡を確認することができるが、操作紐の取り回しを兼用することで簡略化している（写真5-2）。

3 幣振り人形

両手でご幣を持ち、左右に体を振る。顔の表情を変えることができる。顔は眉、目、鼻、口の動きがあるように思われるが、現在は眉のみ動く（写真5-3）。体の構造はシンプルで支柱に胴体が固定され、頭と腕が取りついている。足はなく、肘関節は紐で結んである。ご幣は支柱と両手で固定されている。支柱を回転すると体の向きが変わり、左右に振ると体を揺らすことができる。からくりは首振りと眉を動かすことができ、操作は一人で行う。

頭部の内部を観察すると、眉の他に目、鼻、口を動かす機構が残っていることがわかる。操作紐の断線やレバーの折損などが考えられる。



写真 5-3 変顔

(二) 若戎車

若戎車では前人形に采振り人形、上山人形には若恵比寿と宝船を配置し、能『岩船』の一部を取り入れた演目に合わせて、若恵比寿が鯛を釣り、宝船の出

現を行う。

1 若恵比寿

可動式の樋にロクロ付きの台車を備え、舞台を縦横に動くことができる。また、右手に釣竿をもち、頭、手足を動かすことができる。両ひざには、ぜんまいばねが備わっているのが特徴である。動作は、「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「左手を寄せる」、「右腕を上げる」、「左足を上げる」、「右足を上げる」で、八本の紐と樋の操作を四人で行う。

現用では、右腕の回内外の動きをピン打ちで固定しているが、機能としては有している。また、過去の修理で交換したと思われる胴体部分が保管されているが、旧胴体に埋め込まれている二か所の滑車のうち、右側は自在滑車のところ、現用では固定滑車となっており、使用されていない（写真5-4）。これは、右腕を上げる動作において、

右手側の紐の結び目と滑車への入射角の変位が大きく、固定滑車では対応できず滑車から紐が外れることが原因と考えられる。

2 采振り人形



写真 5-4 新旧胴体の比較



両手に采を持ち、頭、手足を動かすことができる。台座に支柱をたて、胴体が固定され、支柱を回すことで体の向きが変わる。腕を上げるしくみはテコである。動作は「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「右腕を上げる」、「左足を上げる」、「右足を上げる」の六つであるが、左腕と右足、右腕と左足を結び四本の紐と支柱を一人で操作を行う。

頭部を分解調査すると、首の鯨ばねの破損と

「顔を上げる」動作の痕跡がある。図5-2に「顔を上げる」動作を示す。操作紐を引くと、首軸を中心に後頭部が引き寄せられ、鯨ばねが撓む。操作紐を緩めると、鯨ばねの反発力が解放され元に戻る。鯨ばねの先端と後頭部の接続紐によって正対したときの顔の向きが決まる。

台座は、山車側の構造に応じて改造を施した形跡がある。また、現用では二つの穴に操作紐を通してあるが、五つの穴が開いており、前述の四つの動作に「顔を上げる」を加えた五つと合致する。

支柱には留め機能の痕跡がある。立ち姿を固定し、留めのツメを外すと座る

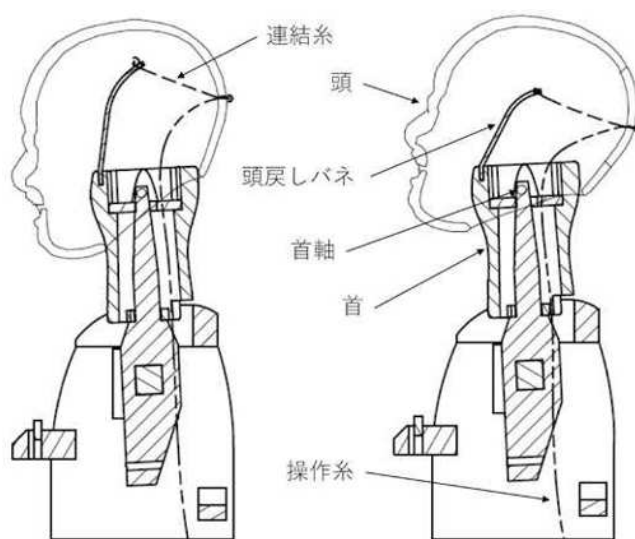


図5-2 顔を上げる

姿となる。

3 宝船

近代に入ってから設置されたものである。宝袋を半割し宝船が出現し、帆を上げる一連の動作となり、一人で操作を行う。動滑車の原理を応用して宝船出現、帆立てを實現している（写真5-5）。

(三) 清影車

清影車では、前人形に幣振り人形、上山人形には豊玉姫と彦火々出見尊を配置し、謡曲『玉ノ井』を舞う。

1 彦火出見尊

右手に軍配を持ち、座位のままで動きはない。大将人形ともいわれ構造はシンプルであるが、「うなずき」機能を有している。左腕は右腕と同じ構造になっており、腕滑車を入れると動く作りである。動作は「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「右腕を上げる」で、四本の紐を一人で操作を行う。

首を固定する首縦軸に首横軸が直交しており、首縦軸で首振り、首横軸で前傾をすることができ、操作は「首を左に振る」と



写真5-6 首振り機構



写真5-5 全景

「首を右に振る」の二本の紐を同時に引くと実現する（写真5-6）。

2 豊玉姫

可動式の樋にロクロ付きの台車を備え、舞台を縦横に動くことができる。また、右手に打杖^{うちづえ}をもち、頭、手足を動かすことができる。特に「面かぶり」で龍神に変身することが特長である。動作は、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「腰折れ」、「胸明け」、「面かぶり」、「面外し」、「左腕を上げる」、「左手を寄せる」、「右腕を上げる」、「右手の回内」、「右手の回外」、「左足を上げる」、「右足を上げる」で、十三本の紐と樋の操作を三人で行う。

頭部の観察によつて、頭はバネ特性を持つ、後頭部の穴、首裏側の溝を確認し、これらは、「顔を上げる」動作の痕跡と機能である（前述の図5-2参照）。後頭部からの操作紐が解けたことが原因と考えられる。

面かぶり機構は、胸中に隠されたお面は、胸板が開いた瞬間に喉元の滑車を中心に回転しお面をかぶる（写真5-7）。

3 幣振り人形

右手に御幣をもち、頭、手足を動かすことができる。台座に支柱を立て、胴体が固定され、支柱を回すことで体の向きを変えることができる。前人形とし



写真 5-7 面かぶり

ては、構造が複雑で動きが多い（写真5-8）。動作は、「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「右腕を上げる」、「右手を寄せる」、「左足を上げる」、「右足を上げる」で、八本の紐を二人で操作を行う。

台座にロクロが備わっているのは珍しい。

第三節 各山車のからくりの図面

（一）からくり人形の調査と図面化にあたって

- 1 からくり人形の内部構造や動くしくみを「機構」とする。
- 2 調査対象は、からくり人形と付属する用具とする。
- 3 調査対象は、現用を原本とし、旧体が現存している場合は参考とする。
- 4 からくりの痕跡も含めて調査を行う。
- 5 採寸は、経年使用や修理を経て、現在にいたっていることを考慮する。
- 6 記録図面として作図を行う。
- 7 部品表の材料名は、具体的に特定しない。
- 8 数値の丸め方や描写により、実際の寸法とは異なる場合がある。
- 9 描写は、製図手法の第三角法とアイソメトリック図法を用いる。

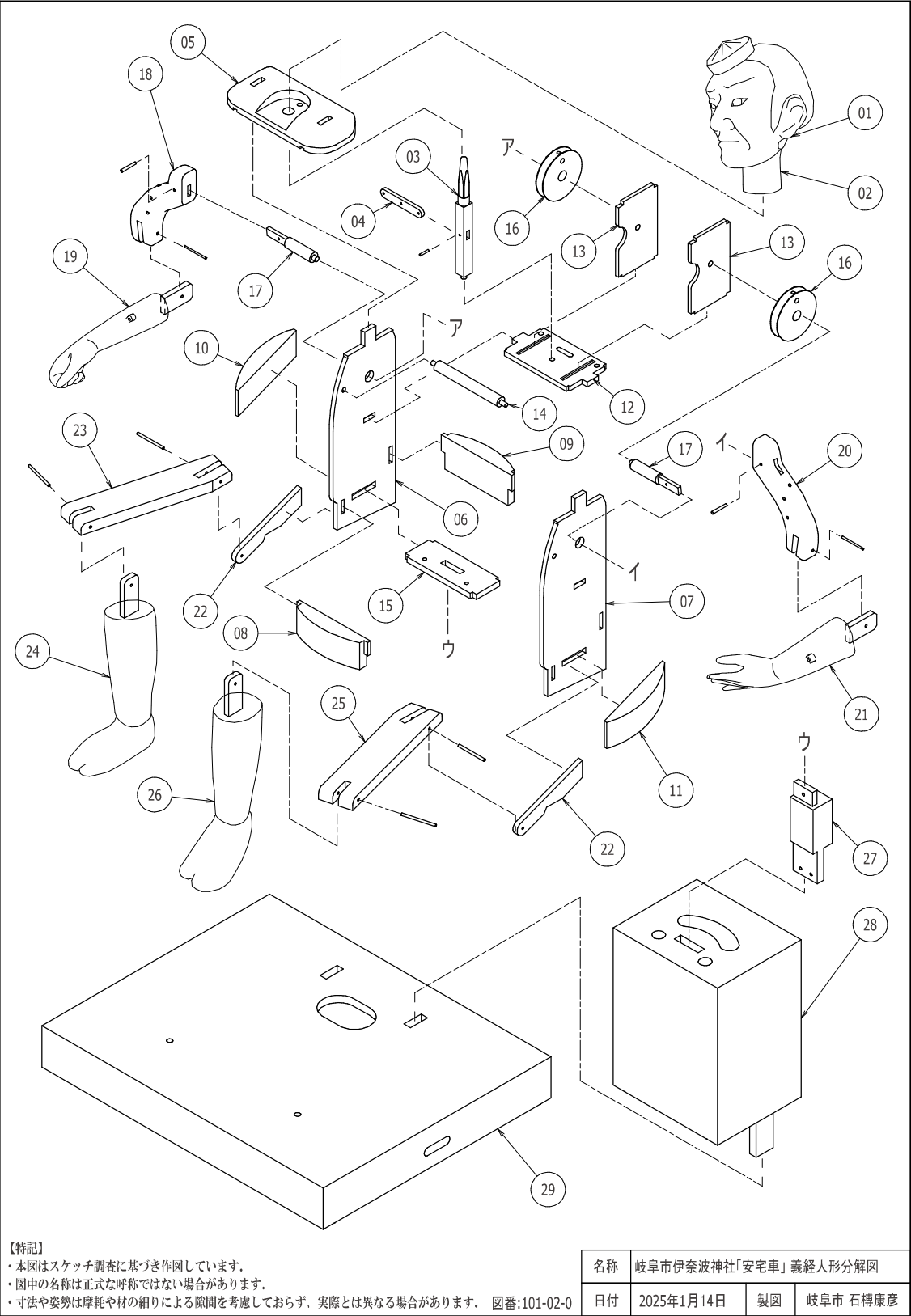


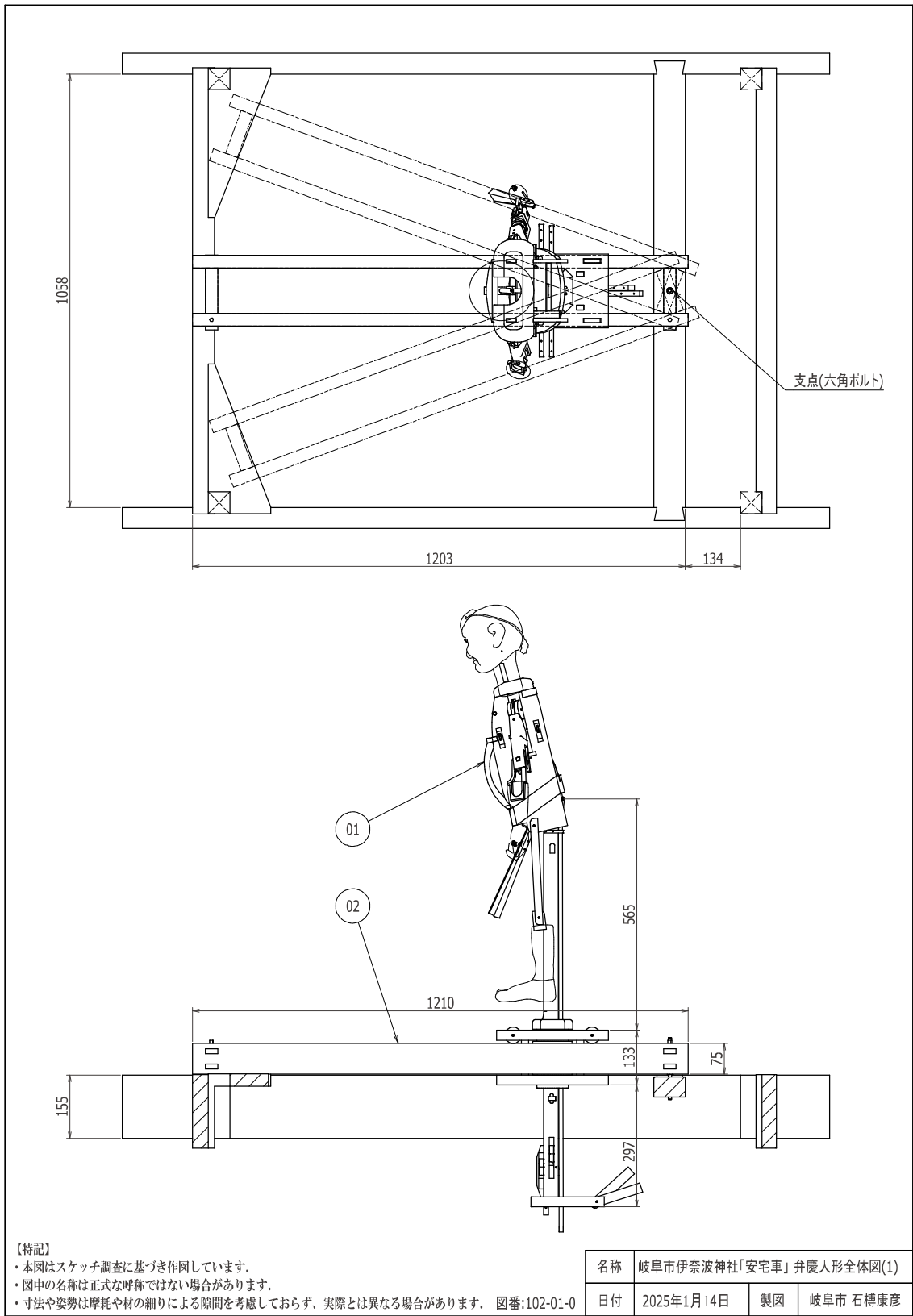
写真 5-8 構造

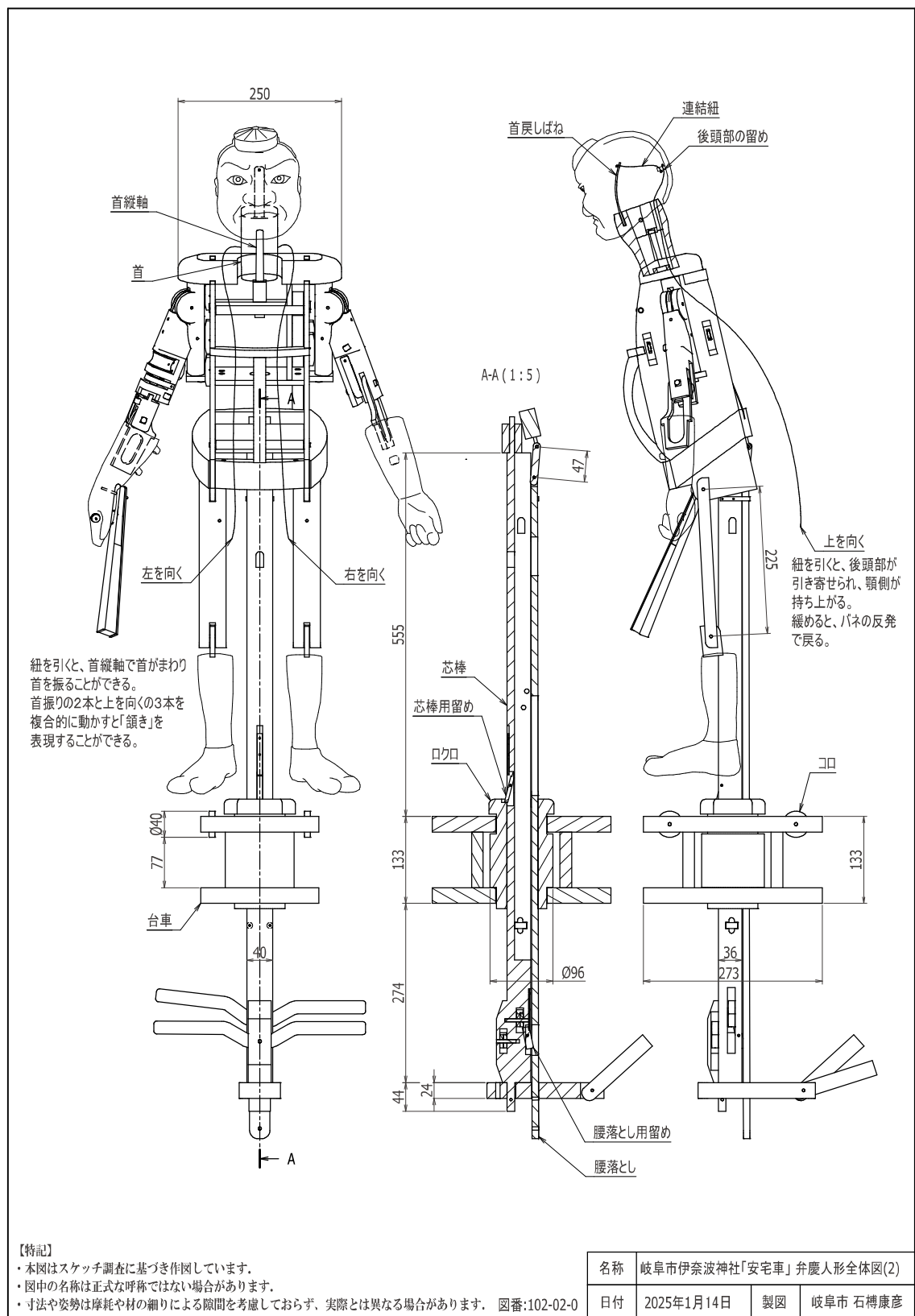


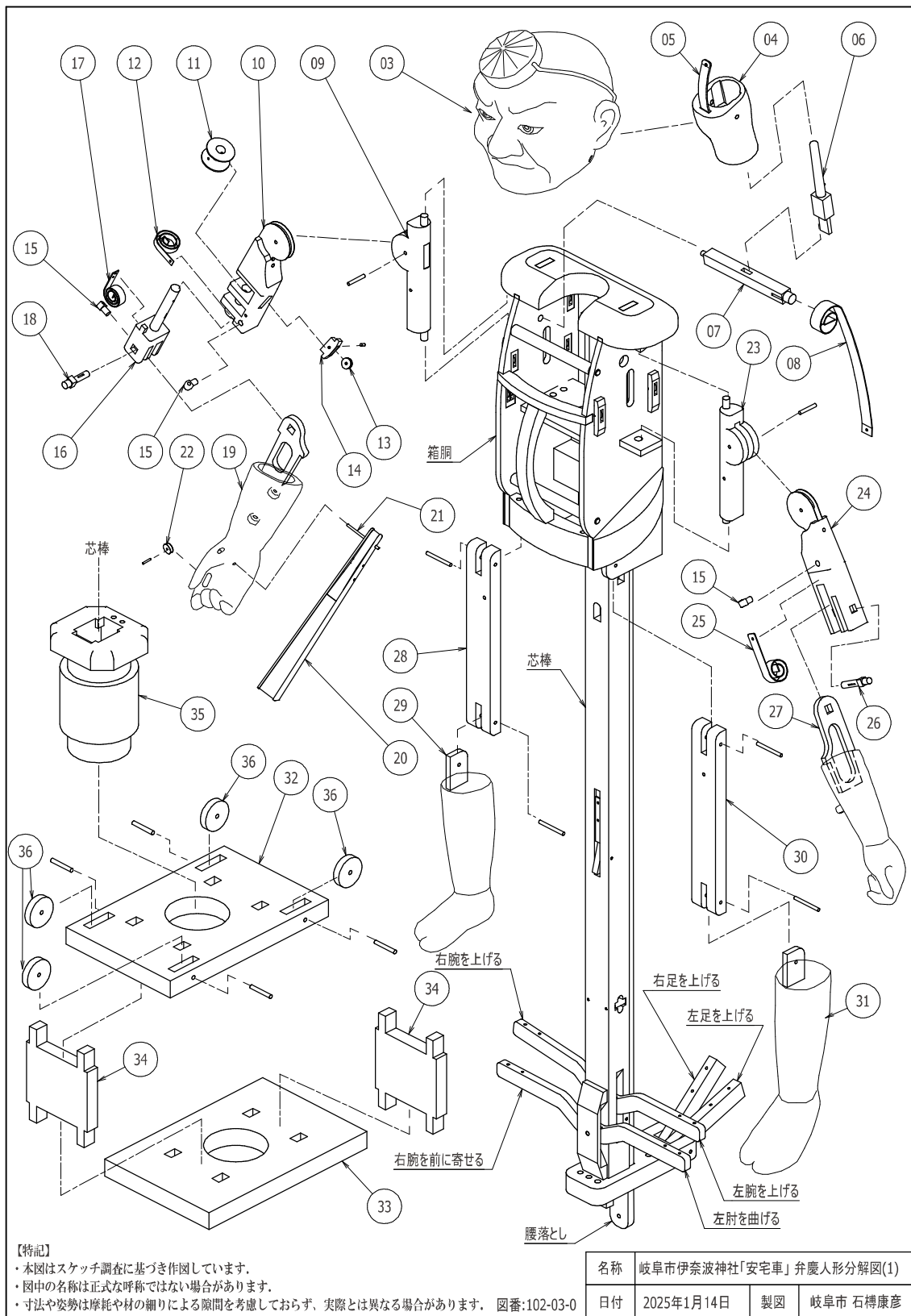
(二) 記録図面

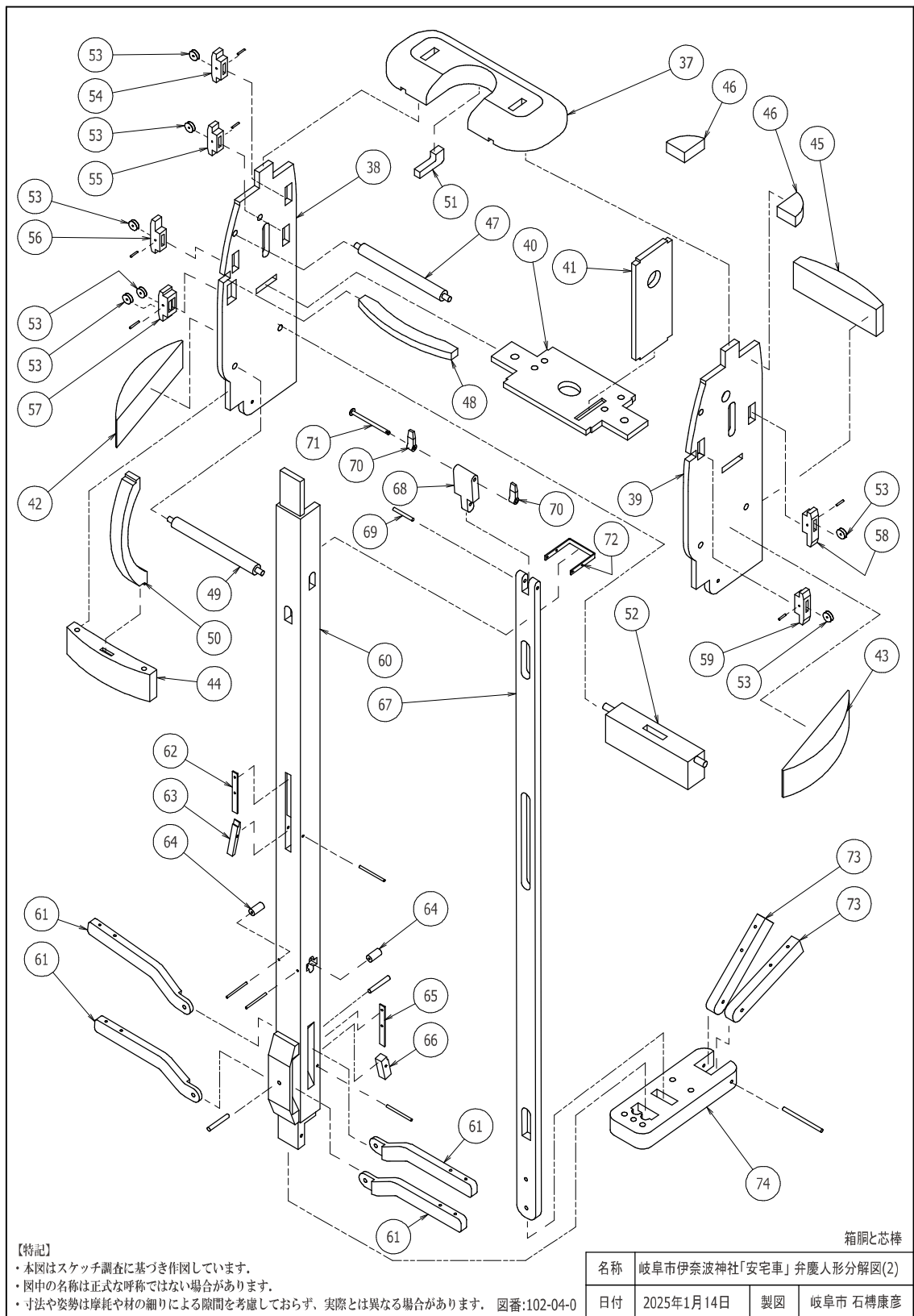
1 安宅車







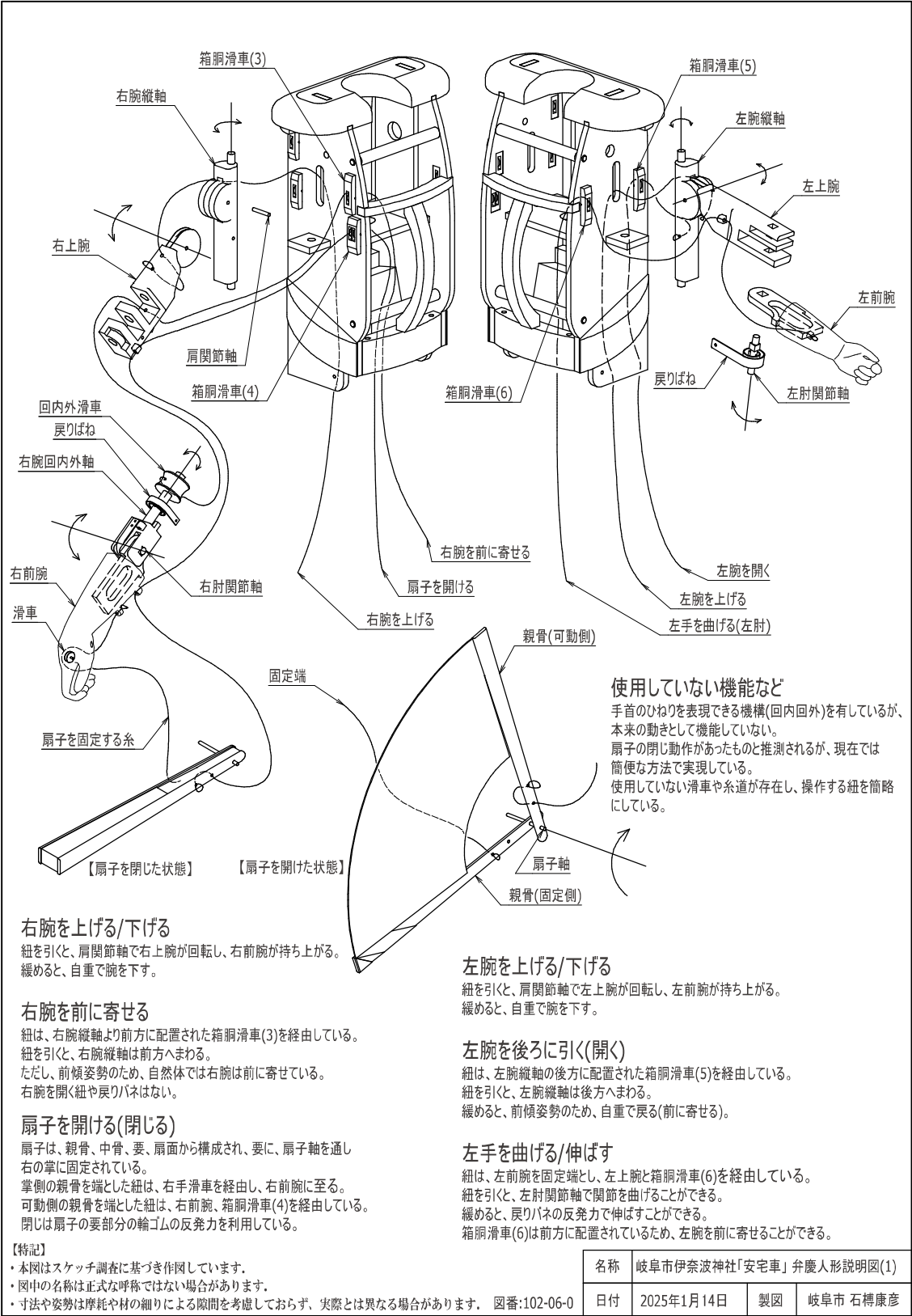




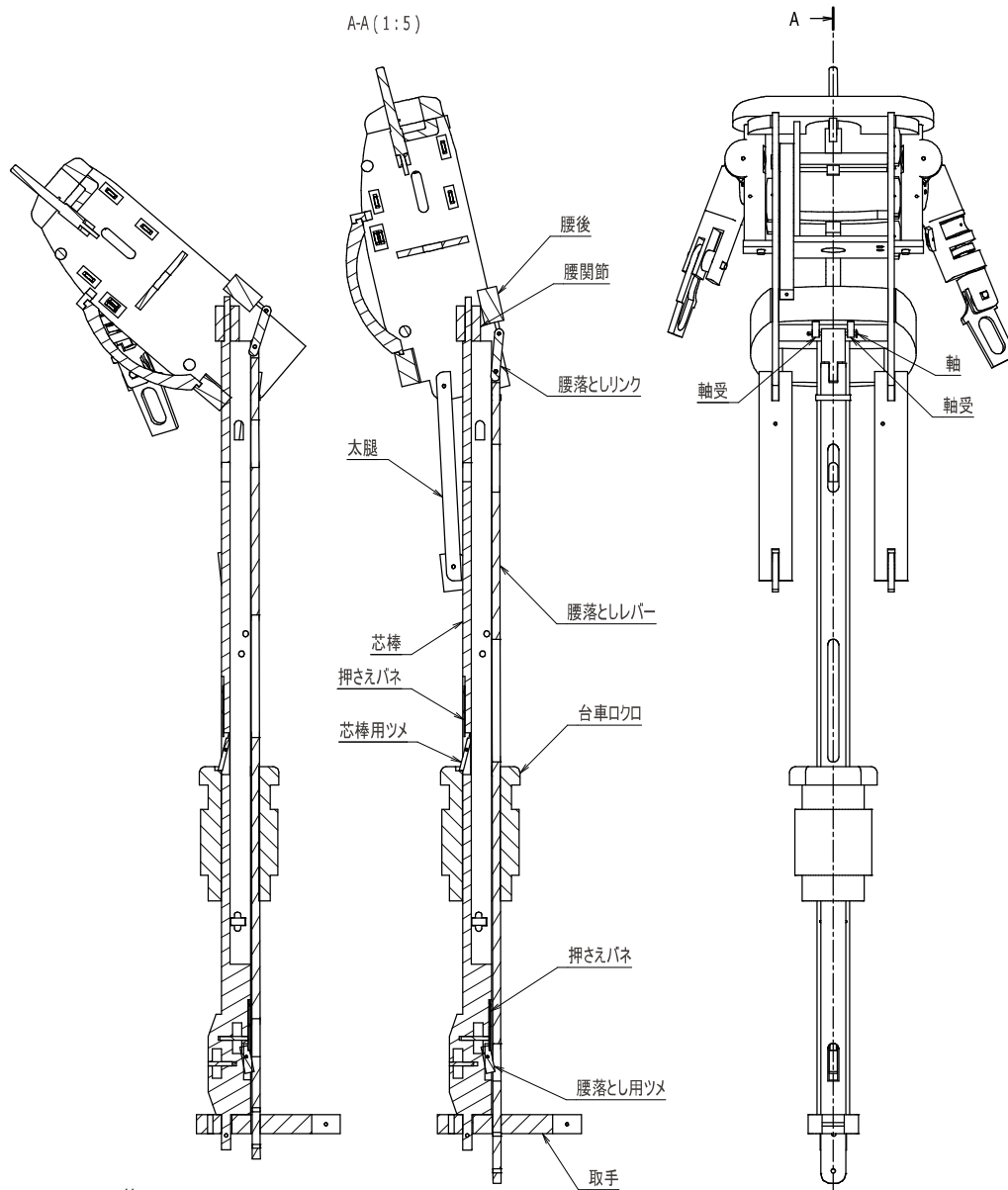


安宅車 弁慶人形 部品表(1)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
01	弁慶人形	1		
02	樋	1	木質	
03	頭	1	木質	
04	首	1	木質	
05	首戻しばね	1	鯨ヒゲ	
06	首縦軸	1	木質	
07	首横軸	1	木質	
08	首軸戻しばね	1	鋼材	
09	右腕縦軸	1	木質	
10	右上腕	1	木質	
11	右腕滑車	1	木質	
12	右腕戻しばね	1	鋼材	
13	右腕滑車	1	木質	
14	右腕滑車台	1	木質	
15	糸道	3	木質	
16	右前腕	1	木質	
17	右手戻しばね	1	鋼材	
18	右肘軸	1	木質	
19	右手	1	木質	
20	扇子	1	木質、真鍮	
21	扇子固定軸	1	真鍮	
22	右手滑車	1	木質	
23	左腕縦軸	1	木質	
24	左上腕	1	木質	
25	左手戻しばね	1	鋼材	
26	左肘軸	1	木質	
27	左手	1	木質	
28	右太腿	1	木質	
29	右足	1	木質	
30	左太腿	1	木質	
31	左足	1	木質	
32	台車上板	1	木質	
33	台車下板	1	木質	
34	台車立て板	2	木質	
35	台車口口	1	木質	
36	台車口口	4	木質	
37	肩板	1	木質	
38	右側板	1	木質	
39	左側板	1	木質	
40	中板	1	木質	

安宅車 弁慶人形 部品表(2)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
41	中縦板	1	木質	
42	腰右	1	木質	
43	腰左	1	木質	
44	腰前	1	木質	
45	腰後	1	木質	
46	腕制限	2	木質	
47	胸棒	1	木質	
48	胸枠	1	木質	
49	腰前棒	1	木質	
50	胸当て	1	木質	
51	首当て	1	木質	
52	腰関節	1	木質	
53	箱胴滑車	7	木質	
54	箱胴滑車台(1)	1	木質	
55	箱胴滑車台(2)	1	木質	
56	箱胴滑車台(3)	1	木質	
57	箱胴滑車台(4)	1	木質	
58	箱胴滑車台(5)	1	木質	
59	箱胴滑車台(6)	1	木質	
60	芯棒	1	木質	
61	操作レバー	4	木質	
62	押さえバネ	1	鋼材	
63	芯棒用ツメ	1	木質	
64	糸口口	2	木質	
65	押さえバネ	1	鋼材	
66	腰落とし用ツメ	1	木質	
67	腰落としレバー	1	木質	
68	腰落としリンク	1	木質	
69	腰落とし軸	1	真鍮	
70	軸受	2	鋼材	
71	軸	1	真鍮	
72	枠	1	真鍮	
73	操作レバー	2	木質	
74	取手	1	木質	
	ピン、木ねじ、フェルト			



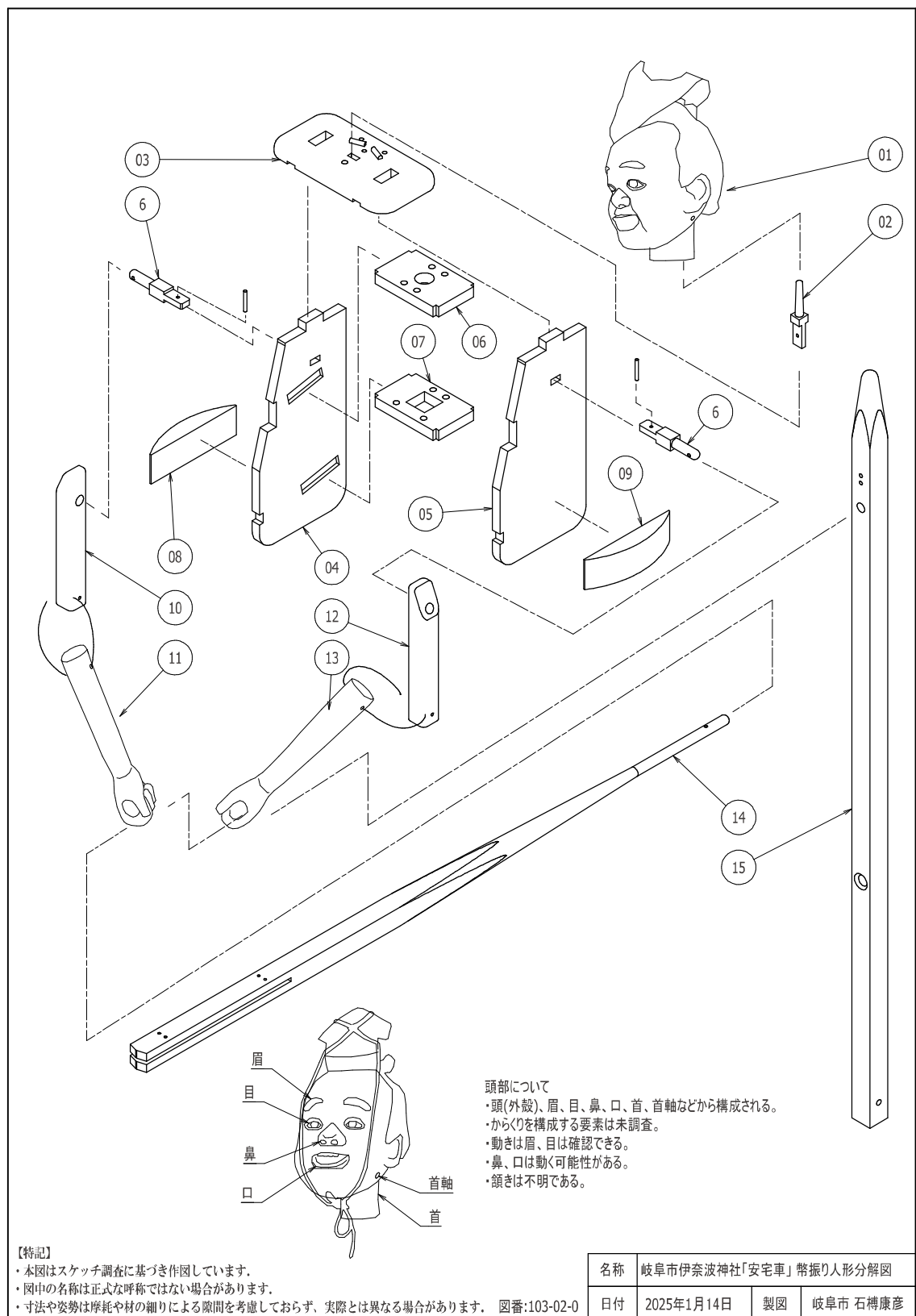
名称	岐阜市伊奈波神社「安宅車」弁慶人形説明図(1)		
日付	2025年1月14日	製図	岐阜市 石樽康彦



腰落とし
ツメを解除し腰落としレバーを上を押上げると、腰関節を中心に腰後が持ち上げられ、腰を折ることができる。重心が前方(胸側)にあるため、腰落とし用ツメを解除すると勢いよく動く。
腰落としリンクや軸受部分には過大な負担がかかり補修、補強が見受けられる。

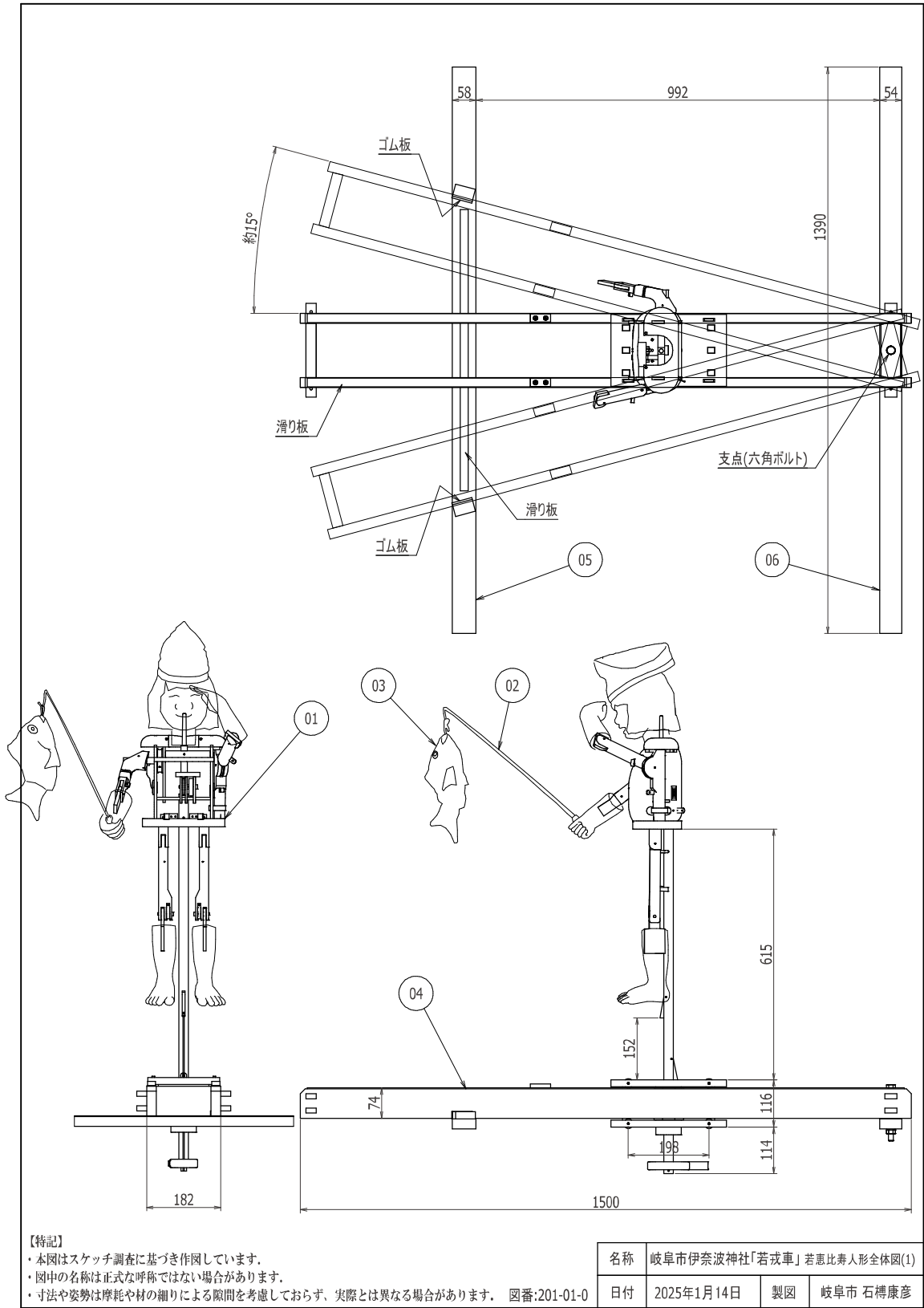
- 【特記】
- 本図はスケッチ調査に基づき作図しています。
 - 図中の名称は正式な呼称ではない場合があります。
 - 寸法や姿勢は摩耗や材の細りによる隙間を考慮しておらず、実際とは異なる場合があります。 図番:102-07-0

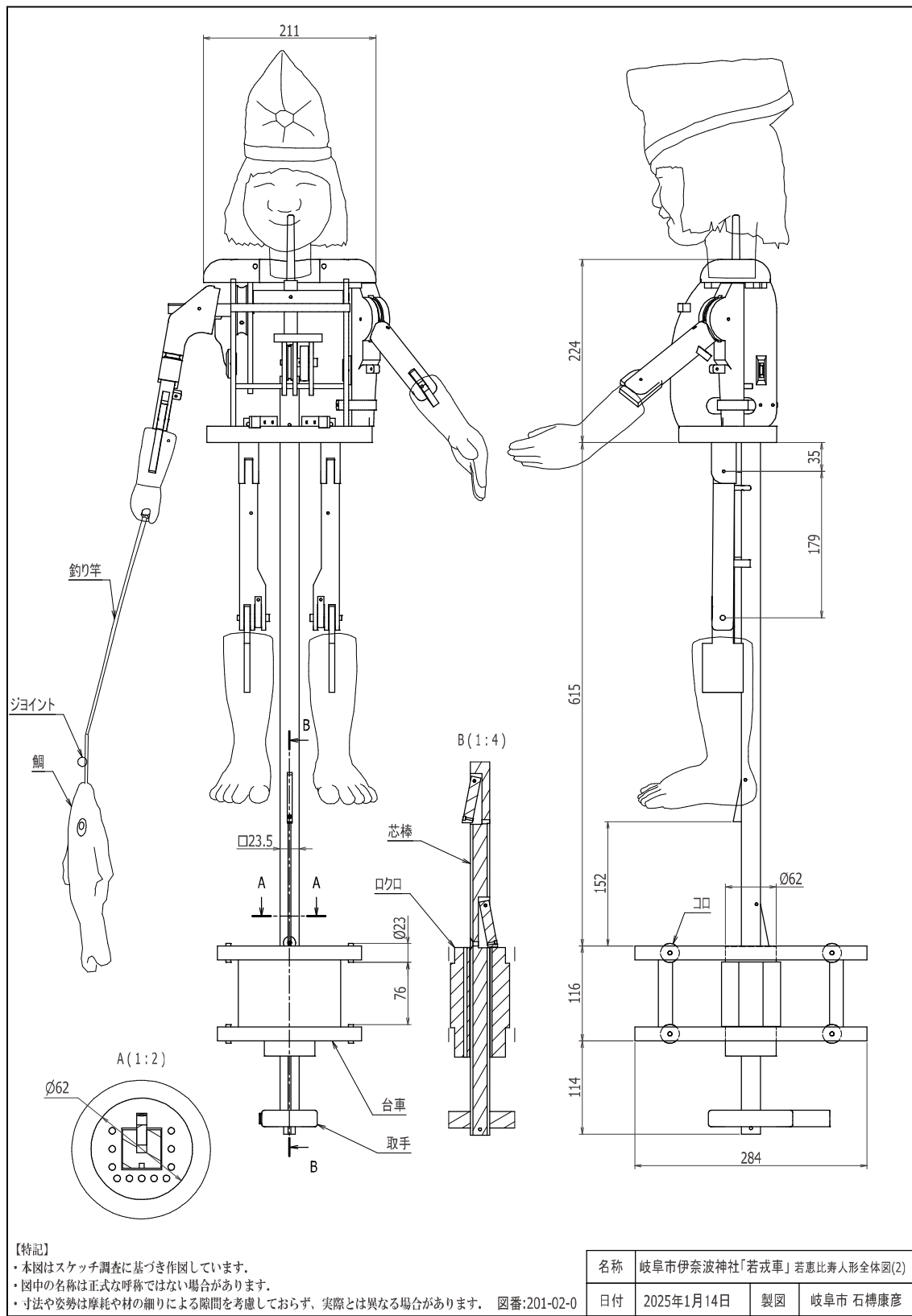
名称	岐阜市伊奈波神社「安宅車」弁慶人形説明図(2)		
日付	2025年1月14日	製図	岐阜市 石樽康彦

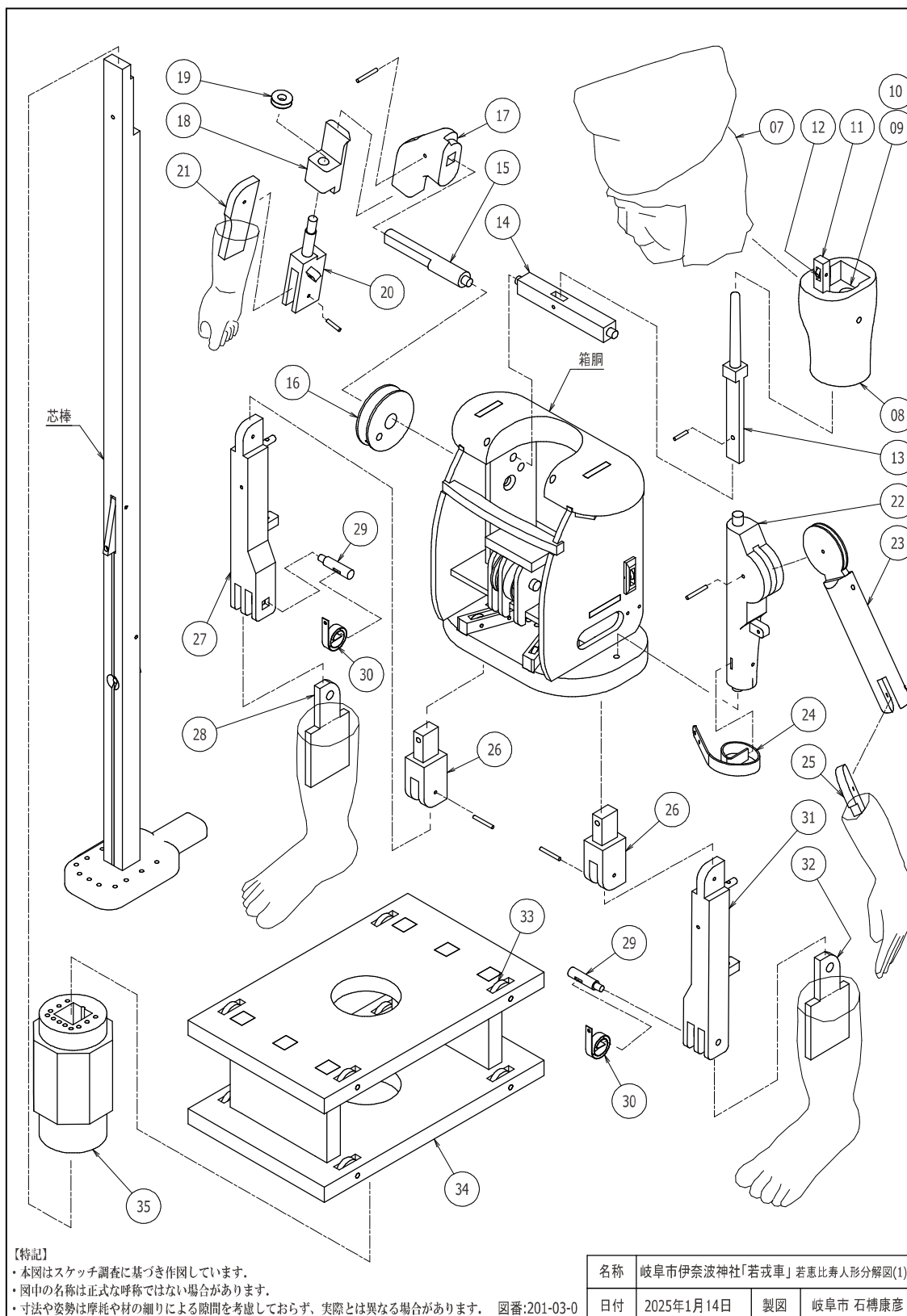


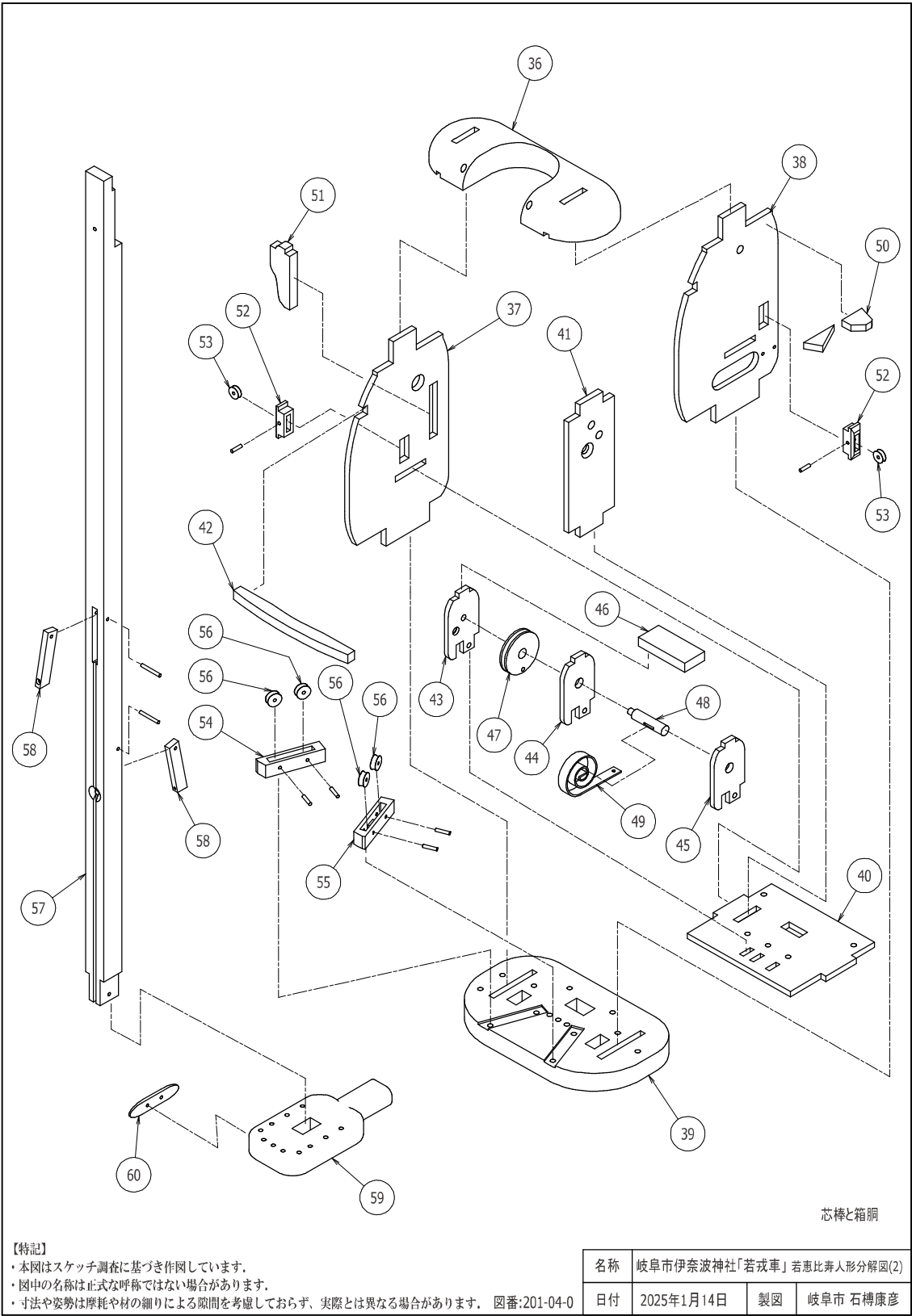
[illegible]

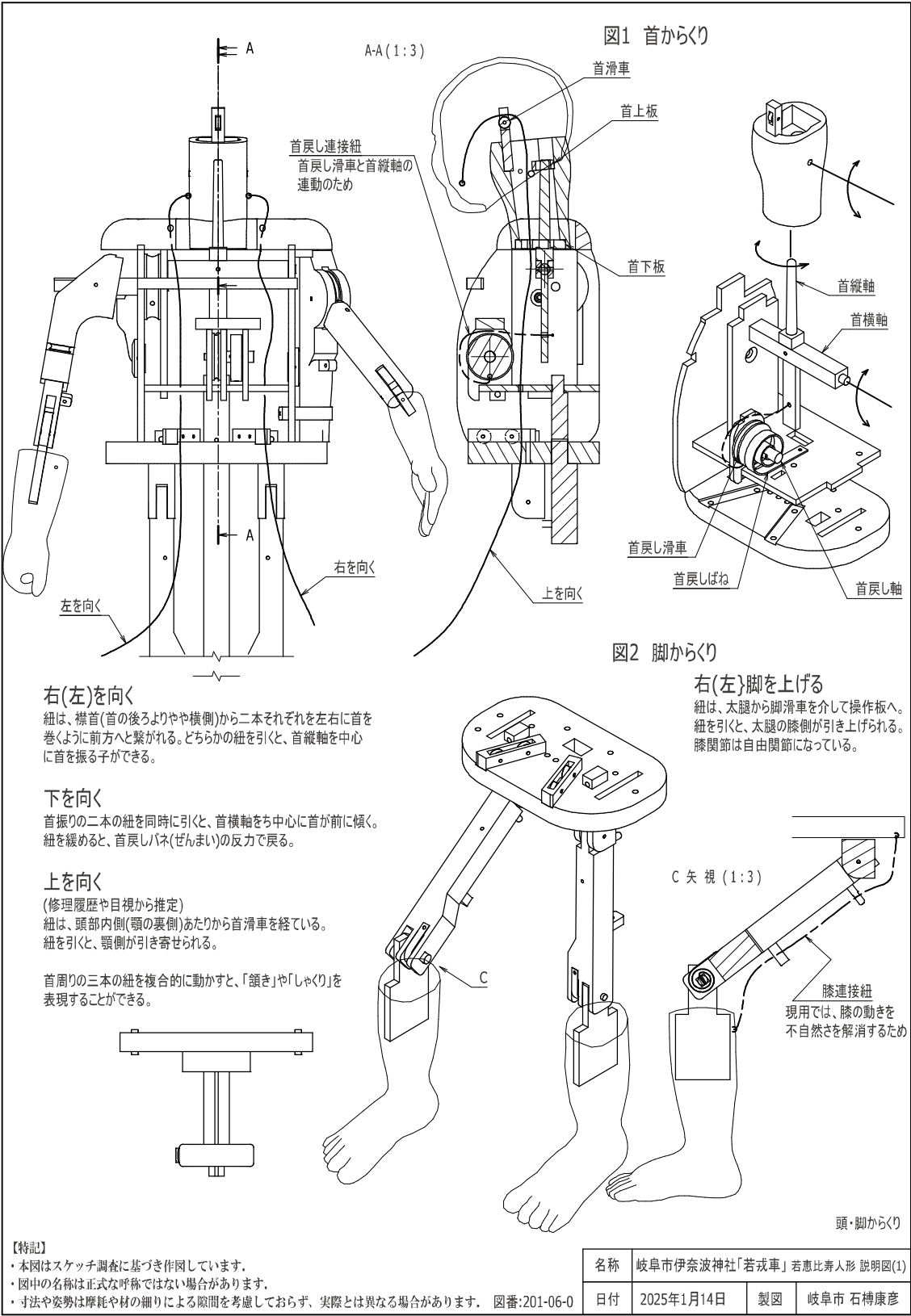
2 若戎車

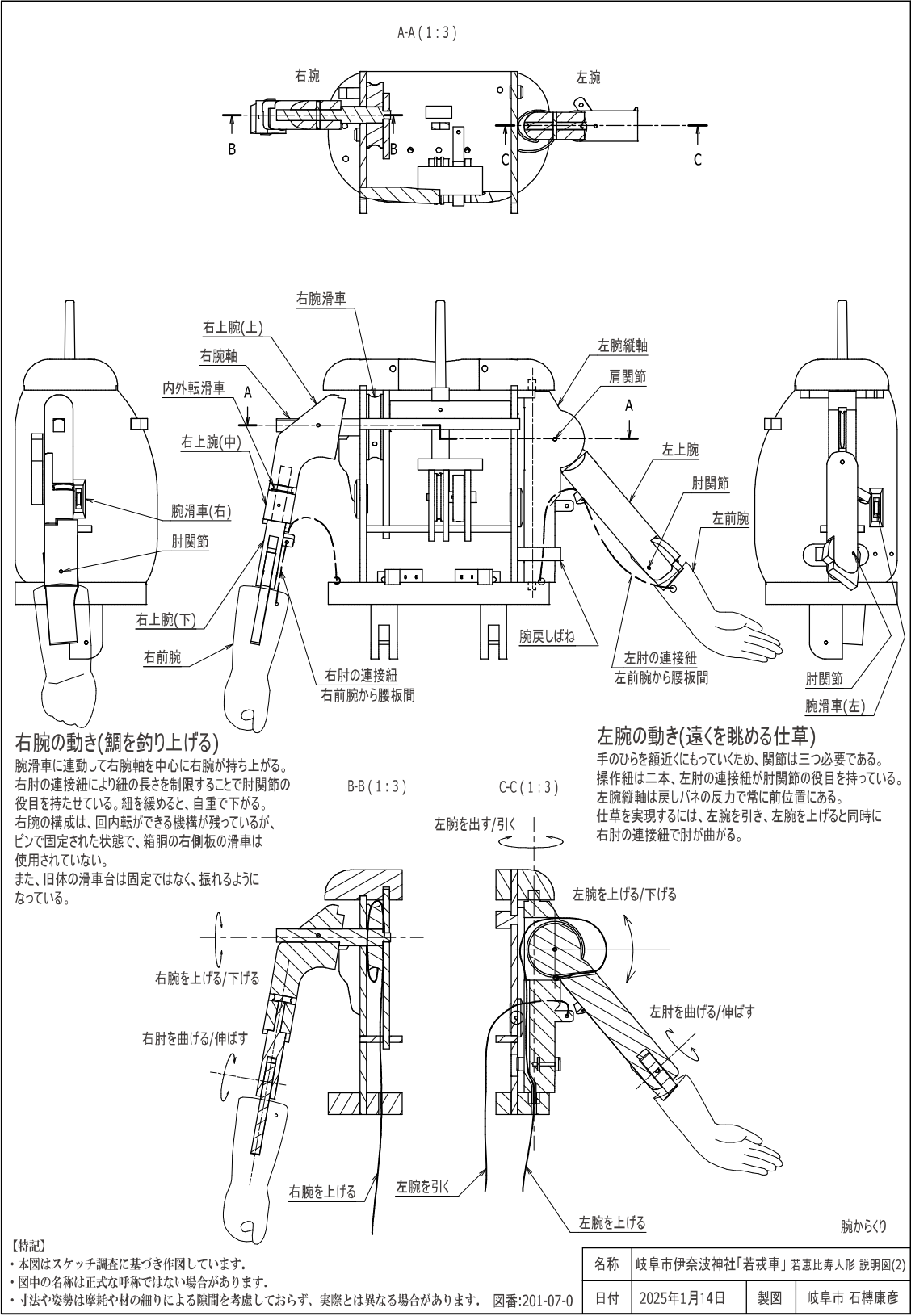


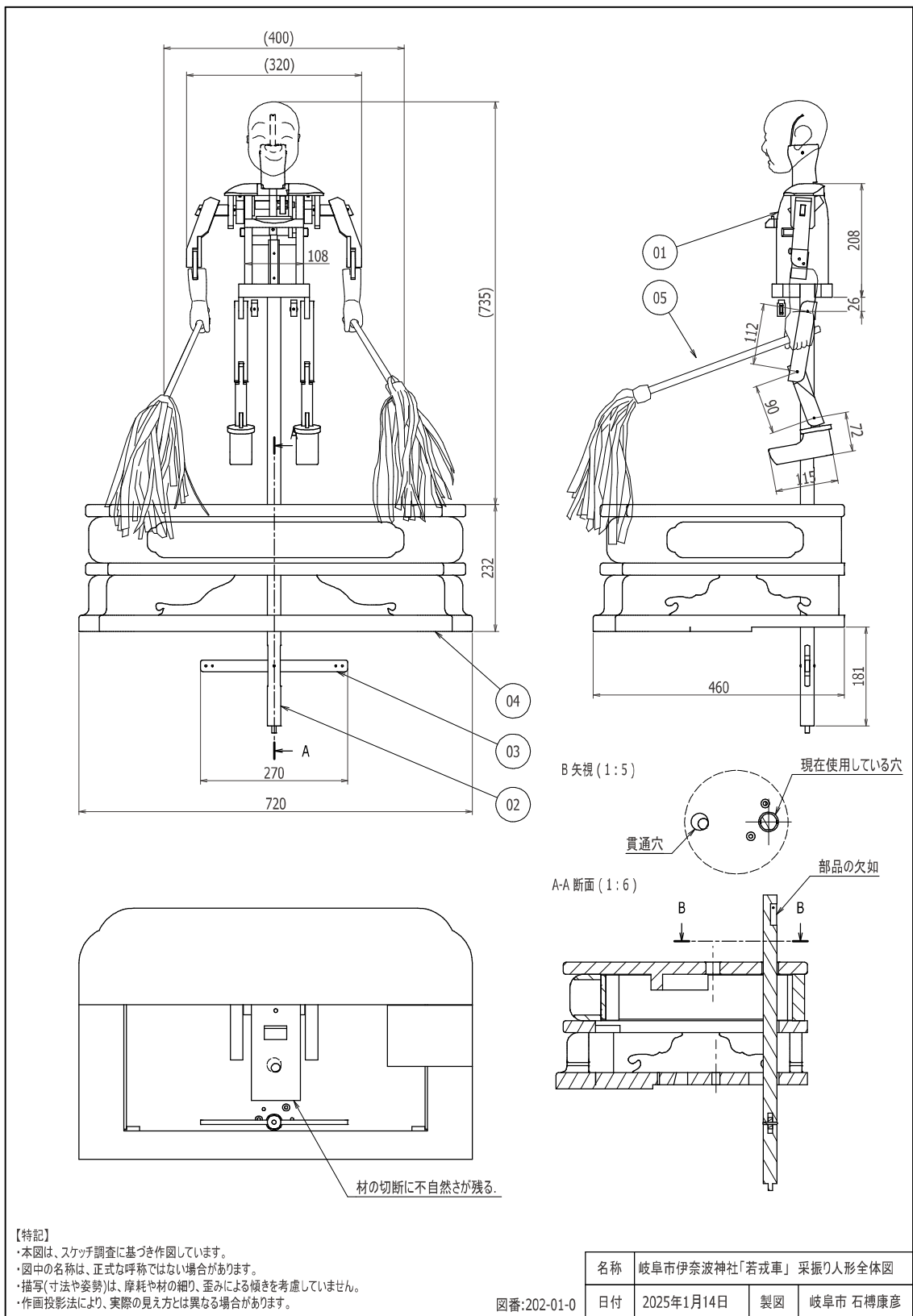


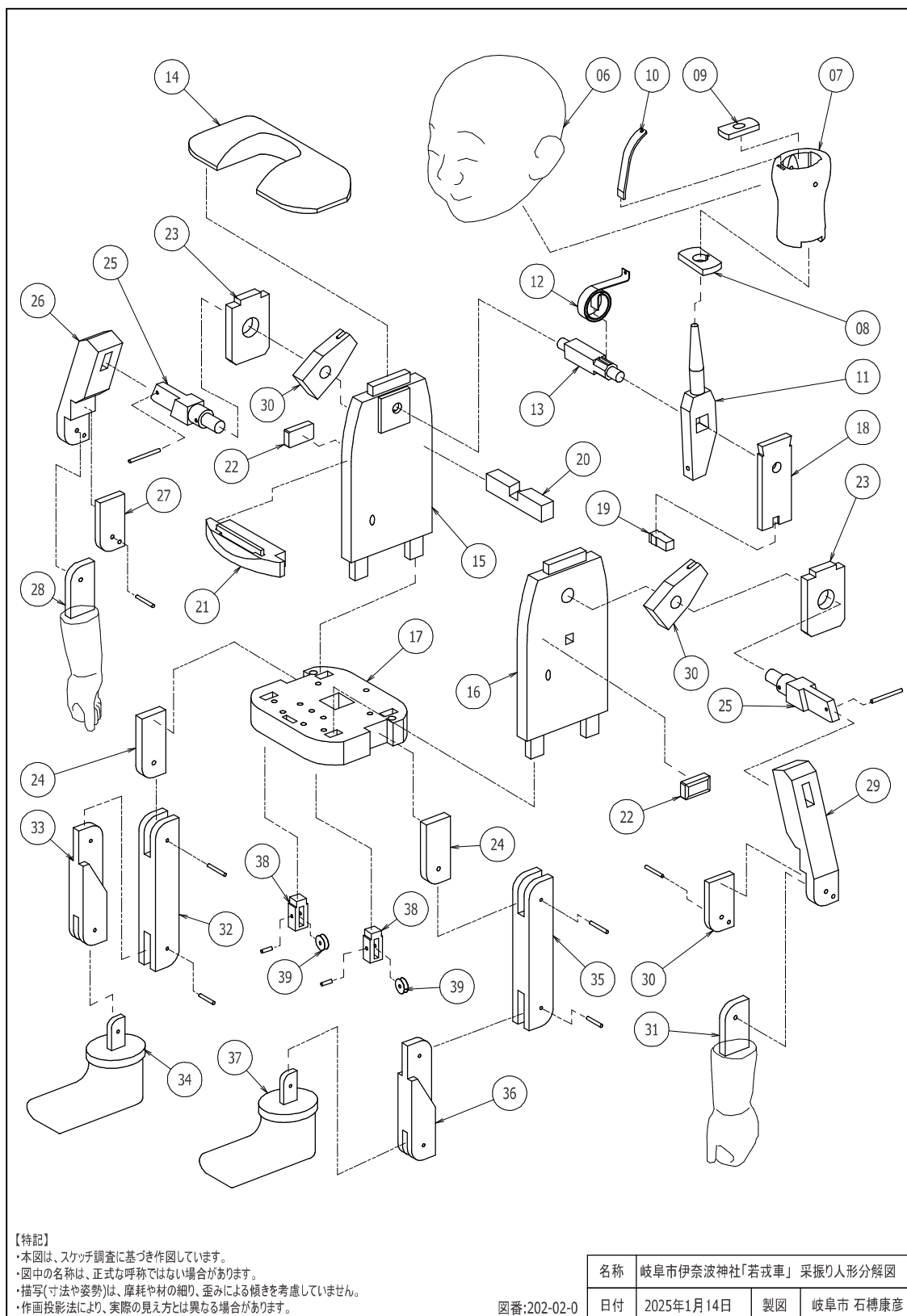






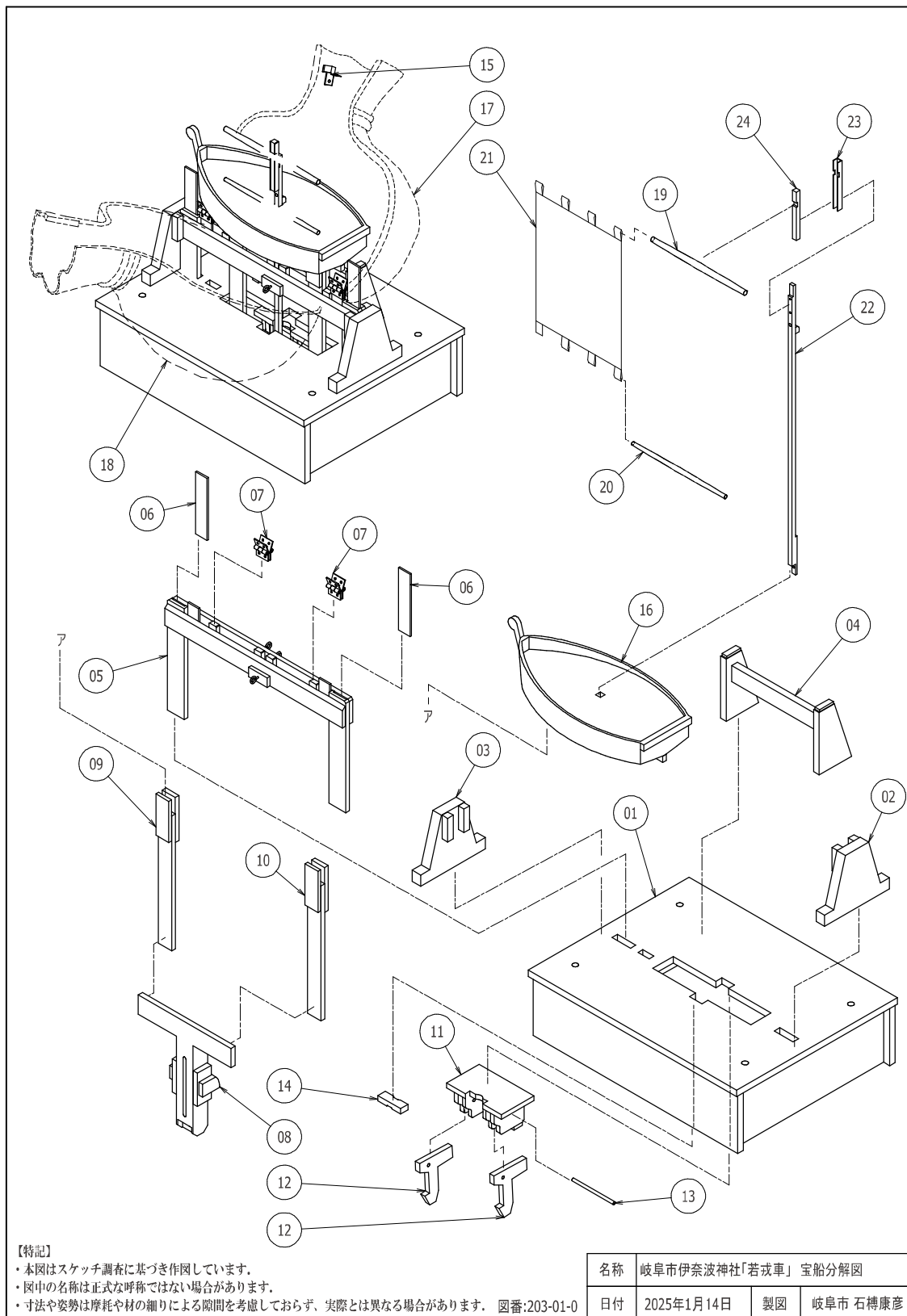






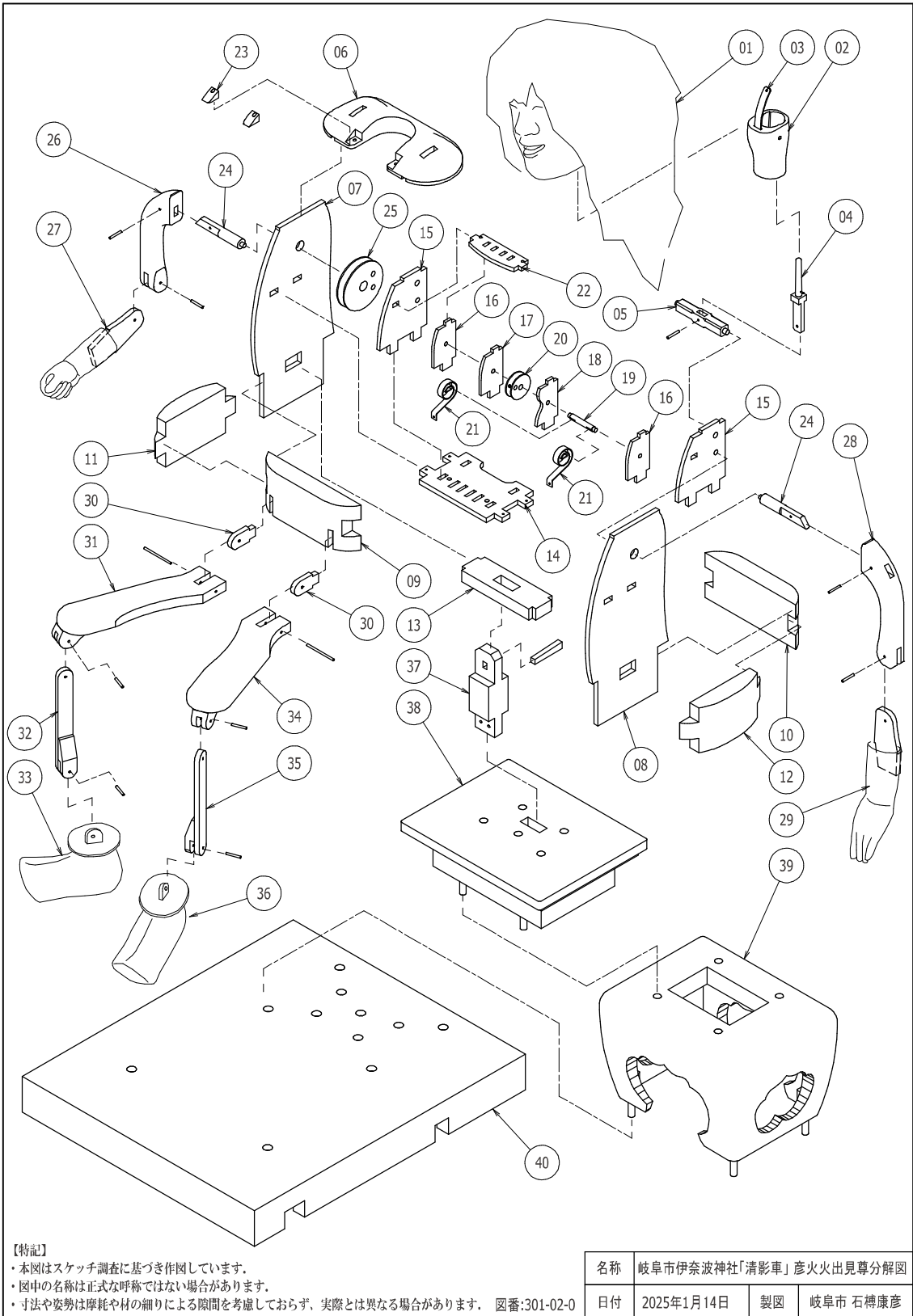


若戎車 采振り人形 部品表				
見出し番号	名称	数量	材質	備考
01	采振り人形	1	木質	
02	芯棒	1	木質	
03	操作板	1	木質	
04	台座	1	木質	
05	采	2	木質・紙	
06	頭	1	木質	
07	首	1	木質	
08	首下板	1	木質	
09	首上板	1	木質	
10	戻しばね	1	鯨ヒゲ	
11	首縦軸	1	木質	
12	ぜんまい	1	鋼材	
13	首横軸	1	木質	
14	肩板	1	木質	
15	箱胴右側板	1	木質	
16	箱胴左側板	1	木質	
17	腰板	1	木質	
18	箱胴中板	1	木質	
19	箱胴中板留め	1	木質	
20	箱胴背板	1	木質	
21	箱胴糸通し	1	木質	
22	腕留め	2	木質	
23	腕軸受け板	2	木質	
24	股関節板	2	木質	
25	腕軸	2	木質	
26	右上腕	1	木質	
27	右肘板	1	木質	
28	右前腕	1	木質	
29	左上腕	1	木質	
30	左肘板	1	木質	
31	左前腕	1	木質	
32	右太腿	1	木質	
33	右下腿	1	木質	
34	右足	1	木質	
35	左太腿	1	木質	
36	左下腿	1	木質	
37	左足	1	木質	
38	脚滑車台	2	木質	
39	脚滑車	2	木質	
	ピン類	多数		



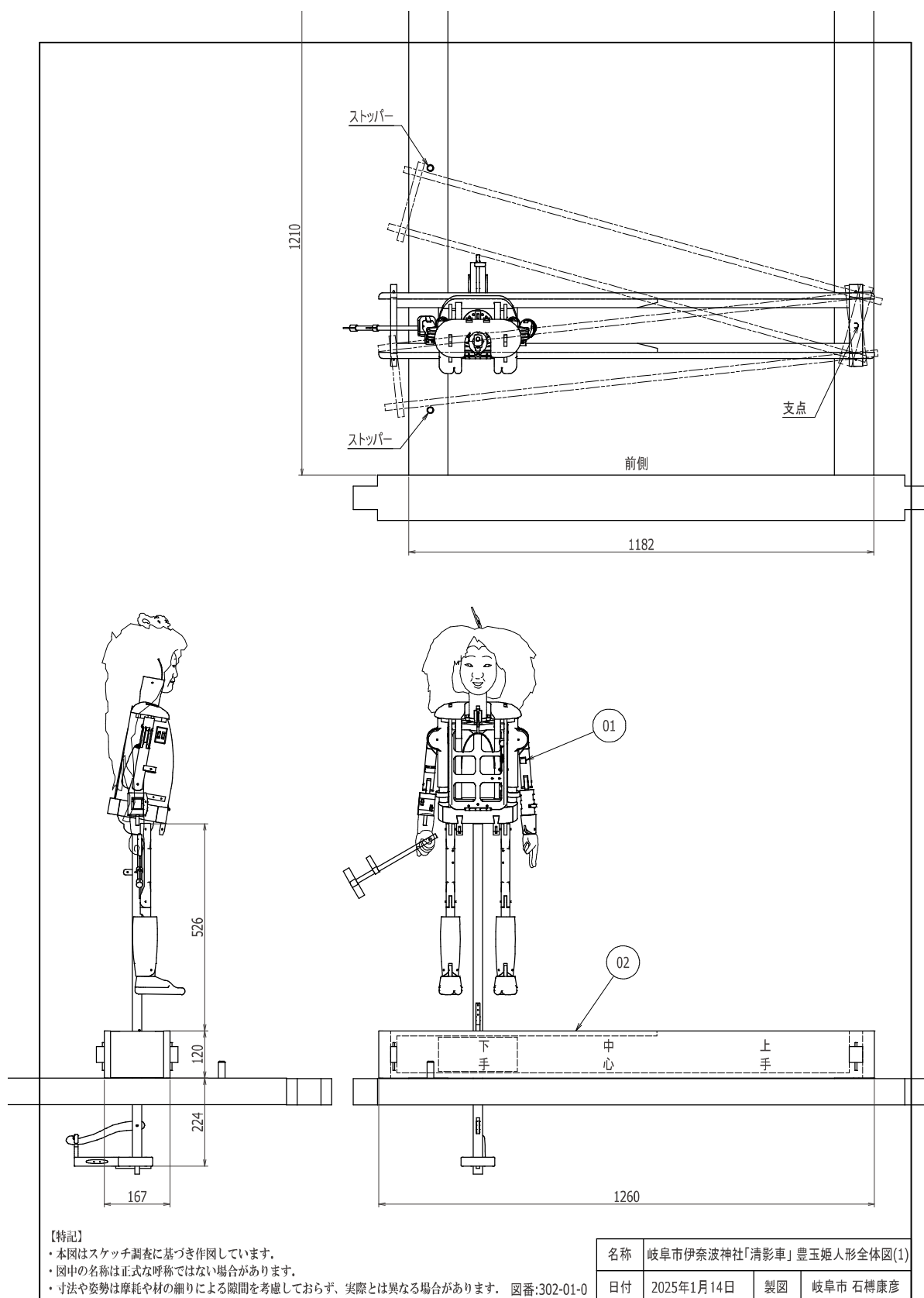
ピン・木ねじ・クッションゴム

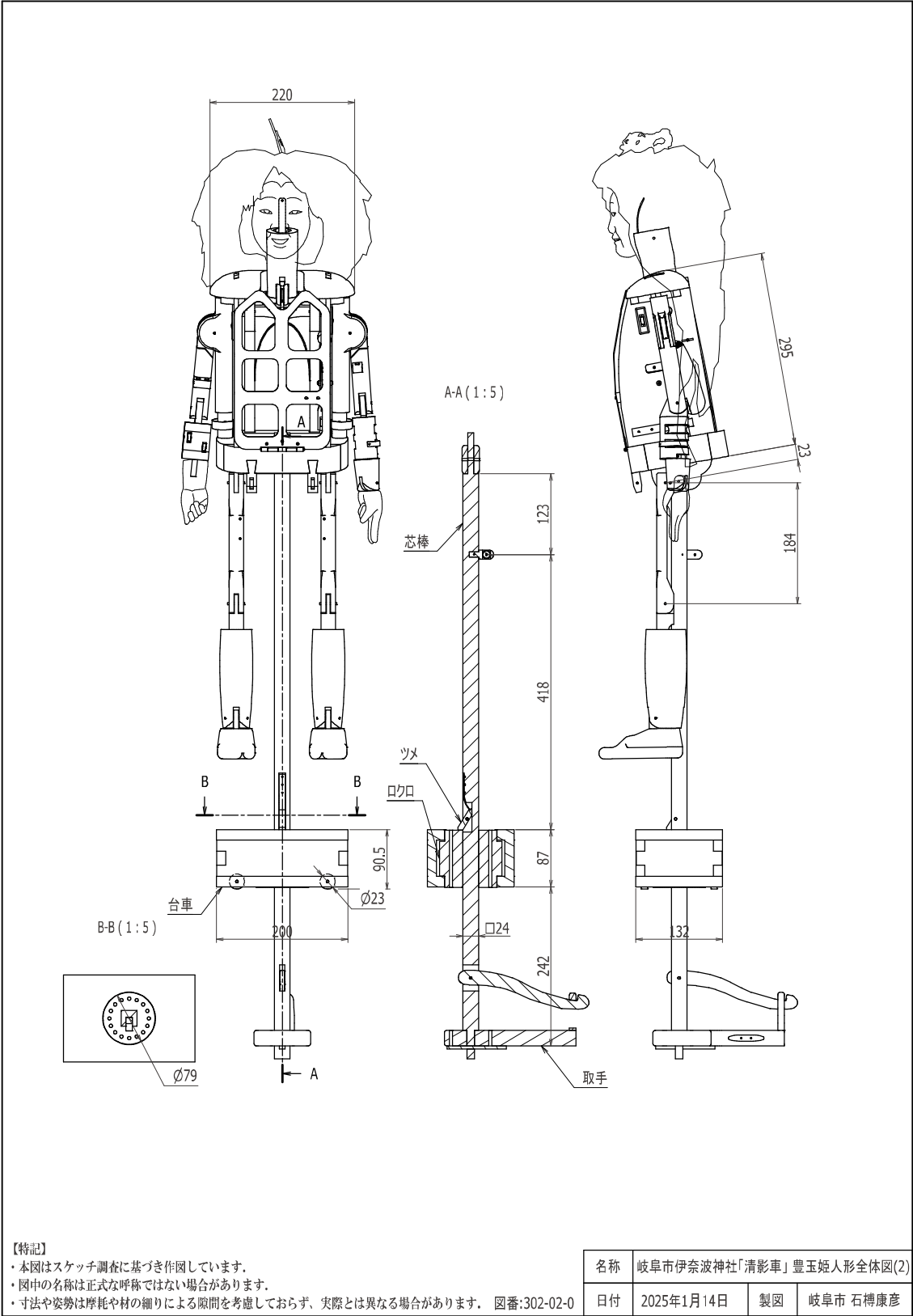
3 清影車

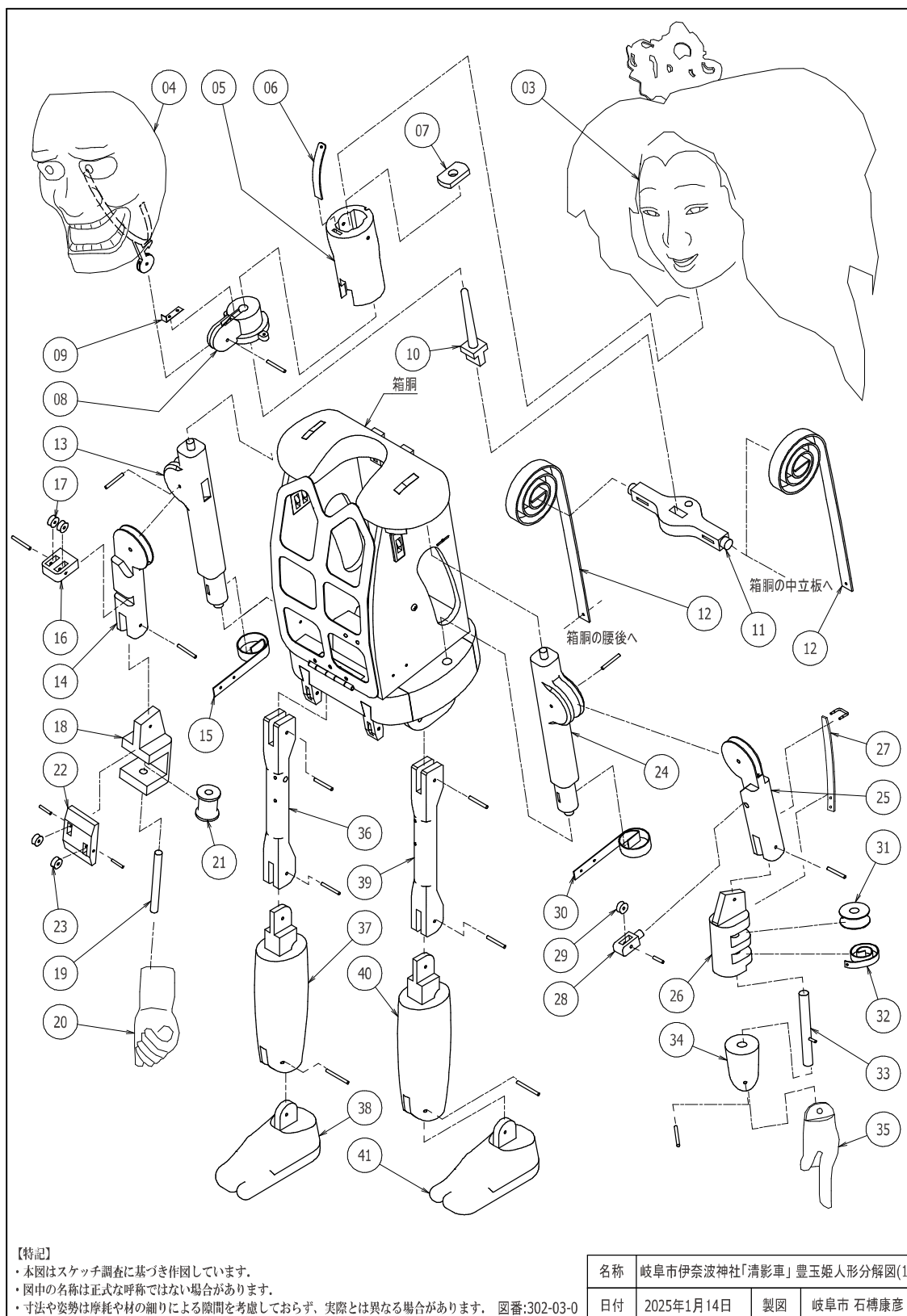


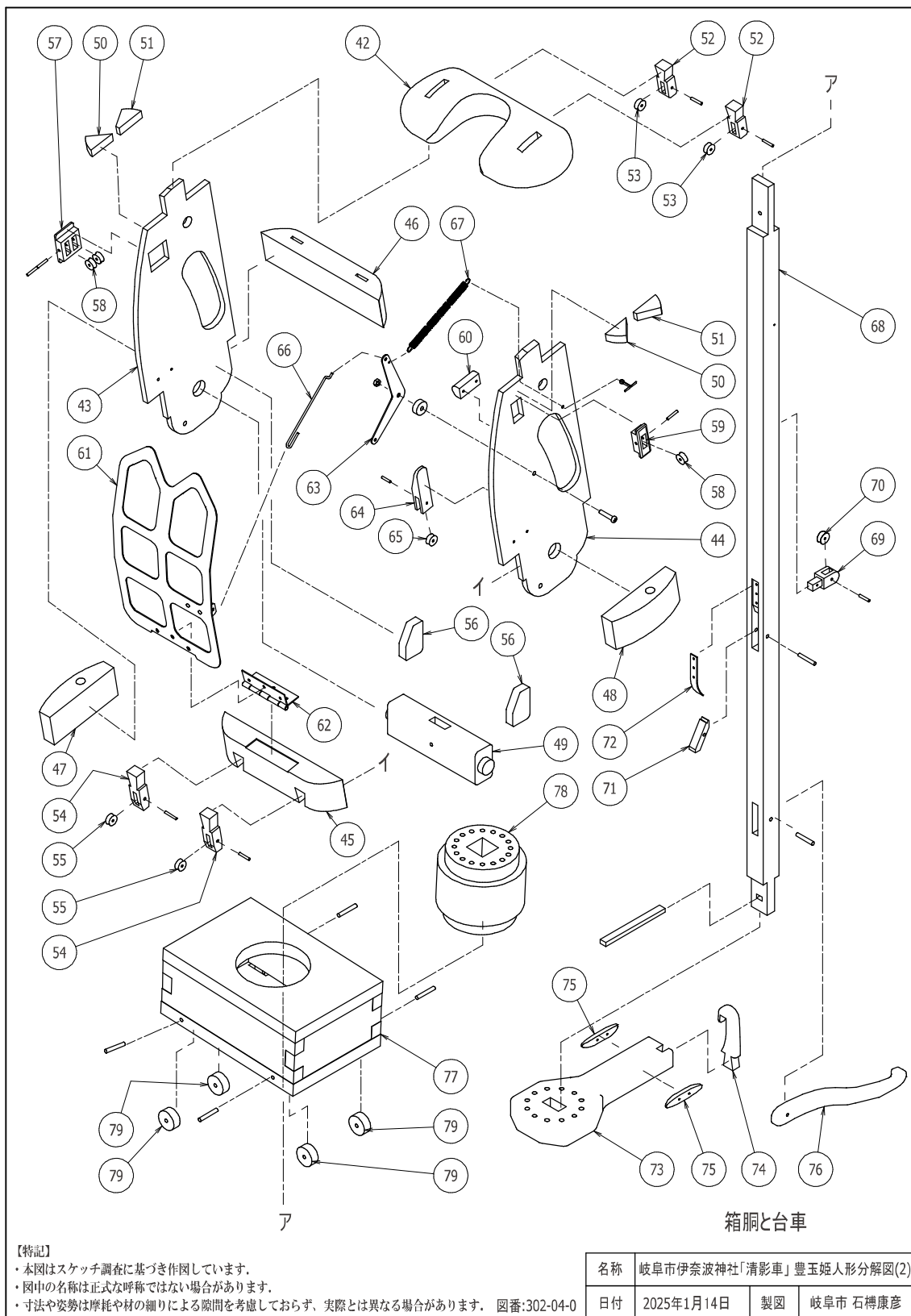


清影車 彦火火出見尊 部品表(1)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
01	頭	1	木質	
02	首	1	木質	
03	首戻しばね	1	鯨ヒゲ	
04	首縦軸	1	木質	
05	首横軸	1	木質	
06	肩板	1	木質	
07	右側板	1	木質	
08	左側板	1	木質	
09	腰前	1	木質	
10	腰後	1	木質	
11	腰右	1	木質	
12	腰左	1	木質	
13	腰板	1	木質	
14	中板	1	木質	
15	中立板	2	木質	
16	仕切り板A	2	木質	
17	仕切り板B	1	木質	
18	仕切り板C	1	木質	
19	頭戻し軸	1	木質	
20	頭戻し滑車	1	木質	
21	頭戻しばね	2	鯨ヒゲ	
22	仕切り上板	1	木質	
23	糸道	1	木質	
24	腕軸	2	木質	
25	腕滑車	1	木質	
26	右上腕	1	木質	
27	右前腕	1	木質	
28	左上腕	1	木質	
29	左前腕	1	木質	
30	股関節板	2	木質	
31	右太腿	1	木質	
32	右下腿	1	木質	
33	右足	1	木質	
34	左太腿	1	木質	
35	左下腿	1	木質	
36	左足	1	木質	
37	支柱	1	木質	
38	腰掛板	1	木質	
39	腰掛	1	木質	
40	台座	1	木質	
	ピン、木ねじ、フェルト			



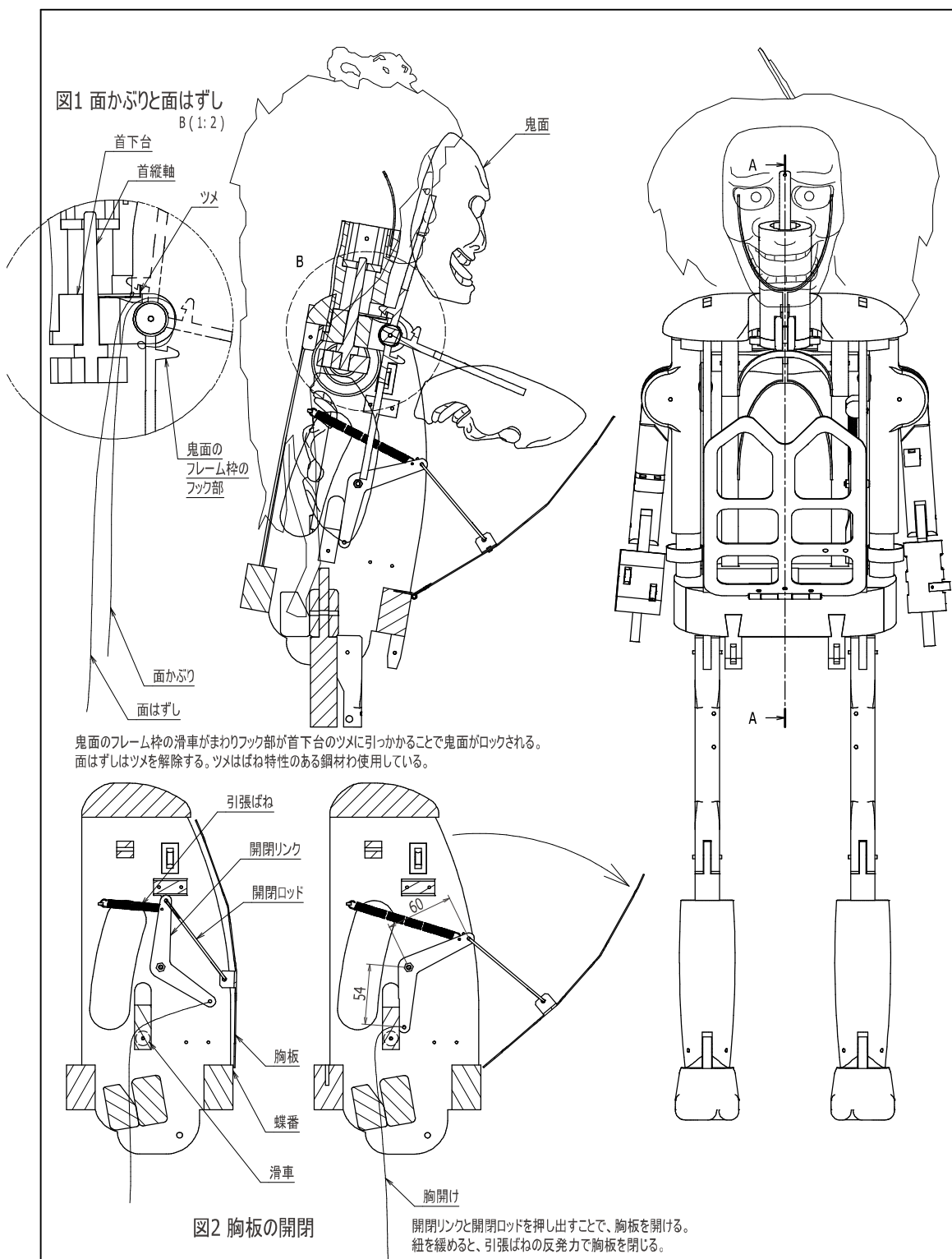






清影車 豊玉姫人形 部品表(1)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
01	豊玉姫人形	1		
02	樋	1	木質	
03	頭	1	木質	
04	鬼面	1	木質	
05	首	1	木質	
06	首戻しばね	1	鯨ヒケ	
07	首上板	1	木質	
08	首下台	1	木質	
09	ツメ	1	金属	
10	首縦軸	1	木質	
11	首横軸	1	木質	
12	戻しばね	2	りん青銅	
13	右腕縦軸	1	木質	
14	右上腕	1	木質	
15	右腕戻しばね	1	鯨ヒゲ	
16	右上腕滑車台	1	木質	
17	滑車	2	木質	
18	右前腕	1	木質	
19	右回内軸	1	木質	
20	右手	1	木質	
21	右回内滑車	1	木質	
22	右前腕滑車台	1	木質	
23	滑車	2	木質	
24	左腕縦軸	1	木質	
25	左上腕	1	木質	
26	左前腕	1	木質	
27	左手戻しばね	1	鯨ヒゲ	
28	左上腕滑車台	1	木質	
29	滑車	1	木質	
30	左腕戻しばね	1	鯨ヒゲ	
31	左回内滑車	1	木質	
32	左回内戻しばね	1	鯨ヒゲ	
33	左回内軸	1	木質	
34	右手首	1	木質	
35	右手	1	木質	
36	右太腿	1	木質	
37	右下腿	1	木質	
38	右足	1	木質	
39	左太腿	1	木質	
40	左下腿	1	木質	

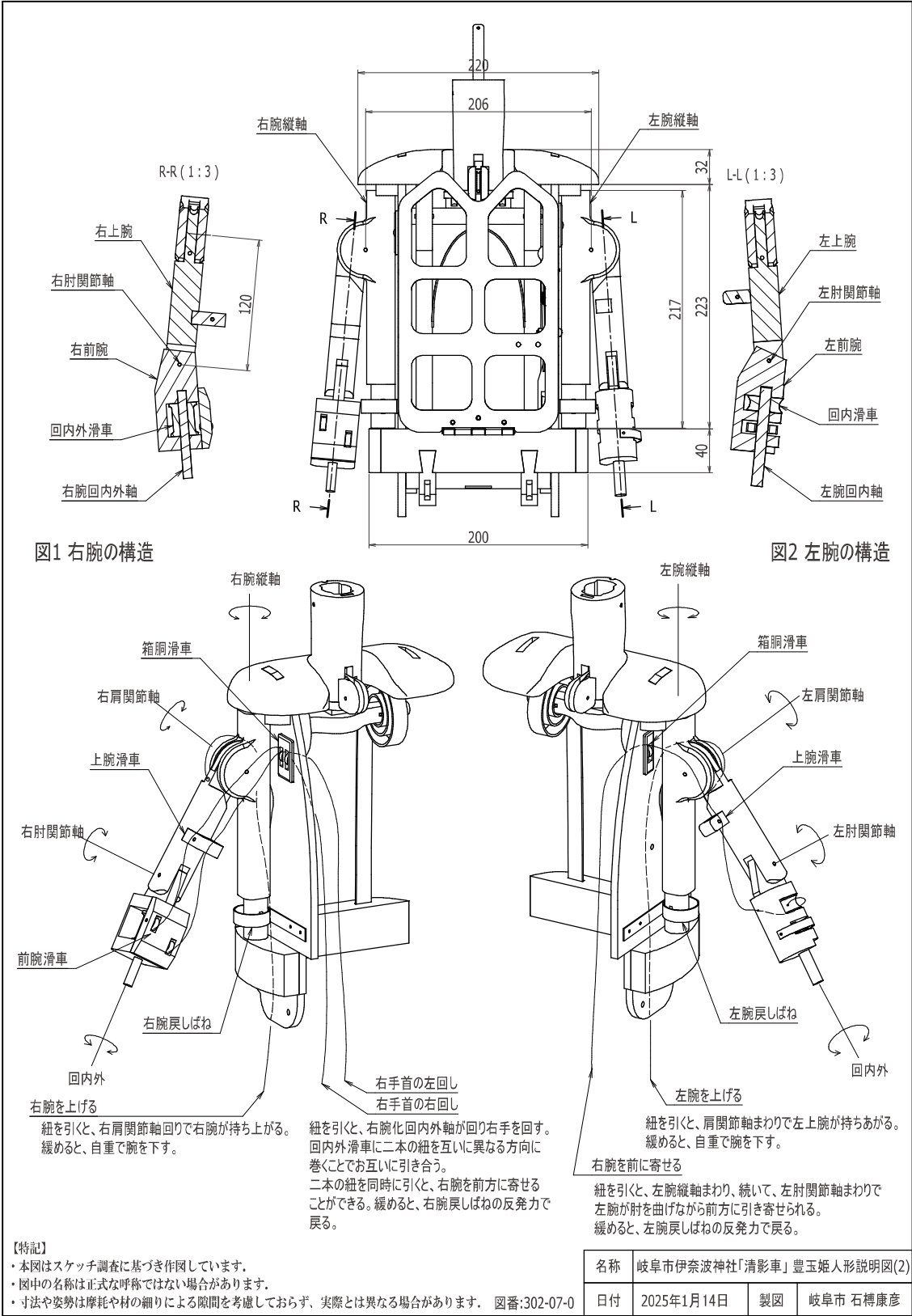
清影車 豊玉姫人形 部品表(2)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
41	左足	1	木質	
42	肩板	1	木質	
43	右側板	1	木質	
44	左側板	1	木質	
45	腰前	1	木質	
46	腰後	1	木質	
47	腰右	1	木質	
48	腰左	1	木質	
49	腰関節	1	木質	
50	腕制限前	2	木質	
51	腕制限後	2	木質	
52	肩滑車台	2	木質	
53	滑車	2	木質	
54	腰滑車台	2	木質	
55	滑車	2	木質	
56	腰制限	2	木質	
57	箱胴滑車台	1	木質	
58	滑車	3	木質	
59	箱胴滑車台	1	木質	
60	糸受け	1	木質	
61	胸板	1	真鍮	
62	蝶番	1	真鍮	
63	開閉リンク	1	真鍮	
64	胸板用滑車台	1	木質	
65	滑車	1	木質	
66	開閉ロッド	1	真鍮	
67	引張ばね	1	鋼材	
68	芯棒	1	木質	
69	芯棒滑車台	1	木質	
70	滑車	1	木質	
71	ツメ	1	木質	
72	押さえバネ	1	鋼材	
73	取手	1	木質	
74	フック	1	木質	
75	留め	1	木質	
76	操作板	1	木質	
77	台車	1	木質	
78	口口	1	木質	
79	台車口口	4	木質	
	ピン、ねじ、フェルト			

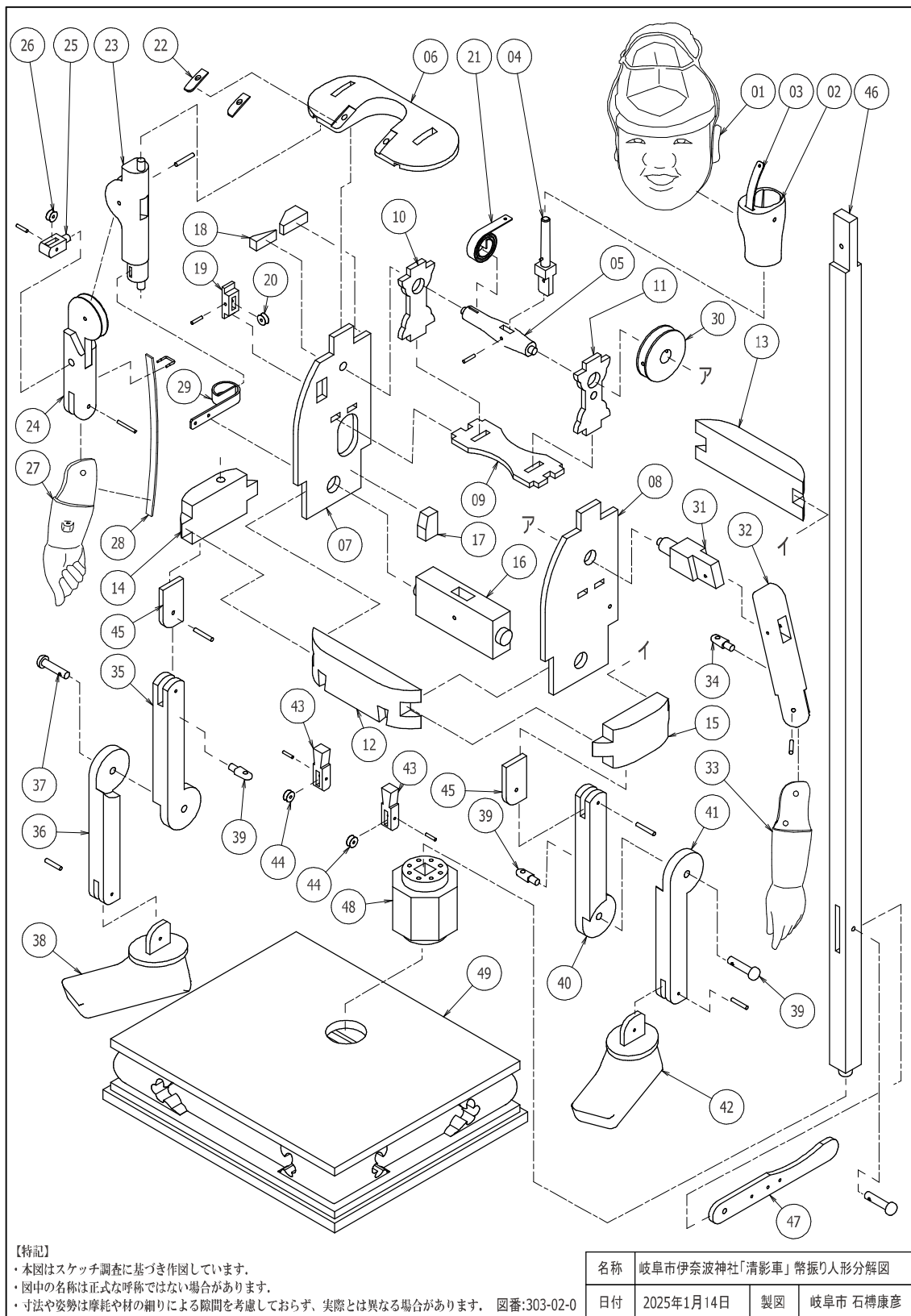


【特記】

- ・本図はスケッチ調査に基づき作図しています。
- ・図中の名称は正式な呼称ではない場合があります。
- ・寸法や姿勢は摩耗や材の細りによる隙間を考慮しておらず、実際とは異なる場合があります。 図番:302-06-0

名称	岐阜市伊奈波神社「清影車」豊玉姫人形説明図(1)		
日付	2025年1月14日	製図	岐阜市 石樽康彦







第四節 岐阜まつりのからくりの特徴

倒立や変身などの大技ではなく、舞を中心とした人形の動きをみせる演技である。これは、各関節が滑らかに動くさまに見応えを感じ、息の合った操作が求められる。滑らかな動きを実現するには、関節数を増やすことにつながり紐数も増し操作が複雑化する傾向にあるところ、紐の通し方や機構を休眠させるなどの工夫で、一本の紐で複数の関節を動かすようにしている。

人形収納箱の墨書き（注1）に基づけば、竹田源吉や荒川正兵衛の作品となるが、平成以前の修理履歴（注2）が残っていない状況なので、どのような状態で現在にいたっているか不明である。原本に近いものなら貴重である。また、私的な推論に過ぎないが、若戎車の轆振り人形の作風や構造は、箱書きの義経人形と若恵比寿人形とは異なり、もう一世代前という印象を受ける。今後の調査研究に期待したい。

からくりの要素技術として、「うなずき」、「会釈」、「お辞儀」、「面かぶり」、「扇子」、「変顔」が挙げられ、具体的に見ていく。

うなずきは、頭と首を接続する首軸で回る所作とし、動作は「顔を上げる」とする。紐を引いて緩める操作で実現している。八つのからくり人形のうち、七つに備わっている（注3）。

会釈は、首縦軸に直交した首横軸で回る所作とし、動作は「下を向く」とする。首振りの二本の操作紐を同時に引くことで実現している。八つのからくり人形のうち、六つに備わっている。

お辞儀は、支柱に胴体を固定する部材の腰関節軸で回る所作とし、動作は「腰落とし」、「腰折れ」とする。弁慶人形と豊玉姫に備わっている。

面かぶりは、名古屋市の紅葉狩車と神皇車、大山市の浦島と寿老台、大垣市の相生と愛宕などでみられる。お面は、喉元にある面かぶり滑車から延びた

柄に取り付けられ、胸中に隠されている。胸板を開けて面をかぶる。

構成される部品の多くは真鍮製で、胸板の開閉機構にレバー式か滑車式かの違いはあるものの原理は同じである。図5-3は滑車式の大垣市岐阜町「愛宕」の武内宿祢である。

扇子の開閉は、名古屋市の紅葉狩車、大山市の住吉台と老松と宝袋、大垣市の相生と布袋と愛宕などでみられる。扇子滑車を用いる機構と扇子の骨に直接紐をつなげる機構に分かれる。前者は掌に扇子滑車を埋め込み、これに扇子の骨を固定する。一方の扇子の骨は右手側に固定され、扇子の要を中心に扇子滑車が回ると、扇子が開く。後者は右の掌の軸に扇子の要を挿し込み、開ける方の扇子の骨に二本の紐をつなげ、一本は外側から潜らせる。二本の紐は互いに引き合う。一方の骨は掌側に固定される。図5-4は扇子滑車を用いた開閉構造を示す。

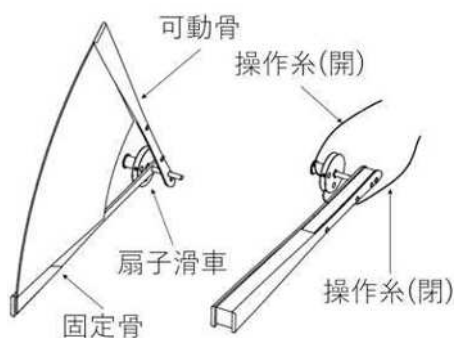


図5-4 扇子開閉の構造

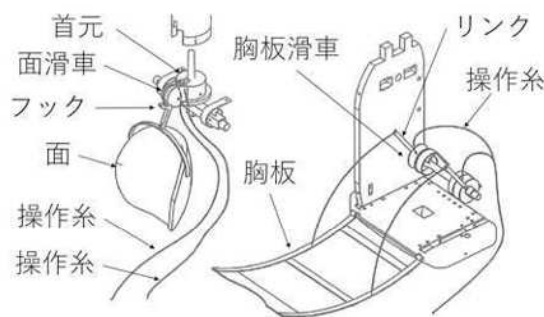


図5-3 面かぶりの構造

他の地域での変顔（注4）は、目を変える、舌を出す、口を開ける、の組み合わせであるが、安宅車の幣振り人形は眉が動く。現状では眉の動きが悪く、目、鼻、口の機能を有しているが動かない。

今回の調査において、からくりの痕跡やからくりの機能を有した状態で休眠していること。また、操作紐が切れたり、バネが折れたりして修繕が必要なことがわかった。今後、修理修復を行う場合には、その価値を損なわない取り組みが必要である。

（注）

（注1）製作者と製作年について、頭内に墨書きする場合がある。

義経人形の箱の墨書では、細工人は「荒川正兵衛」で「明治二十一年」出来とある。五代目玉屋庄兵衛の没年は明治二十一年であり、晩年の作の可能性がある。若恵比寿人形の箱の墨書では、「嘉永五年」「竹田源吉」の作とある。修理履歴報告書によると、「顔を

表 5-1 人形師の略歴

人形師	年号	場所	
竹田源吉	天保 7 (1836) 年	中川名古屋市区牛頭天王「蓮台」	
	天保13 (1842) 年	名古屋市筒井町神皇車「神功皇后」	
	弘化 2 (1845) 年	半田市亀崎石橋組「布さらし」	
	弘化 3 (1846) 年	名古屋市中村区紅葉狩車「磨振り人形」	
	嘉永 5 (1852) 年	岐阜市若戎車「若恵比寿人形」	*
	安政 4 (1857) 年	名古屋市中村区紅葉狩車「更科姫」	
	安政 5 (1858) 年	知多美浜町上野間日之出車	
五代目玉屋庄兵衛	文政10 (1827) 年	犬山市梅梢戯「倒立唐子」	
	天保 6 (1835) 年	常滑市大野紅葉狩車	
	嘉永 6 (1853) 年	東海市横須賀八公車「倒立唐子」	
	安政 2 (1855) 年	名古屋市中川区牛頭天王車「采振人形」	
	安政 3 (1856) 年	小牧市横町聖王車	
	文久 3 (1863) 年	常滑市大野紅葉狩車「倒立唐子」	
	明治21 (1888) 年	岐阜市安宅車「義経人形」	*

参考文献より抜粋し一覧にまとめた。 *印は、箱書きによる。

上げる」動作の戻り用の機構に滑車を用いている点が他とは異なる。

双方とも頭内の銘入れ未確認のため断定はできないが、活動時期や構造から推察すると可能性は高い（表5-1）。

（注2）修理履歴について、保管されている修理報告書をまとめると、

平成三年 （一九九一年） 若戎車 からくり人形修理詳細不明

平成九年 （一九九七年） 清影車 豊玉姫、大人形、前人形の復元新調 萬屋仁兵衛

工房

平成十一年 （一九九九年） 安宅車 義経人形と弁慶人形の修理 萬屋仁兵衛工房

平成十二年 （二〇〇〇年） 安宅車 前人形の修理 萬屋仁兵衛工房

平成二十二年 （二〇一〇年） 若戎車 若恵比寿人形の修理 萬屋仁兵衛工房

（注3）うなずきの機構（図5-15参照）

愛宕車 義経人形 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、自重で戻る。滑車式か不明。

弁慶人形 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、鯨ばねで戻る。

若戎車 幣振り人形 うなずき無し 操作紐は顎から。紐を緩めると自重で戻る。滑車式。

清影車 采振り人形 うなずき有り 痕跡のみ。鯨ばねで戻る。

彦火火出見尊 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、鯨ばねで戻る。

豊玉姫 うなずき有り 痕跡のみ。鯨ばねで戻る。

幣振り人形 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、鯨ばねで戻る。



(注4) 変顔の機構 (図5-6参照)

名古屋市	湯取神子車	笛吹人形	目
(比良)	二福神車	大黒人形	目
(広井)	二福神車	恵比寿人形	目と舌
		大黒人形	目と舌
	神功皇后車	神官人形	目と舌
	湯取車	笛吹人形	目
犬山市	遊漁神	恵比寿人形	目と口
	宝袋	魔振り人形	目と舌
大垣市	愛宕	神官人形	目と舌

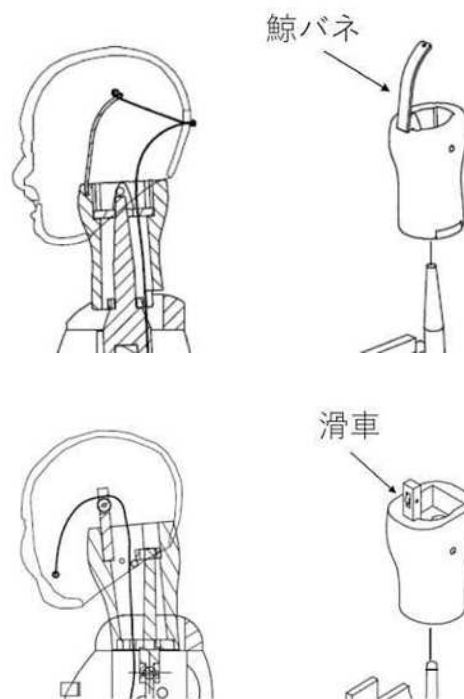


図 5-5 うなずき機構の構造の違い

- (参考文献)
- 山崎構成 『曳山の人形戯』 東洋出版 一九八一年
- 鬼頭秀明監修 『尾張の山車とからくり人形』 名古屋市長務局企画部百周年事業推進室 一九八九年
- 千田靖子 『図説 からくり人形の世界』 平文社 二〇〇五年
- 『大山祭のからくり調査報告書』 犬山市教育委員会 二〇一一年
- 『大垣祭総合調査報告書』 大垣市文化遺産活用推進事業実行委員会 二〇一四年
- 『名古屋市山車調査報告書一』 名古屋市教育委員会 一九九四年
- 『名古屋市山車調査報告書四』 名古屋市教育委員会 一九九七年
- 『名古屋市山車調査報告書五』 名古屋市教育委員会 一九九九年
- 『名古屋市山車調査報告書六』 名古屋市教育委員会 二〇〇一年
- 『名古屋市山車調査報告書七』 名古屋市教育委員会 二〇〇三年
- 『名古屋市山車調査報告書九』 名古屋市教育委員会 二〇〇八年

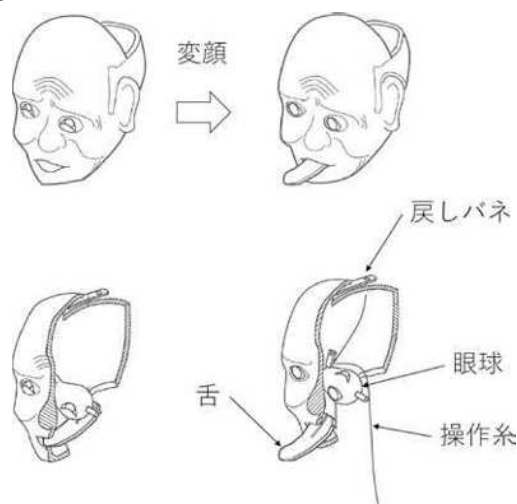


図 5-6 犬山市「宝袋」魔振り人形の構造

第六章 木造町神輿

第一節 神輿の概要

(一) 祭礼における神輿

神輿（みこし・しんよ）は神霊が祭礼の際、氏子町内や御旅所などへ渡御するに当たって一時的に鎮座する輿で、担ぎ上げて神行される神の乗り物である。神輿の発祥は宇佐神宮（大分県宇佐市）と言われており、聖武天皇が東大寺を建立した際、その造営に貢献した宇佐八幡神と大神杜女（おおかのもりめ）を天平勝宝元年（七四九）に九州宇佐から奈良の都へ、屋根に金色の鳳凰が輝く天皇の乗り物・鳳輦（ほうれん）に乗せてはるばる担いで渡御したのが始まりとされる。平安時代になると近江（ひよし）の日吉大社や京都の祇園社・今宮神社・北野天満宮・大阪の大阪天満宮などでも神輿が作られたといい、奈良・京都を中心に神輿が一般化した。

(二) 神輿の基本構造と名称

1 神輿の祖形

天皇の乗り物である鳳輦は基壇（台座）の上に四本柱（胴柱・堂柱）を立てて四方に帳（とばり）や御簾（みす）を垂らし、柱上に垂木の無い屋根（屋蓋）を置いてその頂部に金色の鳳凰を載せた輿である。屋根の軒先に反り（軒反り）はなく水平で、屋根面は四方に棟が降る宝形造とされ、下部で照り（凹面となる）、上部で起る（凸面となる）滑らかな反転曲面をもつ照り起り屋根とされる。後に屋根頂部には鳳凰に換えて宝珠（ほうしゆ）を載せるものや、柱間に襖や格子戸をはめるものも出現する。

2 神輿の構造と発展

柱で囲まれた胴（堂）部は四角形が原形と考えられ、奈良・平安時代以降定型

化するが、後に八角形や六角形の胴をもつ神輿も出現する。柱は当初、角柱で後に丸柱が出現し、江戸時代後期以降には丸柱が普及する。屋根は垂木のない屋蓋であったが、軒裏に垂木が付加され、仏堂建築と同様にその形式は二軒や三軒、平行垂木や扇垂木など多様な展開を見せる。また、軒先も端部で反り上がる軒反りが付けられ、降り棟（神輿では野筋・隅覆と称する）の先端に蕨手が付くのが一般化する。柱上には直接、梁と桁を組む単純な構造であったが、後に大斗肘木などの簡単な組物が置かれるようになり、江戸時代になると二手先や三手先の斗東（きょう）も用いられるようになり、詰組や中備の墓股なども採用される。

胴が載る基壇（台座）には、胴を囲むように四周に高欄が廻らされ、高欄の中央に鳥居が置かれる。鳥居の設置は鎌倉時代以降と考えられており、四方に付くのが一般的だが、稀に前方のみや前後二か所のものもある。また、基壇を二重にして鳥居の前に階段を付加した神輿も鎌倉以降には出現する。なお、神輿の細部の部材については、図6-1に一般的な名称を示した。

3 神輿の装飾

神輿の装飾には金属の金工、木材の木工、漆塗りの三種類が用いられる。金工の鍔金具は原初から取り付けられていたと考えられるが、初めは形や図柄も簡単なもので、中世以降発展し、江戸時代には複雑で多様な鍔金具が付けられるようになり、豪華に装飾された神輿が現れる。また、鏡や風鐸・鈴・瓔珞などの装飾金物も次第に豊富になり、神輿は一層華やかに飾られた。

木工は神輿自体が小規模であるためか、それほど多くはないが、江戸時代中期以降に山車や屋台に彫刻装飾が付き始めると神輿にも木鼻や墓股などに採用されるようになり、建築や山車彫刻の彫物師の仕事による一層見栄えのする神輿が出現する。

漆塗りは見た目の美しさと木部の保護を兼ね、黒漆や朱漆が用いられるようになるが、鎌倉時代初期までの神輿は殆どが黒漆塗りで、これはその後も常套

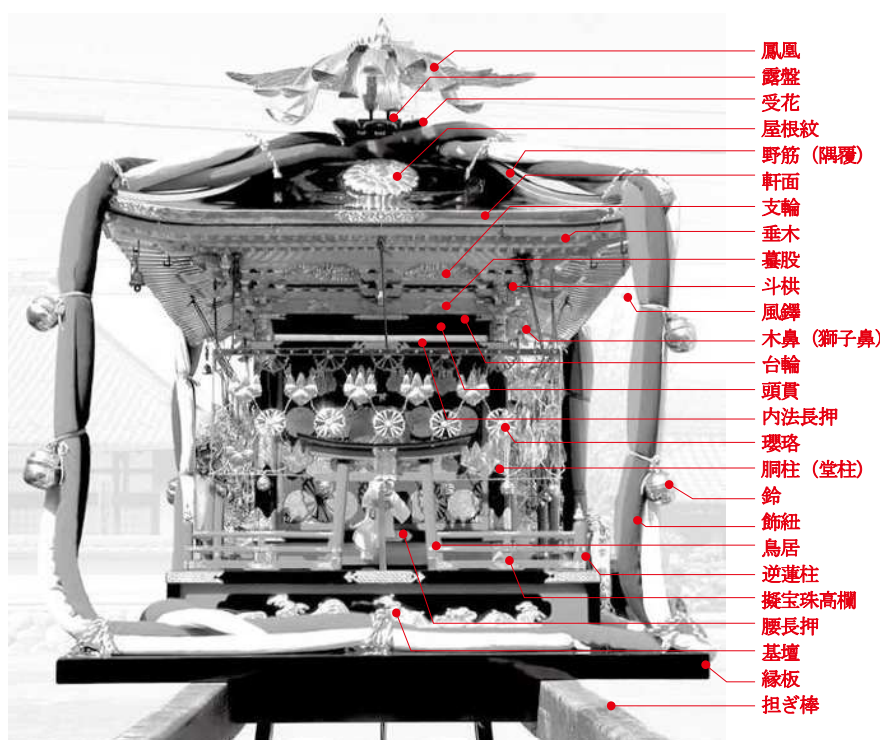


図 6-1 岐阜まつりの神輿の部材名称 (木造町本神輿)

化する。ただし、鳥居や高欄には朱漆が使われる。また、江戸時代後期以降では金箔を使用した煌びやかな神輿も頻出する。

こうした装飾は神輿製作と同時に施されるものもあるが、後世の修理や修復時における美装化に伴い付加されることも多く、神輿自体と装飾部に時代差が生じている場合も少なくない。

第二節 岐阜まつりの神輿の構造と意匠

(一) 岐阜まつりの神輿

伊奈波神社の祭礼で奉芸された木造町の神輿は、本神輿・花神輿・獅子神輿の三基で、いずれも平成九年（一九九七）二月三日に岐阜市重要有形民俗文化財に指定されている。このうち、獅子神輿は一般的な「神輿」とは形状が異なり、内部に獅子頭を載せて巡行する「獅子屋形」である。指定名称では「獅子神輿」とされているが、以前、子供たちが担ぐ「子ども神輿」として使われていたことからこの名称が付けられたと考えられる。

1 伊奈波神社の神輿巡行

伊奈波神社の祭礼において、いつ頃から神輿の渡御が行われたかは不詳であるが、江戸時代後期に成立したとされる『岐阜因幡御神事』（四二頁・資料215）には二基の神輿（布屋町と下矢馬町）が巡行する様子が描かれている。二基はいずれも胴部を四角とした神輿で、屋根は照り起りのある宝形屋根とされ、野筋の先端に蕨手を付し、屋根面には菊と桐の屋根紋を付けている。屋根の頂には露盤宝珠（ろばん）を置き、その上に鳳凰を載せている。胴の柱間には菊と桐の紋を並べた建具をはめ、胴の四方には鳥居を備え、屋根からは飾紐も垂らされている。

基壇や担ぎ棒・担ぎ手などは描かれておらず巡行の様子は不明であるが、画面右上隅に山車曳行の様子とは別に区画されて描かれているので、神輿渡御と山車奉曳が混淆して行われたのではないように察せられる。



資料 6-1 『岐阜因幡御神事』（部分）

明治三十九年（一九〇六）発行の『岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖』（五一頁・資料219）には、山車や踊り山に混じって二基（栄町と忠節町）の神輿が巡行する様子が描かれている。胴や屋根の形状は『岐阜因幡御神事』に描かれた神輿と変わらないが、屋根の頂にはくじやくの飾りが載っている。軒先には提灯が吊られ、基壇の下から四方に担ぎ棒が伸びて神輿の四周を囲むように担ぎ手が描かれている。忠節町の神輿には屋根面に紋様の装飾も付けられている。

これらの絵画資料から、江戸時代後期から明治時代までは伊奈波神社の祭礼で神輿の巡行が行われていたことが分かる。

現存する三基の神輿に関する資料としては、獅子頭を納める木箱の底と蓋に「獅子頭／寶暦五年／亥七月吉辰作之／行年三十四才／賀嶋重主」の墨書があり、宝暦五年（一七五五）に獅子頭が作られたことが分かる。ただし、これが直接現在の獅子神輿の存在や製作を示す資料とは言い難い。これに次ぐ資料としては「本御神輿くじやく」と書かれた紙が貼られた木箱の墨書で、側面に「本」と「安永三年八月」とあり、さらに「花神輿御鈴」の貼り紙がある木箱の蓋には「木造横町什物」「安永三年八朔」の墨書、「子供御輿御鈴」の貼り紙がある木箱には「幸八造／若中／安永三甲午年」の墨書がある。貼り紙はいずれも新しいので、内部に納められたくじやく（鳳凰）や鈴が現在の本神輿や花神輿のものであるか否かは不明であるが、安永三年（一七七四）には木造横町が神輿を所有していたことが確認できる。



資料 6-2 『岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖』（部分）



写真 6-3 獅子神輿



写真 6-2 花神輿



写真 6-1 本神輿



2 木造町の神輿と奉芸

木造横町の町名は、『岐阜志略』（延享四年…一七四七・松平秀雲著 岐阜県立図書館蔵）によると織田秀信の家老であった木造左衛門尉長政の屋敷があったことに由来するといひ、『厚見郡岐阜町絵図』（寛政六年…一七九四 徳川林政史研究所蔵）にも「木作横町 百六間」と記載されている。江戸時代には木造横町と称し、現存する神輿の墨書にもこの町名の記載が幾つか残されている。また、町内には曹洞宗の勝林寺、臨済宗妙心寺派の護国寺、日蓮宗の正興寺、浄土真宗本願寺派の蓮正寺と即得寺が所在し、現在、即得寺境内に整備された神輿蔵（平成九年新築再建）に三基の神輿は収蔵されている。

木造町の神輿巡行は戦後間もなく担ぎ手不足によって中断し、年に一度神輿蔵から出して、虫干しを兼ねた展示を行っていたという。神輿巡行が復活したのは昭和六十三年（一九八八）の岐阜市制100年記念に合わせた岐阜まつり宵宮からである。この年、「木造町神輿奉納委員会」が設置されて奉納が再開され、その後、「三町（木造・矢島・啓運町）神輿奉納実行委員会」（平成四年）、「木造町「町神輿」奉納実行委員会」（平成七年）、「木造町「町神輿」奉芸委員会」（平成十一年）、「木造「町神輿」奉芸委員会」（平成二十一年）などと改組が行われ現在にいたっている。金華十六地区が山車奉曳の当番年や荒天時、東日本大震災の年（平成二十三年）には巡行を取りやめている。

（二）本神輿（岐阜市重要有形民俗文化財 平成九年二月三日指定）

1 歴史・由来

本神輿の製作に関する明確な資料はないが、基壇の裏面三か所に「塗師／上矢 伊助／文政十乙亥年／閏六月から／七月まで／堂立高欄まで／塗□□」「文政十亥七月ぬり 伊助」「文政十乙亥年閏六月から七月まで 堂立より高欄まで塗 上矢嶋町塗師伊助」の墨書があつて、文政十年（一八二七）には現在の

本神輿が存在したことが知られる。この時は上矢嶋町の塗師・伊助によって胴部と高欄の漆塗りが行われたことが分かる。さらに旧鳳凰の羽根を納めた木箱（蓋の表に「本神輿クジャクの羽根」と記された貼り紙がある）には「御輿 木造横町／宇のと里／文化十一年／戌八月吉日」「御輿 うのと里 文化十一年八月／米屋町 作人／佛師 源藏／町内 奉納／千歳 惣吉／全 鉄次郎」の墨書があり、鳳凰の左右の羽根にも「文化十一□戌八月吉日／町内 千歳惣吉／鉄次郎」「町内 □歳 惣吉／寄進 文化十一□」とあり、文化十一年（一八一四）に米屋町の仏師・源藏によって作られた鳳凰（貼り紙には「クジャク」（孔雀）とあり、墨書には「うのと里」（鶴の鳥）と記される）が寄進されたことが知られる。また、基壇の四面に立つ鳥居に取り付けられた「因幡宮」の額金具の裏面には「甲戌 文化十一年七月吉日」「木造横町 什物」「町内 近藤治助作之」「四枚之内」とそれぞれ彫られており、文化十一年に木造横町の近藤治助によつて製作された額が寄進されたことも分かる。

これらの資料により、現在の本神輿が製作されたのは文化十一年から文政十年の間（一八一四～二七）と推定できる。なお、さらに古い資料として「本御神輿／くじゃく」と記された紙が貼られた木箱の墨書がある。「本」「安永三年八月」と記されているが、現在の本神輿の鳳凰は文化十一年に製作されたものであり、神輿自体の建築様式も安永三年（一七七四）まで遡るとは考え難いので、この鳳凰（くじゃく）は現在の花神輿のものではないかと思われる。

文政以後の資料としては、基壇の幕板裏面の墨書に「本神輿箱座／金物／寄進 連中」とあり、続けて寄進者二十九人の名が書かれ、最後に「天保二／第八月／外二／花神輿／御鏡／四面」とあつて、天保二年（一八三一）に基壇の鍔金具の寄進があつたことが知られる。さらに胴柱の鍔金具には「天保三壬辰年七月吉日」と彫られており、本神輿の板屋根裏面には「三□（百か）人講取立／塗諸色世話／人数都合十五人／天保三辰ヨリ／同四巳六月出来／町内 惣

取持／圓七 利兵衛 半兵衛 宇八 吉兵衛 忠兵衛 常藏 勘助 清七 彦兵衛／當時若イ者／善兵衛 儀助 利藏 与八／當時年寄 鉄三／右十五人／塗師鍛冶屋町／勘三郎跡／當時四郎兵衛」の墨書もあり、天保三年（一八三三）にも銚金具の寄進や漆塗りが行われたことが分かる。「本神輿 御鈴」〔鈴四個 鈴八個〕と記された紙が貼られた木箱には「寄進 江州松居氏」の墨書、蓋裏と箱底には「安政五年戊午三月／世話人 綿屋善兵衛／安村屋助藏／同倅 幸助」（蓋・箱同文）の墨書があり、安政五年（一八五八）に鈴が寄進されている。

明治時代以降では、屋根裏に打ち付けられた板札に「明治参拾五年三月／調僭受負人／岐阜市末廣町／藤井源太郎」とあって、明治三十五年（一九〇六）に修繕が行われたことが窺われる。さらに基壇裏側に貼られた紙には「昭和五十七年／十月二十四日／小修繕／広報会長／若染一雄／本部／福井光一／表具／大橋武雄」とあり、基壇幕板の墨書には「木造「町神輿」／大修復／2013 平成二十五年三月／岐阜市木造町十一／福井重光」とあって、その都度、小修理と大修復が実施されている。

2 構造・意匠

本神輿は金銅飾黒漆神輿で、屋根は照り起りのある宝形屋根で、軒は二軒扇垂木とされる。化粧隅木は先端を折り下げて上部に隅木蓋を載せている。屋根面は黒漆塗りで、正背面には菊紋、両側面には桐紋の銚金具が付く。また、屋根の頂部には露盤と八弁の受花を置き、その上に鳳凰を載せている。野筋は金箔押しとされ、蕨手は付けられていない。露盤・受花・鳳凰も金箔押しとされる。



写真 6-4 本神輿 全景

胴部が載る基壇は1550mm四方で、下部に1710mm四方の縁板が付く。基壇の高さは207mmで、上下の框間に朱塗りの幕板をはめ、幕板中央の格狭間を黒漆塗りとし、金箔押しした波彫刻を入れている。基壇上の四周に逆蓮柱の擬宝珠高欄を廻らし、四方の中央に神明鳥居を備えている。高欄と鳥居は朱塗りとされる。担ぎ棒は丸面取りの角材で、全長が4810mm、間隔が980mmとされ、胴の中心から前後左右同寸の位置に配される。前後端で左右の担ぎ棒を繋ぐ円形断面の横材（トンボ）が通される。

基壇上の中央に配される一間四方の胴部は柱間を668mmとし、胴柱は直径60mmの棕のない円柱で、高さ22mmの地覆上に立ち、地覆は基壇内で井桁状に組まれた土居で支えられる。四周の柱間には腰長押・内法長押・頭貫・台輪を廻らし、頭貫端には金箔押しした獅子の彫刻木鼻を出す。腰壁と小壁も金箔押しとされ、柱・長押・頭貫・台輪は黒漆塗りとされる。柱間には朱塗りの額縁を廻らした襖をはめ、襖の表には菊と桐紋の布が張られている。柱上には尾垂木付きの二手先斗棋を載せ、柱間の中央にも同様の斗棋を配した詰組とされる。また、斗棋の間には中備として幕股が置かれ、支輪には雲の彫刻が施される。台輪より上部の軒面までの部材は全て金箔押しとされる。

胴内部の構造は、胴の中央を貫いて屋根頂部まで延びる径120mmの八角断面の心柱が、担ぎ棒の間に架けられた土台上に立つ。胴柱上の斗棋背面には厚板状の桁を廻らし、柱筋より少し内方にも井桁状の梁を組んで上部を固める。また、心柱を貫通する隅行方向の貫を胴柱頂を十字に結ぶように架ける。担ぎ棒の間には心柱を受ける土



写真 6-5 本神輿 胴内部見上げ



台と平行する根太^{ねだ}を胴柱脇に渡し、根太から直径16mmの鉄ボルトを立ち上げて頂部を隅行の貫に固定し、胴の上下震動を抑えている。この鉄ボルトによる補強は昭和五十七年の小修繕より以前に行われていたという。

胴内には床と天井はなく、屋根まで空洞で、現在は根太と土台の下端に鉄板を取り付け、宵宮の際に神輿の屋根や軒裏を飾る電飾や提灯の電燈に使用するバッテリーが置かれる。この改造も近年のものである。

神輿巡行の際には屋根の頂部から四隅の軒先を経て縁板上まで飾紐が垂らされ、紐の途中には鈴が二段に取り付けられる。また、化粧隅木の先端には風鐸が吊られ、胴の四面には瓔珞も掛けられて豪華に装飾される。宵宮では胴の四面に提灯枠を取り付けて提灯が吊られる。

(三) 花神輿（岐阜市重要有形民俗文化財 平成九年二月三日指定）

1 歴史・由来

花神輿の製作年次を示す資料はないが、「花神輿／御鈴」の紙が貼られた木箱の蓋に「木造横町什物」「安永三年八朔」の墨書がある。この鈴箱が現在の花神輿のものであった確証はないが、同じ安永三年八月（一七七四）の墨書がある「本御神輿くじやく」の紙が貼られた木箱の鳳凰（くじやく）は、花神輿のものであった可能性があり、この年には花神輿が存在していたのではないかと推察される。建築様式上も本神輿より時代が古いと考えられ、安永三年頃の製作も首肯できる。

また、本神輿の基壇幕板裏面の墨書に「天保二／第八月／外二／花神輿／御鏡／四面」とあって、天保二年（一八三二）には花神輿が確実に存在したことが分かる。さらに蓋の表に「花御神輿／綱」と書かれた（鉛筆書きか）木箱の裏面には「慶応二年丙寅三月上旬より／木造町ト改／町方年寄／善兵衛／同町清七」とあり、担ぎ棒には「明治十年四月／世話人 藤井吉四郎」の墨書もある。

2 構造・意匠

花神輿は黒漆神輿で、屋根は照り起りのある宝形屋根で、軒は二軒吹寄垂木とされる。化粧隅木は先端を折り下げて上部に隅木蓋が載る。屋根面には美濃和紙を桃色に染めた花飾りを多数取り付けて華やかに装飾され、野筋や蔵手はない。この花飾りが花神輿の名の由来と考えられる。屋根の頂部には露盤と八弁の受花を置くが、現在はその上に鳳凰を載せていない。おそらく「本神輿旧鳳凰」とされている鳳凰が花神輿の鳳凰であったと推察される。

胴部が載る基壇は1210mm四方で、下部に1450mm四方の縁板が付く。基壇の高さは208mmで、上下の框間に四本の縦框を入れて基壇面を三等分し、各間に格狭間を入れている。基壇上の四周に擬宝珠高欄を廻らし、四方の中央に神明鳥居を備えている。担ぎ棒は幅120mmの丸面取りの角材で、全長が4480mm、間隔が850mmとされ、胴の中心から前後左右同寸の位置に配される。前後端で左右の担ぎ棒を繋ぐ横材（トンボ）が通される。

基壇上の中央に配される一間四方の胴部は、柱間を676mmとし、胴柱は45mm角の粽付き唐戸面取角柱で、高さ37mmの地覆上に立つ。地覆は基壇内に井桁状に組まれた土居で支えられ、地覆天端を基壇の床表面と合わせるように納めている。四周の柱間には腰長押・内法長押・頭貫・台輪を廻らし、頭貫端には木鼻を出す。柱間には額縁を廻らした襖をはめ、襖の表には鶴菊紋の彩色刺繍が張られている。柱上には拳鼻・実肘木付きの出組斗拱を載せ、柱間の中央にも同様の斗拱を配した詰組とする。



写真 6-6 花神輿 正面

基壇・胴柱・地覆・腰長押・内法長押・頭貫・垂木側面・軒裏・軒面は黒漆塗り、鳥居・襖の額縁・茅負は朱塗りとされ、基壇の格狭間・胴柱の唐戸面・小壁・木鼻・台輪・斗拱から丸桁間・垂木の下端と木口は金箔押しとされる。

胴内部の構造は、胴の中心から前後400mmの位置で、担ぎ棒の間に幅130mmの大引を架け、この大引間の中央に幅170mmの土台を渡し、この土台上に胴の中心を貫いて屋根頂部まで延びる100mm角の心柱

を立ち上げている。さらに前後の大引を繋ぐように胴の中心から左右265mmの位置に幅85mm（八角）の根太を渡して神輿の台座部分を堅固に固めている。胴柱上の斗拱背面には厚板状の桁を廻らし、さらにその上にも井桁状の梁と心柱を貫通する隅行方向の貫を架けて胴上部を固定する。隅行の貫上には屋根の頂部を支える母屋材が井桁状に組まれている。なお、根太から細い鉄製の角棒を立ち上げ、頂部を鉤状にして隅行の貫に固定し、胴の上下震動を抑えている。この鉄棒による補強は当初からのものと推察される。ただし、根太には手斧はつりの八角断面の部材が使われており、中央部の四面に角孔があげられているので、山車の鯨巻き機構の巻芯が転用されたものではないかと考えられる。胴内には床も天井もなく、屋根までを空洞とする。

神輿巡行の際には胴の四周を璽路で飾ったと考えられる。本神輿の璽路とはほぼ同寸で菊と桐の金物を吊った若干小振りな璽路が残されているので、これが花神輿の璽路であったと推定されるが、飾紐や鈴・風鐸などの装飾に関しては未詳である。



写真 6-7 花神輿 胴内部見上げ

（四）獅子神輿（岐阜市重要有形民俗文化財 平成九年二月三日指定） 1 歴史・由来

獅子神輿は文化財指定名称では「神輿」とされているが、本来は内部に獅子頭を納め、太鼓と共に台座に載せて祭礼時に奉納する「獅子屋形」であろう。

獅子神輿の製作に関する資料はなく、製作年次は不詳であるが、現在の神輿の屋根を収納する木箱の蓋には「寛政四歳／壬子七月吉日／館屋根／木造横町」の墨書があり、裏には「同町大工町／館大工 虎治郎」「同鍛冶屋町／ぬ里師ぬしや」「□立□□／□□□／藤四郎 治兵衛 清藏 辰藏 甚助 玄吉 孫藏 治助 糸藏 魚助／頭／佐兵衛 小太郎」と書かれている。これによって寛政四年（一七九二）には獅子神輿の屋根が大工町の館大工・虎治郎によって製作されていたことが知られる。なお、この墨書から当時この様な屋形（館）や神輿を作る工匠を「館大工」と称したことが知られ、興味深い。さらに獅子頭を収納する木箱には「獅子頭／寶暦五年／亥七月吉辰作之／行年三十四才／賀嶋重主」の墨書があつて、獅子頭が宝暦五年（一七五五）に製作されていることが分かる。したがって、現在の獅子神輿（屋形）が宝暦五年から寛政四年頃（一七五五／九二）には作られていたのではないかと推定でき、神輿の虹梁や木鼻の絵様も一八世紀後半頃の様式を示しており、本神輿・花神輿よりも古い遺構と考えられる。

2 構造・意匠

獅子神輿は屋根を板葺の切妻造・平入とし、頂部には箱棟を載せて両端に鬼板を置いている。軒は一軒繁垂木で、破風の拌み



写真 6-8 獅子神輿 妻面（左が正面）



には蕪懸魚鰭付きを吊る。軒の出が背面より前面の方が90mm程大きいので、屋根の形状は流造のようになり、葺甲部分のみ筋彫りが施されている。また、屋根面と箱棟には正背面とも桐紋と菊紋の鍔金具が取り付けられている。

胴部が載る基壇は611mm四方で、下部に730mm四方の縁板が付く。基壇の高さは40mm程と低く、縁板の四周に逆蓮柱の擬宝珠高欄が廻る。縁板天端から箱棟天端までの高さは970mmで、高欄の擬宝珠柱

の高さは205mmとされる。正面の高欄は逆蓮柱より内側が手前に倒れるようになっており、獅子頭を納める際の工夫と考えられる。縁板より下方の構造は不明で、担ぎ棒などがどのように取り付けられていたかは明らかにし難い。ただし、胴柱は基壇と縁板を貫いて155mm程縁板の下方に伸びており、先端に柄穴がつけられているので、胴柱下に台座もしくは担ぎ棒が納まっていたのではないかと推察される。

基壇上の中央に配される一間四方の胴部は、桁行・梁間とも柱間を511mmとし、胴柱は直径43mmの粽付き円柱で直径65mmの木製の礎盤上に立つ。四周の柱間には頭貫虹梁と台輪を廻らし、頭貫端には木鼻を出す。柱間は四面とも開放され建具を入れていない。柱上には実肘木付きの出三斗を載せ、中備に臺股を置く。正背面の斗拱上には軒桁を載せ、両妻面では妻虹梁を載せる。妻虹梁上の中央に大瓶束を置き、束上に大斗実肘木を載せて化粧棟木を受ける。大瓶束の両脇は板壁とされる。胴は四本の細い柱で屋根を支えるだけの華奢な造りである。



写真 6-9 獅子神輿 胴部分組立ての様子

胴内部には鏡天井が張られ、龍の彩色画が施される。屋根・箱棟・破風板柱・礎盤・台輪・頭貫虹梁・妻虹梁・軒桁・大瓶束・妻壁・基壇は黒漆塗り、高欄は朱塗りで、木鼻・虹梁の絵様・斗拱・臺股・垂木の木口・葺甲の筋彫り・懸魚の鰭・鬼板の足は金箔押しとされる。

この屋根は組立式で、祭礼時以外は基壇・高欄・屋根（軒桁以上）・柱（礎盤一体）・頭貫虹梁・台輪・斗拱・臺股にそれぞれ解体されて収蔵されている。

第三節 木造町神輿の特徴

岐阜まつりで奉芸される三基の神輿のうち、本神輿と花神輿は規模をほぼ同じとし、胴を支える基壇は本神輿の方が若干大きい。胴部分は同寸に近い。担ぎ棒上に縁板と基壇を置き、基壇の四周に鳥居を備えた高欄を廻らし、基壇上の一間四方の胴には照り起りのある宝形屋根を載せるなど、基本的な形式も同じである。また、胴の中心に心柱を立てる点や胴上部に心柱を貫通する貫を対角線状に渡し、この貫に鉄製の棒を掛けて根太と繋ぎ、胴の上下震動を抑える構造なども共通する。

両神輿の相違点は、本神輿の屋根は黒漆塗りで屋根紋の鍔金具を付しているが、花神輿では和紙で作られた花飾りが屋根全面に飾られている。また、心柱と胴柱を支える土台と根太が担ぎ棒と直交して架けられているのが本神輿で、花神輿はこれが担ぎ棒と平行に架けられている。高欄は本神輿が逆蓮柱、花神輿が宝珠柱を用い、垂木は本神輿

表 6-1 木造町神輿 主要寸法比較 (mm)

	縁板		基壇		高欄	胴							担ぎ棒		
	長さ	厚さ	長さ	高さ	高さ	胴柱間	胴柱径	胴柱長	心柱径	内法高	棟高	軒出	全長	間隔	径
本神輿	1,710	63	1,550	207	173	667	60 丸	741	120 丸	500	1,560	361	4,810	980	90
花神輿	1,450	60	1,210	208	198	676	45 角	736	100 角	546	1,558	346	4,480	850	120
獅子神輿	730	20	611	30	205	520	43 丸	723				前 235 後 145			

が扇垂木、花神輿が吹寄垂木とされている。斗
拱は本神輿が尾垂木付きの二手先とされ、花神
輿は拳鼻・実肘木付きの出組とされるが、両神
輿とも詰組としている。これらの相違点をみる
と、本神輿は禅宗様を積極的に取り入れており、
花神輿は和様を基調としていることが分かる。

構造・意匠とも花神輿の方が簡潔で古風であ
り、本神輿は基壇の波彫刻、中備の臺股や支輪
の雲彫刻など木彫も豊富で、鍔金具も縁板・基
壇・高欄・胴柱・軒面・屋根紋などに多用され
ており、全体に派手な装飾が施されている。こ
うした点は時代の新しさを示すものであり、本
神輿は既存の花神輿を手本にして製作された可
能性を指摘できる。

獅子神輿は本神輿・花神輿とは形式が大きく
異なり、獅子頭を納める屋形（館）である。組
立式の小規模な屋形で、四方を吹放しにした柱
上に切妻造・平入の流造型の屋根を載せる。柱
は粽付きの円柱で礎盤上に立ち、頭貫・台輪を
廻らす点や高欄を逆蓮柱とする点は禅宗様を取
り入れている。

様式的には三基のうち、最も古式で一八世紀
後半には伊奈波神社の祭礼で獅子頭が奉納され
ていたことを示す貴重な遺構である。

神輿本体とは別に特筆すべきは、獅子神輿の

表 6-2 木造町神輿 主要構造・意匠比較

	屋 根					軒・垂木	高 欄			台座構造		
	形 状		野筋	葺手	屋根面装飾							
本神輿	宝形造	照り起り	あり	なし	菊桐紋鍔金具	二軒 扇垂木	擬宝珠高欄	逆蓮柱	神明鳥居	土台・根太は担ぎ棒と直交		
花神輿	宝形造	照り起り	なし	なし	和紙の花飾り	二軒吹寄垂木	擬宝珠高欄	宝珠柱	神明鳥居	大引は担ぎ棒と直交、土台・根太は平行		
獅子神輿	切妻造	平 入			菊桐紋鍔金具	一軒 繁垂木	擬宝珠高欄	逆蓮柱		不 詳		

	胴 部 分									
	胴 柱		胴 柱 間		頭貫端	上下揺留	斗拱・中備		心柱	
本神輿	円柱・粽なし		腰長押・内法長押・頭貫・台輪		獅子鼻	鉄ボルト	尾垂木付き二手先	詰組	臺股	八角
花神輿	唐戸面取角柱・粽あり		腰長押・内法長押・頭貫・台輪		木 鼻	鉄製角棒	実肘木・拳鼻付き出組	詰組		四角
獅子神輿	円柱・粽付き・礎盤		頭貫虹梁・台輪		木 鼻		実肘木付き出三斗		臺股	

屋根を納める寛政四年（一七九二）の木箱に「同町大工町／館大工 虎治郎」
の墨書があつて、木造町大工町の「館大工」を称する工匠・虎治郎がこれを製
作したことが知られる点である。さらに本神輿の屋根を飾る鳳凰の収納箱に「く
じゃく」と記された紙が貼られており、鳳凰を孔雀と称していたことが窺われ
る。ただし、この貼り紙は近代以降のものと考えられ、明治三十九年（一九〇六）
発刊の『岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖』（護国寺蔵）にも孔雀の載った神
輿の絵が描かれており、鳳凰と孔雀の混同が察せられる。文化十一年（二八四）
の木箱には「うのととり」（鵜の鳥）の墨書もあつて、鳳凰をうのとりと称して
いたことも知られる。また「米屋町作人／佛師 源蔵」の墨書から、木製の鳳
凰が仏師によつて製作されたことも分かる。他にも塗師の名などが書かれた墨
書もあり、こうした資料は断片的ではあるが、屋形や神輿の製作に係つた当
時の工匠を知る手掛かりとして注目される。

（参考文献）

- 『岐阜市史 通史編 民俗』岐阜市 1977年
- 伊東久之・水野耕嗣「岐阜市文化財指定調査復命書」『木造「町神輿」』
1996年
- 水野耕嗣『日本の神輿の変遷略史―神輿の部位による見分け方―』
2024年



1 本神輿 全景



3 本神輿 正・側面



2 本神輿 側面



5 本神輿 正面 高欄・鳥居



4 本神輿 正面 胴部



7 本神輿 胴柱下部



6 本神輿 基壇



9 本神輿 正面（祭礼時）



8 本神輿 軒裏見上げ



11 本神輿 正面 担ぎ棒



10 本神輿 背面



13 本神輿 胴上部



12 本神輿 胴部 正・側面



15 本神輿 軒先隅



14 本神輿 洞柱上部



17 本神輿 鳳凰



16 本神輿 屋根側面



19 本神輿 基壇内部見上げ



18 本神輿 洞内部見上げ (心柱)



21 本神輿 側面 (宵宮時)



20 本神輿 基壇内部 (墨書：文政十年)



1 花神輿 正面



3 花神輿 屋根



2 花神輿 正面全景



5 花神輿 担ぎ棒



4 花神輿 屋根頂部



7 花神輿 基壇正面



6 花神輿 側・背面



9 花神輿 胴柱下部



8 花神輿 基壇・高欄・鳥居



11 花神輿 軒裏隅見上げ



10 花神輿 軒裏見上げ



13 花神輿 上山 胴内部見上げ



12 花神輿 胴柱上部 詳細



1 獅子神輿 全景



3 獅子神輿 側面



2 獅子神輿 背面



5 獅子神輿 側面柱上 詳細 (胴前柱)



4 獅子神輿 妻部分 (左：正面 右：背面)



7 獅子神輿 胴正面 柱上



6 獅子神輿 胴見上げ



9 獅子神輿 天井見上げ



8 獅子神輿 柱上 詳細



11 獅子神輿 組立前の部材



10 獅子神輿 胴軸部 (組立途中)

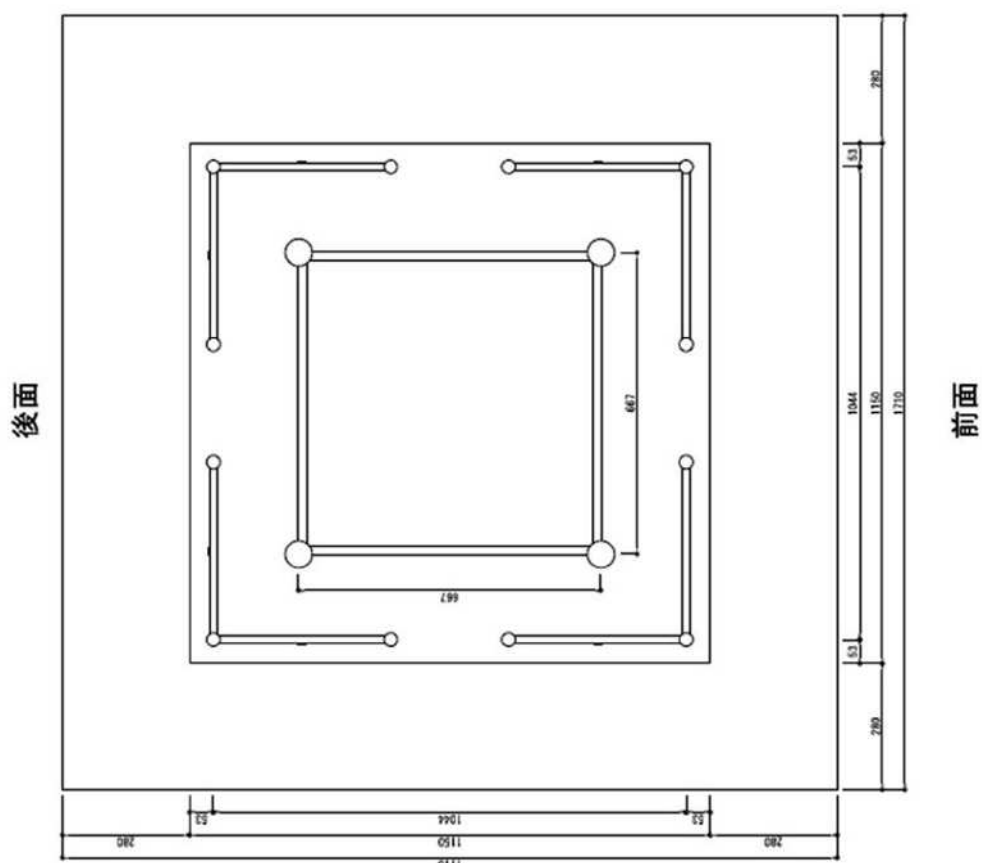


13 獅子神輿 「館屋根」収納箱 (蓋: 墨書 寛政四年)

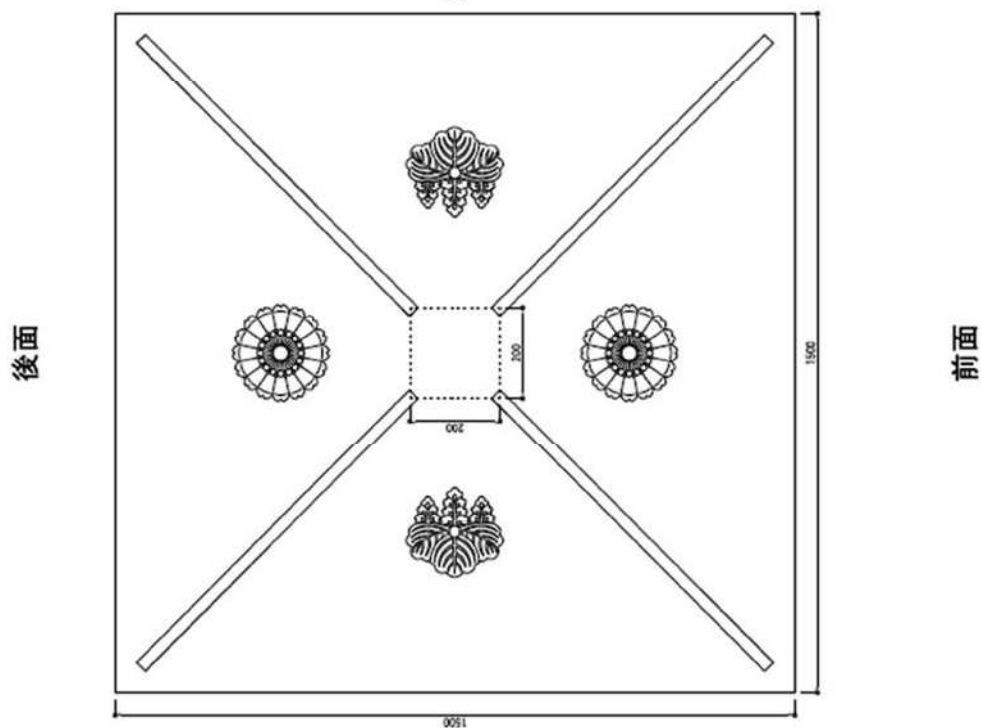


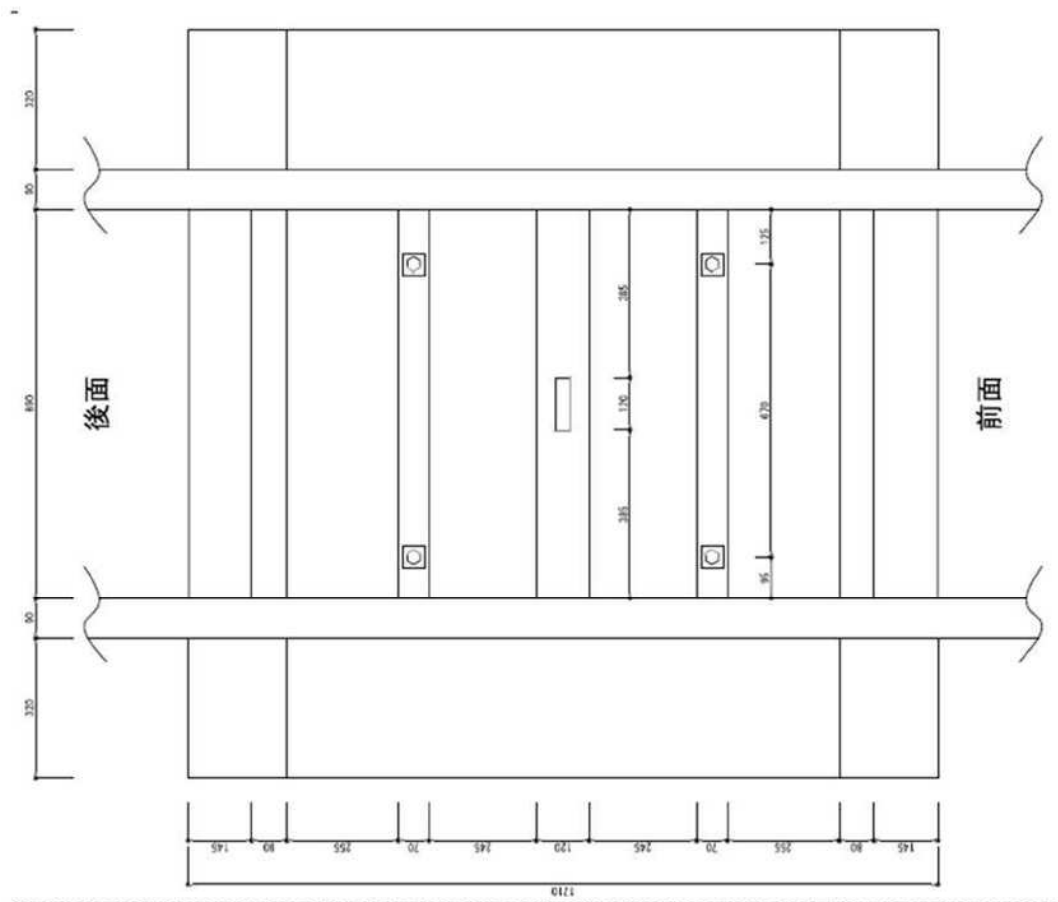
12 獅子神輿 屋根 (箱収納時)

本神輿・基壇・洞・平面図



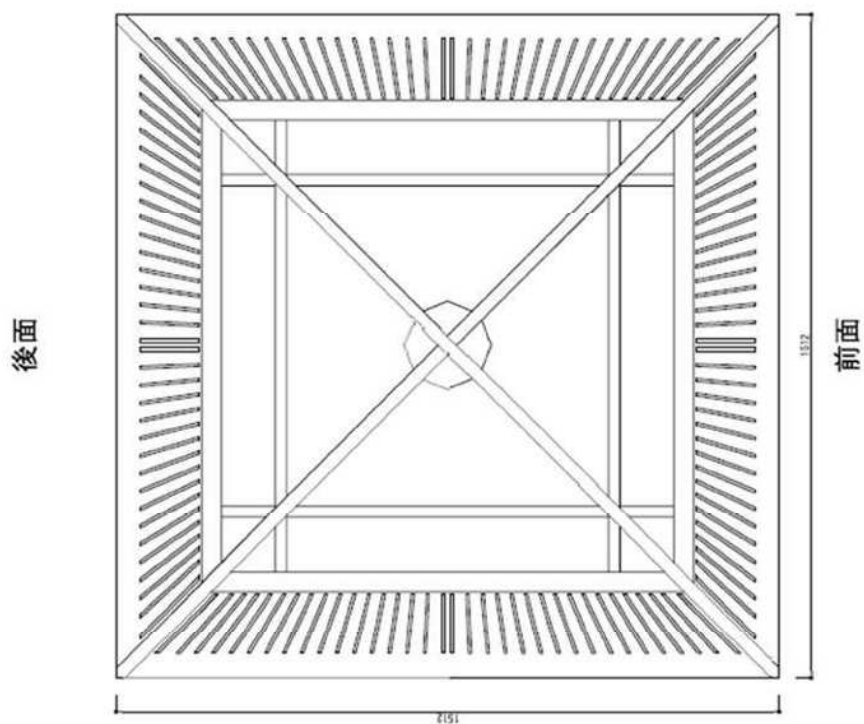
本神輿 屋根伏図





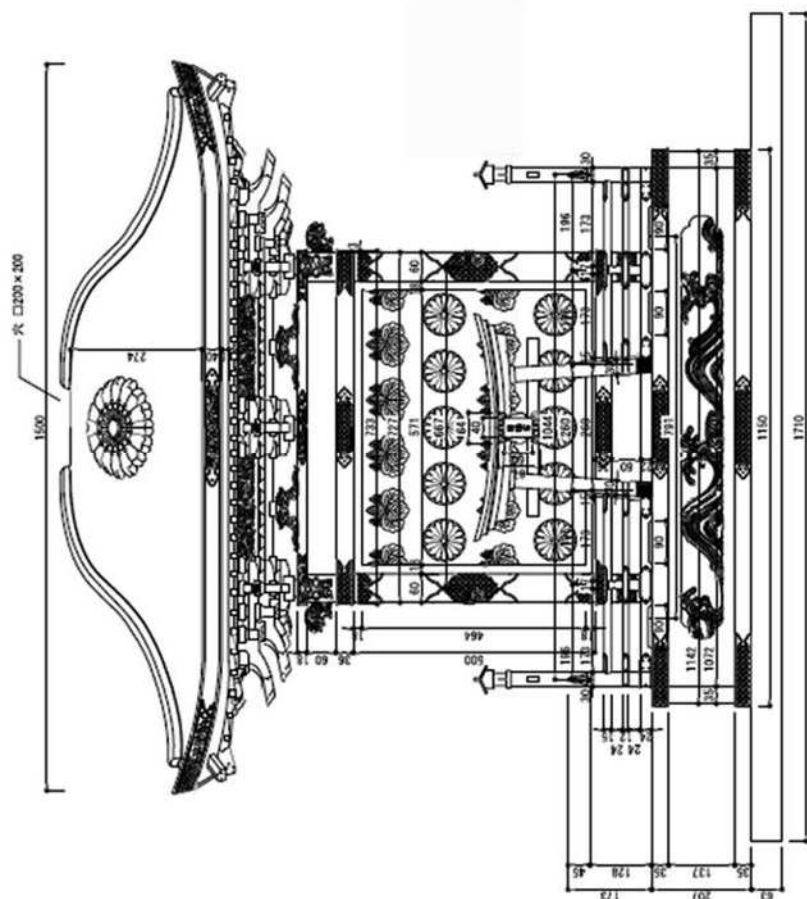
本神輿

本神輿 台座 見上図

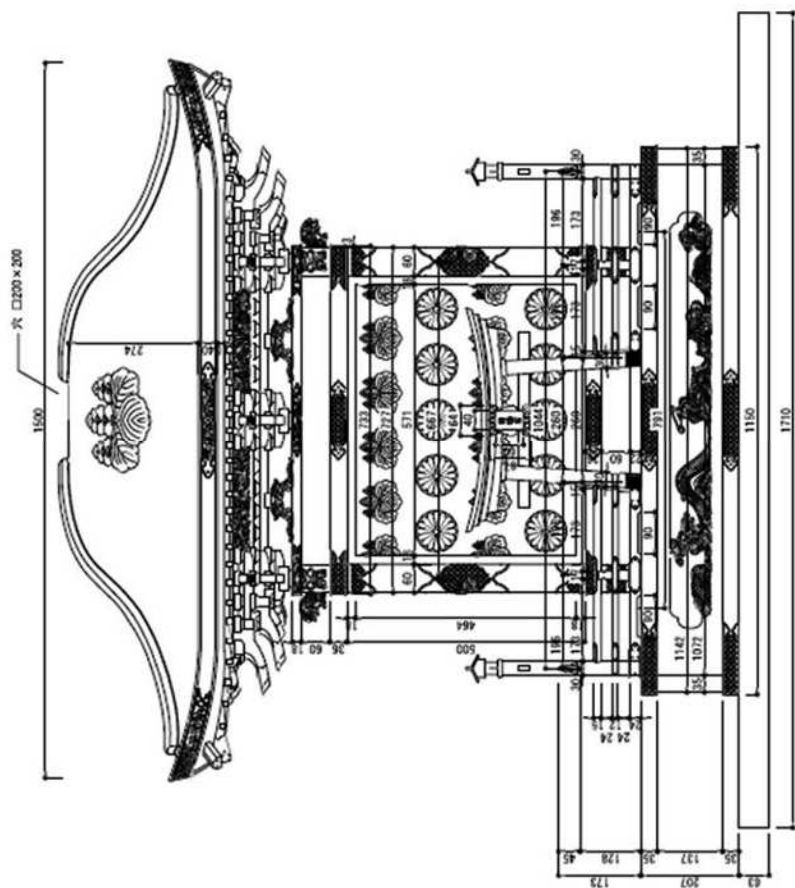


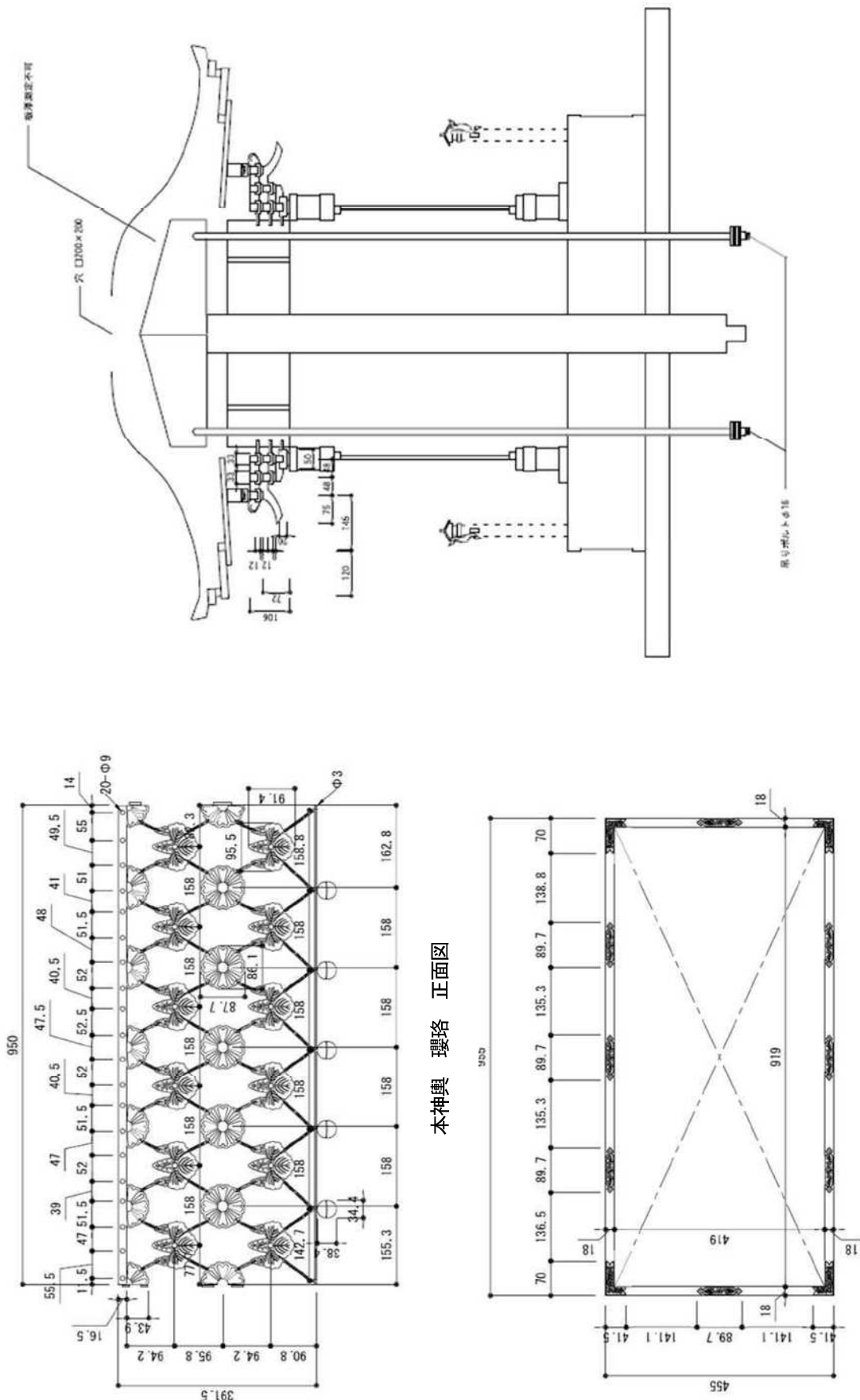
本神輿 天井伏図

本神輿 正面 立面図



本神輿 側面 立面図

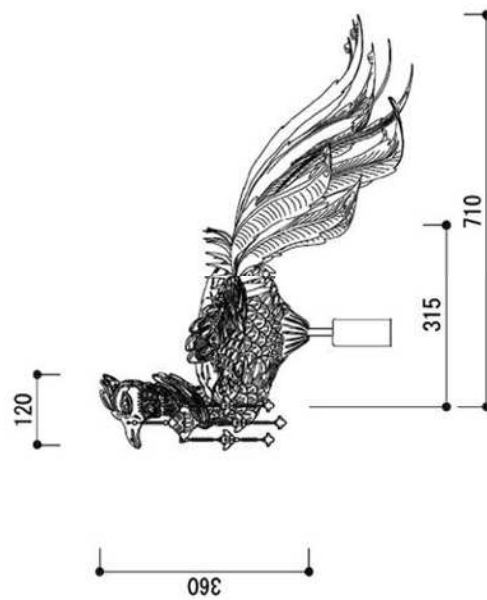
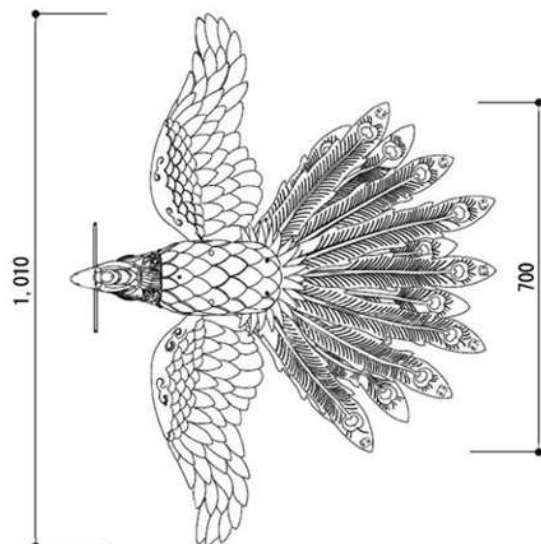
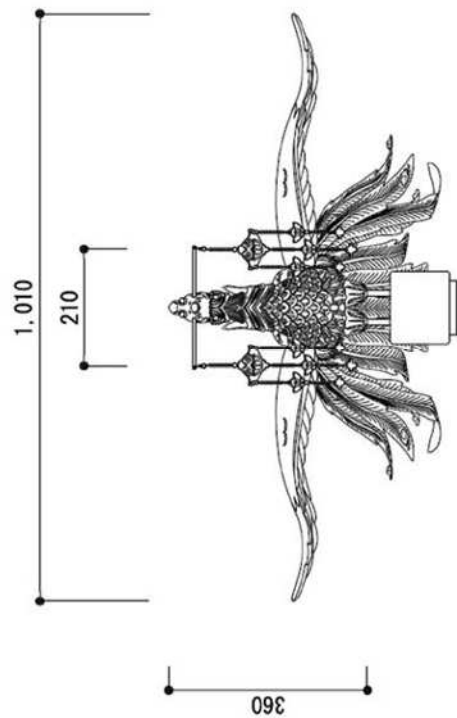
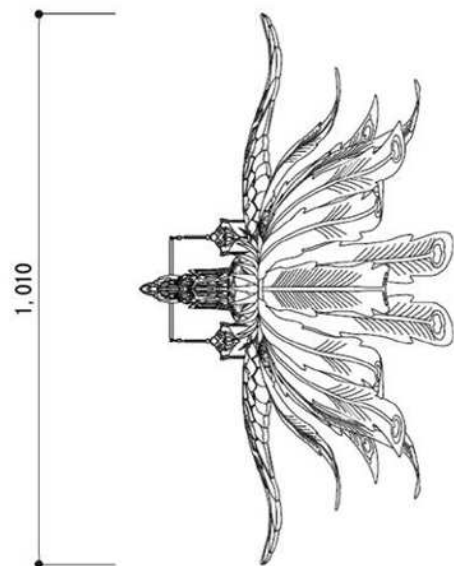




本神輿

本神輿 断面図

本神輿 提灯枠 正面図



本神輿 鳳凰 背面図 (上) 上面図 (下)

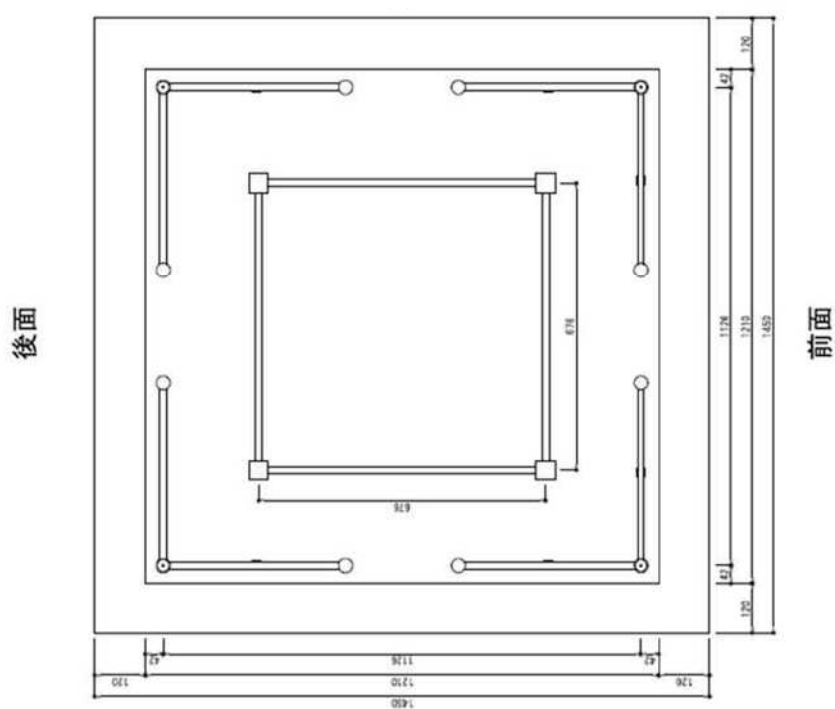
本神輿 鳳凰 正面図 (上) 側面図 (下)

本神輿

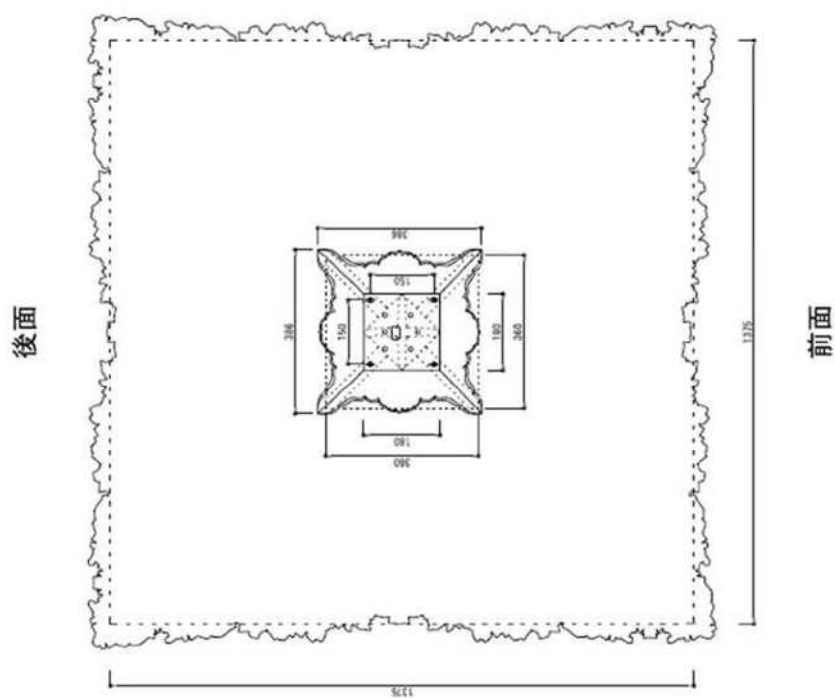


図面 6-2 花神輿

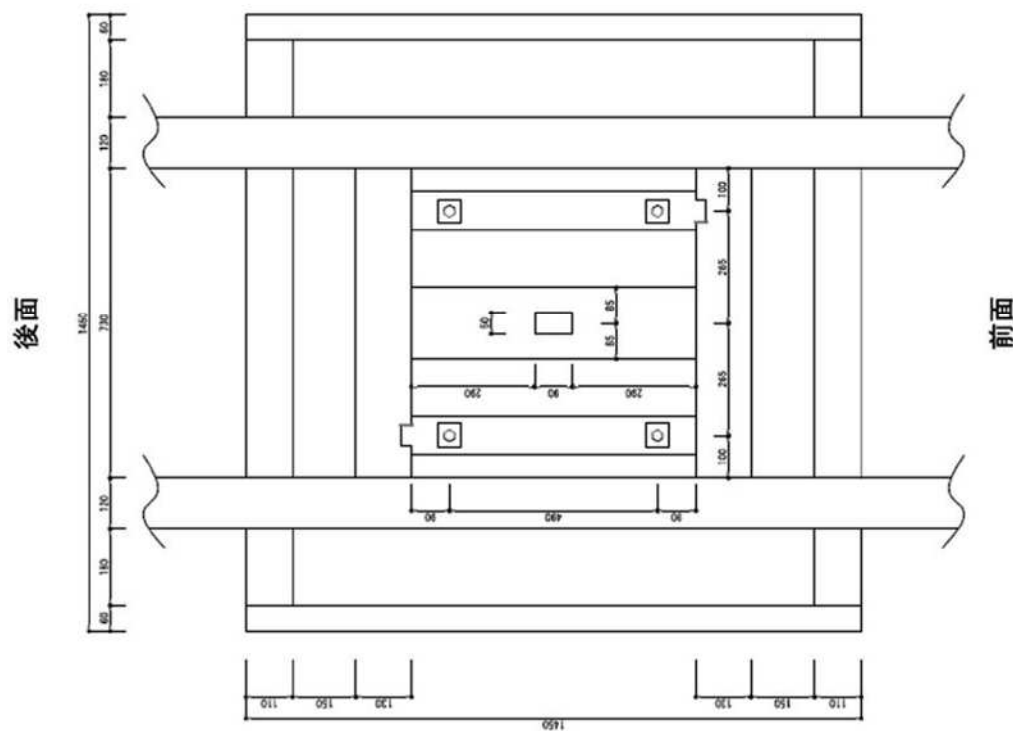
花神輿・基壇・洞平面図



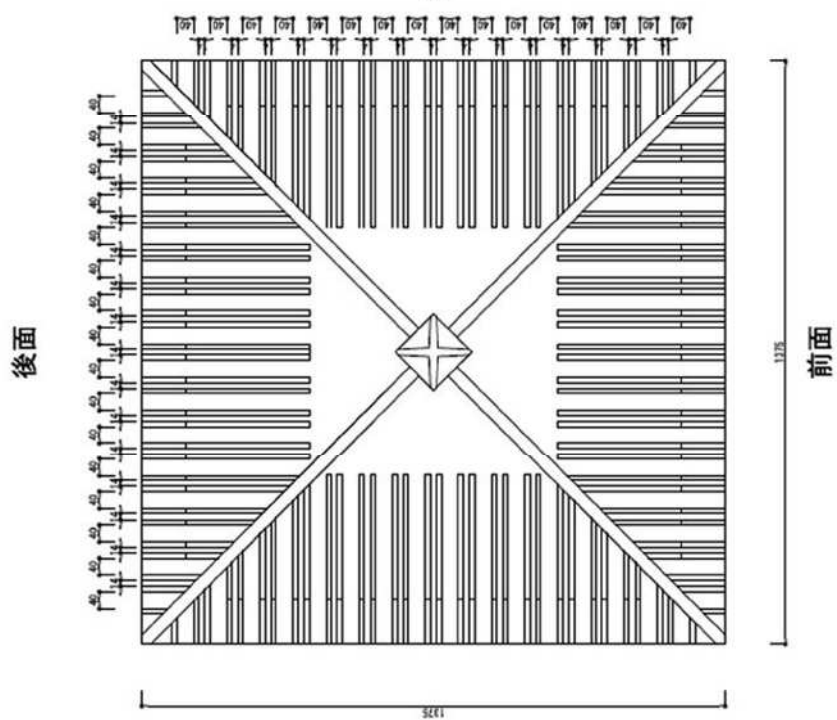
花神輿 屋根伏図

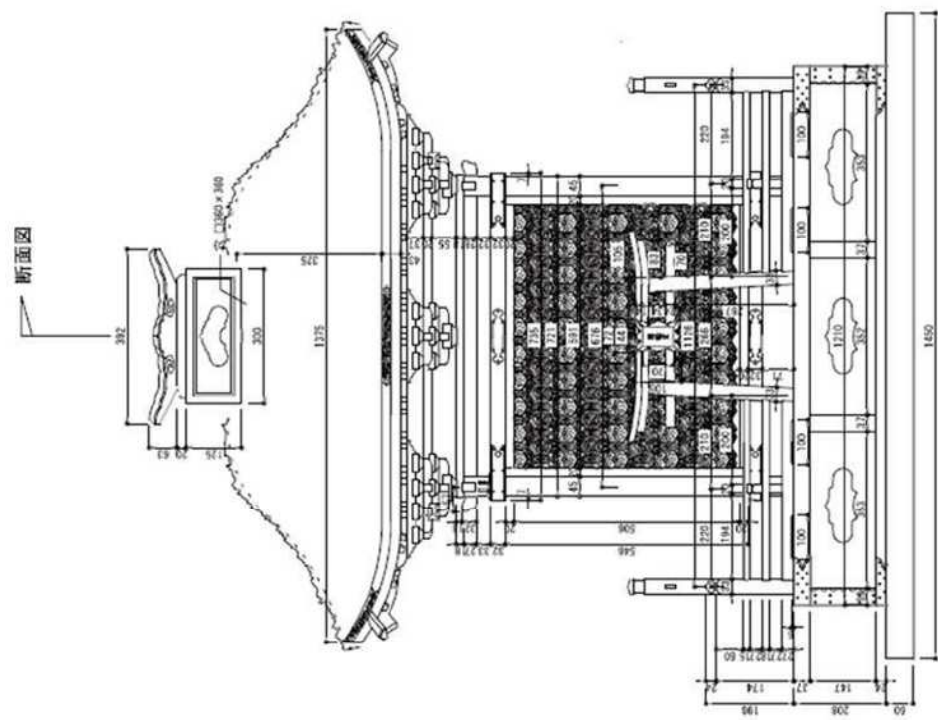


花神輿 台座 見上図



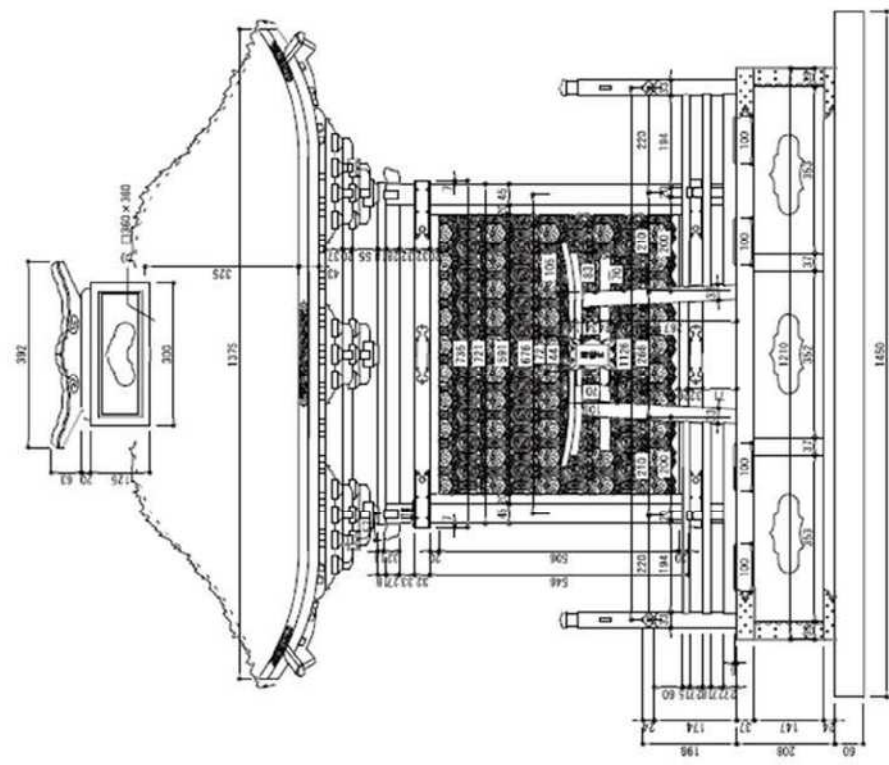
花神輿 天井伏図





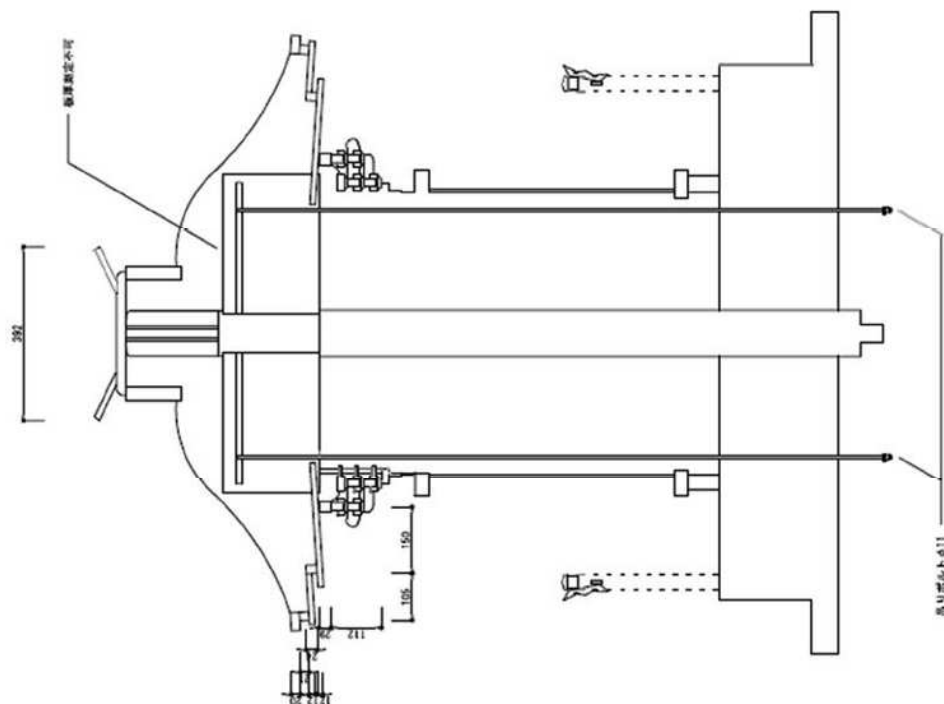
花神輿 正面 立面図

花神輿

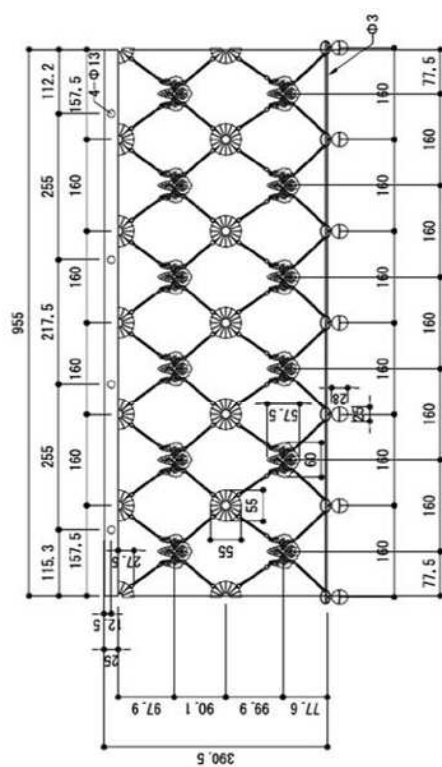


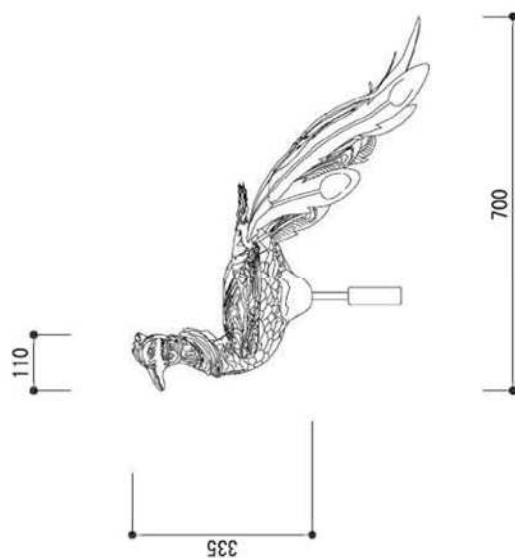
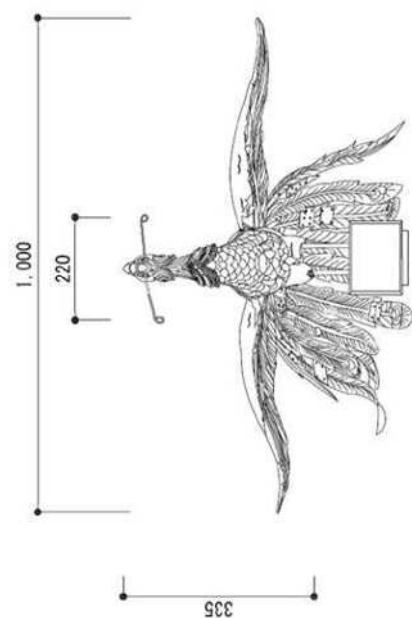
花神輿 側面 立面図

花神輿断面図

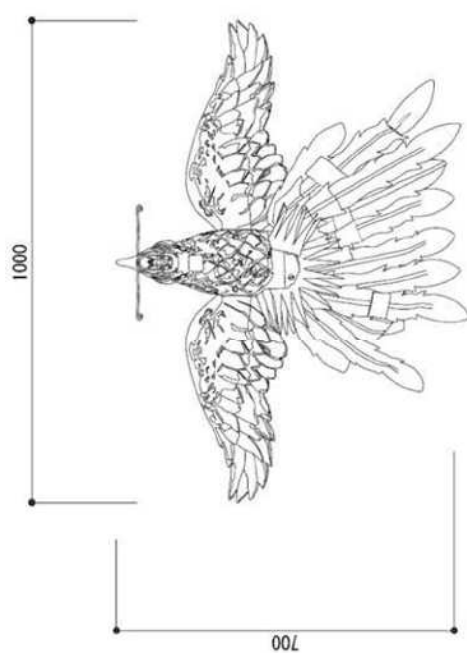
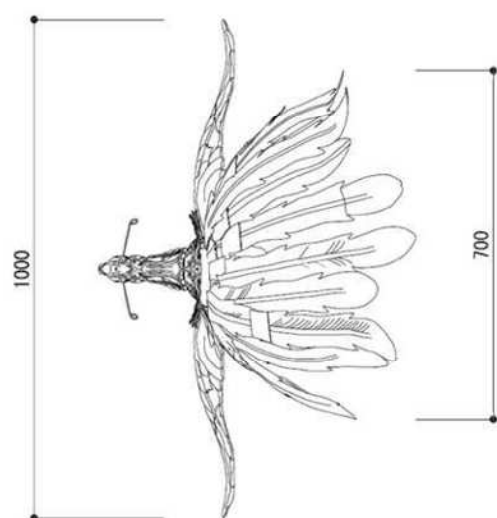


璦珞 正面图





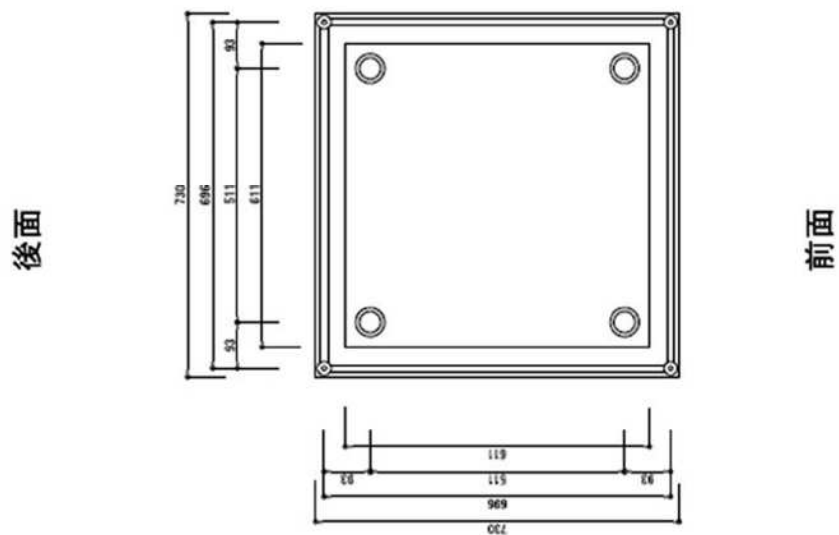
花神輿 鳳凰 正面図(上) 側面図(下)



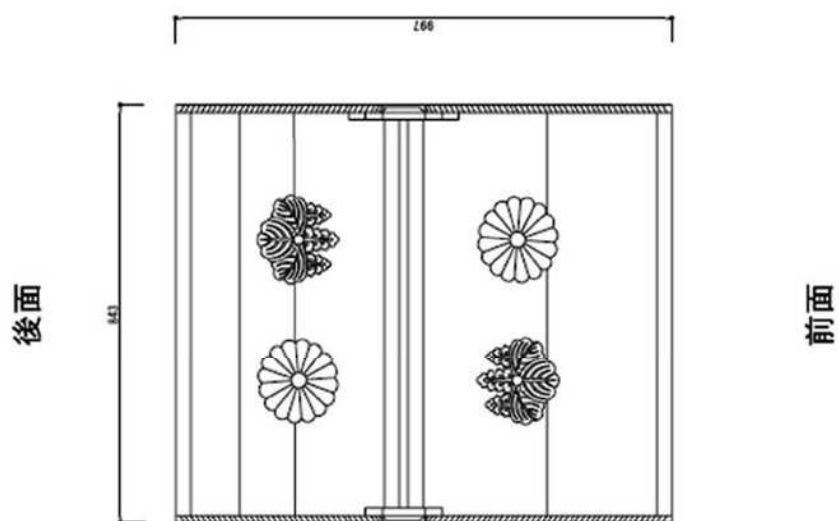
花神輿 鳳凰 背面図(上) 上面図(下)

花神輿

獅子神輿 基壇・胴 平面図

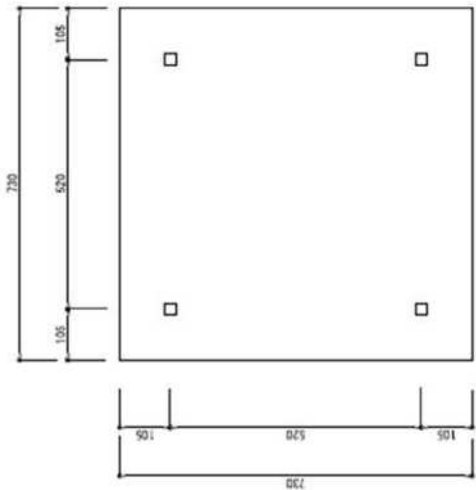


獅子神輿 屋根伏図





後面

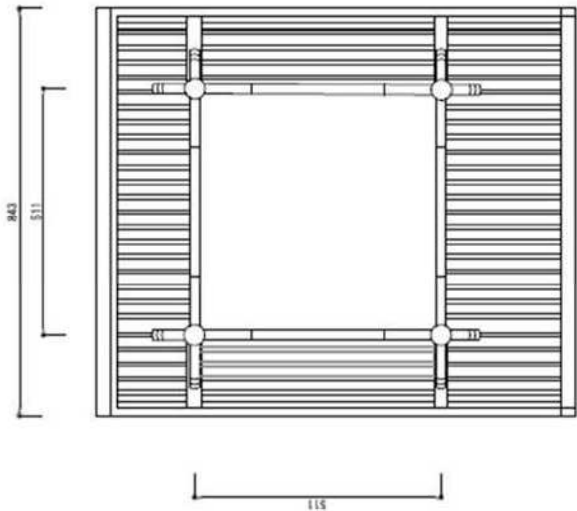


前面

獅子神輿 基壇 見上図

獅子神輿

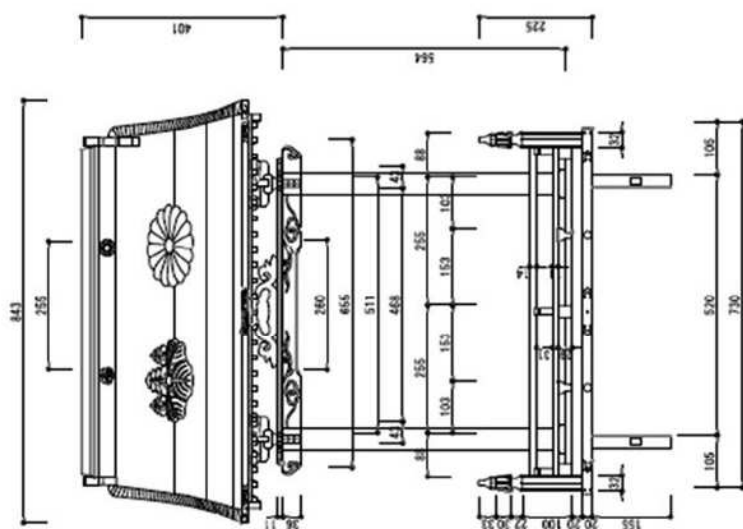
後面



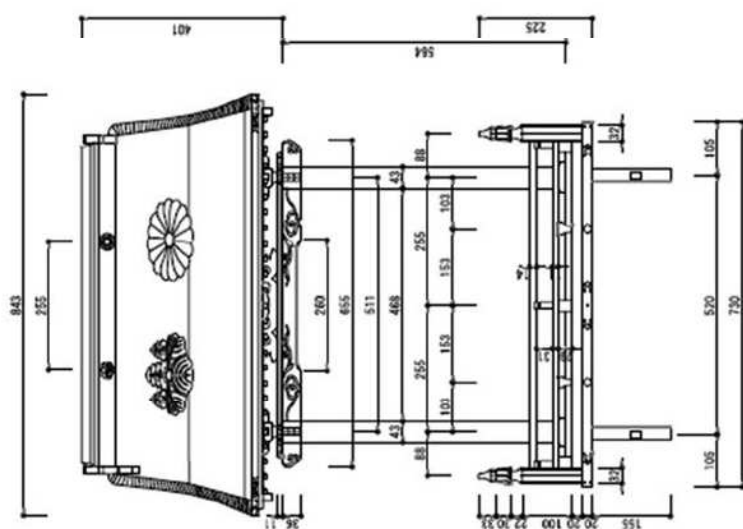
前面

獅子神輿 天井見上図

獅子神輿 背面 立面図



獅子神輿 正面 立面図



第七章 山車・神輿の金工

第一節 はじめに

本章にかかる山車・神輿の金工の調査は久保智康氏によって行われた。調査は、令和五年一月九日、十日、十月十三日、十四日に木造町神輿、令和六年四月十九日、二十日に山車について行い、その場で調書を作成した。その後、調査内容をもとに本章を作成する予定であったが、久保氏自身が令和六年六月に急逝された。

本章では、調査内容の重要性に鑑み、一部の表記についてご遺族の承諾を得たうえで最低限の補足・修正を行ったが、大部分は久保氏が作成された調書を第二、三節にてそのまま掲載することとした。修正・補足前の原本は岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護にて保管している。また、事務局によって、本節でこれまで久保氏が他の報告書に記載してきた用語解説を引用し、第四節で補記を行った。

なお、本章の作成にあたり、ご遺族に調書のご提供と本書への掲載を快諾していただいた。最後まで調査にご尽力いただいた久保氏とともに、この場を借りて感謝の意を捧げる。(事務局)

■用語解説■

八双金具(はっそうかなぐ) 高欄や長押などに打つ金具で、一方の端が尖るか、もしくは二股に入り込んで八字の形をなすことから八双という。前者を出八双、後者を入八双という。

透彫り(すかしぼり) 文様もしくはその背景を透かして見せる技法。銅板か

ら文様形を鑿^{たがね}で打ち抜く技法と、糸鋸で切り抜く技法がある。山車の本体はほとんどが漆塗りで、黒や朱色の背景に金色の透彫り部分が浮かび上がり、華やかで繊細な雰囲気醸し出している。

魚々子地(ななこじ) 文様の背景に、先が円環状の鑿(魚々子鑿)を密に打ち詰めること。打ち方に時代的な特色がよく表れる。江戸時代になると、それ以前よりも概して浅い打ち込みとなり、粒の小さな魚々子を整然と並べて打つ傾向が強まる。また魚々子を三〜四個まとめた単位打ちの魚々子鑿も登場する。魚々子に近いが、円環状でなく放射線状の丸文となる菊目鑿もある。

毛彫り(けぼり) 文様の線を鑿で彫り表す技法の一つ。先の尖った鑿で素地に連続する細線を削り、彫り進める。彫り進んだだけ屑が出るのが蹴彫りと異なる。

蹴彫り(けりぼり) 文様の線を鑿で彫り表す技法の一つ。先が直線状になった鑿を素地に打ち込みながら後ろへ向って進み、その楔形の打痕を連続させて線状に見せる。へこみをつけるだけなので、彫り屑は基本的に出ない。丁寧な蹴彫りの場合には、毛彫りに見えることもあり、一見して区別がつきにくい作例も少なくない。

鍍金(とぎん) 金を水銀(現代は硝酸水銀が主流)に溶かしたアマルガムを塗り、これを火であぶって水銀を蒸発させ、金属の表面に金のごく薄い膜を定着させる技法。この銷鍍金と呼ばれる技法のほか、水銀を塗った上に金箔を乗せて、加熱して水銀を蒸発させ鍍金膜を作る箔鍍金も見られる。後者の場合、一枚の箔では薄いので、数回にわたって箔を置くのが一般的である。打出し(うちだし) 銅板を型に当て、鎚で打つことによって、金具の文様を立体的に見せる技法。打出しの程度によって、高肉に表現されたり薄肉に表現されたりする。(久保智康)



写真 7-1 安宅車

安宅車という車名にちなみ、前者が源氏（牛若丸）、後者が武蔵坊弁慶を暗示した意匠か。

上山高欄の鼻先金具小口に見られる笹竜胆と輪宝（写真7-4、7-5）は、安宅車という車名にちなみ、前者が源氏（牛若丸）、後者が武蔵坊弁慶を暗示した意匠か。

（一）安宅車（写真7-1、表7-2）

第二節 各山車の鍔金具

安宅車の各所に貼られた出八双金具には、透彫りで唐草（写真7-2）文様が表されている。葉が横長に伸び、先を尖らす特徴を示し、さらに幅広の出八

双金具（写真7-3）には、上下に葉を展開する図様を配する。中央に蕨手を

向き合わせる心葉形を表すなど、総体に江戸時代には見られない図様を描く。

各々の金具の図様は、同一下図を厳密に転写して切り透かす点や、葉脈を太く

長く表すなど、細部表現は時代の下降を示す。金具の製作年は明治時代に下降

すると判断される。



写真 7-4 笹竜胆



写真 7-2 出八双金具



写真 7-5 輪宝



写真 7-3 幅広の出八双金具

(二) 若戎車 (写真7-6、表7-13)

唐破風や高欄に貼られた八双金具には、通形つうぎょうの唐草文様からくさ (写真7-7) が表される。縦方向・横方向に間延びする傾向が顕著で、十八世紀の特徴を示す。魚々が細かい整列打ちで、打ち込みは浅い。しかし、葉と茎の輪郭の蹴彫りはやや幅広く、強い打込みで、粗い蹴りあしを連ねる点で、十八世紀には遡らない。十九世紀半ばから後半に江戸中期の金具を本歌とし、忠実に図様を再現したものと考えられる。

この若戎車は、明治二十四年まで、加納天満宮の山車であった(享和二年(二八〇二)の記録が上限)。高欄鼻先金具には、天満宮の神紋である梅鉢紋(写真7-8) が表されていることから、金具の下限は明治二十四年と考えられる。

前棚高欄のみ朱漆塗、彫物は波を意匠とし、本体と様子が異なる。支輪も同様。しかし前棚部の金具は本体とまったく同様であるため、前棚を増設したのちに作られた金具かと思われる。(久保智康)



写真 7-6 若戎車



写真 7-7 出八双金具



写真 7-8 梅鉢紋



写真 7-9 金銅装神輿



写真 7-10 出八双金具



写真 7-11 入八双金具

第三節 木造町神輿の鍔金具

(一) 本神輿

1 金銅装神輿（写真7-9） 一基

屋蓋の頂部に鳳凰をいただく鳳輦。旧露盤は別置され、木造で外側に黒い塗料を吹き付け、金具等はない。

屋蓋は、四面を黒漆塗りとし、前後面に菊、左右側面に桐をやや高肉に打ち出した金銅金具を据える。四方下り棟は金具等を打たず、漆箔仕上げとする。軒付は、金銅板を貼り、中央に出八双金具（写真7-10）、四隅に入八双金具（写真7-11）を打つ。魚々子地に左右に展開する唐草を細い繊細な蹴彫りで表す。



写真 7-12 飛檐垂木 垂木先小口金具



写真 7-13 地垂木 垂木先小口金具

茎は太く葉は丸みを帯びた牡丹葉形を呈する。葉の形と鑿彫りの作行から十七世紀前半もしくはそれ以前に製作された金具の可能性が考えられ、それが安永もしくは天保度の造立に際し、再利用されたものか。四隅金具の上面にはさらに寸の短い入八双金具を重ねる。機械的な図様の割り付けで七宝繋ぎを細かく表しており、後代の修理で補設されたものと考えられる。

軒の裏甲の外側のみ朱漆塗り。裏甲の下面から萱負軒裏、垂木、組物にかけ、総体に漆箔仕上げとする。

垂木は二重垂木。飛檐垂木と地垂木の垂木先金具は意匠を変える。飛檐垂木は、桶型入八双金具で、二種がある。一種は小口に七宝の一部の菱形文（写真



写真 7-14 獅子の彫物と長押の入八双金具

7-12)、側面には七宝繋ぎを表す。もう一種は、小口・側面とも同様の七宝繋ぎ文を表す。地垂木は小口に桜（写真7-13）、側面に唐草を表す。桜文は型鑿を用いている。側面の唐草は粗略な茎と葉の表現になる。いずれの垂木先金具も後世の修理で補設されたものである。四方の垂木先は上段が唐草、下段は小口を太極文、側面は魚々子地に唐草を蹴彫りで表す。屋根を受ける組物は三手先で、各々の先端に桶型入八双金具を打ち、小口・側面とも魚々子地に唐草を蹴彫りする。唐草文様は葉が著しく肥大したもので、四方垂木等の金具の唐草と同様、いずれも後代の補設である。



軸部の欄間腰板は、漆箔仕上げとする。四方には、朱塗り框に菊桐文の金欄を貼った襖をはめ殺しではめ込む。金欄は、下に別種の金欄がのぞくも、現状



写真 7-15 四本柱筒金具

四本柱の中央と上下端には、金欄巻風の割り付けに、七宝繋ぎを魚々子地に表す金銅筒金具（写真7-15）をはめる。中央の筒金具には、本来、菊文金具が据えられているが、現状ではその上に新しい造作の五七桐文金具を打ち重ねている。

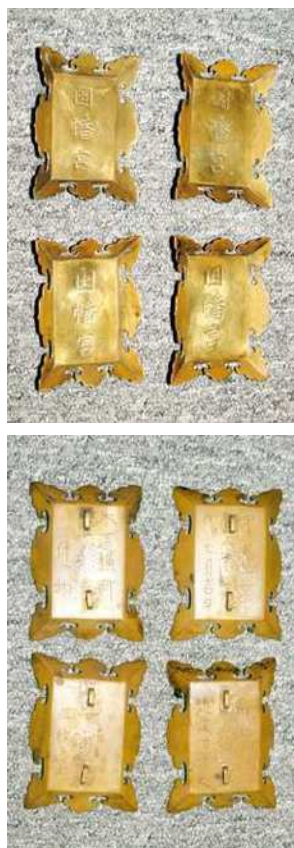
組物の上段小壁には雲文の彫刻を施した板をはめる。雲の彫り出しは、外側へ向かって高く尖らす天保から幕末期の金具の作域に通じる表現を見せる。組物の下段の間の小壁には、同様の雲文を彫り出した幕股を表す。

軸部は総体に黒漆塗りとする。台輪の中央に出八双、四隅に入八双の金銅金具を打つ。いずれも軒付の八双金具と同様の唐草を魚々子地に表し、建造段階の金具と考える。四本柱の台輪と内法長押の間には獅子の彫物を据え、四隅の各々で、阿形吽形の形をとっている。黒い目、舌の朱、総体の漆箔はいずれも修理の際に施されたものである。内法長押・腰長押には中央に出八双金具、四隅に入八双金具（写真7-14）を打つ。魚々子地に七宝繋ぎを表すが、魚々子打ちや金具側面の仕上げなどはいたって新しいため、最近の修理によるものかと思われる。

はその上に、紺地綾織に錦糸による菊桐を織り表した裂を貼る。制作時期を異にする襖が別置される。

基台の上面と上下框は総体に黒漆塗り。四方側面は横長の木瓜型の窓を透かし、枠を朱漆、窓内を黒漆塗りで表す。窓内には、波涛文に漆箔を施した彫物を枠と一材で表す。波涛はうねりが高いものの、波しぶきは抑制的に表現される。彫の凹凸は強調気味の表現になる。

上下框の中央の出八双金具、四隅の入八双金具は、長押と同様の新しい段階の補作と考えられ、七宝繋ぎ文を表す。縁板は総体に黒漆塗り。基台の外周には四方に鳥居を立て、高欄をめぐらす。笠木の屋根を黒漆とするほかは、朱漆塗りとする。いずれにも「因幡宮」（写真7-16）と太く蹴彫りする額をかける。高欄の架木・平桁・地覆の東部と親柱の両端には、七宝繋ぎ文を表す出八双金具を打つ。金具の作行は、垂木先金具と近い新しい作行で後代の修理により補設されたものかと思われる。

写真 7-16 「因幡宮」額
上：表 下：裏

以上見てきたように、この神輿は製作段階から数度にわたる修理が重ねられ、その都度金具の補設や塗り替えが行われてきたと思われる。その中でも建造当初の金具は、屋蓋軒付と軸部台輪の八双金具に限られる。

本神輿の鳳凰とらしい収納箱に安永三年の年紀が残り、当初の金具の年代観とも合致するので、本神輿の制作建造年もこの年と考える。

2 旧鳳凰（写真7-17）

頭部・頸部・体部・主翼を木造、尾羽根を金銅製とする鳳凰。

頸と胴の間に縦方向、背と腹部の間の水平方向に、はぎ合わせに由来するとみられるひびを認める。首と背のはぎ目には、補強のためか、入隅方形の銅板を打ちとめる。胴と脚の間をつなぐ部分は新材。木部は総体に漆箔を施し、古色が覆うが、細部の彫り出しがいたって甘い。当初の彩色漆箔の上に厚い下地と漆箔を再度施したものとみられる。頭頂の大きな剥落部には当初の鶏冠と見られる赤色の彩色が認められる。目は墨書き。嘴の根元に穴をあけ、太い真鍮の針金を通す。鳳凰が瓔珞ようらくを表したもののか。

胴の両側には、主翼を差し込む柄穴ぼなを大きく開ける。上方に径8mmの穴をあけ、主翼を落とし込みの線で留めたものとみられる。主翼は左右とも一材



写真 7-17 旧鳳凰 頭部・頸部・体部



写真 7-18 旧鳳凰 尾羽根（部分）のからくり留め

から彫り出し、総体に胴と同様の漆箔を施す。いずれにも文化十一年云々の墨書を認める。

尾羽根（写真7-18）は長短二種あり、いずれも銅板を切り表して組み合わせる。長い尾羽根は胴との間に、各一枚の別材をつないでいる。各々の羽根は胴寄りの位置で、多数の鋳でからくり留めする。大きく断裂した羽根は別に銅板を当て、からくり留めによる修理を施す。尾羽根の下面は、中央を魚々子地とし、その左右に綾杉状の羽文を蹴彫りする。現状で尻と脚は欠失する。

3 鏡 四面

面径17.4cm 縁高0.2cm 縁幅0.2cm

銅鑄造、鍍錫としやく。周縁部は垂直に立ち上がる。周縁外側に吊耳を作り出す。それとは別に下端近くの背面に、銅の太い針金を用いた鈕を鋳でかしめ留める。

一面のみに、鈕を留める位置のあたり線を毛書きでひく。背面には、やや粒



写真 7-19 鏡（四面のうち一面）

の大きい砂目をまとめ打ちで表す。砂目の間隔は等間隔に打たれる。四面のうち一面の下方の斜め方向の内縁付近に、鑄型の砂目を広い範囲で消した跡を認める。砂目を施刻した後、湯口を設定しようとした痕跡かと思われる。四面共に同位置から下端にかけて、外側がわずかに凹凸をなし、



あるいは内縁立ち上がりに鑄ムラを認める。これは、湯口もしくはあがりを設定した痕跡になる。吊耳の位置の周縁より約2 cm内側に、砂目を打たず、鑄型の凹みを埋めたような跡が認められるのは、注文に応じて内側背面に鈕を設けるための仕様であったか。

これらの鏡を見ると、量産を前提とした鑄型の作りで、砂目の特徴より、江戸後期十九世紀前半から半ばの制作になるとみられる。

上端の内縁近くに三行にわたり墨書（写真7-20）を認める。



写真 7-20 鏡（部分）
「キリクチ／六寸／イ」
「キリクチ／中自イ／六寸」

三面「キリクチ／六寸／イ」

一面「キリクチ／中自イ／六寸」

4 鈴（写真7-21）

大 I 類 四個 総高11.2 cm 中帯径9.0 cm

II 類 一個 総高11.4 cm 中帯径9.0 cm

小 I 類 一個 総高10.4 cm 中帯径8.2 cm

II 類 一個 総高10.3 cm 中帯径8.4 cm

III 類 一個 総高9.2 cm 中帯径8.2 cm

大 I 類は下半が強く下膨れになる。上半の肩も強く張る。扁平球形で菊刻み形の座を備えた板状の鑲を持つ。大 II 類は、下半はやや下膨れながら I 類ほど

ではなく、ほぼ球形の形になる。鑲は座を持たず、外面にやや膨らみを持つ板状。

小 I 類は、下半は腰がやや張り、上半はほぼ半球形。鑲は外面中ほどがやや膨らむ。II 類は、下半の中ほどがやや強く張り、上半はなで肩。III 類は、下半上半ともほぼ半球形である。

現状で、ハンダによる接合修理と再鍍金が施される。大 I 類が安政時の製作になるか。大 II 類はそれ以前のものか。小は花神輿もしくは子供神輿からの混入した可能性がある。大 II 類と小 III 類が最も整った猪目（いのめ）を透かす。小 I 類と小 II 類は猪目の形状を成さない。

箱書に「安政五年、云々」の墨書あり。

5 子供神輿鈴

四個 総高8.2 cm 中帯径6.7 cm

下半が強く下膨れになる。上半の肩も強く張る。扁平球形で菊刻み形の座を備えた板状の鑲を持つ。猪目は整った形になる。

箱底に安永三年の墨書銘あり。



写真 7-21 鈴（上段：大 I 類、下段：左から大 II 類、小 I 類、小 II 類）

(二) 花神輿

1 金銅装神輿 一基 (写真7-22)

この神輿の屋蓋の頂部には、十字の溝を切った高さ約10cmの木柱を立てており、宝珠を据えた座とみられ、本来は葱華輦^{そうかれん}であつたと考えられる。別置される露盤は黒漆塗で、部分的に漆箔仕上げとし、上辺の枝に花先形を刳^くっている。本神輿用の鳳凰を共有するために新造されたものかと思われる。屋蓋の十字の桁板が露出する。

屋蓋は木造の屋根板の上に、和紙を張りつめ、縁に細い棧をめぐらしている。その内側に紙で作った花を貼りつめる。当初に銅板等の裝飾板を貼っていた形跡はない。屋蓋の裏面には文書の反故紙を裏張りする。軒先各面中央に出八双金具(写真7-23)四枚、両端に入八双金具六枚と正面・後面右端に出八双金具二枚(写真7-24)の計十二枚を打つ。中央出八双四枚と両端入八双三枚は、本神輿と同工の魚々子地唐草文を蹴彫りする。唐草の葉は葉先が丸く膨らみを豊かに持たせ、葉脈を明瞭に表す古様な作行を見せる(以上I類)。両端入八双金具三枚と出八双金具二枚は、江戸時代中期とみられる葉先の丸く膨らみ豊かな牡丹葉形を表す。ただし、一部の金具は上端を折り曲げたりして、他所からの移設とみられる(以上II類)。

萱負^{かやおい}は朱漆塗、四隅に金箔押しの木鼻を裝飾的に取り付ける。軒下の垂木は吹き寄せの二重垂木である。小口と下面を金箔押し、側面から軒裏にかけて黒漆塗とする。組物は四隅の屋根受けのみ三手先で、小壁を含めすべて金箔を押す。小壁板の裏面には輪違、丸、四角などの記号を墨書する(番付か)。



写真 7-22 花神輿



軸部は角柱の四本柱を立てて、現状で四方ともはめ殺しの襖をはめる。台輪は金箔押し、四隅に素文金銅製の出八双金具を打つ。その下に貫を通して木鼻のみ金箔を押す。長押は、内法長押・腰長押は黒漆塗、四隅に入八双、中央に出八双形の素文金銅金具を打つ。地長押は設けない。腰長押の四隅一カ所のみ、後補の鉄製黒漆焼付金具に代わる。長押の下面に鏡を懸けるための古様な釣金具を打つ。四本柱は黒漆塗で、四隅に金箔押し、几帳面を取る。襖は朱漆塗の縁を廻し、内側の板には亀甲地に菊と鳳凰を段違いに表した織物を張る。

基壇は黒漆塗。四本柱と上下框の隅に鉄製黒漆焼付の金具を打つ。各面にそ



写真 7-23 出八双金具 (Ⅰ類)



写真 7-24 出八双金具 (Ⅱ類)

れぞれ二本柱を立て、宝珠形の格狭間を設ける。格狭間は一段落とし込みで内側のみ金箔を押す。基壇の上縁には朱漆塗の高欄をめぐらす。親柱は頂部を擬宝珠形とする。架木、平桁、地覆は通形とするも、飾金具は現状で打たない。四面中央には鳥居を立てる。笠木のみ黒漆塗で、以下は朱漆塗とする。各鳥居には「因波宮」の鳥居額をかける。基壇を含む神輿本体を支える木枠が存在し(現状黒漆塗)、担ぎ棒(轆なぐさ)に乗せる。木枠の前後には鉄環金具を二個ずつ打つが、その作行と木部の虫損状況から花神輿の造立当初もしくは早い段階から設えていた可能性が高い。基壇柱にはわずかながら面取りを施す。

基壇を中心に黒漆塗の修理と鉄製金具の補設が行われ、担ぎ棒(轆)の内側に明治十年云々の墨書があるものの、木枠や四本柱の細工は、江戸時代に遡るとみられる。屋蓋の軒先金具のⅠ類は、江戸初期あるいはそれ以前に遡る古様さを見せ、Ⅱ類は江戸中期(十八世紀半ば前後か)の製作になる。以上のことから判断すると、現花神輿の造立は、江戸中期まで遡る可能性が高く、Ⅰ類の金具は前身の花神輿のものが再利用されたと考えられる。江戸時代後半期以後明治十年までの間の大改修を経て、現状にいたったものと考えられる。

2 鏡 四面(写真7-25)

- ① 蓬萊懸鏡「藤原光長」銘 径16・8 cm 縁高0・2 cm 縁幅0・2 cm
 - ② 蓬萊懸鏡「藤原光長」銘 径16・8 cm 縁高0・2 cm 縁幅0・2 cm
 - ③ 蓬萊懸鏡「藤原光政」銘 径16・7 cm 縁高0・15 cm 縁幅0・2 cm
 - ④ 蓬萊懸鏡「藤原光政」銘 径16・7 cm 縁高0・2 cm 縁幅0・2 cm
- 銅鑄造、鍍錫。柄鏡の柄を切り取り、円鏡に仕上げて、背面に真鍮の針金をはんだ付けして吊耳を三か所設ける。

①と②は、踏み返しによる同型鏡で、銘文まで同型である。一二重界圍を設け、外区は青海波文、内区は砂目地に亀が岩と松樹を背負い、上方に双鶴が向き合う図様の蓬萊文を表す。松樹の脇に梅竹菊を添える。砂目は細かくやや密に打つ

ており、文様の肉どりはごく薄く、鏡胎も薄手で、江戸中期の藤原光長工房の特徴をよく示している。

③は①②と同じ図様の亀を表すも、上方の双鶴を欠く蓬葉文を表す。外区には青海波文に加え、下寄りに岩礁を表す。①②よりもわずかに薄手の鏡胎で、肉どりも薄い。藤原光長と共通する藤原光政の工房の特徴をよく示している。



写真 7-25 鏡（上左：① 上右：② 下左：③ 下右④）

④は界圏を下方の土坡^どより松樹、竹、南天が立ち上がり、土坡端と左上方に双鶴を表して、下方左よりの岩礁上に小さく亀を表した蓬葉文を表す。全面に打たれる砂目はごく細かく、やや密に打つ。肉どりはごく薄く、砂目の特徴からも③と同様の藤原光政工房の江戸中期の特徴をよく示す。②④のみ下端の鈕を設定するための正中のあたり線を毛書きで引く。

これらの四面の鏡は、意図的に吉祥を表す蓬葉文の柄鏡で、なおかつ薄手の特徴とする藤原光長・光政作の鏡を集めて円形鏡に仕立て直したものである。

本神輿の天保の修理銘にある「花神輿鏡四面」に該当するとすれば、鈕をつけて神輿鏡とした施工時期は同時期と見られる。

3 鈴（写真7-26）

大Ⅰ類 一個 総高10.3 cm 中帯径8.5 cm

大Ⅱ類 一個 総高10.3 cm 中帯径8.5 cm

小Ⅰ類 二個 総高9.3 cm 中帯径8.0 cm

大Ⅰ類は、下半上半ともほぼ半球形。鐙は中ほどがやや膨らみを持つ板状の環。大Ⅱ類は、下半の中ほどがやや張り、上半はなで肩。板状の鐙。小Ⅰ類は、下半はほぼ半球形、上半はやや扁平な半球形。中ほどに膨らみを持つ板状の鐙。

大Ⅰ類は本神輿小Ⅲ類とほぼ同形。猪目は大Ⅰ類と小がしつかりとした猪目を透かす。大Ⅱ類は猪目の形状を成さない。

箱書きに安永三年の名があるものの、現鈴はいずれも仕切りの内寸より小さいため、本来の箔とは異なる可能性がある。



写真 7-26 鈴（左から大Ⅰ類、大Ⅱ類、小Ⅰ類）



(三) 獅子神輿

1 獅子神輿 一基 (写真7-27)

屋蓋を切妻造、平入とする神輿。大棟は黒漆塗の箱棟とし、頂にやや丈高い棟木を渡す。箱棟側面には菊・桐紋の金具を各一枚ずつ両面に打っている。菊の花弁輪郭、桐の葉脈は細く浅い毛彫りで、菊の蕊は大粒の魚々子を打ち詰める。大棟の前後に金箔押ししの鬼板を立て、雲形の長い脚まで一体に作る。屋根は左右各面三枚板を矧ぎ、総体に漆で塗り固めている。矧ぎ目に布着せ等を行わず、現状で亀裂を生じる。左右各面に各一枚ずつ菊・桐の薄肉大型金具を打つ。真鍮板製で、葉脈等はやや粗く太めの毛彫りで表し、菊紋の上面には黒い塗料で桜花を表している。

屋根の前後降り棟は棚葺風^{とちぶ}に作り、金箔を押す。けらばは黒漆塗で、破風板も黒漆塗で拝みと左右下端に入八双金具、中間に出八双金具を打つ。前後軒付中央に出八双金具(正面は欠失)、前後両端から破風側に入八双金具を打つ。以上の金具は魚々子地に菊唐草を表している。図様はいたって粗い表現で、蹴彫り線も稚拙の観を免れず、魚々子もやや間の開く詰め打ちをする。正面向かって右側の軒付入八双金具(写真7-28)のみ、古い入八双金具(二八世紀後半か)をつける。左右に葉垂木を渡す。小口のみ金箔押しとし、それ以外は総体に黒漆塗とする。

天井は桐材で素地に墨画で雲龍を描く(頭が左側面を向く)。その上に箔を散らす。

懸魚^{げぎょ}(写真7-29)は中央に菊紋の金具を打ち、樽口形の頭を持つ釘で打ち留める。懸魚左右と下端には葉形を彫り表し、箔押しする。破風裏の羽目板、拝幣束、虹梁は黒漆塗とする。虹梁の絵様は内側に長く伸び、中に漆箔を施す。墓股は金箔押しで、大ぶりで横方向に長く伸びる。内側は上半を花頭形とし、下辺中央に葉形を表し、間を透かす。組物は簡素で金箔押しである。



写真 7-27 獅子神輿

軸部は丸柱四本を立て、吹き抜けとする。組物との間に薄板状の台輪を渡し、その下に四面とも大虹梁を渡し、木鼻のみ漆箔を押して小口を花先形とし、側面に蕨手を薄肉に彫り込む。大虹梁のみやや茶味を帯びた潤み漆を塗り、雲形と間をあげ内側に絵様を長く伸ばす。縁取りと雲形、絵様のみ箔を押す。四本



写真 7-28 軒付の入八双金具

柱は黒漆塗とする。軸部の床は基部の縁板から一段高く作り、二枚矧ぎの床板を張る。基部縁板は側面・上面・下面とも黒漆塗で、中央に出八双金具、四隅に入八双金具、その中間に丸鉾を打っている。八双は素文である。

基部縁板の外縁に朱塗りの高欄をめぐらす。正面側を屋蓋の金具と同様の文様を彫金した蝶番で開閉する構造になる。内側中央通束に菊座の驪金具を打つ。当初から獅子頭を乗せるために造作されたものと思われる。通形の架木、平桁、地覆をめぐらせ、金具は打たない。親

柱は横断面八花形で、頂に二重弁の逆蓮華を彫り表し、黒漆塗とする。四本柱の下端は縁板を貫き、長さ約15cmほどの角型を下方に伸ばすが、下部構造は不明である。

屋根を収める木箱が残置され、蓋表に「寛政四年／壬子七月吉日／館屋根／木造横町」と墨書する。

2 獅子頭 (写真 7-30) 一頭
高 38・0 cm 幅 48・8 cm
奥 46・0 cm

木造、漆塗、目は銅鍛造製で、鍍金する。下顎部を内側から頬へ木製の軸で取付け、動かせる構造になる。



写真 7-29 懸魚



写真 7-31 獅子頭内面



写真 7-30 獅子頭

表面は肉部を朱漆塗、眉を黒漆塗、鬣は黒漆塗または漆箔押しとする。歯は漆箔押し、唇は黒漆塗である。目は大きく飛び出させ、銅板製黒漆塗の瞳に一回り大きい銅板を重ね、縁取りを表す。白目は真鍮板製である。

額から頂部にかけて何重もの皺を彫り出し、その両側に細かにひだを彫り、眉と鬣を表す。いずれも先を巻き込む。鼻を上方に大きく突き出し、鼻の穴を前面に円形に透かして覗き穴とする。側頭部に獣毛を植え付ける。内面(写真 7-31)は全面を朱漆塗とする。その下に鑿跡が残っているのが見える。箱に宝暦五年云々の墨書を残す。(久保智康)



第四節 補記

ここでは、調査時に久保氏が述べた所見をふまえ、事務局よりむすびにかえて若干の補足を加えることとする。

各山車、木造町神輿の従来伝えられた製作年代と、今回の調査で明らかになった鍔金具の製作年代は表7-1のとおりである。この表から、山車・神輿の推定の製作年代と今回の調査で推定された鍔金具の年代は、必ずしも一致していないことがうかがえる。このことについて、調査時に以下の可能性が挙げられた。

- ・安宅車：素木の山車が江戸後期から明治初めの間に造られ、明治時代の間
に鍔金具を追加で施した。
- ・若戎車：先代（もしくはそれ以前）の鍔金具を再現して製作した。
- ・本神輿・花神輿：現存する神輿を製作した時に、先代の神輿に使われていた鍔金具を使用した。

これらのことから、これまで明らかにになっていた山車や神輿の製作年代だけでなく、その前後の足取りについて論ずる余地がでてきたのではないか。特に、木造町の本神輿や花神輿については、金具の一部に十七世紀まで遡る可能性があるものが含まれていることは、これまでほとんどわからなかった江戸時代前期の岐阜まつりの姿を知る手がかりの一つになるものと思われる。

岐阜まつりの山車や木造町神輿の多くは、江戸から明治期にかけて造られた文化財で、人々によって長年にわたり大切に守り伝えられてきたものである。使用している以上、修理の必要に迫られることはあるが、これからも大切に伝えていけるよう、山車・神輿本体はもとより、鍔金具などの部品にも配慮して修理していくことが求められる。（事務局）

（参考文献）

- 久保智康「鍔金具」『名古屋の山車行事総合調査関連資料集5 名古屋の山車構造と装飾』二〇二〇年
- 久保智康「山・鉾・屋台の鍔金具」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣出版 二〇二一年
- 久保智康「大山祭山車の金工」『大山祭総合調査報告書』大山市教育委員会 二〇〇五年
- 久保智康「大垣祭輿の金工」『大垣祭総合調査報告書』大垣市文化遺産活用推進事業実行委員会 二〇一四年

表 7-1 岐阜まつり山車・神輿の製作年代

山車・神輿の名称	山車・神輿の製作年代 ※カッコ内は根拠	鍔金具の製作年代 (最も古いもの)
安宅車	安政～明治21年 (1860～1888) 頃 (安政地震以降～からくり人形新調および構造・様式)	明治時代
若戎車	嘉永2～5年 (1849～1852) 頃 (からくり人形製作年および構造・様式)	19世紀半ばから明治24年 (1891)
清影車	明治37年 (1904) (「玉井町」掛札)	—
踊車	明治39年 (1906) 以降 (『稲葉神社祭礼山車引出之図』および構造・様式)	—
本神輿	文化11～文政10年 (1814～1827) (鳳凰収納箱墨書および基壇墨書)	17世紀前半もしくはそれ以前の可能性
花神輿	安永3～天保2年 (1774～1831) (花神輿鈴箱墨書および基壇墨書)	江戸時代初期あるいはそれ以前
獅子神輿	宝暦5～寛政4年 (1755～1792) (獅子頭収納箱墨書および館屋根収納箱墨書)	18世紀後半か

表 7-2 安宅車 銚金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
上山高欄					
(架木)	正面蔵手／入八双	2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	2+3 + 3×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(平桁)	中間：出八双	2+3 + 5×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：笹竜胆 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫、蹴彫、葉脈毛彫、黒色 地板 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(地覆)	正面／桶形入八双	2	小口：輪宝 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫、蹴彫、葉脈毛彫、黒色 地板 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	5×2 +3	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：輪宝 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫、蹴彫、葉脈毛彫、黒色 地板 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(斗束)	桁形：帯板	4+3 + 2×2	菊花	透彫、毛彫	肩に列弁透し金具 外側三方に回す
	地覆上：方形	4+3 + 2×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	肩に列弁透し金具 外側三方に回す
(嫁束)	方形	2+3 ×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
前棚高欄					
(架木)	正面蔵手／入八双	2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(平桁)	正面：出八双	2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	内側に折り曲げる
	中間：出八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(地覆)	正面：桶形入八双	2	小口：菊花 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	2+1 ×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×3	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
前棚縁板	中間：出八双	3+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
前棚欄間					
(上框)	中間：出八双	3+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	端：入八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(下框)	中間：出八双	3+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	端：入八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
台輪	鼻先：小口に方形板 と筒形	4	素文	方形板は銅版、筒形は鉄鍛造	
輪がけ	出八双	10×2	素文	鉄鍛造	
台輪正面	四稜花形座金具	2	素文	鉄鍛造	

表 7-4 清影車 銚金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
前棚高欄					
(擬宝珠柱)	擬宝珠	4	素文	真鍮鍛造鍍金	上山高欄の擬宝珠は木造
台輪	鼻先：桶形入八双	4	小口：木瓜形透し	鉄鍛造	
輪かけ	入八双	8×2	素文	鉄鍛造	

表 7-5 踊車 銚金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
台輪	鼻先：方形筒形	4	素文	鉄鍛造	当初から小口板は無し



表 7-3 若戎車 鋳金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
鬼板	菊花	1	菊花	薄肉打出し、型鑿、なめくり鑿	前
	五三桐	1	五三桐	薄肉打出し、毛彫	後 鬼板上半欠失
唐破風					
(裏甲)	中央：出八双	1×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	左右：出八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	軒側に折り曲げる
(茅負)	中央：	1×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	左右：	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	軒側に折り曲げる
(破風)	中央：入八双	1×2	牡丹・牡丹葉形唐草	牡丹：薄肉打出し、花脈は細い蹴彫 葉：蹴彫、葉脈毛彫	
	左右：出八双	2×2	牡丹・牡丹葉形唐草	牡丹：薄肉打出し、花脈は細い蹴彫 葉：蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	牡丹・牡丹葉形唐草	牡丹：薄肉打出し、花脈は細い蹴彫 葉：蹴彫、葉脈毛彫	
軒					
(裏甲)	中間：出八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2		魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
(茅負)	中間：出八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
垂木先	先端：桶形入八双	18×2	小口：隅花菱 側面：通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	小口金具、左列4枚、 右列一枚欠失
四本柱	上端：出八双	4×4	牡丹葉形唐草 入八双形に桶に雲	唐草：透彫、蹴彫、葉脈毛彫 入八双：魚々子地、桶を薄肉打出し、 雲は蹴彫	葉は丸みを持ち、古様ながら 葉先は下方にやや尖る 雲に桶は独自の意匠か
	中間：出八双	4×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	葉は丸みを持ち、古様ながら 葉先は下方にやや尖る
上山高欄					
(架木)	正面／出八双	2	菊花に唐花	毛彫、唐花の輪郭のみ蹴彫	唐草中央に四葉形
	中間：出八双	2×2+2	菊花に唐花	毛彫、唐花の輪郭のみ蹴彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：梅鉢 側面：通形唐草	小口：魚々子地、梅鉢は毛彫 側面：魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	加納天満宮に一時 貸出していた
(平栱)	正面／入八双	2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	2×2+2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：梅鉢・四隅唐草 側面：通形唐草	小口：魚々子地、梅鉢は毛彫り、唐草は 蹴彫、葉脈毛彫 側面：魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
(地覆)	正面／出八双	2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先入八双	2			
	中間：出八双	2×2+2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：梅鉢・四隅唐草 側面：通形唐草	小口：魚々子地、梅鉢は毛彫り、唐草は 蹴彫、葉脈毛彫 側面：魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
上山縁板	中間：出八双	2×2+2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
上山欄間					
(上框)	中間：出八双	2×2+2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：出八双	2×4	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
(下框)	中間：出八双	2×2+2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
前棚高欄					
(地覆)	正面／出八双	2			
	鼻先入八双	2×2			
	中間：出八双	1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
擬宝珠柱	上端：擬宝珠	2	素文	打出	
	下端：出八双	2	唐草、根巻は列弁	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
前棚縁板	中間：出八双	2+1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×3	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
前棚支輪下欄間框					
(上框)	中間：出八双	2+1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：出八双	2×3	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
(下框)	中間：出八双	2+1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×3	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
台輪	鼻先：方形筒形	4	素文	鉄鍛造	当初から小口板は無し
輪かけ	出八双(T字形)	2×2	素文	鉄鍛造	
台輪正面	四稜花形座金具	2	素文	鉄鍛造	

第八章 山車のお囃子

第一節 囃子について

(一) 囃子とは

囃子とは、映えるようにする、引き立たせる意の「はやす」が転じて名詞化したものである。演技や主奏音楽を引き立たせ賑やかにするための伴奏についていうほか、その音楽（楽曲）そのものを指す場合もある。祭礼では獅子舞や巫女舞、山車などに付随して行う楽器の演奏を囃子（お囃子）と呼び、さらに楽曲のジャンルや楽曲そのものの、また演奏する者をそう呼ぶこともある。例えば、「山車囃子（ジャンルのこと）の〇〇囃子という曲」といった具合である。

(二) 東海地方の山車と囃子の機能

東海地方の山車祭礼は中世の大山・ダンジリ文化まで遡ることが出来る。本来、山車は神の依り代であり、その神を常時囃して送り迎えるための装置が別に必要とされた。東海地方では前者を大山、後者をダンジリと呼び、セットで曳き出していた。大山では人形芸能が行われ、ダンジリでは笛・太鼓・小鼓等の演奏と共に稚児による鞆鼓舞や扇獅子が舞われた。現存数は少ないが岐阜県域では垂井町の南宮大社、美濃市大矢田の大矢田神社等でその名残を見ることが出来る。その後、近世になるとカラクリ人形を搭載した山車が発達した。特に名古屋城下で発達した名古屋型の山車は各地に影響を与え、現在も多く地域で曳かれている。それらの山車では囃子の演奏者（「囃子方」）が内部に乗り込み、道中曲やカラクリ演技用の曲を演奏する。「囃されるもの（依り代）」と「囃すもの」という関係は中世の大山・ダンジリと比べると明確ではないが、山車

が動いている間に絶え間なく演奏を続けるという意識は今もなお残っている。一般にそういった山車の囃子は、神社へ向かう曲、宮入の曲、神社からの帰路の曲など曳行の場面ごとに複数の曲が使い分けられており、神前での奉納曲（カラクリ演技を伴わない場合もある）を演奏する場合もある。

第二節 岐阜まつりの囃子の特色

岐阜まつりでは囃子演奏を伴う四台の山車が曳き出される。それらのうち三台（「安宅車」^{あたかしや}「若戎車」^{わかにびすしや}「清影車」^{せいえいしや}）が屋根付きの名古屋型山車で、他一台（「踊車」^{おどりしや}）は作り物を載せた露天の山車である。明治期以降に制作された山車もあるが、形式としては少なくとも江戸時代後期には伊奈波神社の氏子地域で取り入れられていたものである。

名古屋型山車とは江戸時代に名古屋城下を中心として発達した形式の山車で、愛知県は勿論のこと、尾張藩領が存在した岐阜県内にも多く分布している。それらの山車では上山にカラクリ人形を搭載し、神前等で奉芸が行われる。そのカラクリには能楽を題材にした演目が好まれたことから、それに合わせる囃子も能楽を原曲とするものが多い。岐阜まつりの三台についても同様で、曳行時やカラクリの演技時には能楽系の囃子を演奏している。また、詳しくは後述するが愛知県域とは違い、岐阜県域ではカラクリ演技時に謡曲が入るという特徴がある。

一方、「踊車」は本来「手踊り」が付随する山車で、現在曳かれている一台は作り物を飾るのみで手踊りは行われないが、道中では「三味線の神楽」と呼ばれる三味線付きの曲が演奏され、手踊りとの関わりをうかがわせる。また、踊車でも能楽系囃子が演奏されており、岐阜まつり全体の土台として能楽系囃



昭和中期まで各山車は囃子演奏も含めて特定の町内によって運営されていたようで、その後は複数の町内によって組織される「地区」や、町内に属さない特定の団体へと引き継がれた。地区による担当の場合は細分化された「区」による輪番制になっている場合もある。現在、若戎車は明郷校区（岐阜若戎車奉曳会）、踊車はボーイスカウト岐阜第十六団がそれぞれ毎年担当している。他二台は輪番制となっており、安宅車は金華地区の全十六区から二区ずつが輪番で担当（八年周期）、清影車は京町地区の七区が六年周期で担当している（第五・六区は合同）。近年では人口減少のため担当区以外からの参加者も増えている。

第三節 囃子の担い手

子が浸透していることが分かる。
各山車では複数曲の囃子を伝えており、それらは道中曲とカラクリ曲（人形囃子）に大きく分類され、さらに道中曲は昼の道中や夜の道中、山車回転時、帰路など場面ごとに細かく使い分けられている。それらの囃子は氏子によって笛・小太鼓・大太鼓・小鼓・鉦等を用いて演奏されるが、衰退した時期を経てテープ音源を併用している山車（「清影車」「踊車」）もある。若戎車については長らくテープ音源を使用していたが、近年になってから氏子らの努力によって完全な生演奏が復活し、新たな曲も取り入れつつ囃子の伝承が行われている。

表 8-1 演奏者の年齢層

山車名	楽器	笛	小太鼓	大太鼓	小鼓
安宅車		制限なし	小学1～6年生	制限なし	制限なし
若戎車		大人	小学生～大学生	高校生・大学生	小学生～大学生
清影車		制限なし	小学1～6年生	小学3～6年生	
踊車		高校2年生 大人	小学3～5年生	小学3～5年生	

囃子方の年齢層は子供から大人まで幅広いが、小太鼓については各山車とも主に小学生が担当することになっており、清影車では未就学児を対象にする場合もある（表 8-1）。

第四節 楽器と奏法

（一）囃子に使用される楽器

岐阜まつりの囃子は笛（能管・篠笛）・小太鼓・大太鼓、鉦等の楽器を使って演奏される（表 8-2）。能管を用いる楽曲は能楽系囃子に分類されるが、正式な能楽での楽器構成が笛・太鼓・小鼓・大鼓であるのに対し、山車囃子では笛・太鼓・小鼓・大太鼓となっている。これは岐阜まつりに限らず愛知・岐阜の能楽系山車囃子では一般的である。また、近年になってから取り入れられた若戎車の「七軒町」「おぼは」では篠笛が用いられ、踊車では実演されないものの三味線の演奏が収録された音源を使用しており、使用する楽器は多様である。各山車とも演奏で用いる楽器のうち大太鼓は一丁、小太鼓は三丁と決まっており、他の楽器は参加人員や場面によってその数が増減する。

（二）笛について

1 能管

岐阜祭まつりに参加する四台全ての山車で能管が用いられている（呼び名は「笛」「お笛」「能管」等）。能管は能楽で用いられる笛で、能楽の影響を受けた祭礼囃子でも取り入れられている。外観は龍笛に近いが管内に「喉」と呼ばれる構造を持ち、特殊な音階になっている。若戎車・清影車・踊車では長らく笛の演奏が中断していたが、復活に際してプラスチック製の能管を新調している。

表 8-2 各山車の囃子で使用する楽器

山車の名称 (地区・団体名)	曲名	笛 (能管)	小太鼓	大太鼓	小鼓	鉦	謡	三味線	備考
安宅車 (金華地区)	道行	○	○	○	○				
	早神楽	○	○	○	○				
	車切	○	○	○	○				
	狂言神楽	○	○	○	○				
	三番叟	○	○	○	○				
	人形囃子	○			○		○		
若戎車 (明德地区)	車喜利	○	○	○	○				
	早車喜利	○	○	○	○				
	狂言鞆鼓	○	○	○	○				
	狂言神楽	○	○	○	○				
	三番叟	○		○	○				
	神楽	○	○	○	○				
	早神楽	○	○	○	○				
	七間町	○(篠笛)	○	○	○	○			
	おばば	○(篠笛)	○	○	○	○			唄が付く
	人形囃子	○	○		○		○		
清影車 (京町地区)	道行	○	○	○	(○)				CD音源を併用
	しゃぎり	○	○	○	(○)				CD音源を併用
	三番叟	○	○	○	(○)				CD音源を併用
	人形囃子	(○)	(○)						CD音源のみ
踊車 (ボーイスカウト 岐阜第16団)	車切	○	○	○					
	三味線の神楽		○	○				(○)	CD音源を併用
	下り村	○	○	○					
	神楽	○	○	○					

(○) はCDに収録されているが実演はしていない楽器

表 8-3 笛の寸法

(単位はmm)

寸法 笛・山車		全長	唄口(管尻側)から各指孔の管頭側及び管尻までの距離								唄口径	指孔径 (第1孔)	管尻 内径
			第1孔	第2孔	第3孔	第4孔	第5孔	第6孔	第7孔	管尻			
能管	安宅車(*1)	388	100	125	148	170	190	209	227	268	16×14	11×9	12
	若戎車(*2)	396	100	127	150	172	182	210	229	275	17×9	10×7	12
篠笛(古典8本調子) 若戎車		401	123	147	171	186	216	245	267	336	14×7	9×7	11

*1) 個人所有(輪宝の頭金) *2) プラスチック管



若戎車では奉曳会所有（平成二十七年（二〇一五）新調）、清影車ではからくり保存会所有（平成二十三年（二〇一一）新調）、踊車ではボイスカウト所有（平成十二年（二〇〇〇）新調）となっており参加者に貸し出している。

安宅車には地区所有のプラスチック管の他、古くから伝わる竹製の能管（個人所有）が残されている。その管の管頭には「輪宝」をかたどった金具がはめ込まれており、これは安宅車の飾り金具と同じ意匠である。輪宝は仏教において煩惱を打ち砕く象徴とされており、山伏が首からかける袈裟に金具として取り付けられることがある。安宅車では演者（カラクリ人形）が山伏に扮することから輪宝が意匠として採用されたのであろう。



写真 8-2 輪宝の頭金（安宅車）



写真 8-1 横笛（上から安宅車の能管、若戎車の篠笛・能管）

2 篠笛

若戎車では帰路（夜）で演奏される「七軒町」「おぼば」に唄用八本調子の篠笛（七穴）を用いている。これは日野屋楽器（名古屋市）製で、邦楽関係で広く普及している鳳声管の寸法に合わせて特注で製管されている。材質は白竹に篠の天地巻きである。近年まで岐阜まつりでは篠笛が使用されていなかったが若戎車では楽曲の導入に併せて用いるようになった（平成二十八年（二〇一六）より）。近隣の美濃まつり（美濃市）や関まつり（関市）など、夜（帰路）の囃子曲に篠笛を用いる例はいくつか存在する。

（三）打楽器について

1 大太鼓

各山車とも大太鼓として鋳打ちの平太鼓を用いている（呼び名は全山車で「大太鼓」。直径は60cm前後と大型で、吊り下げて専用のバチで打つ。バチは先端にフェルトや布が巻かれて太くなっており、大きく柔らかい音が出るようになっている。岐阜県や愛知県の山車囃子ではこの形態が一般的である。なお、踊車では太鼓台ごと山車内に載せ、他三台は車体に直接吊り下げている（図3）。各山車の大太鼓については以下の通りである。

安宅車の大太鼓は山車と共に車之町（本町五丁目）から伝わったとされるもので、吊り台（稽古時使用）には「伊奈波神社祭典山車奉曳記念 大太鼓台」と墨書きされている。

若戎車の大太鼓は囃子が復活した平成二十六年（二〇一四）に新調（宮本卯之助商店製）されたものである。

清影車の大太鼓胴回りには「清影車」と墨書きされており、収納箱には「（側面①）紀元二五三三年 明治二年癸酉一月新造」「（側面②）紀元 明治三年酉一月新造」「（側面③）清影車 要具 大太鼓入篋 中之切」「（蓋裏面）玉井



写真 8-3 山車内の大太鼓（安宅車、車体後方より撮影）

町「所蔵」と墨書きされている。年号にばらつきがあるが、紀元二五三三年の干支が癸酉であることを考慮すると、明治六年（一八七三）に大太鼓が造られたと考えてよさそうである。清影車の由来が刻まれた木板によれば、玉井町では明治六年に獨立山車を新造したが濃尾震災により焼失し、その後、明治三十七年（一九〇四）に元濱町・港町と合同で清影車を新造したとあるから、先代の山車と共に大太鼓が新調されたのかもしれない。

踊車の大太鼓を収納する木箱には「祭典用太鼓 小熊町」「昭和十一年四月新調 太鼓師 三重縣桑名郡深谷村 阿部甚兵衛 幹旋人 尾関次口」とあり、昭和四十年代まで踊車を曳いていた小熊町から伝わったようである。

2 小太鼓

各山車とも小太鼓として紐締め座敷太鼓が用いられている（図4、呼び名は「太鼓」縮

表 8-4 打楽器の寸法

（単位はmm）

楽器名	計測部位	安宅車	若戎車	清影車	踊車
小太鼓	打面直径	342	350	345	340
	胴長	137	135	160	150
	バチ全長	未計測	330	330	未計測
	バチ太さ	未計測	25	25	未計測
大太鼓	打面直径	660	610	550	570
	胴長	320	250	200	205
	バチ全長	280	375	340	310
	バチ手元太さ	30	25	25	35
	バチ手先太さ	60	80	60	70
小鼓	面直径	204	200		
	胴長	252	257		
鉦	高さ		38		
	上部直径		135		
	下部直径		165		



め太鼓」等）。安宅車では指導者が所有、若戎車では奉曳会が所有、清影車では地区所有のものとカラクリ保存会所有のものがある。踊車では裏面に「シ（おそらく神振会のシ）」と墨書きされた革が二枚（太鼓一丁分）伝わっており、足りない革や胴は安宅車の関係者から借りている。安宅車や若戎車では能楽太鼓の刻みのように弱打で打面を少し押さえるように打つ。また、各山車とも曲によっては左バチを担ぐ動作が入る。

3 小鼓

安宅車と若戎車では小鼓が用いられる（図5、呼び名は「鼓」「小鼓」等）。京町地区出身者の話では清影車でも以前は小鼓の演奏があったようだが、現在は楽器も含めて残っていない。

4 鉦

若戎車では帰路（夜）で演奏される「七軒町」「おぼば」に鉦（呼び名は「当たり鉦」）を用いている。名古屋方面の文化を意識して取り入れたとのことである。唱歌に「チキ



写真 8-5 小鼓（安宅車）



写真 8-4 小太鼓（踊車）

チ」「コンコン」とあるように、演奏では撞木を使って鉦の内側の側面や打面を打つ。

（四）楽器ごとの演奏者数や配置について

各山車に乗車する囃子方の人数は表8-5の通りである。各山車とも小太鼓（三名）と大太鼓（二名）は固定だが、それ以外のバートについては厳密に人数制限をしていない場合もあり、多少増減することがある。

配置については大太鼓を車体左前方で演奏する点が四台に共通している他、山車後部に小太鼓奏者が外向きに並ぶ点が三台（安宅車・清影車・踊車）に共通している（写真8-6）。詳しくは第七節で述べるが、この小太鼓の配置は岐阜市・美濃市・関市周辺の山車にだけ見られる特徴である。金屋町（明徳地区）出身者によれば若戎車でもかつては後部に小太鼓奏者が三人並んで演奏をしていたらしく、その名残で床が後部に突き出している。

安宅車では、笛（六名、うち二名は指導者で他四名は担当地区出身者）、小鼓（四名、うち二名は熟練者で他二名は担当地区出身者）が乗り込み、山車後方にマイクを設置している関係で指導者や熟練者はその近くになるように座っている（図8-1）。また総指揮をする指導者は山車の外（後方）で指示を出し、曳行中に小太鼓奏者（小学生）の交代を行う。

表 8-5 囃子方の乗車人数（令和6年）

単位：人

	笛	小太鼓	大太鼓	小鼓	合計
安宅車	6	3	1	4	14
若戎車	4	3	1	4	12
清影車	1	3 (+6)	1		11
踊車	3	3 (+α)	1		7 (+α)

若戎車では、太鼓三名が山車の左右に二名対一名で向かい合い、笛は山車前方側に乗る（図8-2）。また小鼓は山車後方に外向きで腰掛けるようにして座る。これらは名古屋の山車文化を模している（写真8-7）。笛・太鼓ともに指導者が乗っていて、曲の切り替えなどの指示をしている。また、カラクリ演技を披露する際は、笛・小太鼓・小鼓・鉦の奏者は山車の前に並んで演奏を行う。スペースの制限がないため使用する楽器は小太鼓が六丁、小鼓が八丁で、笛も大勢で演奏をする。

清影車では、小太鼓奏者の後ろに六名ほど待機しており、その横には指導者が同乗して曳行中に交代の指示を出している（図8-3）。笛は現状では一名で、休憩を挟みながらCD音源に合わせて演奏をしている（令和六年時点）。



写真 8-7 若戎車の小鼓奏者（車体後方より撮影）



写真 8-6 安宅車の小太鼓奏者（車体後方より撮影）

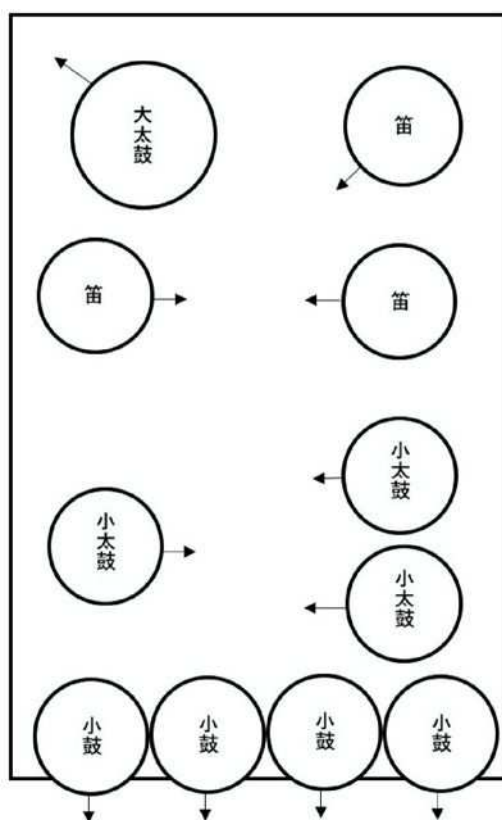


図 8-2 囃子方の配置（若戎車）

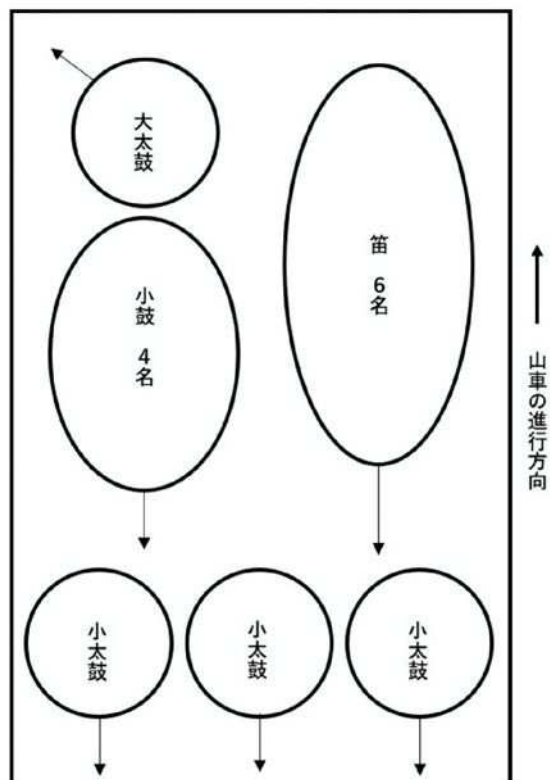


図 8-1 囃子方の配置（安宅車）

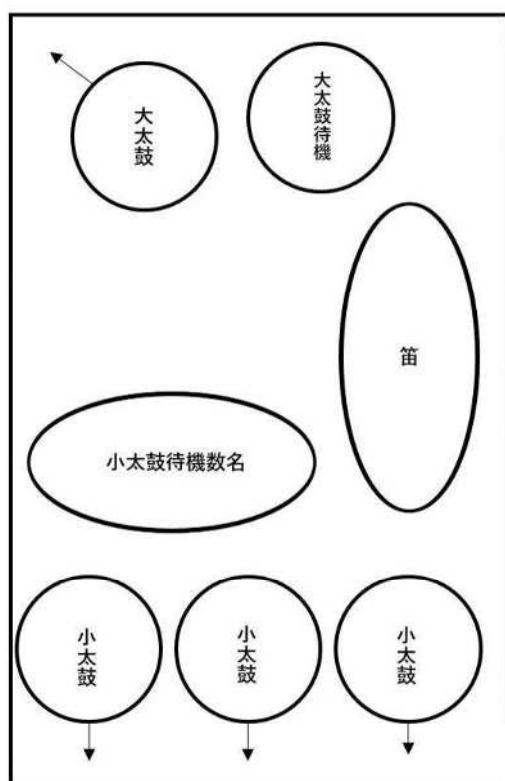


図 8-4 囃子方の配置（踊車）

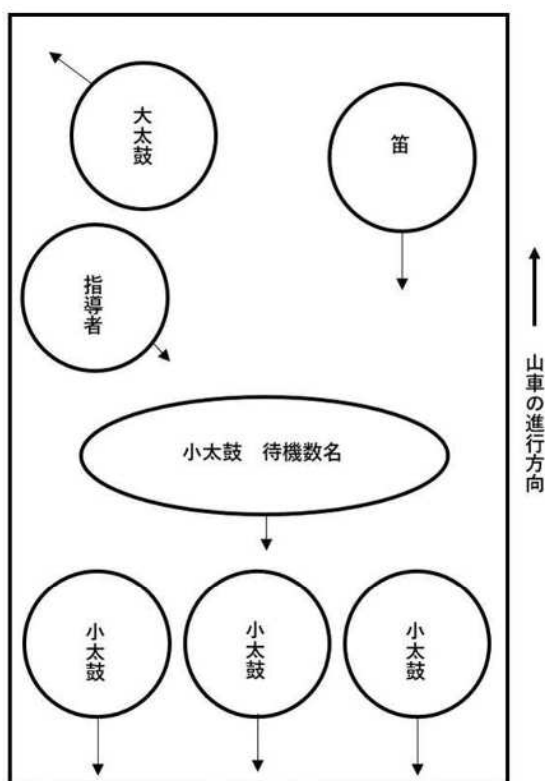


図 8-3 囃子方の配置（清影車）

踊車では小太鼓奏者の後ろに数名待機しており、その後ろに笛奏者（うち一名は指導者）が座る（図 8-4）。音響機器の調整は笛奏者が担当している。

第五節 稽古と楽譜

各山車では岐阜まつりの時期が近くなると地区や団体主催で囃子の稽古が開催される。回数や期間はそれぞれ異なっており、五回程度の場合もあれば二十回以上開催する場合もある。複数の地区が年ごとに輪番で囃子を担当するケースもあり、安宅車は八年周期、清影車は六年周期で担当が回ってくることになっている。しかしながら、どの地区も指導者や主要メンバーは輪番とは関係なく毎年携わっており、安定して囃子が伝承されている。

どの山車も稽古に八割譜が用いられている。八割譜とは能楽で用いられる楽譜のことで、笛のメロディや打楽器の手付が八拍を一行として表記されている。笛は「オヒヤラ」というような唱歌に加え、運指を数字表記した数字譜も併用されている。どのパートも最終的には暗譜をした上で山車に乗車するため基本的に祭礼当日は楽譜を用いないが、稽古の補助としては役立っている（写真 8-17～29）。

若戎車では文化庁の補助事業で「奉曳資料集 第一集 山車囃子（令和四年発行）」という譜面集を刊行している。指導者である小野崎隆賢氏が中心となつて編集されたもので、楽器ごとの八割譜の他、囃子復活のいきさつや、各曲の由来等が詳しく解説されている。他山車についても印刷されたものを配布したり、拡大したものを稽古場に掲示するなどの方法で活用している。

（一）安宅車の稽古



写真 8-8 稽古風景（安宅車）

安宅車では金華地区内の十六区が二区ごとの輪番で囃子方を担当しており、稽古はどの年も金華公民館で行われる（写真8-8）。スケジュールは年によって多少変動するが、一月から笛・大太鼓の稽古があり、二月になると太鼓・小鼓の稽古が始まる。そして、三月になると全体での稽古が行われ、祭礼当日と同様に曲の切り替えなども含めて調整をする。パート別の稽古も含めると三十回近くの開催になる。小太鼓・小鼓の指導は能楽幸清流小鼓方の後藤嘉津幸氏

（金華地区）が中心となっており、われ、他楽器も金華地区在住者によって指導されている。

令和五年三月二十七日の合同稽古では、初めに昼の道中進行で用いる「道行」と「車切」を交互に演奏し、休憩を挟んで、夜の道中進行で用いる「早神楽」と「車切」、帰路で用いる「三番曳」と「狂言神楽」を交互に演奏した。笛・大太鼓・小鼓の演奏者は会場の両側に内向きで座り、小太鼓の演奏者は会場中央（前方）に配置された三丁の小太鼓に三列で並ぶ。小太鼓の正面には指導者が座り、演奏の中で構えや強弱、速度など細かい点を指導し、頃合いを見計らって交代の指示を出して稽古が進めら

れた。参加者は笛九名、小太鼓二十二名、大太鼓一名、小鼓八名だった。なお、一・二月に行われる笛・大太鼓のパート別稽古でも同様に曲を切り替えながら進行していく。指導者は笛の唱歌を唱えながらテンポや間の取り方などについて指導をする。演奏の出来栄だけでなく、長時間の演奏に耐えられる奏法にも主眼を置いているのだという。

（二）若戎車の稽古

若戎車では明郷校区在住者を中心とした岐阜若戎車奉曳会が囃子方を担当しており、毎年の稽古は明徳公民館で行われる。指導は邦楽囃子方・住田流の住田名央妃氏、住田喜久次氏、小野崎隆賢氏らによって行われている。

令和五年三月二十八日の稽古は、まず①笛、②打楽器（小太鼓・大太鼓・小鼓）の二グループに分かれて別室で行われた（写真8-9）。笛は指導者と共に膝を叩いてリズムをとりながら一曲ずつ唱歌を唱え、続いて笛を手に取って演奏をした。「車喜利」「早車喜利」「狂言囃鼓」「狂言神楽」「三番曳」「神楽」「七軒町」の順だった。



写真 8-9 笛の稽古風景（若戎車）



打楽器は、指導者の助言を受けながら「車喜利」「早車喜利」等を順に演奏した。その後、両グループは人形方と合流しカラクリ演技に合わせて全体演奏をした。「神楽」一回「人形囃子」を二セット演奏した後、休憩を挟んで「早車喜利」「車喜利」「狂言囃鼓」「狂言神楽」「神楽」「人形囃子」「七軒町」を演奏して終了した。

なお、金屋町（明徳地区内）出身者によれば、昭和末期ごろは鑄物会館で囃子の稽古が行われていたらしく、小学生がテープ音源に合わせて小太鼓・大太鼓を打っていたという。指導者は金屋町在住者のほか小熊町からも来ていた。

（三）清影車の稽古

清影車では京町地区内の七区が輪番で囃子方を担当しており、稽古会場は担当地区の寺院等を利用している。稽古は三月上旬ごろからはじまり毎週二回程度行われる（令和五年は合計九回）。指導は京町地区在住者が輪番とは関係なく毎年担当している。基本的には小太鼓の稽古が中心で、はじめのうちは指導者が楽譜を用いて唱歌を唱えながら手付や強弱、テンポ等についてゆつくりと説明をして、演奏者は小太鼓に見立てた木版をバチで叩いて習得をする。その後ある程度慣れてくると本物の小太鼓を用いるようになる。自主性を重んじていて、稽古の前後には担当小学生の号令で挨拶をする。

令和五年三月三十日の稽古は上宮寺（京町一区）本堂で行われた。指導者は笛と小太鼓それぞれ一名ずつ、参加者は十七名で、内訳は低学年（保育園年長・小学校二年生）が九名と、高学年（小学校三・六年生）が八名だった。小太鼓は会場中央に三丁配置されて参加者はその後ろに三列で並び、大太鼓は右後方に置かれ高学年が演奏を担当した。音源を使用しながら「しやぎり」「道行」「三番唄」「しやぎり」の順で演奏をした。指導者は小太鼓正面に座ってバチの構えや強弱などについて指摘をし、頃合いを見計らって曲中で交代の指示を出す。笛の演奏は指導者のみで、随時音源に合わせて演奏をした。前半の稽古が

終わると低学年は解散し、中休み後に高学年のみで「しやぎり」「道行」「三番唄」「しやぎり」の順で演奏をして終了した。また、同日にカラクリの稽古（本覚寺にて）も行われており、人形方の数名（成人）が譜面や音源を元にして「しやぎり」の笛を練習した。

（四）踊車の稽古

踊車ではボーイスカウト岐阜第十六団が囃子方を担当しており、関係者宅（金華地区内）を稽古会場としている（令和五年時点）。稽古は三月下旬から五回程度行われ、指導はボーイスカウトの関係者が担当している。囃子演奏はボーイスカウト活動の一環でもあり、技術面だけではなく話を聞く姿勢なども含めて厳しく指導が行われている。

令和六年四月二日の稽古には小学二・六年生までの計六名が参加した（写真8-10）。参加者は事前の稽古で曲を暗譜できているため、この日は祭礼当日と同じ演奏スケジュールで人員交代をしながら演奏を行った。前半は、①「三味線の神楽」、交代、②「車切」、③「三



写真 8-10 稽古風景（踊山車）

味線の神楽」、交代、④「車切（途中で速く）」、⑤「三味線の神楽」、交代、⑥「三味線の神楽」、交代、⑦「車切」という流れだった。後半の稽古では山車蔵まで戻る際の「下り村」も演奏された。曲が終わるたびに指導者からテンポ等についての指導を受けながら習得していた。「三味線の神楽」はCD音源を使用し、他曲は指導者が笛の演奏をした。

現指導者によればボーイスカウトが囃子方を担当する以前は神振会が中心となつて囃子の演奏が行われ、囃子の指導者には元芸子だった人物もいたという。同氏は昭和末期に神振会の囃子稽古に参加した経験があり、当時の練習曲目は「三味線の神楽」「車切」の二曲だった。

第六節 楽曲について

（一）各山車の歴史と囃子

1 安宅車の囃子

安宅車は能楽「安宅」を題材にしたカラクリを載せた山車で、元は車之町（現本町五丁目）の所有だった。江戸時代後期の建造と考えられており、安政の大地震で大破した後、修復再建を繰り返し、明治二十一年（一八八八）の改修時に安宅を題材とするカラクリ人形が載せられた。その後、濃尾震災や岐阜空襲の被害を免れたものの、町内での管理が困難になり昭和三十年代に伊奈波神社へ寄進され、金華地区が輪番制で曳行や囃子演奏を行うようになった。現在演奏されている囃子は山車が神社へ寄進された頃に能楽師の後藤孝一郎氏によって整備されたものである。安宅車伝来の古文書や古老の証言を元に再現され、以後は後藤氏とその子息の指導を中心に伝承されている。

現在伝わっている曲目は、「道行」「早神楽」「車切」「狂言神楽」「三番叟」「人

形囃子」の六曲である。このうち「狂言神楽」「三番叟」は神社からの帰路で演奏されることから総じて「帰り囃子」と呼ばれることもある。その他、以前は「狂言神楽」の代わりに「下がり羽」という曲を帰路で用いていたこともあったが現在は演奏されていない。なお、『岐阜市史 通史民俗編』では安宅車が車之町で曳かれていた当時の稽古について取り上げられており、「道行」「早神楽」など現在と同じ曲名が紹介されている。

2 若戎車の囃子

若戎車はカラクリ人形を搭載した山車で、人形の箱書きや言い伝えなどから、江戸時代後期に加納本町三丁目（加納天満宮氏子）で建造され、明治期に金屋町（明徳地区内）に譲渡されたと考えられている。その後、伊奈波神社で保管されるようになり、現在は明郷校区の岐阜若戎車奉曳会が曳行や囃子演奏を行っている。カラクリは恵比寿が鯛を釣って、宝船が現れるという内容である。

囃子の由来については詳しく分らないが、少なくとも昭和末期の時点ではテープ音源に合わせて町内の小学生が小太鼓や大太鼓の演奏をしていたように、金屋町出身者や小熊町出身者が指導に当たっていた。その後、山車の曳行やカラクリ演技（平成四年から）は行われていたが、生演奏は中断してテープ音源の放送だけになった。

平成二十年代になると生演奏復活の機運が高まり、邦楽住田流の住田名央妃氏、住田喜久次氏、小野崎隆賢氏らの指導によって平成二十七年（二〇一五）に生演奏が復活した。復活に際して、山車に残されていた「早神楽」「人形囃子」のテープ音源や譜面が参考にされた。また、若戎車と同じく名古屋型山車で恵比寿人形を搭載する二福神車（名古屋市中村区）との交流も生まれ、その囃子を編曲して若戎車の曲目に取り入れている。

現在伝わっている曲は、「車喜利」「早車喜利」「狂言鞆鼓」「狂言神楽」「三番叟」「神楽」「早神楽」「七軒町」「おぼば」「人形囃子（名乗り・早笛・岩船）



の十曲である。そのうち、「狂言囃鼓」は住田流の手附（歌舞伎囃子）、「おぼば」は岐阜の民謡、その他は「早神楽」「人形囃子」を除いて二福神車の囃子に由来する曲目である（若戎車用に編曲されている）。

3 清影車の囃子

清影車は能楽「玉井」を題材にしたカラクリ人形を搭載した山車で、明治三十七年（一九〇四）に玉井町・元浜町・湊町の合同で建造され、現在は京町地区が曳き回しや囃子演奏を担当している。

囃子の由来については詳しく分からないが、昭和四十年代前半には京町地区の氏子による囃子演奏が行われていたようで、当時は子供が小太鼓や大太鼓、大人は笛や小鼓を担当していた（京町二区出身者談）。近年はテープ音源（笛・小鼓収録）に合わせ小太鼓・大太鼓を演奏する状態が続いていたが、平成二十三年頃から笛の生演奏も加わるようになった。

伝わっている曲目は「しやぎり」「道行」「三番叟」「人形囃子」の四曲である。「人形囃子」はテープ音源のみを使用している。

4 踊車の囃子

踊車は作り物を載せた露天の山車で、ボーイスカウト岐阜十六団によって曳行や囃子演奏が行われている。山車の来歴については詳しく判っていないが、昭和四十年代までは小熊町によって曳き出されていたようで、昭和十年の墨書きが残る大太鼓も伝わっている。その後、神賑会（現在は解散）に引き継がれ、昭和末期にボーイスカウト岐阜十六団が運営に携わるようになった。戦後に三味線の伴奏入りで日本舞踊「さくらさくら」を披露したこともあったようだが、現在は道中囃子のみで踊りは不随していない（『岐阜市史 通史民俗編』）。

伝わっている曲目は「車切」「三味線の神楽」の二曲である。このうち「三味線の神楽」はテープ音源に合わせて演奏をしている。現指導者によれば同氏が神振会で囃子を習った昭和六十年頃は「車切」「三味線の神楽」の二曲を演

奏していたという。その後、平成十四年頃に小熊町の加藤かざり屋からテープと譜面（「車切」「神楽」「下り村」の三曲）が発見され、そのうち「下り村」「神楽」を踊車の曲目に加えた。また、「三味線の神楽」で使用するテープは平成十六年頃に同じ内容で再録音をしている。

（二）曲の用い方

岐阜まつりは四月第一土・日曜日（宵宮・本楽）に行われ、両日とも山車が曳き出される。全四台のうち安宅車・清影車は両日参加で、若戎車・踊車は宵宮のみ参加している（令和六年時点）。

宵宮では日中から山車が各地区内を廻ってカラクリ人形の奉芸を行い、夕方に伊奈波神社へ向け出発。その後、伊奈波通1交差点での「どんでん」を終えて順に宮入する（踊車は地区所属でないため夕方以降に曳行）。各山車は神前でお祓いを受け、境内に整列をして順次カラクリ人形の奉芸を行う。その後、花火等の催しが終わると、安宅車・清影車は地区の会場へ戻り、若戎車と踊車は境内の蔵へ収蔵される。二日目は安宅車・清影車が朝から各地区を廻り、宵宮と同様に伊奈波神社1交差点でどんでんを行った後、伊奈波神社に宮入をして山車を収蔵する。午前中にはすべての行程が終了する。

各山車の囃子を場面別に比較すると表8-6のようになる。曲名の隣に記載されたA～Iは音楽的に共通する系統である。各山車とも独自であるが、平均して昼の道中では系統A（道行・神楽）、山車を回すときは系統C（車切・シャギリ）、神社からの帰路では系統D（狂言神楽）や系統E（三番叟）を用いている。特に山車を回す際に系統Cの「車切（シャギリ）」を用いる点は四台に共通している。人形囃子は各山車とも内容が異なっている。

1 安宅車

両日とも昼の道中では「道行」が演奏され、方向転換をする直前に「車切」

へと切り替え、向きが変わると再び「道行」へと戻す。曲を切り替える際は笛のヒシギ（運指「(632)―」）を合図に中断をし、次の曲を始める。交代などで停車する場合もヒシギを鳴らす但しその場合は運指「(632) (74)―0 (632)―」と吹く。また、大通りを通過する際も「車切」が演奏されることがある。道中では担当区内の各町内に向けてカラクリの演技が行われる。

宵宮で神社に向かう際の道中では「早神楽」が演奏され、昼と同様に方向転換や大通りの通過時に「車切」が演奏される。どんでんの行われる伊奈波通1交差点に差し掛かると「車切」をかなりスローテンポで演奏し始めて、山車が回るにつれて限界までテンポを上げていく。さらに山車が着地した直後の「早神楽」は特に速く演奏することになっている。その後、通常テンポの「早神楽」で参道を進んで宮入し、神前でお祓いを受けて定位置に整列する。その後、カラクリ奉芸を終えて帰路につき、道中では「三番叟」「狂言神楽」を交互に演奏する（切り替えタイミングは限定されていない）。帰路の方向転換では「車切」は演奏されず、終始ゆったりとした雰囲気で行く。

翌日の本楽では、宵宮の昼と同様に「道行」「車切」を用いながら地区内を回ってカラクリ奉芸をする。伊奈波神社1交差点でのどんでんでは宵宮と同様に「車切」「早神楽」を演奏し、その後は「道行」で宮入りして、最後に神前でカラクリ奉芸をして終了である。安宅車では指導者が常に山車後方に同伴しており、曲の切り替えや人員交代の指示を出している。

2 若戎車

若戎車では長らく生演奏が行われずテープ音源（道中は「早神楽」のみ）が放送されていたが、囃子復活に際して曲の用途が新たに決められた。

若戎車の曳き出しは初日（宵宮）のみである。当日の午前中、出発地点である伊奈波神社で儀礼囃子の「三番叟」を一回演奏した後、地区を曳行する。神社参道では「神楽」を演奏し、方向転換時は「早車喜利」、道中では「車喜利」

表 8-6 囃子の用いられ方

山車の名称 場面	安宅車	系統	若戎車	系統	清影車	系統	踊車	系統
昼の道中	道行	A	三番叟(*1)	E	道行	A	神楽	A
			車喜利	C				
			狂言鞆鼓	F	しゃぎり	C		
			狂言神楽	D				
山車を回す時	車切（帰路は除く）	C	早車喜利	C	しゃぎり	C	車切	C
夜の道中（神社へ）	早神楽	B	昼と同様		道行	A	三味線の神楽	I
参道曳行時	昼（夜）道中と同様		神楽	A	昼（夜）道中と同様		昼（夜）道中と同様	
宮入時			早神楽	B				
神社からの帰路	狂言神楽	D	七間町	G	三番叟	E	下り村	D
	三番叟	E	おばば(*2)	H				
からくり奉芸時	人形囃子		人形囃子		人形囃子			

*1) 山車蔵から出発する際に1度だけ演奏する。

*2) 山車蔵に到着したときに1度だけ演奏する。



写真 8-11 奉芸時の様子（若戎車）

「狂言囃鼓」「狂言神楽」の三曲を自由なタイミングで切り替えながら演奏する。曲の切り替え時は笛のヒシギ（高音）を合図に中絶をする。道中では所定の場所で行われる。令和五年は同日開催の「道三まつり」の会場、明郷小学校、北野神社等でカラクリ奉芸が行われ、どの場所でも同様に「車吉利」「神楽」「人形囃子」「七軒町」の順で組曲として演奏された。また、奉芸時は大太鼓奏者以外が山車の前に並んで演奏をする（写真8-11）。曳行を終えて明徳公民館に到着すると夜に備えて休憩に入る。

宵宮の夜、伊奈波神社へ向けての道中でも昼と同様の決まりで演奏が行われる。伊奈波通り1交差点では「早神楽」に合わせてどんでんカラクリ奉芸を行う。その後、境内に入ると「早神楽」で神前まで進んでお祓いを受け、定位

置に整列する。その後、カラクリ奉芸では他山車とは違って囃子奏者がステージ上に上がって演奏をする。令和五年は昼同様に「車吉利」「神楽」「人形囃子」「七軒町」の組曲だった。

その後、境内の山車蔵まで戻ると「七軒町」を演奏し、蔵前で「おぼば」の演奏（唄付き）をして終了である（「おぼば」は令和六年から使用）。

3 清影車

昼および夜（神社へ向かう際）の道中では「道行」、方向転換の際に「しゃぎり」を用いるのが本来だったようだが、近年では「しゃぎり」も道中曲として演奏している。これは参加者の低年齢化によって「道行」の習得が難しくなったためである。両日とも昼の地区内曳行では低学年も活躍できるよう「しゃぎり」を主に演奏し、見せ場である宵宮夜の曳行（神社へ向かう際）では高学年をメインとして「神楽」を演奏している。「しゃぎり」についてはテープ音源を併用して演奏するのだが、途中からテンポが速くなっている。その点についてはあまり気にせず演奏をしている。令和五年の宵宮では伊奈波通り1交差点での「どんでん」でテープ音源を使用せずに生演奏を披露した。

4 踊車

踊車は宵宮でのみ曳き出される。特定の地区に所属していないため伊奈波神社への宮入がメインで、正興寺前から神社までの直線約600mを曳く。

道中では「三味線の神楽」が主で、大通り通過時や「どんでん」の際は「車切」が演奏される。また、神社境内の蔵に戻る際には「下り村」が演奏される。その他に、「神楽」という昼の道中で使用する曲を伝えているが、現状では夜しか山車を曳かないため演奏される機会はない。過去に、市制百周年記念行事で曳き出した際や、ボーイスカウト三十周年記念で岐阜まつりの昼曳行を行った際には「神楽」を演奏したという。令和五年を例に挙げると、

- ①正興寺から「三味線の神楽」で出発
- ②矢島町1交差点を通過する際に「車切」を演奏し、すぐに「三味線の神楽」に戻る
- ③伊奈波通り1交差点にて「車切」を演奏してどんでんを行う
- ④どんでんが終わってから神前まで「三味線の神楽」
- ⑤神前から定位に整列するまでの間に「車切」

⑥定位位置から山車蔵まで「下り村」を演奏
以上である。

(三) 道中曲について

道中で演奏される曲は音楽的に九グループに分けられる(系統A～I)。清影車の使用している演奏音源(笛と小鼓)については安宅車の囃子を録音したという話があり内容が同じだが、それに合わせて演奏する小太鼓と大太鼓の手は清影車独自の内容である。そのため「道行」「車切」の比較譜では小太鼓の手のみを取り上げることにした。また、比較用に名古屋の若宮祭「福祿寿車」の曲も引用した。大多数の能楽系山車囃子で基音は運指4なのだが、福祿寿車を含む一部の山車では運指5を用いている。これは能楽藤田流の影響によるものだと考えられている(安宅車の運指表参照)。岐阜まつりでは安宅車の「狂言神楽」や若戎車の各曲で基音が運指5で、他は運指4である。運指については譜例の中で安宅車だけを参考に記載する。また、能管は管ごとに高音が微妙に異なるため、今回の譜例では平均的な値で統一した。

系統A 「道行(神楽)」

能楽囃子「神楽」を原曲とする楽曲である。愛知・岐阜の能楽系山車囃子ではかなり広く普及している。若戎車・踊車では「神楽」と呼び、安宅車についても通名は「道行」だが譜面には「道行(神楽)」とある。内容を比較すると、清影車「道行」と踊車「神楽」の小太鼓の手は安宅車「早神楽」に近い(譜例1 参照。十三～二十小節目付近)。また、若戎車は基音が他よりも高く運指5の音高になっており、演奏開始箇所も他三台とは異なる(譜例1 九小節目)。

系統B 「早神楽」

系統A「道行(神楽)」のテンポを速くした楽曲だが、内容を若干変えて演奏する為、本書では別系統として扱うこととした。安宅車では夜の道中曲とし

表 8-7 道中曲の系統

系統	安宅車	若戎車	清影車	踊車
A	道行	神楽	道行	神楽
B	早神楽	早神楽		
C	車切	車喜利 (早車喜利)	しゃぎり	車切
D	狂言神楽	狂言神楽		下り村
E	三番叟	三番叟	三番叟	
F		狂言鞆鼓		
G		七軒町		
H		おばば		
I				三味線の神楽



山車名	山車高	山車幅	山車重	山車色	山車装飾	山車音	山車舞	山車歌	山車囃子
山車1	1.5m	1.0m	100kg	白	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車2	1.8m	1.2m	120kg	赤	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車3	2.0m	1.4m	140kg	青	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車4	2.2m	1.6m	160kg	黄	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車5	2.5m	1.8m	180kg	緑	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車6	2.8m	2.0m	200kg	紫	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車7	3.0m	2.2m	220kg	黒	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車8	3.2m	2.4m	240kg	白	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車9	3.5m	2.6m	260kg	赤	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車10	3.8m	2.8m	280kg	青	花紙	太鼓	舞	歌	囃子

山車名	山車高	山車幅	山車重	山車色	山車装飾	山車音	山車舞	山車歌	山車囃子
山車11	4.0m	3.0m	300kg	黄	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車12	4.2m	3.2m	320kg	緑	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車13	4.5m	3.5m	350kg	紫	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車14	4.8m	3.8m	380kg	黒	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車15	5.0m	4.0m	400kg	白	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車16	5.2m	4.2m	420kg	赤	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車17	5.5m	4.5m	450kg	青	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車18	5.8m	4.8m	480kg	黄	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車19	6.0m	5.0m	500kg	緑	花紙	太鼓	舞	歌	囃子
山車20	6.2m	5.2m	520kg	紫	花紙	太鼓	舞	歌	囃子

山車は、日本の伝統的な祭りの一つで、山車と呼ばれる山車に乗って、山車囃子と呼ばれる音楽を演奏しながら、山車舞と呼ばれる舞を踊ります。山車は、山車高、山車幅、山車重、山車色、山車装飾、山車音、山車舞、山車歌、山車囃子によって分類されます。山車は、山車高、山車幅、山車重、山車色、山車装飾、山車音、山車舞、山車歌、山車囃子によって分類されます。

第 1 次		第 2 次	
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100

第 1 次		第 2 次	
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100



て用い、「道行」と比べて開始箇所や笛・打楽器の手が少し異なる（譜例1）。小太鼓と笛に焦点を当ててみると、「道行」の四行目（譜面十三小節目）に相当する箇所から演奏を開始し、二周目以降は冒頭二行（譜面十三～二十小節目）の打楽器が早神楽独自の内容に変わる。また、笛についても同様の二行（譜面十三～二十小節目）に加え、一周目最終行（譜面九～十二小節目）も独自で、以後はその内容が繰り返される。それ以外にも跳ねるようなリズムのメロディになっている箇所もあり「道行」とは全体の雰囲気は違っている。

若戎車では名古屋の文化を取り入れて宮入時に演奏するようにしており、メロディが道行よりも少しだけ簡素になっている。名古屋方面では山車のすれ違いなど特別なタイミングで演奏されることが殆どだが、竹鼻まつり（羽島市）や高田まつり（養老町高田）では安宅車と同じく道中曲として用いられている。

系統C 「車切」 しやぎり

愛知・岐阜の能楽系山車囃子で最も広く普及している楽曲である。「社切」「シャンギリ」「サンギリ」など表記や呼び方は地域ごとに異なり、道中の他、山車を回転させる際の曲として速いテンポで演奏する場合が多い。岐阜県域では美濃・関・大湫・大垣・竹鼻・養老高田などで伝承されている。前半が能楽囃子「狂言神楽」と共通していることから広義に能楽系山車囃子に分類される。

岐阜まつりでは主に山車を回転させる際に演奏される（譜例2）。ただし、若戎車では遅いテンポのものを「車喜利」として道中で用い、速いテンポのものを「早車喜利」として山車回転時に用いている（内容は同じ）。他三台でも「どんでん」の際に遅いテンポで演奏を開始するが、テンポごとに別曲としては扱っていない。

系統D 「狂言神楽」 きやうげんかぐら

能楽囃子の「狂言神楽」を原曲とする楽曲である。若戎車では通常の道中曲として演奏し、安宅車と踊車では神社からの帰路で用いている。安宅車では特に遅いテンポで演奏する。関まつり（関市）や竹鼻まつりでも夜（帰路含む）で演奏される例がある。

系統E 「三番叟」 さんぱんそう

能楽囃子「三番叟（揉の段）」を原曲とする楽曲である。歌舞伎囃子にも取り入れられており、若戎車ではそこから引用して山車が発する前の儀礼曲として演奏している（大垣まつり「布袋軸」でも同系統のものが伝わっている）。一方、安宅車と清影車では神社からの帰路で用いている。そのメロディは愛知県域に広まっているものよりも美濃まつりや関まつりで演奏されているものに近い。

系統F 「狂言鞆鼓」 きやうげんかづこ

若戎車でのみ演奏されている楽曲で、歌舞伎囃子から取り入れたものである。山車囃子としての使用例は少ないが、名古屋型山車では田原祭り（愛知県田原市）の応神天皇車で方向転換時の曲として演奏されている。

系統G 「七軒町」 しちけんちやう

若戎車の帰路で用いられている。原曲は尾張東照宮祭（名古屋市）で曳かれた橋弁慶車（下七間町）の「帰り囃子（雨降り囃子）」とも呼ばれたものである。歌詞をつけてわらべ歌としても好まれた程で、橋弁慶車が戦災消失した後も愛知県を中心に山車囃子として盛んに演奏されている。若戎車では二福神車（名古屋市中村区）に伝わる曲をモチーフにして新たに作り入れた。岐阜周辺では関祭りの加茂山車（岐阜より譲渡）で夜曳き曲「夜山」として演奏されている。

系統H 「おばば」

原曲は岐阜の民謡「おぼば」である。古くから祭礼や宴席などの締めで歌われた曲で、若戎車ではその意味を汲み取って山車蔵へ帰着した際の納め唄として用いている（演奏と唄による）。岐阜周辺では関祭りの浦嶋山車に伝わっており、夜の曳行時に「おぼば」として唄付きで演奏されている。また、大垣祭り（大垣市）の大黒軸でも神前奉納の退出時に「おぼば」という曲名で演奏されている。

系統Ⅰ 「三味線の神楽」

踊り山車に伝わっている曲だが、原曲は不明である。曲名に「三味線」とあるとおり三味線の演奏が入っているが、実演されることはなく小太鼓と大太鼓だけが生演奏される。音源がどのような経緯で収録されたのか等は不明である。

以上の他、安宅車には帰路で使用する「下がり羽」という全七行からなる曲が伝わっていたそうで、前半三行は「車切」、後半四行は「狂言神楽」に近い内容だったとのことである。

（四）カラクリ演技時の曲

1 安宅車

安宅車のカラクリは能楽「安宅」を題材にしている。能楽での大まかなあらすじは以下の通りである。「源頼朝と不和となった源義経の一行は山伏姿となつて奥州平泉をめざす。途中、安宅の関で一行を阻む富樫某（関守）との問答の末、弁慶の機転によつて無事に関を超える。その後、非礼を詫びる富樫某と酒宴となり、弁慶が延年の舞を舞う。そして一行は富樫某に別れを告げて奥州へと下っていく。囃子については能楽では義経一行の登場で「次第」、弁慶の舞で「男舞（山伏ガカリ）」が笛・小鼓・大鼓によつて演奏される。

カラクリでは酒宴の場で弁慶が舞う姿が表現されており、謡の後に弁慶が扇を素早く開く場面が見所の一つである。囃子についてはカラクリ用に三部構成で編曲されており、部分名称はなく全体で「人形囃子」と呼んでいる。演奏はすべて生演奏で行われ、楽器は笛（二々複数名）、小鼓（複数名）、謡（一名）で構成される。笛は二管が正式だが、観客で混み合った場所等では複数名で演奏することもある。

① 弁慶の登場

演奏者…笛（一名々複数名）・小鼓（複数名）

笛のヒシギによつて曲が始まり、中盤で弁慶人形が動き出し、場を大きく一周廻る。この部分の曲は能楽囃子「一声」が原曲になっているものと思われる。

② 舞直前部分

演奏者…小鼓（複数名）、謡（一名）

弁慶人形が扇を閉じた状態で場を動き、その間、謡に合わせて小鼓が演奏される。謡が終わると弁慶人形は扇を開く。謡の内容は以下の通りである。

「面白や山水に。面白や山水に。盃を浮かめては。流にひかるる曲水の。手先づ遮る袖触れて。いざや舞を舞おうよ。元より弁慶は三塔の遊僧。舞延年の時の和歌。これなる山水の。落ちて巖に響くこそ。鳴るは瀧の水」

③ 舞部分

演奏者…笛（二々複数名）、小鼓（複数名）

弁慶が舞う場面である。曲は「男舞（山伏ガカリ）」のメロディに近いが、独自に編曲されている。大きく三段落に分かれており、一々二段落は「男舞（山伏ガカリ）」の「カカリ」「初段」を少し短くした内容に近く、三段落は同曲の最終段落に相当すると思われるが、途中で黄鐘調から盤渉調へと変わり基音が高くなる。この部分は能楽囃子「早舞」の初段ヲロシ以降の地に似ている。



2 若戎車

若戎車のカラクリは恵比寿が鯛を釣り、宝船が出現するという内容である。能楽に該当演目はなく独自のものであるが、能楽「岩船」から取材した謡や、囃子曲「早笛」がカラクリ演技中に用いられている。詳しい経緯は不明であるが「宝船」が登場する点が「岩船」と共通するため選曲された可能性がある。長らくテープ音源（名乗り（謡）「早笛」「岩船（謡）収録」）を用いていたが、それを元にして平成三十年（二〇一八）から生演奏をするようになった。元のテープ音源が録音された時期や経緯は不明である（カラクリ奉芸は昭和後期に中断し平成四年（一九九二）に復活している）。

①「名乗り（謡）」

演奏者…謡（子供）

名乗りは能楽において登場人物が自己紹介や場面についての説明をする部分である。若戎車では笛のヒシギに続いて名乗りが謡われ、若恵比寿人形が周囲を見渡して場を一廻りする。この部分は子供が複数名で謡うことになっており、復活に際して謡い易いよう節を少し変更した。

「そもそもこれは。事代主命とは我がことなり。あら、麗かな春の景色やな。有り難や。君の恵みも今この時。面白や。面白や。」

*事代主命は出雲の国譲りで釣りをしたことから恵比寿と同一視されている。

②「早笛」

演奏者…笛、小太鼓、小鼓（それぞれ複数名）

笛、小太鼓、小鼓によって演奏される速いテンポの囃子である。この曲の冒頭で若恵比寿人形は鯛を釣り、喜び勇んで場を大きく二周廻った後、正面に置かれた宝袋の前で待機する。

③「岩船（謡）」

演奏者…謡（男性）、小太鼓、小鼓、笛

能楽「岩船」で用いられる謡が小太鼓・小鼓の演奏に合わせて謡われる（それぞれ複数名）。この部分は男性が謡うことになっており車力の男性陣を中心にして謡っている。途中「宝の御船」と謡われる部分で宝袋が開いて宝船が登場する。その後、若恵比寿人形が大きく三周廻って演技は終了する。謡の終わりでは笛（打ち込み）の演奏も加わる。以下は「岩船」の謡である。

「長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出すや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。」

3 清影車

清影車のカラクリは能楽「玉井」を題材にしている。能楽での大まかなあらすじは以下の通りである。「神代の昔、彦火火出見尊（山幸彦）は兄から借りた釣針を魚にとられてしまい、それを探し求めて海神の都へと赴き、不老長寿の水が湧くという井戸で海神の娘（豊玉姫・玉依姫）と出会う。その後、尊は豊玉姫と契りを交わし、三年の月日が流れると海神たちから珠玉と釣針を受け取って地上へと戻っていく」。

カラクリでは、尊が海都を後にする場面で姫たちが舞う「天女舞」、海神が威厳を示して舞う「舞働」が演じられている。人形は一体二役で、豊玉姫の人形が面かぶりをして海神（清影車では龍神と呼んでいる）に変化し、舞が終わると再び面をはずして豊玉姫へと戻る。そこがカラクリ演技の見せ場である。

囃子は生演奏ではなく、人形が復活した平成十年頃に吹き込まれたテープ音源を使っている。笛と太鼓による能楽囃子で、笛は藤田流、太鼓は金春流の能楽師による演奏である。能楽では笛・太鼓・小鼓・大鼓の構成によって姫たち

の登場で「出端」、舞で「天女舞」。海神の舞で「静カナル舞働」、姫たちの中入りで「来序」を演奏するのだが、清影車で使われているテープでは大きく異なっている。おそらく、演技時間等も考慮してカラクリ用に編集されたのである。演技の流れとテープに吹き込まれている曲は以下の通りである。

①豊玉姫の登場と天女舞 使用曲「下り羽」「祈り」

豊玉姫人形は西・東・正面へ移動をして礼をすると、後方に向いて大将人形（彦火火出見尊）に礼をする。その後、舞が始まり、最後は後方（大将人形側）へ向きを変えて待機する。そこまでの流れで囃子は演技が始まると同時に「下り羽」が流れ、途中からテンポの速い「祈り」へと切り替わる。曲の切り替わり部分が演技と対応しているわけではないが、面かぶり演技に向けて盛り上げていく意味があるものと思われる。

②面かぶりで龍神へと変わり舞う 使用曲「早笛」

笛のヒシギ（高音）を合図に、面かぶりをして正面を向く。そこから龍神の舞が始まる。曲はテンポが速く勇壮な「早笛」が用いられている。

③豊玉姫へと戻る 使用曲「来序」

「早笛」が終わるタイミングで面をはずして豊玉姫に戻る。そこから、尊との別れを惜しむように東西にゆつくりと移動し、正面に礼をして演技が終了する。この間「来序」が流れる。

以上のような流れである。「祈り」「来序」は人形からくりで用いられる例があまりないが、「下り羽」は登場など演技前半、「早笛」は見せ場（クライマックス）で用いられる例がある。例えば、岐阜祭りでは若戎車が「早笛」を使用

している（鯛を釣り上げる場面）。

第七節 他地域との関係

（一）岐阜県下における能楽系山車囃子の分布

これまで述べてきたように岐阜まつりで曳かれる四台の山車では、道中曲・カクリ曲ともに笛（能管）・小太鼓・小鼓・大太鼓による能楽系囃子が盛んに演奏されている。こういった事例は愛知・岐阜県域に見られ、岐阜県では名古屋型やそれに準ずる形式の山車で演奏されている場合が多い。おそらく山車やカラクリと繋がりを持ちながら伝搬したのであろう。例えば東部のダンジリ（稚児舞が付随する）や、西部の長浜型山車（子供歌舞伎・舞踊が付随する）、大垣まつりや蚕まつり（瑞穂市美江寺）で曳かれるような露天型の山車（屋根なし、置き人形搭載）等では能楽系囃子が演奏される例は少ない。演奏されていたとしても同じ祭礼の中で名古屋型に準ずる山車が曳かれていることが殆どで、その影響を受けているものと思われる（岐阜まつりの「踊車」はその一例）。

表8-8、図8-5は岐阜県下で能楽系囃子を演奏している代表的な地域とその詳細である。これら以外にも、古川祭（飛騨市）や高山祭（高山市）宮代白山神社例祭（郡上市）ではカラクリ演技の際に謡曲を含む能囃子が用いられているが、調査が不完全なため今回の一覧表には載せなかった。表を見ると分かるように、八か所で曳かれる計四十三台のうち八割超の三十七台で能楽系囃子が用いられている（CD使用含む）。さらに細かく見ると、大垣まつりが全十三台中の八台、高田まつりが全十三台中の二台で、それ以外の六か所は曳き出されるすべての山車で用いられている。これらは代表例であるから岐阜県全体について論ずるにはいたらないが、少なくとも今回取り上げた祭礼の多くでは



*1) 曳かれている山車のうち能楽系囃子を用いている台数。

*2) カラクリ演技を伴う山車のうち演技中に能楽系囃子を用いている台数。



図 8-5 岐阜県下の山車祭礼における能楽系囃子の分布

表 8-8 山車の形状および演奏用途別一覧

単位：台

No.	祭礼名	地域	山車の形状と台数		能楽系曲 使用	能楽系 道中曲	カラクリ人形		
							演技あり	能楽系曲	謡使用
①	岐阜まつり	岐阜市	名古屋型	3	3	3	3	3	2
			露天型	1	1	1	なし	なし	なし
②	加納天神祭	岐阜市	準名古屋型	1	1	1	1	1	1
③	美濃まつり	美濃市	名古屋型	3	3	3	3	3	1
			準名古屋型 *1	3	3	3	1	1	1
④	関まつり	関市	名古屋型	2	2	2	2	2	2
⑤	大湫神明白山神社例大祭	瑞浪市	準名古屋型	1	1	1	なし	なし	なし
⑥	大垣まつり	大垣市	準名古屋型 *2	10	8	3	9	8	7
			露天型 *3	3	なし	なし	1	なし	なし
⑦	高田まつり *4	養老町	準名古屋型	3	2	2	2	2	1
⑧	竹鼻まつり	羽島市	準名古屋型	13	13	13	5	4	1
合計				43	37	32	27	24	16

*1) 布袋車（古川町）は踊山車に布袋人形を搭載して屋根を付けた形状である。他に船型も 1 台含んでいる。

*2) 10 台のうち 2 台は前方に長浜型のような踊り舞台が搭載されている。

*3) 「三輪ヤマ」と呼ばれ、2 台は置き人形、他 1 台は杖頭人形（表中「演技あり」に含めた）を搭載。

*4) 「照鱗閣ヤマ（長浜型）」は長らく休車中のため除外した。

能楽系囃子が山車囃子の土台として認識されているようであるし、名古屋型山車を曳く岐阜市周辺の祭礼では特にその意識が強いことが分かる。

道中曲での使用率が低い大垣まつりについては、戦災消失からの復興による影響がある他、三輪軸（露天型）や長浜型山車で演奏される系統の曲（俗謡系囃子など）を道中曲として演奏している例が多く、カラクリ演技では謡曲のCD音源を用いている山車が約半数である。また、高田まつりの神楽獅子軸はカラクリを搭載せず神社等での獅子舞を主とし、神楽囃子を軸の道中曲として用いている。

カラクリ人形の演技を行う山車は二十七台で、そのうち約九割の二十四台で能楽系囃子が用いられ、さらにその約七割の十六台では謡曲が用いられている。謡曲が用いられないのは唐子の文字書きや鉦叩き、湯取神事、鯉押さえなど、能楽以外をテーマにしているものが多い。また、美濃まつりの「浦嶋車（泉町）」のように以前は謡曲が付いていたが途絶えたというケースもある（表では未カウント）。

以上に取り上げた祭礼だけでも能楽系囃子を用いる山車は相当数に上り、カラクリ演技に謡曲を用いる山車が多いことが分かる。これは岐阜県域に限った特徴である。愛知県域ではカラクリ演技に謡曲が用いられる例は極めて少なく、筆者の知る限りでは名古屋型山車では例がなく、車体の形式を問わずに数えても津島市や半田市で数件確認される程度である。手遣いの三番叟（知多半島に多い）や、浄瑠璃人形の演技（知立祭、岡田祭、上野間祭など）で短い台詞や語りが入るほかは楽器の演奏だけの場合が殆どである。

（二）岐阜まつりに関係する山車と囃子の伝搬

1 山車の伝搬

伊奈波神社の例祭では慶長年中（一五九六～一六一五）に二十四台の山車が

曳かれるようになり、その後、少なくとも江戸時代中期には能楽を題材としたカラクリ人形を搭載した山車が登場していた。江戸時代から明治期にかけて衰退した時期もあったようだが最盛期には三十台近くが曳き出された。しかし、濃尾地震（明治二十四年（一八九一））や第二次世界大戦の被害によつてその殆どが失われ、現在は四台が曳かれる状態である。そういった歴史の中で山車の譲渡が行われることもあったようで、伊奈波神社の氏子地域と関係のある山車が周辺地域に残っている。例えば、「加茂山車（関まつり、本町三丁目）」は明治二十七年（一八九三）に岐阜の矢島町から、「三輪車（美濃まつり、殿町）」は明治三十六年（一九〇三）に岐阜の白木町から、それぞれ譲渡されている。一方、逆に他地域から譲り受けた例もあり、加納天満宮の氏子地域である本町三丁目から譲渡された「若戎車（岐阜まつり、明徳地区）」がそれに該当する（元の名称は「蛭子車」）。

以上に挙げた関・美濃・加納の祭礼は山車の形状（名古屋型）や囃子の内容など、岐阜まつりと共通する部分が多く見られ、同じ文化圏に含まれていると考えられる。また、名古屋から旧車を譲り受けたという町内もあり、名古屋の文化とも密接に関係している。具体的に挙げると、美濃まつりの「船山車（相生町）」は明和九年（一七七二）に末広町（現中区、若宮祭）から、「浦嶋車（泉町）」は明治十三年（一八八〇）に万松寺（現西区）から、「靱車（常盤町）」は益屋町（現中区）所有だったものを明治三十年（一八九七）に、それぞれ購入している。また、関まつりの「浦嶋山車（常盤町）」についても明治二十七年（一八九四）から山車を曳くようになったと記録されており、言い伝えによれば名古屋の円頓寺近辺から購入したのだという。

2 囃子の伝搬

岐阜まつりの山車でいつ頃から能楽系囃子が演奏されているかについては氏子地域に記録や言い伝えが残されていない。しかしながら、能楽で使われる能



楽囃子そのものについては古くから町人に浸透していたようで、名古屋を本拠地として活動する能楽笛方藤田流の『藤田家門人帳簿（江戸中期から明治期の弟子名簿）』には伊奈波神社の氏子地域に住んでいた商人の名前が多く載っているという。藤田流の能楽師は各地の山車祭礼に積極的に関わっていたようで、愛知県域では名古屋城下の東照宮祭や、鳴海、西枇杷島。岐阜県域では大垣や竹鼻などで指導を行ったことが知られている。伊奈波神社の氏子地域においてもそういった経緯で能楽系囃子が祭礼に取り入れられた可能性は十分に考えられる。

一方、岐阜周辺地域に目を向けると、岐阜から譲渡された山車についても囃子の由来は分かっているのだが、それ以外の山車に岐阜関連の記録が残っている。美濃まつりで曳かれている「船山車（相生町）」では明治三年（一八七〇）に囃子が一新され、岐阜の安川助右衛門なる人物を指導者として招いて稽古をした。また、習得した曲目は「能 神楽 付 早神楽」「三羽叟 鈴之段」「車切」「狂言神楽」だった『諸色勘定帳（相生町）』。殆どの曲が現在の岐阜まつりで演奏されている能楽系囃子と同名である。「能」とあるからそれらの囃子が能楽由来であるという認識があったのだろう。時期については、明治三年に指導を行っているのだから、岐阜では少なくとも江戸時代末期にはその囃子が存在していたと考えてよいだろう。また、関まつりの「浦嶋山車」についても山車を購入した明治二十七年に指導者（出身不明）を招いて囃子を習得しており、その曲目は「神楽」「下り葉」「三三番（原文ママ）」「社切」だった『記録帳 第宅號（常盤町）』。「三三番」以外は現在も伝わっており、内容は能楽系囃子である。

以上のことから、岐阜やその周辺地域では少なくとも江戸時代末期～明治期には能楽系囃子が山車の囃子として浸透していた可能性が高く、能楽を嗜む町人たちの存在もその一因だったと考えられる。

（三）岐阜まつりと周辺地域との共通性

1 曲の比較

岐阜まつりから安宅車の道中曲を例に挙げて各地の曲目と音楽的に共通するものを一覧にすると表8-9のようになる。岐阜まつりに関係する山車を優先し、他はなるべく共通曲を網羅できるように選択した。また、参考までに名古屋の若宮祭で曳かれる福祿寿車（名古屋型山車）の曲目も加えてある。若宮祭はかつて名古屋三大祭の一つに数えられた名古屋を代表する山車祭礼である。各祭礼での曲の用いられ方については一様ではないため、本書では岐阜まつりと用法が似ている例を紹介することにとどめる。また、岐阜まつりにおける各系統の詳細については第六節を参照いただきたい。

・系統A「道行（神楽）」は安宅車と同じく昼の道中で用いられる場合が殆どで、宮人時に使われる場合もある（美濃まつり「轡車」等）。

・系統B「早神楽」は「道行（神楽）」のテンポを速くして内容を少し変えたもので、関や竹鼻では昼の道中で用いられており、高田まつりの猩々軸と林和靖軸では安宅車のように夜の道中曲としている（猩々軸は帰路のみ）。また、愛知県域では大山祭り（大山市）や足助祭り（豊田市）、津島秋祭り（津島市）が帰路（夜）で用いているが、名古屋周辺では山車の回転や他山車とのすれ違いなど勢いをつける際に演奏することが多く、夜専用の道中曲として用いられる例は確認されない。

・系統C「車切」は最も多くの地域で用いられている。通常の道中の他、坂を上る際（竹鼻）や、安宅車と同じく山車の回転時（岐阜・加納・美濃・大湫・高田）で用いられることもある。美濃まつり「船山車（相生町）」では帰路の曲として用いている。

・系統D「狂言神楽」は美濃や大垣のように行きの道中で使われることもあるが、関や竹鼻では安宅車のように帰路で用いられることがある。例えば、竹鼻ま

表 8-9 地域ごとの能楽系囃子（道中曲）比較

祭礼名	地区	山車名	曲名					
			A	B	C	D	E	
①岐阜まつり	金華地区	安宅車	道行	早神楽	車切	狂言神楽	三番叟	
②加納天神祭		鞍馬車	道行		車切			
③美濃まつり	相生町	船山車			戻り囃子	シャギリ	三番叟	他 1 曲
	殿町	三輪車			車切		三番叟	他 1 曲
	常盤町	靱車	本バヤシ		シャギリ		三番叟	
④関まつり	本町三丁目	加茂山車	神楽	早神楽	車切	帰り山	三番叟	他 2 曲
	常盤町	浦嶋山車	神楽	早神楽	社切			他 3 曲
⑤大湫神明白山神社例大祭			ナカ		マワリメ		モドリ	他 1 曲
⑥大垣まつり	本町	相生軸			道行		帰り軸	
	竹島町	榊軸				道行		
⑦高田まつり	西町（*1）	猩々軸		早神楽	親鳥		二・一	他 1 曲
	東・中町	林和靖軸	本神楽	早神楽	シャンギリ			
⑧竹鼻まつり	大西町	湯取神子		早神楽	サンギリ 三木利	チンセイナガラ 鎮西神楽		他 1 曲
若宮祭		福祿寿車	神楽	早神楽	車切	狂言神楽	三番叟	他 2 曲

（*1）能管ではなくアイジャク笛（篠笛十本調子に近い囃子笛）を使用。

つりの川町では「夜山三切くずし」という曲名で夜間（帰路含む）の曲として伝わっていて、大西町では「鎮西神楽」という曲名で宮入用になっているものの、後半部分と似た「四ツ囃子」という曲は夜間（帰路含む）になっている。各祭礼に伝わるものを比較すると安宅車では四行目（七、八小節目）が独特なフレーズになっていることが分かる（譜例 3）。なお、美濃まつりではニワカで用いる俗謡曲（篠笛使用）を帰路の曲としている山車が多い。

・系統 E 「三番叟」は能楽の三番叟（揉の段）から取材されたと思われる曲で、岐阜県下の多くの祭礼で使用され、大垣や大湫では安宅車と同じく帰路の曲として用いられる例がある。また、福祿寿車（若宮祭）でも帰路の曲として用いている。安宅車を基準として各地に伝わるものをフレーズの行構成で比較すると以下ようになる。概ね内容が共通する行を同じアルファベットで表記してある（譜例 4）。

岐阜まつり 安宅車 「三番叟（全六行）」 A・B・C・D・E・F
美濃まつり 船山車 「三番叟（全五行）」 A・B・C・E・F
関まつり 加茂山車 「三番叟（全五行）」 A・A・C・E・F
高田まつり 猩々軸 「二・一（全五行）」 D・F・A・B・C
大湫神明白山神社 「帰り（全六行）」 D・F・A・B・（二行）
出来町天王祭 河水車 「三番叟（全五行）」 D・F・A・B・C
尾張津島秋祭り 宮車 「もみのだん」 D・F・A・B・C *漢字表記未調査
若宮祭 福祿寿車 「三番叟（全十行）」 B・（G・H・I・J・K）・C・D・F・A
犬山祭 外町 「とつば（全十行）」 B・（G・H・I・I・J・K）・C・F・A

岐阜県域では岐阜周辺のグループ（岐阜・美濃・関）と、大湫・高田のグループに大きく分かれている。岐阜周辺のグループは構成が似通っていることに加えて独特な E のフレーズを含んでおり、同一の起源をもつ可能性が高い。さらに安宅車だけは D のフレーズを含んでいる。後者のグループは愛知の津島秋祭



山車お囃子 山車囃子		山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子

山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子
山車囃子	山車囃子	山車囃子

山車囃子 山車囃子 山車囃子
 山車囃子 山車囃子 山車囃子
 山車囃子 山車囃子 山車囃子
 山車囃子 山車囃子 山車囃子



「山車お囃子」

昭和 十一年

一	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
二	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
三	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
四	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
五	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
六	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
七	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
八	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
九	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子

十一	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十二	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十三	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十四	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十五	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十六	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十七	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十八	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
十九	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子
二十	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子	山車お囃子

昭和 十一年 十月

山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子

山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子

山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子 山車お囃子

り宮車（津島市）や出来町天王祭の河水車（名古屋市中区）で演奏されているものと構成が同じで、福祿寿車（若宮祭）のそれとは違っている。地理的に岐阜に近い犬山祭でも昼の道中曲として盛んに演奏されているが、構成は福祿寿車のものに近い。なお、大垣まつりの相生軸（本町）や菅原軸（新町）に伝わっているものはそれらのグループには属さず独特である。

2 囃子方の配置

第四節でも触れたように岐阜まつりの山車では小太鼓の演奏者が車体後方に進行方向とは逆向きで座っている。これは岐阜やその近隣の加納・美濃・（関）でのみ見られる特徴である。それらの山車では床が少しだけ車体後方に出ている、高欄で囲まれているケースもあり、おそらく演奏形式を想定して車体が新造あるいは改造されている。愛知県域の名古屋型山車では後方に小鼓の奏者が足を投げ出す形で腰掛けることが多く、そういった機構は見られない。また、岐阜県下の名古屋型に準ずる山車についても後方に並ぶ例は見られない（写真8-12）。

美濃まつりでは布袋車（かつて屋根なしの踊山車だった）のみが前方に並んで座る形式になっているが、他五台は後方に座っている。人数は車体の大きさによる制限があるようで、浦嶋車・靱車では三名、聖王車・三輪車・船山車では二名となっており、子供だけでなく大人も演奏している。関まつりでは加茂山車・浦嶋山車とも車体前方に二名が並んでいるが、加茂山車では後方に座るのが本来だっ



写真 8-12 上鍋屋町（竹鼻まつり）車体後部



たという。両車とも小学生が演奏をしている。また、加納天神祭の鞍馬車では車体後方に三名並んで座っている(写真8-13)。

3 若戎車のカラクリについて

第六節で詳しく紹介したように若戎車のカラクリは恵比寿が鯛を釣り、宝袋から宝船が登場するというストーリーである。これは能楽と直接関係が無い内容であるが、宝船からの着想と思われる能楽「岩船」の謡や囃子曲「早笛」が用いられている。

岐阜県下では竹鼻まつりの上町に似た系統のからくりが現存している。それは明治期に再建されているが演目としては天明六年(一七八六)から伝わるとされている。内容は能楽「岩船」をテーマにしたもので、勅使と童子の人形によって演じられる(写真8-14)。演技の流れと使用楽曲は以下の通りである。

① 勅使(人形)の登場。楽曲は「ヒシギ」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

② 前方の宝袋が割れて童子(人形)が登場し、面かぶりをして龍神となり激しく舞う。楽曲は「早笛」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

③ 再び面を外し童子の状態で舞のような所作をする。楽曲は「岩船(謡曲)」で、謡に



写真 8-14 龍神の面かぶりをする童子(写真左)



写真 8-13 鞍馬車(加納天神祭)車体後部

合わせて小太鼓・小鼓を演奏する。

以上である。①の「ヒシギ」は能囃子「出端」、②の「早笛」は能囃子「早笛」に相当すると思われる。若戎車とは使用されるタイミングが異なるが、「早笛」「岩船(謡曲)」を用いる点は共通している。

一方、愛知県の花車神明社祭(名古屋市中村区)では恵比寿と大黒の人形を載せた名古屋型の二福神車(天保七年(一八三六)頃建造)が曳かれている。カラクリ演技は、恵比寿が鯛を釣り上げると前方の宝袋が割れて宝船が登場するというストーリーである(写真8-15)。演技の流れと使用楽曲は以下の通りである。

① 恵比寿・大黒が手をかざして辺りを見渡す。楽曲は「出端」「二ノ句」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

② 恵比寿が鯛を釣り上げ大黒と共に体を揺らして喜びを表す。楽曲は「棹ノ手」で、笛・小太鼓・小鼓・大太鼓にて演奏。

③ 宝袋が割れて宝船が登場。楽曲は「早笛」で、笛・小太鼓・小鼓にて演奏。

以上である。①の「出端」「二ノ句」は能囃子「出端」、③は能囃子「早笛」に相当すると思われる。②は独自の曲である。謡は入らないが若戎車と同じく「早笛」が使用されている。なお、二福神をテーマにした山車は東照宮祭(名古屋)の上長者町で享保十七年(一七三二)に建造されており、



写真 8-15 二福神車(花車)のからくり

花車等の地域はその影響を受けていると考えられている。

4 鞍馬車（加納天神祭）への囃子伝授

伊奈波神社の氏子区域から南に位置する加納天神町には加納天満宮が鎮座しており、十月に行われる例祭（加納天神祭）で鞍馬車と呼ばれる準名古屋型の山車が曳かれている。これは氏子町内の本町五丁目が所有していた山車で、能楽「鞍馬天狗」を題材にしたカラクリを載せている。第二次世界大戦の戦災を免れ、その後は天満宮が引き継いで保存している。

加納城の守護神であった加納天満宮でもかつては伊奈波神社同様に多くの山車が出された。享和二年（一八〇二）に行われた加納天満宮九百年祭では七台の山車が出されたことから、少なくとも江戸時代後期には山車祭礼が成立していたようである。その後、濃尾地震後の明治三十五年（一九〇二）に行われた千年祭でも山車が出され、絵図によれば名古屋型山車が八台と、踊山車が五台出されていたことが分かる。その中に鞍馬車の姿も見られ、現存するカラクリ人形の収納箱に同年（明治三十五年）の記載があることから、千年祭に合わせた建造されたのではないかと考えられている。ただし、天満宮で保管されている



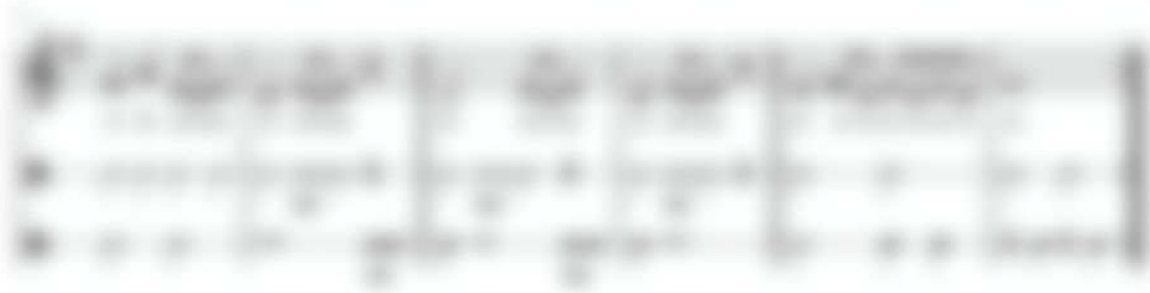
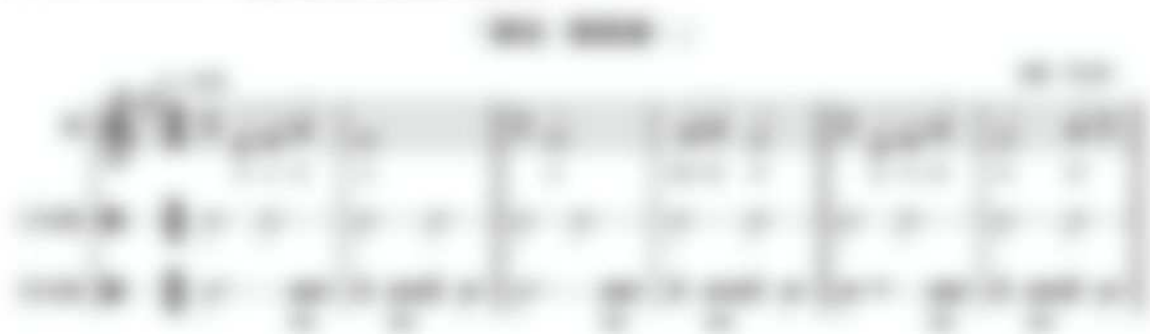
写真 8-16 鞍馬車

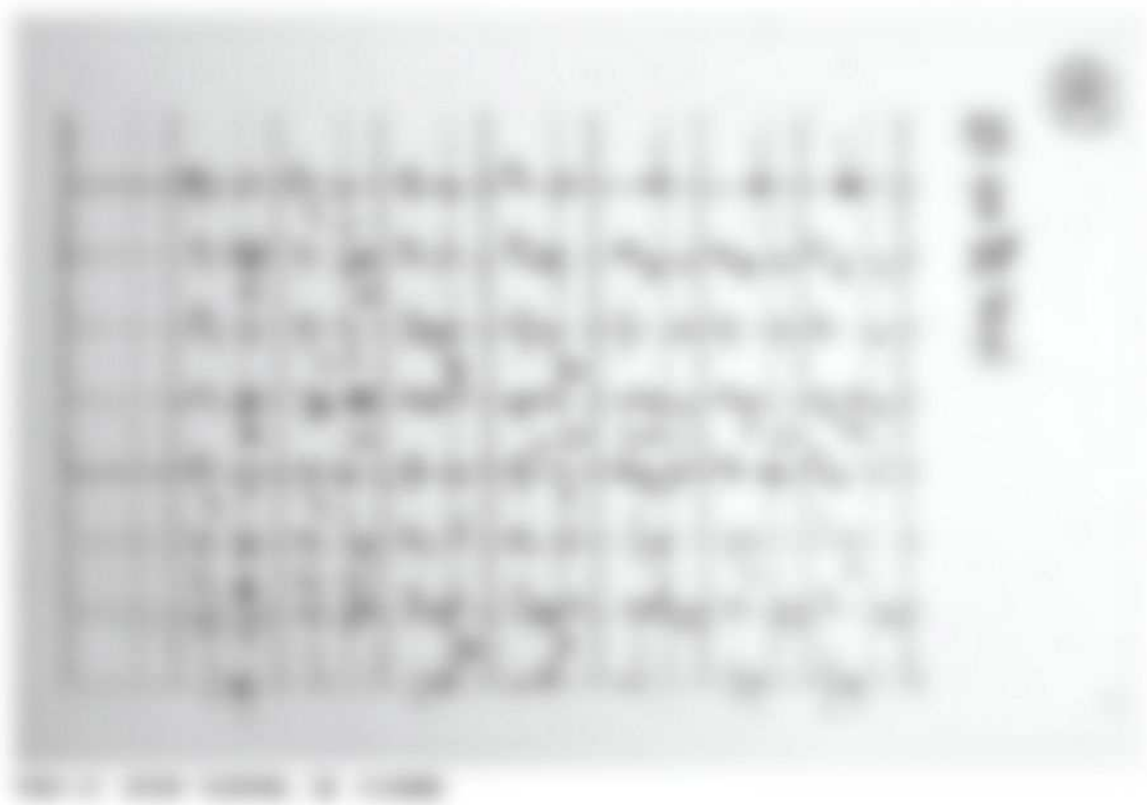
る平太鼓の収納箱に「五丁目」「明治十五年」とあることから、少なくとも囃子は明治初期から本町五丁目で行われていた可能性がある。その後、昭和初期には数台の山車が町内で保管されていたが、鞍馬車以外は全て戦災消失

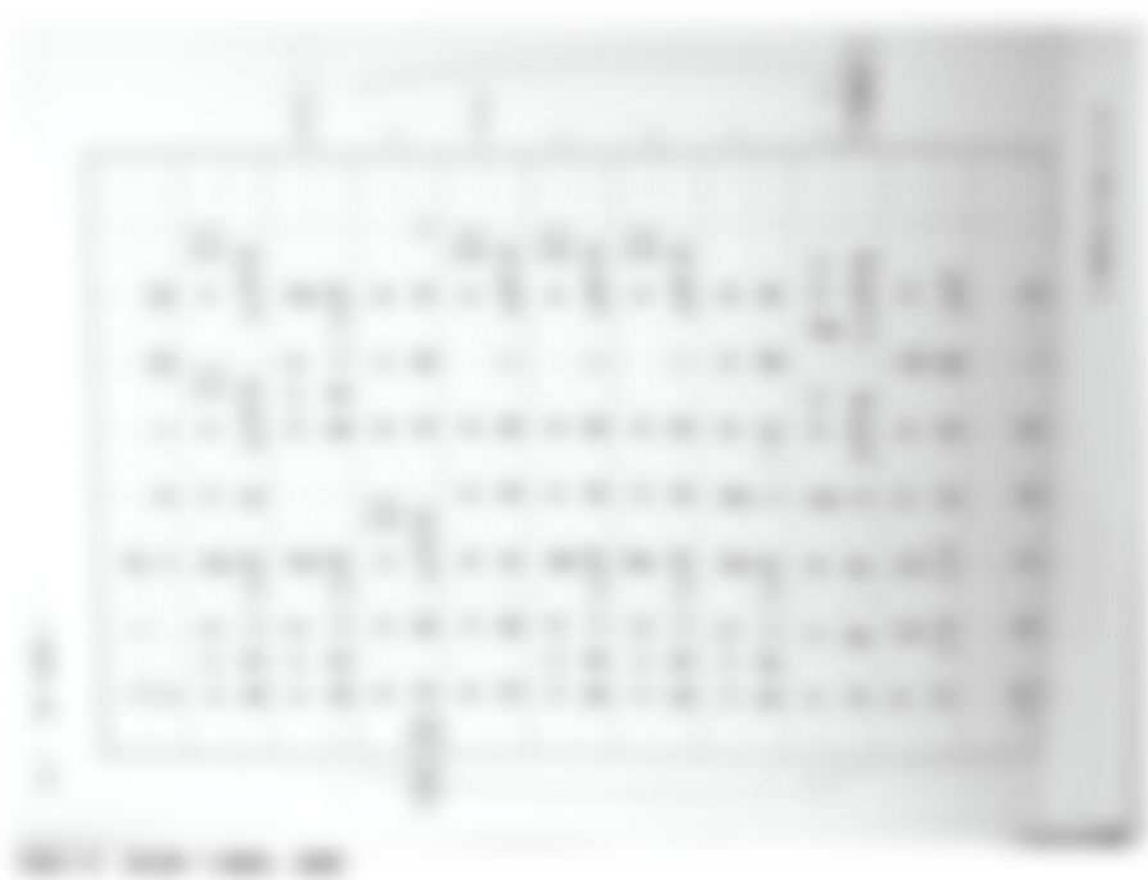
した。

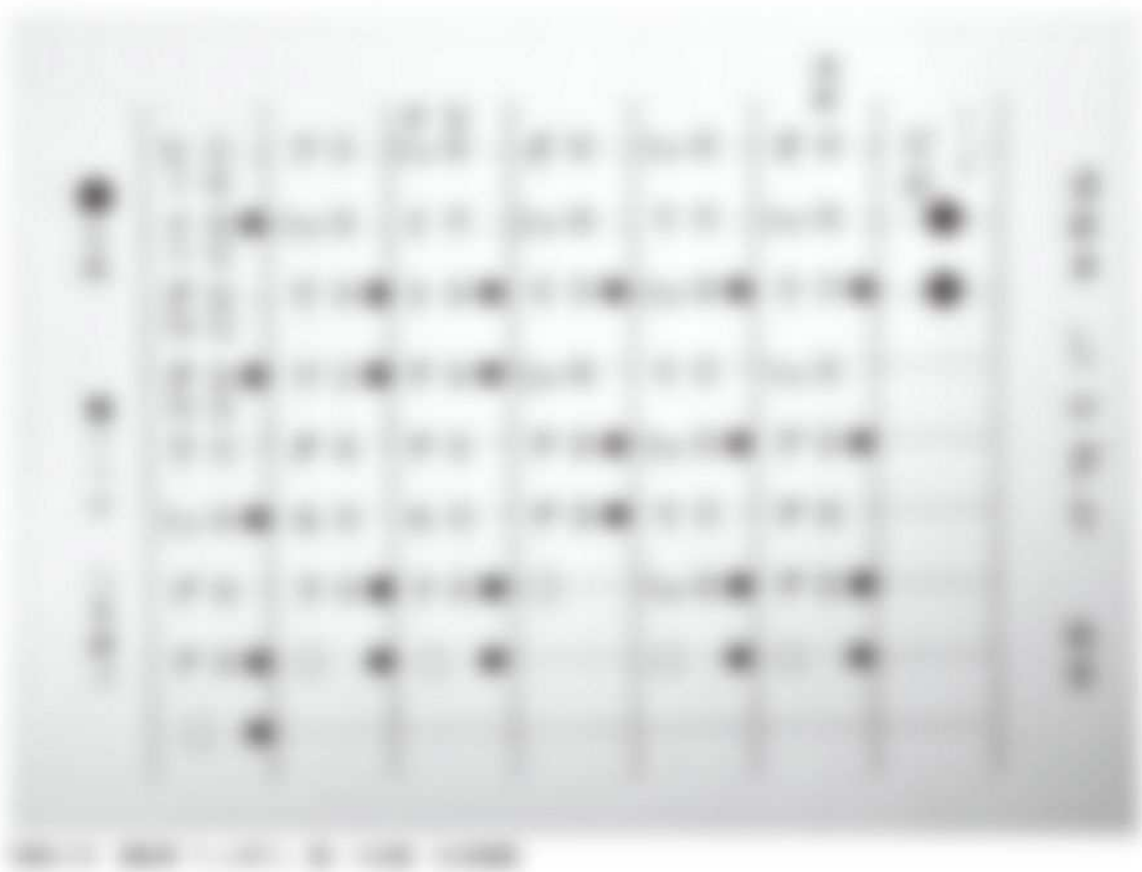
戦後は境内に飾られるだけで曳き回しは無く、囃子演奏だけが本町五丁目の有志を中心に行われていた。昭和四十年代に囃子を経験した女性（当時は小学生）によれば、曲は「シャギリ」「道行」の二曲があつて、笛・小鼓・大太鼓を大人が担当し、小太鼓は三人一組で小学生が演奏したという。その後、いつしか生演奏は途絶え、テープ音源を放送するようになった。

平成十五年（二〇〇三）の本殿新築に合わせて山車の曳行を復活させることになり、同時に囃子も生演奏で行う運びとなった。当時すでに伝承されていなかったため、岐阜まつりの安宅車（金華地区）に所属する囃子方有志に協力を依頼して「シャギリ」「道行」「人形囃子」を復活させた。このうち「シャギリ」は天満宮に残るテープ音源を元にし、「道行」は安宅車に伝わるものを導入、「人形囃子」は安宅車で囃子の指導をしている後藤氏（能楽師）によって新たに編曲された。「シャギリ」は岐阜まつりで演奏されているものと似ている（譜例5）。道中では「道行」、山車の回転時は「車切」を演奏している。「人形囃子」は「早笛」・「謡」・「舞働」・「謡」という構成になっており、能楽に即しているだけでなく、岐阜周辺の山車文化である「謡の使用」も考慮されている。楽器は笛（能管）・小太鼓（紐締）・平太鼓が用いられ、小太鼓は小中学生が中心で演奏している（写真8-13）。













第九章 総括

第一節 岐阜まつりと岐阜県内の祭りの比較

「岐阜まつり」は、二〇一九年三月二十八日に岐阜市重要無形民俗文化財に指定された。指定名称は「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」であり、伊奈波神社の一連の例祭神事と、四月第一土曜日・日曜日に行われる岐阜祭りの中の伊奈波神社に係る行事群（神幸祭、宵宮、山車奉曳とからくり奉芸、神輿奉納など）から構成されている。ここでは、「岐阜まつり」と岐阜県内の祭り・行事とを、神事・祭事の関連性、山車の形態、からくり奉芸、そして後継者育成や山車の保存・修理などの観点から比較し、改めて「岐阜まつり」の魅力について記載する。

（一）神事と行事との関連性の比較

『岐阜県の祭り・行事』（岐阜県の祭り・行事総合調査報告書 二〇二〇年三月 岐阜県）によれば、岐阜県内の指定無形民俗文化財は、国指定重要無形民俗文化財十三件（寒水の掛踊^{かのみず}）含む、県指定重要無形民俗文化財五十九件、市町村指定重要無形民俗文化財一七〇件となっている。また国指定重要無形民俗文化財のうち、「高山祭の屋台行事」（高山市）、「古川祭の起し太鼓・屋台行事」（飛騨市）、「大垣祭の軸行事^{やま}」（大垣市）は二〇一六年に「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録され、さらに二〇二二年には郡上市の「郡上踊」と「寒水の掛踊」が「風流踊」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。この二四〇件にも及ぶ指定無形民俗文化財のうち、「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」のように、指定名称に「行事」が付いている県内の指定文化

財として、ユネスコの「山・鉾・屋台行事」に登録された三件のほかには、県指定では、「長屋神社の祭礼行事」（本巣市）、「岩村町秋祭行事」（恵那市）を、市町村指定では、「伊勢神楽（神賑行事^{かみにしぎわい}）」（高山市）、「三夜待ち行事」（飛騨市）、「中呂数珠くり行事」（下呂市）を挙げることができ、「岐阜まつり」を含めるとわずか十件という数になる。

「岐阜まつり」の場合、「行事」という言葉が使われているのは、伊奈波神社の例祭の日に、神社本体の「神事」のほかに、いわゆる「町衆」たちが行う、山車奉曳、からくり、神輿などのさまざまな行事が生まれ、「町衆」たちに重きを置いた祭事が祭りの中心にあることからきている。ユネスコ無形文化遺産の「山・鉾・屋台行事」の提案要旨にも「地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う、各地域の文化の粋をこらした華やかな飾り付けを特徴とする『山・鉾・屋台』の巡行を中心とした祭礼行事」とあり、祭礼行事の主役はあくまでも地域住民であり、都市が成熟する中でその地域に住む人々が育てた無形の文化遺産であることが強調されている。

この提案要旨について無形文化遺産の一つである「高山祭の屋台行事」を例にとつて具体的に見てみる。「高山祭」の春の山王祭は日枝神社の例祭、秋の八幡祭は櫻山八幡宮の例祭であり、それぞれ町々から繰り出された屋台が曳行される。春の山王祭の試案祭では、日枝神社の神事を合図に祭りが始まり、二日間にはわたり総勢数百名の祭行列（御巡幸）が日枝神社と御旅所間を練り歩き、闘鶏^{とうけい}楽や獅子舞なども行列に華を添える。また十二台の屋台が所定の場所に曳き揃えられ、そのうちの三台によりからくり奉芸が披露され、夜には屋台に提灯が灯され曳き廻しが行われる。本祭にも再び屋台の曳行があり、神輿還御^{かみぎよ}とともに屋台の曳き別れ、そして日枝神社の神事で幕を閉じる。このように「高山祭」は、例祭の中で行われる「神事」と地域の人々が執り行う屋台や神輿の御巡幸、それに伴う芸能などの「行事」が一体化している点に文化財としての



非常に高い価値を見ることが出来る。

「岐阜まつり」においても、地域の人々の伊奈波神社への信仰心というものが祭りの中心にあり、四月五日に行われる伊奈波神社の例祭と一体化している。初日の四月第一土曜日に行われる神幸祭では、伊奈波神社の主祭神である「五十瓊敷入彦命」が金神社、樫森神社を神輿に乗って渡御する。金神社の祭神が五十瓊敷入彦命の妃である淳熈斗姫命であり、樫森神社の祭神が子の市牟雄命であるため、三社は古来より緊密な繋がりをもってきた。「岐阜まつり」の神幸祭においても、発肇祭後、伊奈波神社を出発した神輿は金神社に到着し、御旅所祭が行われる。そして樫森神社へ神輿が渡御する途中、三社の神幸行列が合流して街中を練り歩き、三社合同祭典となる。その後、樫森神社でも同様の御旅所祭が行われた後、神輿は伊奈波神社に戻り還幸祭で幕を閉じる。当日は「道三まつり」の神輿パレードもあり、市内は活気に満ちているが、それとは一線を引き、厳粛な形で神幸行列や三社合同祭典が実施される。一方、各地域から神輿や山車が地域を練り歩き、伊奈波神社へと向かう。そして山車からくりが奉納される宵宮となる。二日目の日曜日は午前中に山車を地域で練り廻し、その後「やまおろし」となる。このうち宵宮では山車清祓において、山車が一台ずつ順に伊奈波神社前に移動し、神宮の祓詞奏上、大麻祓い、玉串奉納が行われ、次いで神輿清祓、玉串奉納の後、山車の上でからくり奉納が行われる。宵宮は伊奈波神社の祭礼の中で「町衆」



写真 9-1 「岐阜まつり」神幸行列

たちが行う行事として重要な役割を担っているのである。

「岐阜まつり」や「高山祭の屋台行事」のように神輿や山車・屋台を中心とした渡御祭は県内には数多く残されている。無形文化遺産に登録された飛騨市の「古川祭の起し太鼓・屋台行事」は気多若宮神社の例祭で、神輿行列が中心となり、動の「起し太鼓」と静の「屋台行列」がこれに加わる。同じく無形文化遺産に登録された「大垣祭の軸行事」は大垣八幡神社の例祭で、軸奉芸（神前）、掛芸（その他の場所）、軸曳き廻し、夜宮へと続く。掛芸郡掛芸川町の三輪神社の例祭である「掛芸まつり」では、神輿渡御とともに曳軸の上で演じられる子ども歌舞伎が有名であるが、神輿を担ぐ時や軸を曳く時に「おぼばの唄」を声高らかに歌うところに特徴がある。関市の春日神社、神明神社および貴船神社の例祭である「関まつり」では、山車の曳行とともに「神事」と芸能を一体化とした「どうじやこう」が演じられる。美濃市の八幡神社の例祭である「美



写真 9-2 掛芸まつり 神輿を掲げ「おぼばの唄」を歌う



写真 9-3 岩村町秋祭行事 神輿渡御行列

濃まつり」では美濃和紙で飾り付けをした花みこしや山車がうだつの上がる町並みを練り歩く。また試楽祭の夕方には笑いを誘う即興劇「美濃流しにわか」(国選沢)が披露される。この祭りでは八幡神社の「神事」を地方(農村部)が、山車や練り物の巡幸などの「行事」を町方が担当するという役割分担がなされている点に特徴がある。

「行事」という名称が付く「長屋神社の祭礼行事」では、試楽祭には境内修祓祭人馬係の宮参り、山車神楽の奉納が行われる。本楽祭では、昼食時に「二本茶漬け」を食し、境内では神輿の渡御、山車の上では稚児の舞及び獅子の舞が行われ、最後に馬掛神事となる。また「岩村町秋祭り行事」は、神輿渡御・還御行列とその途中及び神社で奏する打囃子・雅楽や獅子芝居などからなる。二日間武並神社と八幡神社の間を往復する総勢三〇〇人の神輿御渡行列は荘厳である。

(二) 山車の形態の比較

以上のように見ていくと渡御祭にはその中心となる見所が数多く用意されているが、「岐阜まつり」の場合はなんと言っても山車からくりである。

次にその山車について見てみる。『岐阜県の祭り屋台』(水野耕嗣監修 岐阜新聞社 二〇〇三年十月四日発行)によれば、県内に現存する山車の総数は曳き出されていないものも含めれば、およそ六十五カ所一五〇台あるとされる。「岐阜まつり」では現在、「踊車」、「安宅車」、「若戎車(蛭子車)」、「清影車」の四台が曳行される。「踊車」は四輪内輪、二階部が高欄付きの舞台形式となっている。からくりが奉納される他の三台はいずれも名古屋型であり、四輪外輪で輪覆があり、前方に前棚、後方の人形飾り台に四本の細い柱が立ち、曲線状の唐破風屋根を支えている。一般に名古屋型の「山車」はからくり人形を重視するが、同様の山車は「加納天満宮例祭」(岐阜市)、「久々利八幡神社大祭」(可

児市)、「高田祭」(養老町)、「関まつり」、「美濃まつり」などにも見られる。美濃地域には尾張藩領であったところが点在し、名古屋の祭礼から直接的な影響を受けていると考えられる。「大垣祭」(大垣市)、「綾野祭」(大垣市)、「竹鼻まつり」(羽島市)の山車は車輪を台車の内側に設けた内輪式であるが名古屋型の一つと見ることが出来る(水野二〇〇三)。

一方、歌舞伎などを主体とする長浜型芸能舞台形式の「曳山」は「垂井祭」(垂井町)、「揖斐まつり」、「室原祭」(養老町)、「大垣祭」、「笠松春まつり」(笠松町)などに見られる。「大垣祭」の軸は、名古屋型変形「山車」と長浜型変形「曳山」が混在する独自の存在となっており、東西の祭礼文化の交渉がうかがえる点で非常に価値が高い。また西濃地域では「軸」という独特の字が使われる点も特色である。近隣の羽島市の「竹鼻まつり」の山車も「大垣祭」の軸同様、からくり人形付き名古屋型と子どもの手踊りなどが演じられる舞台芸能型が混在している。



写真 9-4 垂井祭 曳軸における子ども歌舞伎



写真 9-5 置山における南宮大社蛇山神事



露される代表的な祭りは次の図1のとおりである。その中でも、「岐阜まつり」の山車や写真6の養老町「高田祭」の「林和靖軸」に代表されるように、山車の四



写真 9-6 「林和靖」の幣振り人形

(三) からくり奉納の比較

このように地域によって山車の型や名称は異なるが、県内には山車に載せた「からくり」を披露する祭りが数多く見られる。人形を糸で操る糸からくりが中心であるが、中には棒から棒へ飛び移るといった離れからくりや操り師と人形を結ぶ糸が一旦切られている糸切りからくりも見られる。山車からくりが披露される代表的な祭りは次の図1のとおりである。その中でも、「岐阜まつり」の山車や写真6の養老町「高田祭」の「林和靖軸」に代表されるように、山車の四

「高山祭」や「古川祭」の山車は「屋台」と呼ばれ、江戸型の山車を祖形とし、上方の装飾やからくり人形を取り入れたもので、東西文化の融合の結晶といえる。高山の屋台は方向転換する際に用いる戻し車など独自の特徴がある。

「だんじり」と呼ばれる山車が曳行する祭りには「太部古天神社祭礼」（川辺町）、「久田見まつり」（八百津町）、「八百津まつり」（八百津町）、「諏訪神社祭礼」（美濃加茂市）など、可茂地区の祭りに多くみられる。その他、大山と呼ばれる巨大な置山と鞆鼓稚児舞が演じられる曳山が一体となつて奉納される事例として、「南宮大社蛇山神事」（垂井町）、「大矢田ひんこ祭り」（美濃市）、「御嵩薬師祭礼」（御嵩町）を挙げることができる。

本柱内に主役となるからくり人形、前棚に御幣や采配などを持つ幣振り人形や采振り人形を乗せた型のものが多い。また、からくり奉芸の際に能楽の謡曲が演奏されることが多いことも県内の特徴であり、いかに中世の芸能が近世に影響を与えたかを知るための貴重な資料となっている。

「岐阜まつり」の安宅車では前棚に幣振り人形、上棚には弁慶人形と大将人形として義経人形を飾り、謡曲『安宅』に合わせ、義経一行が安宅の関で関守の富樫某に止められるが、弁慶が偽りの勅進帳を読んでその場を逃れる場面を演じる。若戎車（蛭子車）では前棚に唐子人形（采振り人形）、上棚の上・前方にからくり仕掛けの宝船、その後ろに若恵比須人形を乗せる。奉納では、初めに鼓、太鼓、大太鼓や能管（横笛）による生演奏があり、その後、からくり奉芸となるが、えびす様が鯛を釣り、福をもたらす宝船が現れる場面を謡曲『宝船』に合わせて演じる。清影車では前棚に幣振り人形、上棚に豊玉姫人形と大将人形として彦火々出見尊人形を飾る。からくり奉芸では日本書紀の中に見られる海幸・山幸の神話から創作された能『玉井』という演目の一節が上演される。豊玉姫が龍神に、そして再び豊玉姫に戻るといふ「変身からくり」である。

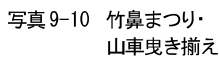
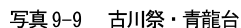
同じ名古屋型の

「関まつり」の「加茂山車」「浦島山車」でも、前棚には魔振り人形、上山にはからくり人形が設けられている。そのうち「浦島山車」では、市街地巡行中の要所



写真 9-7 関まつり・浦島山車

図 9-1 「岐阜県の代表的な山車からくり奉納がある祭り一覧」 () は指定の有無



「岐阜県の白地図イラスト無料素材集」(chizu-seisaku.com)の地図を基に作成



にて、からくりの釣り竿を担ぐ浦島と魔振りの唐子の演技が披露される。唐子が糸の端に作り物の鯛を付けたところで浦島が釣り上げるという仕組みで、ここで謡曲『浦島』の謡が始まる。

「軸」と呼ばれる「大垣祭」の山車は、十三台のうち九台にからくり人形を載せている。本町「相生軸」は、謡曲『高砂』の楽曲に併せて人形が舞い、舞いを重ねるうちに瞬時に帆掛船に変身するからくり、岐阜町「愛宕軸」は、武内宿禰が舞っている中、現れた狂言師の手にした箱から二羽の鳩が出てきて、豆を拾うからくり、新町「菅原軸」は、額の白紙に、菅原道真の少年時代を模したと言う童子人形が手にした毛筆で一氣に文字を書き上げるというからくりなど、大変ユニークでバラエティに富んだからくり奉芸が披露される。

「高山祭」や「古川祭」のからくりも見応えがあるが、高山祭の場合、春の十二台のうち、からくり奉



写真 9-12 久田見まつり・糸切りからくり



写真 9-11 大垣祭・菅原軸のからくり奉芸

(四) 保存・伝承・活用のために

以上、「岐阜まつり」と県内の祭りと比較しながら見てきたが、どの祭りにも共通する課題がある。その一つが後継者不足や若者の祭り離れという問題である。各保存会は担い手不足から後世への着実な継承に不安を抱えており、後継者を育成するためのさまざまな対策を練っている。「岐阜まつり」の場合、地元の町内会や子ども会によって祭りは維持され、からくり人形の遣い方や囃子の演奏など、早い段階から準備に取りかかっている。特に山車の曳行時に奏される「道行囃子」と

納があるのは三台、秋の十一台のうち、からくり奉納があるのは一台だけである。春の三番叟のからくりは童子が翁に、石橋台のからくりは濃艶な美女が獅子にそれぞれ変身する「変身からくり」である。春の龍神台のからくりは謡曲『竹生島』に合わせて唐子が壺を持ち、その壺から龍神が飛び出すくみである。秋の布袋台のからくりは、男女の唐子が順番に綾(フランコ)に飛びつき、回転しながら布袋和尚の肩と手に乗るという「離れからくり」であり全国的にも名高い。また「久田見まつり」のからくりには特徴がある。「久田見まつり」のだんじりは、二輪の花山車であるため、からくり人形の仕掛けも特殊で、操り師と人形を結ぶ糸が歯車によって一旦切られているところから「糸切りからくり」(「久田見の糸きりからくり」国選択)と呼ばれている。



写真 9-13 岐阜まつりに向けた練習・明徳地区



写真 9-14 岐阜まつりに向けた練習・金華地区



写真 9-15 岐阜まつりに向けた練習・京町地区

人形からくり奉芸時に奏される「人形囃子」の演奏の担い手として子どもたちの存在が欠かせないため、どの地区でも子どもたちへの伝承に力を入れている。明郷校区の岐阜若戎奉曳会では、一月から週一回のペースで練習し、岐阜まつり本番までには合計二〇回ほどの練習を行う。子どもは縮太鼓、大太鼓と大人の能管による囃子からくり人形の動作を合わせる練習が三月末に数回行われる。演奏は平成二十七年からは全て生演奏となった。また「岐阜若戎奉曳資料集」という山車囃子や衣装に関する冊子が二冊作成されているが、囃子を保存・伝承をしていく上で大変貴重な資料となっている。

金華地区の安宅車奉曳実行委員会では、一月から、大太鼓・能管と縮太鼓・鼓に分かれて計画的に練習を行っている。三月に入ると囃子全体の合同練習を週三回のペースで実施し、三月後半には、からくり人形の動作を合わせる全体

練習が始まる。全て生演奏で行っているが、囃子の指導者が自ら手本を示しながら子どもたちに懇切丁寧に教えている。

京町地区の清影車からくり保存会でも、三月から週二回、小学生の低学年と高学年に分かれて囃子練習を始める。初めと終わりの挨拶は小学生のリーダーが行うなど、子どもたちの自主性を重んじている。練習では三列に並び、テープ音源に合わせて、長板を太鼓に見たてて打つ練習から始まり、途中から縮太鼓を用意して順番に打つ練習となる。指導者は、子どもと同じ目線に立ち、邦楽特有の「間合い」を意識させながら教えている。

近年、都市化の進展や個人主義的傾向から地域社会における住民同士のつながりが希薄化し、地域で子どもを育てるという意識が低下しているといわれる。「岐阜まつり」の担い手となる子どもたちは、地域の古きから祭りにおける囃子の演奏技法をひたすら学び取るとともに、年長者に対する敬意方や地域社会の中での生き方を学んでいる。このように祭りの練習は、「地域の教育力」を十分に活かすことができる場でもあり、心身の鍛錬とともに、家庭内のしつけや学校教育だけでは学ぶことができない仲間の特長を生かし合って共に生きていくことの大切さを教えてくれている。

「岐阜まつり」以外の県内の祭り保存会でも、小中学校との連携によって後継者育成を図っている団体が数多く見られる。高山屋台保存会や大垣祭保存会では、若い世代への継承を図るため、小中学校での出前授業を行うなど学校と連携した活動に取り組んでいる。真桑文楽保存会も、中学生の真桑文楽同好会の指導を行ったり、小学生に対する体験教室を開催したりしている。一方、郡上おどり保存会のように小中学生を対象とするジュニアクラブを結成している団体もみられるが、どの保存会も後継者育成に余念がない。

二つ目に祭りで使用される山車、用具や山車を格納する収蔵庫の補修・修理が十分に行われていないという問題がある。「岐阜まつり」の場合、山車の所



有は「町方」であつたが、保管する場所がなく伊奈波神社に「寄附」することとなつた。現在は、伊奈波神社が祭りの期間だけ「町方」に「貸し出す」ことにしているが、山車やからくり人形の保存・修理という点で課題が残る。

こうした後継者育成や保存・修理の課題については岐阜県が策定した『岐阜県文化財保存活用大綱』の中にその解決策が示されている。そこでは、県が目指す文化財の保存・活用の基本方針を「文化財を知り、守り、育て、地域の資源として「清流の国ぎふ」づくりに活かす」とし、このうち「守り・育てる」では、「担い手を育成するための伝承教室、育成研修会、将来を担う子どもたちの育成教室に加え、大会や公演の開催に要する経費の一部を支援する」とあり、「活かす」では、「学校教育、社会教育の連携とともに、郷土への愛着・誇りの醸成、人材育成等を継承発展させる事業に対して補助を行う」とある。後継者育成のために、こうした県の補助金を有効活用していく方法がある。また大綱には「祭り行事の屋台、軸等の修理への支援を行うことにより、県民が今後も主体的に保存・活用に関わる土壌づくりを進める」とあるが、用具や収蔵庫の補修・修理に関しては、国や県指定の文化財に限られているため、「岐阜まつり」のような市町村指定の文化財の補修・修理については、限られた市町村の財政の中で行わなければならない。そのため、文化財保護を目的とする公益財団法人の支援事業に応募するという方法もあるが、いずれにせよ保存会と行政が連携を取りながら進めていく必要がある。

先のユネスコ無形文化遺産の提案要旨に「祭礼に当たり披露される芸能や口承に向けて、地域の人々は年間を通じて準備や練習に取り組んでおり、『山・鉦・屋台行事』は、各地域において世代を超えて多くの人々の間の対話と交流を促進し、コミュニティを結びつける重要な役割を果たしている」とあるが、地域に残る祭りは地域コミュニティの活性化に大きな役割を果たしている。「岐阜まつり」も「氏神・伊奈波さん」への信仰心とそれを支える地域コミュニティ

の中で生まれたものであり、岐阜という中規模都市にある大規模神社の伝統神事や行事を、神社を取り巻く人々の文化の中で考えていく上で貴重な文化財といえる。本調査報告書が、「知り・守り・育て・活かす」という四つの観点から、「岐阜まつり」を保存・伝承・活用していくための大きな指針となることを期待する。

（参考資料）

- 岐阜県『岐阜県の祭り・行事』岐阜県の祭り・行事総合調査報告書
- 水野耕嗣監修『岐阜県の祭り屋台』岐阜新聞社 二〇〇三年十月四日
- 植木行宣監修『山・鉦・屋台の祭り研究辞典』思文閣出版
- 清水昭男『岐阜県の祭りからⅢ』一つ集文庫
- 岐阜県『岐阜県文化財保存活用大綱』二〇二二年三月
<http://www.pref.gifu.lg.jp/page/139021.html>
- 岐阜県教育委員会編『岐阜県文化財図録』
- 無形民俗文化財「岐阜県公式ホームページ」（文化伝承課）（gifu.lg.jp）
- 外務省報道（別紙Ⅰ）「山・鉦・屋台行事」の提案内容（mofa.go.jp）
- 『祭礼行事・岐阜県』桜楓社 一九九二年三月十日
- 『祭礼事典・岐阜県』桜楓社 一九九三年一月十日

第二節 全国の都市祭礼と岐阜まつり

当調査が対象とした岐阜まつりとは、本書冒頭で「伊奈波神社の祭礼日に合わせて、伊奈波神社でおこなわれる神事のみならず、神事に関係ないことまで含めた賑わい」「十頁」と選定したものである。この伊奈波神社は延喜式内社で、美濃国三宮（一宮…不破郡垂井町南宮大社、二宮…不破郡垂井町伊富岐神

社」と称される古社であり、その由緒は第二章第二節に詳しい。毎年正月三日には多くの初詣客を迎え、令和七年には実に六十七万五千人を数えた（注1）。これは所在する岐阜市の総人口約三十九万九千人（令和七年一月一日「住民基本台帳」世帯人口）を大きく上回るものである。また、岐阜まつりについては、統計のある道三まつりだけでも令和六年は三十六万人の集客を得ている（「令和六年度岐阜市観光統計」）。このように、市内の氏子にとどまらず、広域からの尊崇を集め、多数の参加者や観客が集う岐阜まつりは、都市部での祭礼とすることができる。本節では先学による全国の都市祭礼に関わる研究を参照しつつ、岐阜まつりの意義について検討する。

（一）都市祭礼としての岐阜まつり

岐阜まつりは多様な行事が包摂されているが、なかでも宵宮の山車と神輿の練り込みと、道三まつりでの岐阜まつり神輿パレードが見どころとなっており、岐阜まつりは山車と神輿の祭りというイメージが一般には強い。毎年製作される宵宮、道三まつりのポスターの素材にも、山車と神輿を使うのが通例である。宵宮の主催は平成七年（一九九五）組織化された宵宮実行委員会「第三章第三節（二）参照」であり、伊奈波神社の神事の付け祭りが宵宮との位置づけから、自治会、神輿、神社、行政の各関係者が参加している。つまり、現在の宵宮は神社の神事ではなく、宵宮に関わる関係者による行事となっている。

都市祭礼において、このように神事と行事が重層的に存在する例は各地で見られる。国指定重要無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産に「秩父祭の屋台行事と神楽」として登録されている、埼玉県秩父市の秩父神社例大祭を調査した藺田稔は、『祭りの現象学』「平成二年 弘文堂」において、神社・町内会・観光協会の関係性から、祭りとは「劇的構成のもとに祭儀（リチュアル）と祝祭（フェスティビティ）とが相乗的に現出する非日常的な集団の融即状況（コ

ミュニタス）の位相において、集団の依拠する世界観が実在的に表象するものである。」「六十四頁」と指摘している。藺田の論に従えば、岐阜まつりにおける前夜祭、例祭、神幸祭（発輦・神幸・還幸）は「祭儀」となる。それに対して宵宮は、参道鳥居前の広場という、伊奈波神社との関連を明確に認識できる意味ある場所が会場であり、主催者が神社ではなくとも、伊奈波神社の祭礼の一部として広く認識されていることから「祝祭」に相当させることができる。このように、岐阜まつりは秩父神社例大祭と同じ表象の構造を持つものである。

一方、京都の夏の風物詩として名高い五山送り火の一つ、左大文字送り火の行事を都市祭礼として分析した和崎春日は、『左大文字の都市人類学』「昭和



写真 9-16 宵宮における神輿の総練り（令和6年4月6日）



写真 9-17 宵宮における神事（安宅車）（令和6年4月6日）



六二年「弘文堂」において、都市祭礼は三つの行事性、すなわち宗教行事・伝統行事・観光行事があり、それぞれの属性を自然性、閉鎖性、開放性とし、これらが併存することに特色があるとした。岐阜まつりにおいては、宗教行事として前夜祭、例祭、「よみや」での神事、神幸祭（登輦・神幸・還幸）、伝統行事として地域での山車の奉曳や神輿の巡行、観光行事として宵宮の山車曳揃えと神輿練り込み、道三まつり「第一章第四節参照」とすることができる。このように和崎の指摘する都市祭礼の重層性は、岐阜まつりとも合致する。

このように、現在の岐阜まつりは、宗教行事、伝統行事、観光行事が重層的に併存し、祭儀と祝祭が相乗的に現出している、都市祭礼の一つと捉えることが適当と思われる。

（二）宵宮の組織と岐阜まつりの開放性

前項で、宵宮について「よみや」での神事を宗教行事、宵宮での山車曳揃えと神輿練り込みを観光行事と分けて考えた。これは宵宮実行委員会結成以前、この夜祭りは伊奈波神社が「よみや」と呼び主催していたことに基づく。当時は町内の山車や神輿がぼつぼつと集まるものであったというが、賑わいを取り戻すべく結成された宵宮実行委員会によって、山車の曳き揃えと、総練り（巻頭写真3）をクライマックスとする神輿練り込みという形に整えられたことで、観光行事として今日の盛況を見ている。一方「よみや」の伝統は、宮入した山車が鳥居前で神職による修祓と奉曳の代表者による玉串奉献を行い（写真9・17）、神輿も練り込み後に代表者が修祓を受け玉串奉献を行う（巻頭写真3）という神事に残っている。

一方、観光行事の属性である開放性を示す例として、宵宮に練り込む神輿の団体として設立された岐阜神輿連があげられる（第三章第四節（五）参照）。同連は設立の趣旨を次のように宣言した。

私たちは、「岐阜神輿連」といいます。

私たちは、「神輿」を担ぐことの好きな人の集まりです。

私たちは、「神輿が好きな人」であれば、

「神輿」を持っても、いなくても、

男であっても、女であっても、

たとえそれが一人であっても、

「神輿」を担げるように、

「神輿」が大好きな仲間」づくりがしたい。

存分に活躍できる場を設けていきたいのです。

一人ひとりの個人の集まりが集団になり、

・・・町内ぐるみ、団体ぐるみ、会社ぐるみ・・・

一つでも多くの「神輿」をかつぎだしたい、

と考え、

ここに「岐阜神輿連」を設立いたしました。

「岐阜神輿連設立趣旨」

ここには町内を主体とした担ぎ手による伝統と閉鎖性に対し、神輿を担ぎたいという個人の価値観によって結集した集団を容認し、岐阜まつりに共に参加しようという、開放性が明確に示されている。

このように旧来の町内を単位とした地縁などによらない団体の祭礼への参加は、東京都千代田区の神田祭など、他の都市祭礼でもみられる。なかでも「小倉祇園祭の小倉祇園太鼓」が国指定重要無形民俗文化財に指定されている福岡県北九州市の都市祭礼、小倉祇園太鼓を分析した中野紀和は、『小倉祇園太鼓の都市人類学』（平成一九年 古今書院）において、「祭礼のなかで中心的役割を果たす組織が、町内から個人的な結びつきによる組織へと移行しつつある」「九十九頁」とし、企業や友人を母体とした有志チームなど、新たな価値観に

よる集団をボランティア・アソシエーションと定義した。そして伝統文化の維持は、従来の価値観と外部の視線をとりこんだ新たな価値観の相互関係のうえに成り立っていると指摘している。岐阜神輿連と岐阜まつりの関係も、この指摘と全く軌を一にするものである。

さらにこの傾向は、岐阜神輿連の参加団体であるとともに、伊奈波神社の氏子であり、江戸時代以来の歴史を誇る本造町の町神輿（本神輿）にもみられる「第六章第二節参照」。この神輿は、戦後まもなく担ぎ手不足で中断の後、昭和六十三年（一九八八）に復活したものの、近年は再び担ぎ手を町内とその関係者で手配することが困難となり、神輿会所に虫干しを兼ねて飾るのみであった。しかし、平成六年（一九九四）担ぎ手をQRコード等利用し一般募集すること、五年ぶりに宵宮の練り込みを行っている（注2）。閉鎖性の強い町内から、担ぎ手を公募により開放したことで、神輿を担いで町内を練り歩き、宵宮で宮人をして参拝するという信仰に基づく価値観から、純粋に神輿を担いで祭りを楽しみ、盛り上げようという価値観を取り入れることで、練り込みが実現したといえる。

（三）岐阜まつりと道三まつりの関係性

一方、道三まつりについては、JR岐阜駅北口駅前広場、金公園、柳ヶ瀬、神田町など岐阜市中心市街地一帯で開催されている「令和七年度」。正式な名称は「岐阜まつり協賛 道三まつり」であり、メイン行事の「岐阜まつり神輿パレード」のほか、斎藤家の菩提寺である岐阜市梶川町常在寺における「斎藤道三公追悼式」、駅前における「道三駅前祭市」、協賛事業として岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会による「柳ぶら祭市スペシャル」、美殿町商店街振興組合による「美殿町春祭」など様々な行事が開催され、岐阜まつり宵宮実行委員会（「岐阜まつり宵宮」も、ここに名を連ねている（注3）。道三まつりの目的は、

道三まつり実行委員会規約第二条で「実行委員会は、商業、農業、観光、物産等の振興及び中心市街地を含めた地域の活性化を図り、並びに岐阜市を宣伝し、及び市民参加によるにぎわいを創出するために、岐阜まつりを共に盛り上げるイベントとして道三まつりを実施することを目的とする。」と定めているように、商業、観光振興を第一とし、岐阜まつりを共に盛り上げる協賛イベントの位置づけである。



写真 9-18 神輿パレードにおける造り神輿（令和5年4月1日）

イベントと都市祭礼の違いについて、和崎は祭りには人々の共通理解となる核や儀礼がある一方、イベントには儀礼的、宗教的な核を備えていないとする。この視点を参考に改めて道三まつりの諸行事をみると、岐阜まつりとの接点として、岐阜まつり神輿パレードにおける三社合同祭典が見いだせる。パレード自体はNPO法人ぎふ睦が運営し、参加は子供会・会社・グループ、サークルなど自由であり、神輿も本神輿、造



り神輿を問わない開放的なものである。本来、神輿は祭神を遷し氏子地域を巡行する移動式の神座であるが、参加する神輿は神社御札を納めない神輿が多数あるなど、全ての神輿が等しく宗教性を有しているのではなく、造り神輿も多い（写真9-18）。また、参加する神輿は年により異なり、一定ではない（表9-11）。この神輿パレード開催中、金神社に渡御した伊奈波神社の神輿が、会場の「みこし広場」へ渡御し、金神社、檀森神社の神輿とともに観衆に対して金神社神職による修祓、続いて伊奈波神社巫女による神楽を舞うのが三社合同祭典である（巻頭写真2）。この祭典が行われることにより、観衆は三社の祭礼との関連性、すなわち宗教的な核の存在を明確に認知することとなる。そしてパレードに参加した神輿と、それを見物に集まった多数の観衆に対して修祓と神楽を行うことで、会場はイベントの空間から、岐阜まつりの祝祭の場へ転換がなされているとみられる。なお、この三社合同祭典は平成二十年（二〇〇八）に形が整ったもので、それ以前は伊奈波神社の神輿については金神社と檀森神社への渡御であった。つまり、岐阜まつりに協賛した道三まつりのイベントである岐阜まつり神輿パレードは、三社合同祭典の形式を整えることで、岐阜まつりそのものへ包摂されたと考えられる。

このように商業イベントが祭礼と連携して開催されることも、都市祭礼では珍しいことではない。一例として国指定無形民俗文化財でユネスコの無形文化遺産に「川越氷川祭の山車行事」として登録されている、埼玉県川越市の「川越まつり」では、地域の経済力低下により明治時代後期以降衰退していた山車奉曳を、昭和二十三年（一九四八）氷川神社例祭と同日に開催した商工祭での奉曳を契機とし、以後「川越まつり」として毎年開催するようになり、令和六年には延べ七十三万八千人にもぼる来場者数を数えている（注4）。

（四）岐阜まつりの外延

以上みてきたように、道三まつりは宗教的にも空間的にも岐阜まつりの周縁に位置するが、さらに四月第一土・日曜日に「岐阜まつり」と称して例祭や神輿を出す地域が岐阜市内に多数存在し、当日には其処彼処の社前参道に祭礼の幟がはためく。その経緯は第二章第三節（三）で述べられているように、明治七年（一八七四）に金神社を初めとする上加納村の諸社が例祭日を伊奈波神社と同じ四月五日とし、同二十二年（一八八九）に旧岐阜町と上加納村の一部を併せて岐阜市制を施行後、町村合併により当該地域の神社例祭日を伊奈波神社に合わせた例が多く、その後平成七年（一九九五）に四月第一土・日曜日に変更して現在にいたる。但し、江戸時代加納藩城下町であり、加納天満宮を信奉する加納地区など例外もある。これらは各地域の神社で行われる祭礼と神輿であり、伊奈波神社を核とする岐阜まつりとは別個のものである。つまりここでいう「岐阜まつり」とは、「岐阜のまつりの日」の祭礼、もしくは「岐阜まつりの日」の祭礼という意ととることができる。

このように期日の点からみれば、岐阜市域における四月第一土・日曜日は、伊奈波神社と金神社、檀森神社の祭儀に、岐阜まつりの宵宮、岐阜まつり神輿パレードがもたらす祝祭が加わり、さらに地域における諸社の例祭と神輿練りなど多様な宗教的核の祭儀によって、相乗的に非日常的な空間を形成し、それが岐阜まつりの外延として存在しているようである。

なお、大正時代には長良の鵜飼屋、真福寺の本神輿、太田、八代、天神、西浦の花神輿が、連合渡御として伊奈波神社や金神社へ宮入をしていた。また、長良高見の神輿も昭和初期には長良の連合渡御に参加し、更には禁止されていた柳ヶ瀬通りを練り歩き、金津遊郭門前で大騒ぎをしたという（注5）。長良村の岐阜市合併は昭和七年（一九三二）であるが、それ以前から連合渡御が行われていた。このような事例から、岐阜まつりと別地域の神輿でも、岐阜まつりが形成する祝祭の場へ参画することで岐阜まつりが包摂するプロセスが見い

だされる。これは祭礼日の統一、すなわち祝祭の共時性があるからこそ可能なものであろう。しかしながら、現在これらの地域における「岐阜まつり」の多くは、子ども神輿で地域を巡る行事が中心となり、神輿に対する関心の低下と子どもの減少、それに加え新型ウィルス感染症による行事中止が影響し、退潮の傾向が強い（注6）。その一部は岐阜まつり神輿パレードに糾合しているといわれるが、地域の祭礼が、岐阜まつりそのものに包摂されているとは言い難いのである。

（五）祭りを示す形象と変化

以上、現在の岐阜まつりを象徴する山車と神輿を中心にみてきたが、その数は神輿が圧倒している。しかし、江戸時代後半の「岐阜因幡御神事」〔四一頁・資料2-5〕では山車二十七台に対して、神輿二基（下矢島町・布屋町）、榊山一台（下矢島町）が描かれていることをはじめ、その変遷は第二章第二節から第三節にかけて詳しい。それに基づけば、明治時代まで山車の数は神輿に対して優勢であったが、明治二十四年（一八九一）の濃尾震災で多くが被災して失われると、各町内では造り物を載せた飾り山車や俄などの奉芸が盛んになる。さらに昭和二十年（一九四五）の岐阜空襲により岐阜市中心部が焦土と化したのが、翌年には岐阜まつりが再開され、同二十四年には造り神輿四十〜五十基が社頭に並び、翌年には山車の奉曳（清影車・踊車）が再開されている。つまり、岐阜まつりにおける各町内の奉芸は、時代や社会情勢によりその種類や数が変化しており、必ずしも山車や神輿に限定したものではない。

一方、全国の伝統的な祭りでは、山車や屋台などを長く継承していく例が多い。その代表例は、十四世紀末にはほぼ完成し、四種類の類型が揃ったとされる京都祇園祭の山鉦であろう。国指定無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産に「大垣祭の軸行事」として登録され、十三台の曳山が奉曳される岐阜県大垣

市の大垣祭の軸は、十七世紀後半からの歴史を持つが、濃尾震災や戦災により多くの軸が失われた。しかし、その度に時間をかけてでも軸を新調や再建している。このように軸は大垣祭を象徴する伝統的な形象として広く認識され、各町はそれを維持し、滅失した時は再生することで祭礼の持続が図られている。

また、継承の過程で形状が変化する例もある。国指定無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産登録の祭礼では、「角館祭りのやま行事」として登録されている秋田県仙北市の角館祭りのヤマや、「土崎神明社祭の曳山行事」として登録の秋田市土崎神明社祭のヤマは、かつては大勢で担ぐ「担ぎ山」であったものが、車輪をつけた曳山や、固定化した置山へ変化した。「魚津のタテモン行事」として登録された富山県魚津市諏訪神社例祭で、各町内が出す山型に提灯を飾った造り物のタテモンは、提灯の数が明治時代は二十五個程度であったものが、大正時代には五十個程度、昭和時代以降は九十個程度と大型化した。このように造り物が大型化することは、観る者の印象をより強化するものであり、類例の多い変化の方向性の一つであるが、伝統的な形象のイメージを外れるものではない。

いずれにしても、山車や屋台、造り物など、祭礼における形象は、それを担うコミュニティにとって結集の象徴であり、対外的には祭礼の形象として機能していると思われる。

一方、岐阜まつり同様、各地の祭礼において主要な奉芸が時代により異なる例もある。江戸三大祭りの一つに数えられ、二百基以上の神輿が宮入すること知られる東京神田明神の神田祭は、江戸時代の十九世紀中頃には二基の神輿と三十六台前後の山車、それに踊り屋台や曳き物、仮装行列などの「附け祭」が加わった行列で、江戸城曲輪内へ練り込んでいた。明治時代も引き続き山車を主体とした行列が行われていたが、明治十七年（一八八四）の台風により多くの山車が被災した。さらに市中の電線架設が障害となり背の高い山車の奉曳



に支障をきたすなどにより、次第に山車は各町内に備え付けるのみとなり、大正時代には代わって神輿渡御が行われるようになった。神田祭を分析した秋野淳一は『神田祭の都市祝祭論』〔岩田書院 平成三十年〕において、「都市祝祭と町内の祭りは、祭礼の象徴を介して、維持・拡大しているといえるのではなからうか。そうした意味では、神輿や山車といった祭礼の象徴の存在が神田祭の盛衰に重要な役割を果たしている。だからこそ、たとえ観念的であつても町内共同の危機においては、祭礼の象徴が新たに誕生したり、復活したりするのである。」「五四四頁」と指摘している。つまり、都市祭礼はその担い手が結集する象徴の変化により維持されてきた側面を有すると考えられる。

同様の例は、国指定無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産に「八戸三社大祭の山車行事」として登録されている、青森県八戸市の八戸三社大祭でも伺い知ることかできる。八戸市は青森県の南東部、岩手県と県境を接する人口約二十二万人〔令和五年三月三十一日現在住民基本台帳人口〕の中核市で、三社大祭は竈神社、長者山新羅神社、神明宮の合同例祭に合わせて行われる行事である。その始まりは享保六年（一七二二）に始まる八戸藩鎮護の法霊社の神輿渡御といわれ、当時は神輿の前後に幡、箆鉦、山伏や獅子権現が続く程度であり、その後町人による人形を乗せた「人形出し」が加わるも、明治時代に入ると衰退し、代わって明治二十年（一八八七）から現在のような山車が曳き出されるようになったという。現在は「お通り」「お還り」と呼ぶ神幸行列に「附祭」として二十七台の山車の奉曳と、様々な出し物が加わる。山車は毎年各山車組が新たな題材で新造する造り物の山車で、祭礼が終わると解体する。山車組には、組の町内だけでなく、親類縁者、山車組のない町内、職場や友人などが広く参加している。また、出し物は山伏による「法霊神楽」、「虎舞」、「大神楽」のほか、平成時代には伝統芸能の「駒踊」「笹の葉踊」が復活して加わり、同じく途絶えていた芸妓の踊り屋台である「華屋台」も加わるようになった。

八戸三社大祭の場合、山車自体を毎年作り変えることで町内をはじめ多数の担い手が結集し、「附祭」の芸能復活も新たな担い手の参画をもたらしている点、先の神田祭同様、都市祭礼として変化による維持が認められる。また、毎年新造する造り物の山車は、既に百四十年近く続けられており、このように変化することが、祭礼の精神として受け継がれていると考えて良いのではなからうか。

（六）岐阜まつりの変化と意義

改めて岐阜まつりの奉芸の変遷をみると、台風という自然災害が端緒で山車主体から神輿主体へ形象が変化した神田祭同様、岐阜まつりは明治二十四年の濃尾震災によつて人形（からくり）山車や踊り山車から、造り物と俄による、「にわか山車」主体に形象が変化している。神田祭も岐阜まつりも、この変化によつて祭礼が継続された。昭和五十二年（一九七七）に刊行された『岐阜市史 通史編民俗』では、この「にわか山車」について、古老の談話をもとに次のように記している。

にわか山車は、からくり山車には見られない「つくり」と、町民が創作した「にわか」を演ずることで、祭りに花を添えてきた。またにわか山車を出す町内には、つくり山車とは違った町民意識が感じられた。

東材木町では、祭礼に山車を出すことが決まると、町総代が町内の野村屋に依頼し、部屋を借り、祭りの準備にとりかかる。

会所に集まった人々は、山車のつくりを何にするかを相談した。その結果「かぶと」或いは「桃太郎」などに決まると、早速青竹を準備し、町民の手で製作にかかった。紙を貼つて、色を塗り仕上げるまでには、たつぷり一カ月半は要した。この間、どの家も毎晩一名は会所に詰め協力し合つて、仕事を進めた。自分らの企画を、自分らの手で実現していく此の仕事は、格別に楽しく、熱も一段と入った。その結果、つくりは、町民の愛情のこもったものとして完成さ

れていた。

会所ではこの仕事と並行して、「にわか」の練習が行われた。にわかとはにわか芝居の意味で、寸劇の類に入る芸能であった。にわかは、からくり山車の人形の踊りに相当するものであり、山車が練つていく順路に従って、方々で山車の先綱で大きな輪を作り、その範圍を舞台として、演ずるものであった。

従って、にわかには山車の立寄る場所にふさわしい内容が考えられた。日頃、三味線の練習、狂俳の会を通して、深いつながりのある町内の芸達者が、にわか創作にあたった。練習も相互の考えを出し合い、他町内の応援も受けたりして、賑やかな中にも、厳しさが漂っていた。祭りは自分らの芸を披露する場であるという意識が、町民の団結を強いものにしていたし、真剣な取組をさせていた。

祭りの山車は、決まって金津廓へ行った。東材木町のにわか山車でも金津廓にふさわしい内容の種目を用意した。(下略) 林基吉談「七六五〜七頁」

この談話では、にわか山車が明確にコミュニティにとつて結集の象徴であることを述べるとともに、他の神輿同様金津廓にまで練り込むなど、対外的にも岐阜まつりの形象として認識されていることがわかる。また、「つくり」や「にわか」は毎回新しく考案し、常に変化するものであり、それがまた町民の団結を強めるとの記述は、担い手の結集する象徴の変化(作り変え)により維持されてきた側面を如実に示している。これは先に紹介した八戸三社大祭の山車や神田祭の「附け祭」とも共通するものである。

岐阜まつりにおける山車は、昭和三十七年(一九六二)に安宅車、同四十一年頃に若戎車、清影車も同四十二年頃にはそれぞれ伊奈波神社に奉納され、安宅車は金華地区、清影車は京町地区の各町内が輪番制で奉曳し、若戎車は明德・本郷地区の岐阜若戎車奉曳会が奉曳を担うようになった「五八頁参照」。このような輪番制並びに地区の団体が一括して請け負うことは、従来人形(からく

り)山車を持たない町内の奉曳が可能となり、負担も軽減した半面、その山車を持たなかった町内が独自に出していたにわか山車が消滅してしまい、岐阜まつりの衰退の一因となったようである。

それに代わって変化を担ったのが、先に述べた昭和四十八年の「岐阜まつりを共に盛り上げるイベント」として始まった道三まつりであり、平成七年に宵宮の賑わいを取り戻すべく結成された宵宮実行委員会主催による宵宮行事だったといえよう。

このように、祭りの形象の観点から、岐阜まつりにおける変化は、確かな記録の残る濃尾震災以来、百三十年以上の歴史がある。また、奉芸の地区の変化からみれば、江戸時代の旧岐阜町に加え、明治五年に小熊村に踊り山車に加わっていることをみれば「六四頁・表2-1」、百五十年を超えるものである。これは先に触れた八戸三社大祭と同様、変化することが祭礼の精神として受け継がれているものであり、それによって、現在の賑わいが維持されていると評価することができよう。

(七) 岐阜まつりの特徴

では、岐阜まつりは何故このような都市祭礼として成立したのであろうか。この点については多くの論があると思われるが、ここでは以下二点をあげておく。一つは、江戸時代、岐阜町が商工業・水運の町であり、資力を有し、各地との交流が盛んであるとともに、尾張藩領の辺縁地域のため、強い集権力が働かず、住民は開放的な気質であったと想像されることである。明治八年(二八七五)の岐阜県による調査で、岐阜町住民について「其俗高尚ニシテ狭固。人心最輕薄、市中大半商ヲ業トス。即勤惰相半ス。」(注7)と評しているのはその一例であろう。

第二に、第二章第二節(三)3に述べられているように、江戸時代から明治



時代にかけて、伊奈波神社周辺は見世物や興行が行われる歓楽地になっていたことである。そのため不特定多数の者が来集し、常時、非日常的な場を形成していた。そこに立地する伊奈波神社を核とした祭礼であるため、そのイメージは少なからず反映され、祭儀と同時に祝祭の要素が多分に意識されたと推測される。「岐阜名所図会」に載せる「伊奈波神社例祭」の図「四一頁・資料2-4」には、各町の山車が現在同様参道鳥居前の坂を登る様子を描いているが、そこに夥しい群衆が見物に押し寄せる様や、添えられた「人の出や 花にうきたつ砂ほこり」の句からは、既に江戸時代からこの祭りが祝祭の要素を十分に備えていたことを示すものであろう。

現在の岐阜まつりは、このような地域の歴史的背景をもとに、宗教行事、伝統行事、観光行事が重層的に併存し、祭儀と祝祭が相乗的に現出するとともに、祭礼の担い手は従来の価値観と外部の視線をとりこんだ新たな価値観を持つ相互関係のうえに成り立つ開放性を有し、伝統的な祭儀を伝える一方、その形象、奉芸、地区等は変化していく、都市祭礼の特徴をよく備えたものである。そして、その変化は、確かな記録が残る近代以降、少なくとも百五十年を超え、受け継がれてきたものである。

(注)

(注1) 『岐阜新聞』令和七年一月四日記事

(注2) 『岐阜新聞』令和六年四月五日記事

(注3) 岐阜のまつりHP（道三まつり実行委員会・ぎふ信長まつり実行委員会運営）
<https://gifuomatsuri.jp/>

(注4) 「令和6年度川越まつり来場者数」川越まつり公式サイト「お知らせ」令和六年十月二十八日掲載データ <https://www.kawagoematsuri.jp/news/20241028.html>

(注5) 高見青年団OB会刊『高見のみこし』長良のみこし』平成三年 私家版

(注6) 令和五年、岐阜市内の全五十地区の自治会連合会に対して実施した「みこしが出る祭りに関するアンケート」では、山車を出す四地区（金華・京町・明德・徹明）と大人神輿を出す祭りを実施していない八地区を除く三十八自治会連合会中、子ども神輿の記載があるのは二十五自治会、そのうち「岐阜まつり」（四月第一土・日曜日）に子ども神輿を出していたのは十三自治会（華陽、日野、長良、鷺山、常盤、長森西、岩野田、茜部、西郷、七郷、岩、三輪南、藍川）であった。このうち、日野、長良、岩は令和五年度時点で中止または廃止。また、この日大人神輿を出していることが確認できるのは五自治会（華陽、長良西、鷺山、長森南の林北町自治会、西郷）であった。「表9-2参照」

(注7) 岐阜県立図書館編『美濃民俗誌稿 関口議官巡察復命書』昭和五十一年刊 一一頁

(参考文献)

伊藤泰雄著『神輿大好き』平成二十七年 私家版

植木行宣監修『山・鉾・屋台の祭り研究事典』令和三年 思文閣出版

第三節 岐阜まつりの特徴と地域性

(一) 重なる変化

岐阜まつりをひとことで説明しようとするのはむずかしいが、その特徴をあえていうなら、かたちが一定していないことにある。もちろん、今の世の中にあって、祭礼行事の中身や支え方に変容が起こるのは仕方がないが、ここでのいうのはそういった変化ではない。例えば山車の町内巡行にしても、山車三者がまったく同じ行程で巡行するなどということは、非常に低い確率である。囃し方を子供にやらせるといっても、半数の子どもは昨年と同じでは

ない。ある子どもが太鼓を担当した場合、次に担当するときは「子ども」でなくなっていることだってめずらしいことではない。こうしたことは多くの場合、行事の統一性がなくなり、行事の意義が忘れられ、最悪の事態には行事の廃絶すらも起こりうる。

しかしその反面で、このまつりは随所で変化もさせられた。

最も大きいのは、祭礼の期日である。明治六年（一八七三）に新暦が採用され、伊奈波神社の祭礼日は三月三日が四月五日に改められた。そしてこの改定に合わせて、岐阜市内の各神社も祭礼日を四月五日へと改めるようになり、岐阜市全体の祭りを総称して「岐阜祭り」という。さらにそれは昭和四十年代に入って、期日は土日曜日に合わせておこなわれるようになった（ただし伊奈波神社は、例祭を四月五日におこなうことを守っている）。また昭和四十八年（一九七三）から、神社とは無関係の商工関係者が作った「道三まつり」も加わるようになり、次第に祭りは神社だけのものではなくなってきた。今では、岐阜市の一番のメインストリートが神輿パレードをする中、一定期間を伊奈波神社の祭礼（神幸祭の一部）に費やすという、他所者から見れば「破天荒」と思われることまで変化させた。

神輿でいえば、宵宮には、市の重要有形民俗文化財に指定された木造町の町神輿三基が奉納される。この神輿は宵宮以外の時でも、地元界隈で見ることができる。一方、四月第一土曜の昼間の、道三まつりの神輿パレードではなくさんの神輿が出て、うち何基かは宵宮にも出てくる。神輿は伝統的なものもあれば新出来のものもあり、それらが一体となって宵宮の神輿行列がおこなわれる。これも、昔では考えられなかったことである。

山車の曳行であっても囃子であっても同様で、要するに「岐阜まつりの様子について語れ」といわれても、それは「〇〇年頃の」という限定詞がつかないと無理である。それほどまでに、岐阜まつりの内容は変化している。

（二）岐阜まつりを守ったもの

伊奈波神社としては、中には同調しがたいような変化もあったことであろう。しかしながら、一方では祭礼の期日や行事の開催方法を改めてゆきながらも、他方では確固として守り抜いている、例えば例祭の期日とか中身だとか、そういう部分もある。つまり、伊奈波神社側の大きな理解によって、岐阜まつりは、市民との間の距離を縮めてきた感がある。

また、岐阜まつりを存続させようとしているのは、地域住民の意識の高さでもある。たとえ自分たちが辛い目を見ようとも、たとえ子どもたちの自由が制限されることになっても、この囃子を残すことが大切だと思うからこそ、囃子の行事を続けられた。ただしそれは昔のとおりではなく、許される範囲の中で変化もさせてきた。だからこそ、まつりが続いてきた。

からくり人形も町神輿も、「あるだけで動かない」では、文化が終焉してしまふ。それを嫌うからこそ復活させた。ゆえに、現状がある。

神社側と住民側、双方の努力によって、岐阜まつりは存続してきたといえる。

（三）岐阜まつりの民俗学的意義

岐阜まつりは、岐阜という中規模都市にある伊奈波神社という大規模神社が、神社の伝統神事や行事を、神社を取り巻く人々の文化の中で、どのように位置づけてゆくかを考える上で、非常に重要な事例でもある。中世末期、たとえば斎藤道三や織田信長らによって作り上げられた岐阜の城下町が、近世都市として形成されてゆく中で、伊奈波神社は神道信仰の要であったことはいうまでもないが、それ以外にも「氏神・伊奈波さん」として都市民、いわゆる「町衆」の間でも親しまれてきた。結果、伊奈波神社の例祭の日には、神社本体の神事のほかに、伊奈波神社をめぐる「町衆」の間で、さまざまな行事も生まれている。それらのひとつが、山車奉曳であり、からくりや狂



言奉芸であり、踊り奉納であり、神輿奉納などであった。

「町衆」の行事の中には、今も引き継がれているものもある。ただ、現在の形にいたるまでにはさまざまな紆余曲折を経ている。支える団体も町内会や子供会、〇〇保存会、あるいは商工会、PTAなど、昔とは違っている。しかし、その変容は表面的なもので、根底にある意識は「氏神・伊奈波さん」への信仰心であり、それを支えるのは地域のコミュニティである、ということとは変わりがない。

振り返ってみれば、神社と「町衆」との親密な関係は、伊奈波神社の祭礼が衰退する前、それこそ明治地震以前や江戸末期に、からくりや神輿、狂言、にわかなどで賑わっていた時代にもあったと想像される。だとすれば、今日の岐阜まつりは、目に見える表層的な部分は変わっても、本質的には変わらない、いわば時代を超えて蘇った昔ながらの祭礼形態といえるかもしれない。

その変容の歴史や現状は記録に止め、保存に努めるべきである。歴史資料として、また有形資料としての価値は高い。それ以上に、過去の伝統から現代までの変容を明かすために、岐阜まつりは無形民俗文化財としての価値があるといえる。

	29 30 31	R2 3 4 5 6 7	備 考 (年号のない数字は回)
	45 46 47	48 49 50 51 52 53	
			伊奈波神社所有の神輿。
			片田神社 明治 38 年に三里村六条出身の石樽朴次郎が日露戦争戦勝記念製作。
			昭和 63 年から参加。平成 3 年に新調。 33・34 岐阜市農業協同組合、42 ～ぎふ農業協同組合。
			29・31 ～中部電力㈱。
			44 ～ OKB 大垣共立銀行。
			平成元年より参加。
			25 ～岐阜市職員、30 ～32 岐阜市役所有志、33 ～岐阜市役所、 40 ～岐阜市職員みこしパレード実行委員会。
			平成 7 年結成。29 岐阜心女、30 ～女神輿 岐阜心女、33 女神輿 岐阜心女・子心女、 34 女神輿 心女 大人神輿・子供神輿、35 ～女神輿 岐阜心女、 42 ～女神輿 岐阜心女・子供みこし子心女。 昭和 27 年 福井光一(木造町) 作。
			昭和 51 年から参加。
			市川工務店からいただいた神輿。 40 ～(公社)岐阜青年会議所、51(一社)岐阜青年会議所。
			51 ㈱十六フィナンシャルグループ。
			昭和 60 年から参加。美園町の唐箕屋本店で調製。参加しなくなった後、神輿を廃棄。
			平成の御大典記念で調製。平成 3 年より参加。
			昭和 63 年調整。31・32・34 サムソン・ビューティチェーン(協)、 33 サムソン・ビューティチェーン、35 サムソン ビューティチェーン、 38 ㈱サムソン、40 ～サムソンビューティチェーン協同組合。
			昭和 58 年に参加している。
			29 ～㈱電算システム。
			40 ～医療法人社団 誠広会 平野総合病院。
			25 岐阜我が街の会、26 ぎふ我が街の会、27 ～岐阜我が街の会。
			全 3 回参加。
			パレード開始以来毎年参加していた。
			昭和の御大典記念に作成。平成 8 年に神明神社より譲り受ける。 伊奈波神社の紹介により現在は加納天満宮に保管。
			32 ～金神社岐阜祭奉賛会 岐阜睦。
			29 ～岐阜シニアリーダークラブ。
			31 ～岐阜市立岐阜商業高等学校。
			29 ～岐阜ハイジュニアリーダークラブ。
			31 弥生町ママさんの会、32 ～岐阜柳ヶ瀬弥生町ママさん会、 35 ～弥生町ママさん会。
			32 ボーイスカウト岐阜第 2 団 A 組、B 組。
			30 NHK 岐阜放送局。
			32 ～明徳校区子ども会育成会、35 ～岐阜市明徳子ども会。

表 9-1 (1) 道三まつり 神輿パレード参加団体の変遷 (1)

年	H8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
開催回	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	
大日本土木㈱																						
㈱岐阜銀行																						
立正佼成会岐阜教会																						
JA ぎふ																						
岐阜商工信用組合																						
中部電力㈱岐阜営業所																						
㈱大垣共立銀行																						
岐阜新聞社・岐阜放送グループ																						
岐阜市消防本部																						
心女																						
外国人みこし																						
(社)岐阜青年会議所																						
㈱十六銀行																						
㈱高島屋岐阜店																						
松阪祇園まつり三社みこし																						
岐阜信用金庫																						
㈱サムソン																						
岐阜バス																						
岐阜流通センター(協)																						
電算システム																						
平野総合病院																						
わが街の会																						
㈱ダスキン岐阜支社																						
岐阜市青少年海外交流協会																						
日の丸興業																						
㈱河吾グループ																						
岐阜睦																						
岐阜シニアリーダー																						
市立岐阜商業高等学校																						
岐阜ハイジュニアリーダー																						
日本将心会																						
GIFU ストリートカーニバル																						
弥生町商店街振興組合ママさんの会																						
ボーイスカウト岐阜第2団																						
NHK 岐阜支局																						
ボーイスカウト岐阜第6団																						
明徳子ども会																						
ボーイスカウト岐阜北地区																						

[illegible]

表 9-1 (2) 道三まつり 神輿パレード参加団体の変遷 (2)

年	H8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
開催回	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	
徹明 5 地区親睦会																						
京町第 1 地区子どもみこし																						
京町校区第 2 地区子どもみこし																						
早田子ども会																						
岐阜市内郵便局																						
神輿愛好会 蕎 (まっしぐら)																						
徹明総合スポーツ少年団 野球部																						
徹明小学校 バトミントン部																						
ぎふサン SUN 子ども劇場協議会																						
加納天満宮「神加勢」																						
檀森神社子どもみこし																						
華陽子ども会連合																						
岐阜祭粋会																						
ぎふ青年みこし																						
長良西みこしかつごまい会																						
日ノ出町子ども会																						
明郷地域ジュニアリーダー MJI																						
明德地域子ども会育成会西組、東組																						
岐阜市身体障害者福祉協会青壮部																						
ぎふ長良川勝手おどり実行委員会																						
明德・本郷連合子ども会																						
宮島薬品㈱																						
三里六條神社 神輿会 梨割会																						
ペルフォート・百合姿合同ビューティーみこし隊																						
響 白山子ども会																						
シーシーエヌ																						
MJI 岐阜																						
やななみこし																						
木ノ本少年消防クラブ																						
阿多岐神輿会																						
木之本あすなろ会																						
ぎふ音楽クラブ																						
白山神輿会																						
一般社団法人 岐阜北法人会 女性部																						
日本南京玉すだれ協会																						
(明德山車 若戎車)																						

凡例

各年の道三まつりパンフレットに掲載している団体名を集計した。当日の参加は異なる場合がある。

花…木造町花神輿

48・49 は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止。

1～23・37 は不明。

表9-2 (1) 岐阜市内のみこしが出るまつり (1)

校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
						例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
1 金華	M22	岐阜まつり	伊奈波神社	4月第一土曜	○	○	○		○	山車	S20～
2 京町	M22	岐阜まつり	伊奈波神社	4月第一土曜	○		○		○	山車	S20～
3 明徳	M22	岐阜まつり	樺森神社周辺・神田町通	4月第一土曜	○		○				～江戸
			伊奈波神社	4月第一土曜	○					山車	～江戸
4 徹明	M22	岐阜まつり		4月第一土曜	×		○				
5 白山	M22	無し									
6 梅林	M22	無し									
7 本郷	M22	不明	鍛神社	不明	×						不明
		不明	伊奈波神社	不明	×						不明
		不明	稲荷社	不明	×						不明
		不明	観音	不明	×						不明
8 華陽	M22	住吉神社例大祭 岐阜まつり	住吉神社ほか 華陽地区内	10月第一日曜 4月第一土曜	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○		餅まき等	不明 S20～
9 木之本	M22	無し								※こどもみこしのみ	
10 本荘	S6～S10	無し									
11 日野	S6～S10	岐阜まつり	日野本郷地区(日野東1～5丁目)		×		○				不明
12 長良	S6～S10	不明		4月第一土曜	×		○				S20～
		天神神社祭礼	長良天神神社	4月5日	×						不明
13 長良西	S6～S10	岐阜まつり	神田町通り	4月第一土曜	○						M～S20
14 長良東	S6～S10	不明	護国神社	不明	×						不明
		不明	新屋敷地区	不明	×						不明
15 島	S6～S10	不明	近島地区	4月第一土曜	×						不明

	校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
							例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
16	早田	S6～S10	第■回春祭り	津島神社ほか	4月第一土曜	○	○	○				M～S20
17	城西	S6～S10	不明	不明	不明	×						不明
18	三里	S6～S10	岐阜まつり	片田神社	4月第一土日曜	×						S20～
19	鷺山	S6～S10	岐阜道三まつり	北野神社	4月第一土日曜	○	○					不明・無回答
			岐阜道三まつり	無回答	4月第一土日曜	○	○					S20～
			正木こし祭り	白山神社	4月第一土日曜	○		○				不明・無回答
			岐阜道三まつり	秋葉神社	4月第一土日曜	×		○				S20～
20	加納東	S15	加納天神まつり	加納天満宮	10月第三土日曜	○	○	○	○	○	山車、稚児行列	S20～
			玉性院 節分つり込み祭	玉性院	2月3日	○	○	○		○	豆まき	S20～
21	加納西	S15	加納天神まつり	加納天満宮	10月第三土日曜	○	○	○	○	○	山車、稚児行列	S20～
22	則武	S15	則武祭り	日吉神社	11月11日	○	○	○				S20～
			岐阜まつり	下坂田寺	不明	×	○	○				不明
23	常磐	S15	岐阜まつり	上坂田寺	不明		○	○				不明
			岐阜まつり	上土居東西	不明		○	○				不明
24	長森南	S15	手力雄神社火祭り	手力雄神社	4月第二土曜	○	○	○		○		～江戸
25	長森北	S15	手力雄神社火祭り	手力雄神社	4月第二土曜	○	○	○		○		～江戸
26	長森西	S15	岐阜まつり	吉野神社ほか(林北町自治会)	4月第一土日曜	○		○				不明
27	長森東	S15	手力雄神社火祭り	手力雄神社	4月第二土曜	×	○	○		○		～江戸
28	木田	S15	無し									
29	岩野田	S24～S25	岐阜まつり	諏訪神社	4月第一日曜	○	○	○				M～S20
			岐阜まつり	白山神社	4月第一日曜		○	○				M～S20
30	岩野田北	S24～S25	無し									

表9-2 (2) 岐阜市内のみこしが出るまつり (2)

校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
						例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
31 黒野	S24～S25	不明	多賀神社	4月第一土曜	×						不明
32 方県	S24～S25	無し									
33 茜部	S24～S25	岐阜まつり	茜部神社	不明	×		○			今はこどもみこしのみ	S20～
		岐阜まつり	比奈守神社	不明	×		○			今はこどもみこしのみ	S20～
34 鶯	S24～S25	岐阜まつり	不明	4月第一土曜	×						不明
35 西郷	S24～S25	岐阜まつり	各地区		○		○				不明
36 七郷	S24～S25	岐阜まつり	津島神社				○				不明
37 市橋	S24～S25	不明	藪田神社		×						S20～
38 岩	S24～S25	岐阜まつり 岐阜まつり	伊波乃西神社ほか 六所神社ほか		×	○	○	○		餅まき	不明・無回答 M～S20
39 鏡島	S30～S44		神明神社	4月第一土曜	×						S20～
		神明神社春の例祭	神明神社	4月第一日曜	○	○	○				不明
40 厚見	S30～S44	領下神輿巡行	領下地区		○	○					不明
			西領下地区		×						
			上川手地区		○	○					不明
41 日置江	S30～S44	日置江まつり	日置江神社ほか	4月5日		○	○				M～S20
		日置江まつり	白山神社	4月5日		○	○				M～S20
		日置江まつり	神明神社	4月5日		○	○				M～S20
42 芥見	S30～S44	八幡神社大祭	八幡神社	4月第二日曜		○	○	○		餅まき	～江戸
		諏訪神社祭り	諏訪神社	4月第一日曜		○	○			餅まき	S20～
43 芥見東	S30～S44	無し								※こどもみこしのみ	
44 芥見南	S30～S44	無し								※こどもみこしのみ	

校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
						例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
45 藍川	S30～S44	岐阜まつり	加野地区		×		○				S20～
46 合渡	S30～S44	祭いこまい中山道河渡宿	馬頭観世音菩薩観音堂	10月最終日曜	○						S20～
47 三輪南	S30～S44	岐阜まつり	日枝神社ほか		×	○	○				不明・無回答
	S30～S44	岐阜まつり	三嶽神社		×	○	○				S20～
48 三輪北	S30～S44	岐阜まつり	白山神社		×	○					S20～
	S30～S44	三輪祭り	三輪神社	4月第一土曜	○	○		○			～江戸
49 網代	S30～S44		熊野神社		×						
	S30～S44		春日神社		×						
50 柳津町	H18		高桑地区		×						

凡例

1 このアンケートは、各地区の自治会連合会に依頼して令和5年度に実施したものである。（一部開取りあり）

2 設問は以下のとおり。

あなただの地域の「みこしが出る祭り」についてお聞かせください。 ※大人がみこしを担ぐ祭りを対象

①祭りの名称 ②会場名・住所 ③開催日と現在の開催状況

④大人みこし以外の祭りの対象（例祭/こどもみこし/神楽・屋台などの踊り/出店・屋台/その他）

⑤祭りの起源（江戸時代以前/明治～昭和20年/昭和20年以降/不明）

岐阜まつり総合調査報告書

発行

岐阜市

令和八年三月

編集

岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課
〒五〇〇―八七〇一 岐阜市司町四〇番地一
電話 〇五八―二六五―四一四一